

新編問題雜纂

卷三

M4-12-3

朝鮮問題之書類

總目錄

朝鮮問題雜纂 卷一 (自大正八年五月至)

第二 朝鮮問題雜纂 卷二 (自大正八年七月至昭和五年七月)

第三 朝鮮問題雜纂 卷三 (自大正十一年三月至昭和十一年十一月)

第四 朝鮮問題雜纂 卷四 (自大正十三年十一月至昭和十二年四月)

一 自壇會同任書類

以上

221.06

75°

| 朝鮮問題 第二書類目次 | | | | | | | |
|-------------|---|-------|---------|--------|---|--|--|
| 朝鮮問題 第二書類目次 | | | | | | | |
| 要 | | | | | | | |
| 九三 | 朝鮮人事關係新書 | 法川雲岳 | 奎二五九 | 滿 | 考 | | |
| 九四 | 法川雲岳反朝鮮書 | 高崎正藏 | 〃 〃 三八 | | | | |
| 九五 | 張慶弼書件 | 法川雲岳 | 〃 〃 四三 | | | | |
| 九六 | 朝鮮人事關係新書 | 〃 | 〃 〃 八三 | | | | |
| 九七 | 朝鮮人事關係新書 | 阪谷芳郎 | 二二六六 | 自筆日記 | | | |
| 九八 | 朝鮮人事關係新書 | 川上溫保 | 〃 〃 九三 | 新信 | | | |
| 九九 | As Appeal to my Korean friends. By S. Shaka. | 〃 | 〃 〃 一〇三 | 英文新聞切株 | | | |
| 一〇〇 | 朝鮮問題會議會要 | 〃 | 〃 〃 九二 | | | | |
| 一〇一 | 朝鮮問題有志會組織件 | 全通備委員 | 〃 〃 一〇六 | 全通備委員 | | | |

101 臨時總會成立紀念冊
 102 臨時總會成立紀念冊
 103 臨時總會成立紀念冊
 104 臨時總會成立紀念冊
 105 臨時總會成立紀念冊
 106 臨時總會成立紀念冊
 107 臨時總會成立紀念冊
 108 臨時總會成立紀念冊
 109 臨時總會成立紀念冊
 110 臨時總會成立紀念冊

臨時總會成立紀念冊

故阪谷子爵記念事業會

| | | | | | |
|-----|------------|--------------|------------------|-------|--|
| 一〇二 | 朝鮮問題調查會報告書 | 大正五年 十月十日 | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |
| 一〇三 | 朝鮮問題調查會報告書 | | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |
| 一〇四 | 朝鮮問題調查會報告書 | | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |
| 一〇五 | 朝鮮問題調查會報告書 | | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |
| 一〇六 | 朝鮮問題調查會報告書 | | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |
| 一〇七 | 朝鮮問題調查會報告書 | | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |
| 一〇八 | 朝鮮問題調查會報告書 | | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |
| 一〇九 | 朝鮮問題調查會報告書 | | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |
| 一一〇 | 朝鮮問題調查會報告書 | | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |
| 一一一 | 朝鮮問題調查會報告書 | | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |
| 一一二 | 朝鮮問題調查會報告書 | | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |
| 一一三 | 朝鮮問題調查會報告書 | | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |
| 一一四 | 朝鮮問題調查會報告書 | | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |
| 一一五 | 朝鮮問題調查會報告書 | | 朝鮮問題調查會 全準備委員 | 大正二二年 | |

1. 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。

2. 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。

3. 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。

4. 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。

5. 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。

6. 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。

7. 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。

8. 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。

9. 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。

10. 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。

故阪谷子爵記念事業會

| | | | |
|--------------------------------|-----------|------|-------------|
| 二四 鮮人問題解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。 | 石坂龜治 | 三九二六 | |
| 二五 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。 | 浦石寛裕 | 二二六 | |
| 二六 朝鮮人子弟補導會。 | 通原豊四郎 | 二四一三 | 関係書類 |
| 二七 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。 | 通原豊四郎 | 二二三 | |
| 二八 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。 | 国民會會長 尹甲炳 | 三三 | 関係書類 |
| 二九 朝鮮人子弟補導會。 | 車善壽 | 三三四 | |
| 三〇 善隣協定案の成立と交渉。 | 三島彌吉 | 五 | 七月四日付 |
| 三一 朝鮮問題の解決に必要の資料を調査し、整理し、出版する。 | 伊藤謙吉 | 五五六 | 関係書類 |
| 三二 崔麟氏手紙（英園三陸前日の移移状） | | 九八 | |
| 三三 在布哇天道教の同志と與ふ（上下） | 鳳谷生 | 三三 | 朝鮮問題通信 七四九号 |
| 三四 天道教の大眾的教化（上下） | 金明 吳天 | 八三 | 朝鮮問題通信 七四九号 |
| 三五 天道教七十年（中外日報社説） | 朝鮮問題通信 | 四四五 | |

[illegible]

1

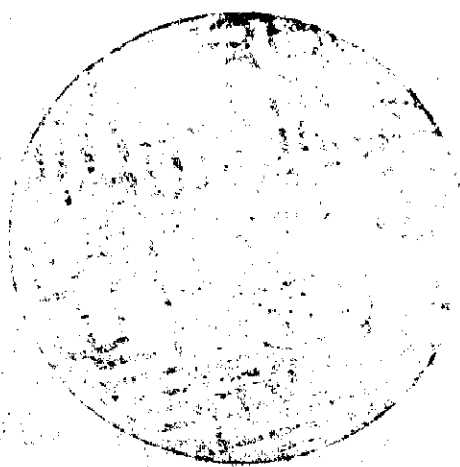
4.

在川通余十一二
改谷男高町家
帝家扶雲牛

朝鮮人事相談所趣意書

滋川雲岳

94.



滋
川
雲
岳

滋川雲岳

朝鮮人事相談所假事務所

東京市芝區麻田久保町十九番地

電話銀座二五一一

朝鮮人事相談所趣意書

朝鮮合併の下に帝國の法令發布せられて茲に十有餘年、殆ど概ね普しと雖も、在鮮民の中には尙、其の併合と法令の理解を知らず、従つて移管せられたる手續きを誤り、又は怠り、内には財産所有權の設定に遅れ、或は失ひ、外には外交に關する帝國臣民たるの權利を喪失するもの實に枚舉に遑あらず、例へば隣邦支那商人との間に結ばれたる商事取引に於て損害を來したる場合之が賠償を要求するの途を誤り、帝國領事館を経由せず、韓國時代の舊慣に従つて直ちに之を支那官憲の法廷に争ひ、自己の權利主張を貫徹する能はざる人の損失を來したるものあるが如き、或は財産の所有登記の基礎に關する錯誤、不完全とより數年間に亘りて紛争を重ね、尙且つ所有登記の權利主張

を爲す能はざるものがあるが如し。

密かに想ふに、斯くの如きは一面文化の發達に遅れたる國民の法令の理解は素より、其の發布されたるをも之を知らず、自然の推移に任せたと、他面彼等を喰物とせる三百代言の不親切極まる取扱に其罪を歸せざるべからず。

併合十年、武裝せられたる朝鮮は平穩なりき。偶々大正八年の騷擾起りし以來、當局は銳意施政の改善を圖り、同時に武裝政治を解きて専ら保安警察力を嚴にし、近來漸く再び又平穩なるを得たりと雖も、之れ眞の平穩と無事とに有らず、之れ生けるものゝ沈黙なり、之れ火山の休息なり。更に又十年の後五年の後、誰か再び同一の悔あるなきを保せんや。況んや自己の不明より來りたりと雖も、當然自己が主張し、且つ獲得すべき權利を消失し、無告の悲慘に陥りたる鮮民の多數は、恐らく其の原因を究めず、自己の遺漏を顧

みず、直ちに之を以て法令に對し、不當なる非難を加ふること現實の事例に於て已に明かにして、延いては統治に對する悲憤となり、終には民心動搖不安の徴をなすに到らんも亦計り難し、之れ豈統治上看過すべからざる缺陷に非ずや。

夫れ統治の要諦は民心の和を計り、其の安定を努むるに在りとす。而も斯途は徒らに大局の政策のみに依つて之を求むべからずして、深く在鮮民個々の不平と憤懣の心裡に徹し之が救済の機關を設け、依つて以て彼等に安んじて倚依する所あるを知らしめざる可らず。今日の朝鮮に於て最も嘆すべき缺陷は此種の施設の一として見るべきものなきこと是れなり。

惟ふに斯の如き事業は、事業本來の性質として之を朝鮮統治正面直接の責任者たる總督府の事業をもつてして容易に其の効果を收め難きものあり。之れ今日の在鮮民は多年武斷政治の下に在りて、官を頼るよりも寧ろ只實

之を畏怖するの風より脱する能はざればなり。即ち此種の事業は當局の治鮮方針を經として、正に在鮮民個々の利害の機微に觸るゝ緯さなるべきものなれば、正義と愛との名に於て宜しく之を民間有志の同胞愛の温情溢るゝ奮闘に待たざるべからず。之れ官と民と治鮮の要道を上より下より相携へて行はんとするものなり。

吾儕等を年朝鮮に出入して聊か遮般の事情を諳にし、同憂の士と共に今日茲に朝鮮人事相談所を設立せんとするもの、志は如上の缺陷を補ひ以て國家奉仕の一端を盡さん欲するに外ならず、蓋し之れ吾が新らしき同胞に對する吾等の當然にして且つ最善の義務たるを信すれば也。

大正十一年三月

朝鮮人事相談所

平京市芝區櫻田久保町十九番地
朝鮮人言士公所假事務
電話銀座二五二一

海子書

改之

十二月

朝野人事相談所

滋川雲岳

あまのこころ
をきく
こと

おのこころ

あまのこころ

あまのこころ

あまのこころ

おのれを懐く言

おのれを懐く言

おのれを懐く言

おのれを懐く言

おのれを懐く言

おのれを懐く言

おのれを懐く言

おのれを懐く言

おのれを懐く言

おのれを懐く言

140
昔時心筆

印
心筆

如
心筆

有
心筆

心
筆

心
筆

心
筆

心
筆

心
筆

心
筆

心
筆

心
筆

少右川區原田百貳拾六畝地
男爵阪谷芳郎閣下



謹啓陳名近來稀肩の

強震有之度

即郵内以羅雅吳中府

95



大正十一年

四月二十七日

東京市芝區櫻田久保町十九番地

朝鮮人事相事務所

電話銀座二五一一番

謹啓陳名近來稀肩の

強震有之度

即郵内以羅雅吳中在

有之石乃得共中機嫌

中伺且中見舞中云々

謹啓陳名近來稀月

强震有之度

即郵內以羅吳中居

有之石其得兵中械爆

即同且亦見舞中其

右正署儀以書句

中上候

敬具

三月二十七日

洪川雲岳

男爵阪谷芳郎閣下



如シ実ニ露支國境ニ散在セル不良鮮人ニ於テ
皆然リトス或ハ所謂要周旋屋ナル者ノ誘惑ニ
基クモノアリ茲ニ觀ル處アリ特ニ此等ノ為ニ
相談案内ノ途ヲ設ケタリ
事業ノ内容
一法令ノ解釋諸願諸届書ノ手續説明
一合併后帝國法令ニ基キ所有權登記ノ設定

This image shows a blank, aged, cream-colored page, likely an endpaper or flyleaf of a book. The paper has a slightly textured appearance with some minor discoloration and a small dark stain near the bottom center. The left edge of the page shows the binding of the book.

第 11 頁

外

千中

基
无

10

法金

10

如シ尚國外

和
方
人
夢

國境一音在

二、觀兒

事、

謝類詒居書

100

一、**硬**ヲ譲リ紛議セシ者ニ對シ解決セシムル細
 談
 一、**外**國入トノ間ニ行ナハレタル商事ヨリ起ル
 紛争ニ對シ手續ノ相談
 一、**現**今整理中ノ林野法ニ基キ屆出手續ノ相談
 一、**國**外ニ發越セント欲スル者ノ案件又相談
 一、**本**邦ヲ京城府ニ置キ發展ニ伴ヒ出張所ヲ設
 ク事

朝鮮人事相談院
 設立主唱者
 滋川 雲 無

豫算

設立費ノ部

收入

一金貳拾壹萬圓也

支

出

篤志家ノ寄附

一金貳拾壹萬圓也

内

譯

金貳拾萬圓也

金貳拾萬圓也

金四拾萬圓也

金參拾萬圓也

經常費ノ部

基本積立金

創業費
校議費
 印刷費
 庶務費
 雜費

事務所建築費(三層建五畝坪)

事務所敷地七拾坪買入費

一金壹萬貳仟圓也

收入

基本積立金利息等

一金參仟九百拾圓也

職員手当

一金壹仟貳百圓也

主事等手当金等
書記等手当金等
消耗費及事務費

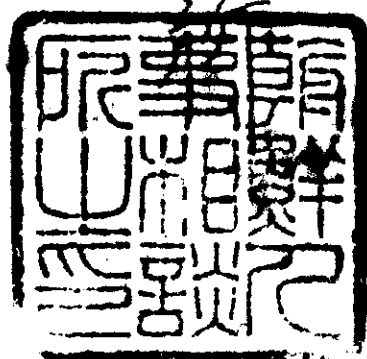
一金六百元也

車馬費
通信費
備費

以上

報告書

朝鮮人事相談



経過報告書(第巻四)

曾テ主唱者ガ實親シ格涉シタル問題ヲ基礎ト
シテ具體的ノモノトナシ意義アル働キトナサ
ント欲シ則テ大正拾一年參月朝鮮人事相談所
ト名稱シ後事務所ヲ東京市芝區櫻田久保町拾
九番地ニ設ク
本相談所最初ノ希望ハ去ル七月朝鮮京城府ニ
於テ本部建設ノ豫定ナリシモ種々ノ事情ト状
況ノ推移ニ依リ豫定ヲ變更シテ延期ス茲ニ參
月ヨリ八月ニ至ル経過ノ報告ヲナスモノナリ
賛成者ノ意見ニ依リ別紙ノ如ク設立計畫書ト
シテ主意ノ補足ト事業内容設立豫算ヲ発表ス

但シ豫算書ハ主唱者ノ告白ノ如ク將來ノ希望
 ニシテ刻下ノ問題トナスモノニアラズ
 再未特ニ賛成セラレタル主ナル人名左ノ如シ
 男爵 岩倉道順 公爵 二條尊基
 男爵 清宮長 伯爵 大木遠吉
 男爵 高崎弓彦 男爵 辻 太郎
 男爵 陸軍將 長岡外史 男爵 黒田 長和
 海軍大將 山下源太郎 男爵 福原俊丸
 公爵 近衛文麿 貴族院議員 安樂兼道
 男爵 阪谷芳郎

其他阪井徳太郎氏貳拾貳名ナリ
 一篤志家ノ組ハ依リ三井合名會社理事者ト
 會見シ三井男爵家ノ賛成ヲ求メタルモ從來
 濟生會ノ如キ政府ノ主唱ニアル拳國一致ノ
 會ニハ賛成シタルモ其ノ他ニハ年代ノ家憲
 ノ如ク一般ニ謝絶シ居ラル、旨ニテ賛成者
 トシテ列記スル事ハ重役會ノ問題トナラズ
 然レ共賛成ヲ表スル意味ニ於テ物質的援助
 ニ付テハ詳議スベキ旨ノ回答ヲ得タリ五月
 下旬以來交渉ヲ重ネ今尚懸案中ニ在リ
 一長井益太郎小島碩鳳兩氏ノ好意ト大西・梶下
 ノ組ハ依リ佛教各宗管長ノ賛成ヲ得ント

欲シ各宗聯合會ニ交渉ノ結果同會ノ賛意ヲ
得タリ但シ同會主事窪川旭文師ヨリ九月中
旬幹部會ニ於具體的決定ヲ為シ発表セラル
事トナレリ

會計

一 金七拾圓也 收入ノ部

篤志贊助金

譯

金拾圓也 師岡靜平

金五拾圓也 坂井徳太郎

金拾圓也 安沢是信

主唱者出資

一 金參百六拾圓六十錢也 計金四百參拾圓六拾錢也

支出ノ部

一 金參拾貳圓四拾錢也

印刷費

一 金貳拾五圓參拾錢也

講義冊文具費

一 金拾貳圓七拾錢也

自三層 通信費

一 金貳百參拾五圓也

全 汽車電車代

一 金貳百五拾圓貳拾錢也

全 事務所費

計金參百六拾圓六拾錢也

收支差引

金七拾圓也

右預金ト其他篤志贊助金ノ豫金ヲ受ケタル
モノナリト雖モ未收入ニ付キ記載セズ

希望ト感謝

朝鮮ノ現状ニ省ミ本相談所ハ漫然時ノ推移ニ
任セ難キモノアリ今後佛教各宗聯合會ノ賛成
ト二三篤志者ノ賛助ニ依リ愛ニ金五円也ノ
淨財ヲ得バ連ニ渡鮮シ本部設立ヲ了シ業務ニ
從事シ度キ希望ナリ
今茲ニ第一回經過報告ヲ為スニ至リシハ賛成
者諸氏ノ御好意ナル事ヲ感謝ス特ニ黒田高崎
西男爵閣下大西僧正親下平堅幸平氏ノ後援ニ
對シ謹ンデ謝意ヲ表ス
從來知人ノ好意ニ依リ芝區櫻田久保所ニ在リ
シモ都合ニ依リ府下滝野川町鴻之台六九四

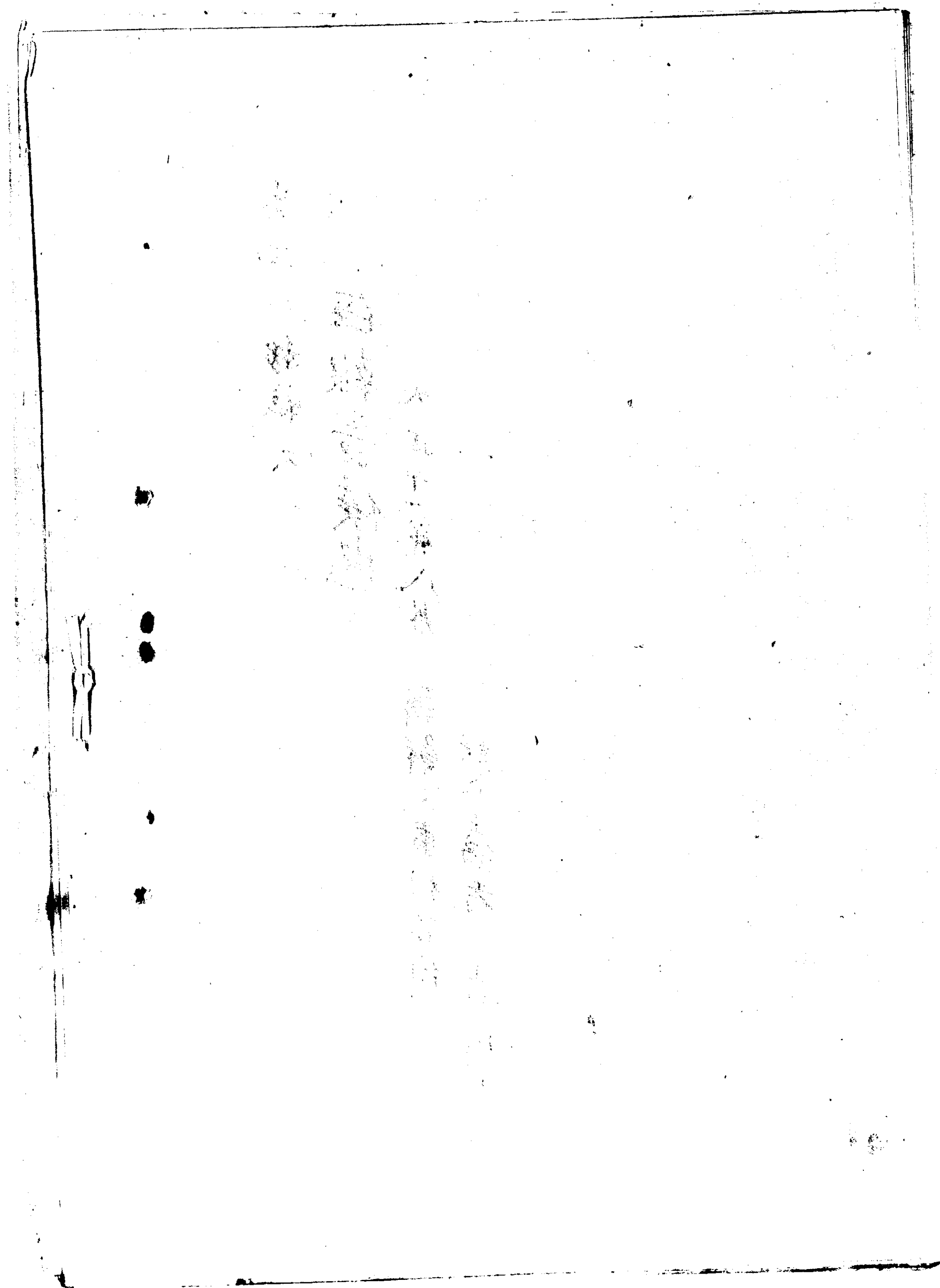
番地ニ移転ス

右報告候也

大正十一年八月

朝鮮人事相談所

設立主唱者 池川雲岳



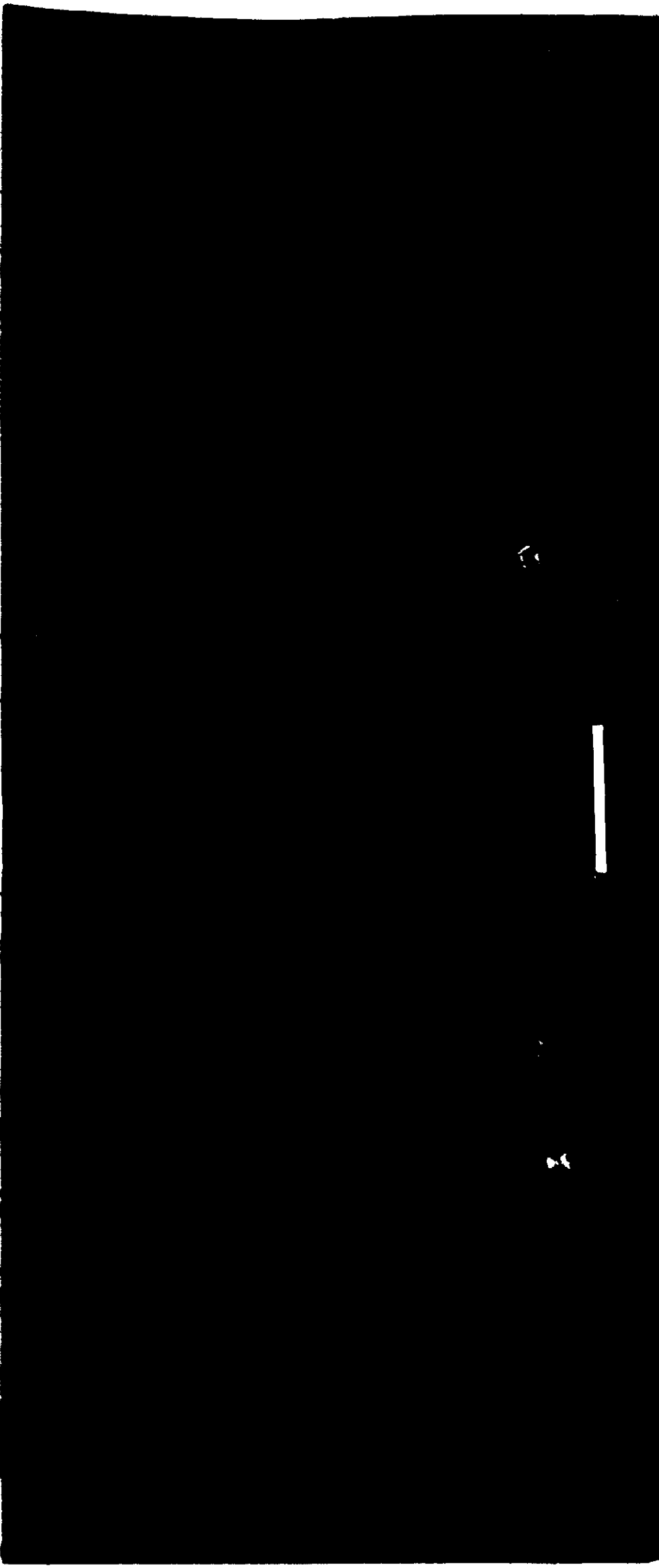
閣下 今般の歴辰災に際し内鮮両民族間に
些くも不祥事の突發し閣下永年の市に
常々北の馳するの悪影響を及ぼす（これを愛
い少片片を去る）と此に後來ある所
る朝鮮人等及吾等の生中の不良介する
程に大言壯語を放つて善良ある鮮人を壓迫
し内鮮融和の上に多大の妨害を與へ居るを以て

No. /

る朝鮮人學生及學者の生中の不良分子なる

者くに大言壯語を放つて善良なる朝鮮人を壓迫

しぬ朝鮮人の上に多大の妨害を與へ居るを以て



閣下 今般の震災に際し内鮮兩民族間に
此等甚だ不祥事の突發し閣下永年の中心
地より北の地とするの悪影響を及ぼす（これを憂
い少升兵を遣はし之と共に復東東を治す
る朝鮮人の生及若き生中の不良を介する
程々に大言に語を放つて善良ある鮮人を壓迫
し内鮮融和の上に多大の妨害を與へ居るを知

108
今般の比来事に依る之の氣風を掃き去り新しき
愛護の途を吾子有志者の爲めに示せしめを信じ
直に歸人救助を固執し其意を分り給ふ所
培養を要するもの了解力の下に有らざる
中一候
本月三日救助開始以来の成績は以下の如く
九日三〇名 五日一四〇名
〃四〇〇名 六日一六〇名

$$\begin{aligned} \frac{1}{2} \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} \frac{d^2}{dt^2} \right) &= \frac{1}{2} \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} \frac{d^2}{dt^2} \right) \\ &= \frac{1}{2} \frac{d}{dt} \left(\frac{1}{2} \frac{d^2}{dt^2} \right) \end{aligned}$$

11

五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

$\frac{1}{\sqrt{2}} \left(\begin{array}{c} 1 \\ 0 \\ 0 \\ 1 \end{array} \right)$

卷二

我與你在一起

[Handwritten signature]

九月十七日 七〇名
十月十七日 九八名

八日 九〇名

九月十八日
十一月
九月

十日 六八名

上日 九〇分 十九日 八分

「吉」百〇名

十三日 八五 廿日 正午迄 五(4)

縣人十三名

十四日 九五名

11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

卷之十二

解人十三名

No. 3.

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|

No.

前記二十五名の鮮人中四名は打撲に起因する傷症に
 大多數は急性腸カスに有主矣右は参考迄に申
 上矣而此際内地の官民合同に鮮人愛護の途を
 開始せしむる意外の効果を奏すべし
 事を確信仕る所也
 先は得る意を此所より度候
 敬具

大正四年九月二十日
 川上昌保
 男爵阪谷芳郎閣下
 13 付
 大正四年九月二十日
 川上昌保

No.

AN APPEAL TO MY KOREAN FRIENDS

Japanese who has the privilege of friendship among a fairly large circle of the Korean people, with whom I have always "mixed" as friends and equals, I sincerely share regret with them for the wanton assaults upon and the murders perpetrated against innocent Korean residents in and about the devastated districts.

With the populace now cooled down from the excitement of the unprecedented catastrophe, I feel sincere humiliation for the only blot in the otherwise splendid record of courage, self possession and enduring spirit of the people manifested during the greatest calamity.

An acknowledgment of wrong and an apology are due to the Korean people from the nation, if we still possess the moral courage which is the fundamental law of Bushido, the Spirit of Japan.

Under the circumstances, it is worse than useless to pose as an apologist and I do not intend to be one. A great people should feel as free to admit wrong as they should be to stand fearlessly for right.

A Tense Situation

Be that as it may, I feel that in order that a full understanding may be maintained and peace and friendship between the Korean people and the rest of the Japanese subjects assured, it is only right, as well as proper, to explain the tenacity of the situation under which the criminal acts were committed. This step is necessary, I consider as a misunderstanding may lead to other more serious misunderstandings, detrimental to both.

I cannot but sincerely hope that Korean friends will understand that while the rampant slaughter of their people had no excuse whatsoever, it was no indication of our hatred for their race, nor evidence of racial prejudice. The fact that the frenzied mobs committed equally as many murders against their own countrymen, as against Koreans, must show that the insanity displayed was not wholly of a racial nature.

No Antipathy

No feeling of antipathy has ever existed among the Japanese people against Koreans except in cases of those malcontents who can never reconcile themselves even to the present beneficial administration under Governor General Satto and who have continuously agitated the otherwise peaceful people of Korea and who have attacked and destroyed peaceful villages and menaced the peace of Korea from time to time.

The recent outrageous conduct and criminal wrongs committed on the Korean people in the devastated districts and vicinities are directly traceable to the hysterical commotion caused by

rumors and fearful apprehensions, the result of wild rumors prevalent at the moment when the populace was in a terrified condition with nature's ravages.

These rumors started when every means of communication was temporarily suspended and consequently police control was slackened. Conspiracies between the dangerous Japanese elements and the Korean malcontents which were suspected for some time in the past, suddenly came to the fore in the minds of the people.

Spread Maliciously

Early substantial evidence has come to light that the reports and warnings of a Korean uprising were spread with malicious intent among the already frightened groups of people.

The intention was, evidently, first to add to the general confusion in order to permit anarchistic activities, and, secondly, to place in advance upon resident Koreans the blame for what they hoped would take place.

In the most precarious moment, some Koreans started to pilfer stores, rob people and assault women. Some were found with arsenic and still others with giant powder. These discoveries added fuel to a rumor, that they were poisoning drinking water and setting fire to large buildings, intent upon destroying cities and killing the inhabitants.

People Were Afraid

All sorts of wild rumors made the people tremble and fear a worse condition and a revolution. Thus terror stricken, the people rushed to take whatever steps they thought were necessary to protect their wives and children and to save their own homes.

The worst criminal acts were committed in these dreadful moments while communication was cut off and police protection became hopeless. With the intention which should rightly be entertained by any independent people—that of protecting their own self-existence, the populace was driven to commit shameful acts under a mischievous illusion.

The prevailing thought was then to protect themselves against misdeeds of others and to defend the sanctity as well as safety of home against onslaught of assailants, however mistaken the incentives were. It was to kill others in order to save themselves, which is natural human instinct. The intent was primarily defensive.

Keynote Of Understanding

This should be the keynote of an understanding how the people who otherwise maintained equality of their minds and preserved tranquility of the community, perpetrated such acts as the entire nation is now horrified and ashamed even to speak of.

To relate a little personal experience, I have always professed myself as a staunch friend of the Korean people. But when I was made to believe some of the rumors I heard then I was un-

dermined. The perfect police system of Japan in ordinary times, which is known all over the world, shall guarantee the future safety of the remaining Korean residents.

The nation is thoroughly humiliated because of the barbarity of a few impassioned citizens who rushed to lynching. We are ashamed to repeat the story even though it relates the events that took place under impending such imaginary alarm conse-

Bushido, the Spirit of Japan.
Under the circumstances, it is worse than useless to pose as an apologist and I do not intend to be one. A great people should feel as free to admit wrong as they should be to stand fearlessly for right.

A Tense Situation

Be that as it may, I feel that in order that a full understanding may be maintained and peace and friendship between the Korean people and the rest of the world these subjects assured, it is only right as well as proper to explain the tenor of the situation under which the criminal acts were committed. This step is necessary, I consider as a misunderstanding may lead to other more serious misunderstandings, detrimental to both.

I cannot but sincerely hope that Korean friends will understand that while the rampant slaughter of their people had no excuse whatsoever, it was no indication of our hatred for their race, nor evidence of racial prejudice. The fact that the frenzied mobs committed equally as many murders against their own countrymen, as against Koreans, must show that the insanity displayed was not wholly of a racial nature.

No Antipathy

No feeling of antipathy has ever existed among the Japanese people against Koreans except in cases of those malcontents who can never reconcile themselves even to the present beneficial administration under Governor General Saito and who have continuously agitated the otherwise peaceful people of Korea and who have attacked and destroyed peaceful villages and menaced the peace of Korea from time to time.

The recent outrageous conduct and criminal wrongs committed on the Korean people in the devastated districts and vicinities are directly traceable to the hysterical commotion caused by

among the already frightened groups of people.
The intention was, evidently, first to add to the general confusion in order to permit anarchy to activities, and, secondly, to place in advance upon the Koreans the blame for what they hoped would take place.

In the most precarious moment, some Koreans started to plife the Korean people and assault women. Some were found with weapons and others with intent upon destroying cities and killing the inhabitants.

People Were Afraid

All sorts of wild rumors made the people tremble and fear a worse condition and a revolution. Thus terror stricken, the people rushed to take whatever steps they thought were necessary to protect their wives and children and to save their own homes.

The worst criminal acts were committed in these dreadful moments while communication was cut off and police protection became hopeless. With the intention which should rightly be entertained by any independent people—that of protecting their own self-existence, the populace was driven to commit shameful acts under a mischievous illusion.

The prevailing thought was then to protect themselves against misdeeds of others and to defend the sanctity as well as safety of home against onslaught of assailants, however mistaken the incentives were. It was to kill others in order to save themselves, which is natural human instinct. The intent was primarily defensive.

Keynote Of Understanding

This should be the keynote to an understanding how the people who otherwise maintained equanimity of their minds and preserved tranquility of the community, perpetrated such acts as the entire nation is now horrified and ashamed even to speak of.

To relate a little personal experience, I have always professed myself as a staunch friend of the Korean people. But when I was made to believe some of the rumors I heard then I was unable to control my passion. I thought it was too cruel and inhuman for Koreans to take advantage of the great national calamity; to kill the dying; to poison the last drop of water needed to quench the thirsty; to set fire in a burning neighborhood; and to assault helpless women and children who were fleeing for their lives.

Now, I am ashamed to think that I was made to believe those stories, rampant when chaos prevailed.

A Short Period

Thanks to the enlightenment of the age, the darkest period following the appalling destruction passed within 48 hours, and the stern hand of the law is already administering severe justice to those who were unfortunately misguided under their nightmare. It shows the degree of our judi-

cial integrity. The perfect police system of Japan in ordinary times, which is known all over the world, shall guarantee the future safety of the remaining Korean residents.

The nation is thoroughly humiliated because of the barbarity of a few impassioned citizens who rushed to lynching. We are ashamed to repeat the story even though it relates the events that took place under impending though imaginary alarm, consequent to a temporary suspension of police control and breakdown of communication.

Weigh With Coolness

Now, my Korean friends, these are the facts which should be carefully weighed with coolness of mind. The events are most regrettable to us as much as they must be to you. But, we have voluntarily confessed and acknowledged our wrong and the nation is determined to do justice to the honor of your people.

I plead for the sake of peace and humanity and for the furtherance of good will among the subjects of the Emperor that cool, sane and modest thought and prudence be given to this subject and if possible that we may both bury the past with the ashes that are symbolic of our present anguish.

故阪谷子爵記念事業會

—S. SHEBA.

前略今回の大事は御同様洵に痛心の至に不堪候
その善後策に就ては官民朝野共々必死の努力中に有之
か此際我が鮮人に関しては最も慎重の考慮を要する
もの歟やうかと存候間茲に同憂の上相會し寫と御協
議申上度外に付刻下御多端の砌甚に懇縮に奉存外と
萬障御差繰りの上来る九月二十四日(月曜)午後一時
芝正櫻田本郷町十四番地(櫻田本郷町電車交々附近)
櫻田俱楽部迄御来臨を仰ぎ度此致御案内書取急々
得貴意候 勿々

大正十二年九月廿九日

男爵 目賀田 種太郎

頭本 元貞
阿部 充家

男爵 坂谷 芳郎 殿

拝啓

来る九月二十八日(金曜)午後一時芝区櫻田本
郷町十四番地櫻田俱樂部(丸木写真館ノ横
通り)に於て鮮人に開する第二回の協議會相
催し度候に付刻下特に御繁忙とは拝察致し
候へども御繰り合はせ御來臨被下度此段御
案内申上候

大正十二年九月廿五日

男爵 目賀田 種太郎

頭本 元貞
阿部 充家

男爵 坂谷 芳郎 殿

男爵阪谷芳郎殿

第一回の申合せにもつき、目賀田男爵、明日中に
首相と會見左の趣きと以て進言せられ候筈に御
座候

今次、震災火災と際シ生シタル鮮人問題ニ関スル事
奥、奥相ヲ速ニ發表シ、善後ノ措置ヲ採ラレタシ
右申副候

世話人

十二
十日

東京区原町一二五

男 芳郎殿



入会云々

最者

と決議致し之に付此際あらためて御賛同を仰
ぎ度此段得貴意候

大正十二年十月六日

朝鮮問題有志會準備委員

男 芳郎殿

御不同意の向は御手数数々から牛込喜久井町三一副島八分
宛御一報相煩し度矣

十二年

十月十九日

受

拜啓

鮮人問題に關し目賀田男爵外數十名の有志者
相謀り既に三次の會合を催し意見交換致矣最
終の會議に於て別紙案文に基き會を組織するこ
とに決議致し矣に付此際あらためて御賛同を仰
ぎ度此段得貴意候

大正十二年十月六日

朝鮮問題有志會準備委員

男爵及谷芳政 殿

御不同意の向は御手数数々から牛込喜久井町三副島八十六
宛御一報相煩し度矣

朝鮮問題一研究
朝鮮問題の解決と日本と
朝鮮問題の解決と日本と

朝鮮問題研究會

朝鮮問題研究會の設立と目的

大正十一年十月六日

朝鮮問題研究會の設立と目的

朝鮮問題研究會の設立と目的

朝鮮問題研究會の設立と目的

朝鮮問題研究會の設立と目的

朝鮮問題研究會の設立と目的

十月
十日

會則案

第一條 本會ハ朝鮮問題有志會ト稱シ東京ニ設置ス

第二條 本會ノ目的ハ今次ノ震災火災ヨリテ發生シタル鮮人問題ノ善後策ヲ講シ兼テ朝鮮統治ニ關聯スル諸問題ヲ研究スルニアリ

第三條 上記ノ目的ヲ貫徹スル爲本會員ハ隨時會合シテ意見ヲ交換ス

必要ニ應ジ委員會ヲ設ケ或ル問題ノ審議調査及實行ニ當ラシム

第四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長 一名

幹事 若干名

會長ハ會員中ヨリ推戴シ、幹事ハ會長之ヲ指命ス

第五條 會長ハ會務ヲ統轄シ、會議ニ際シテハ議長ノ職ヲ行フ。但シ會長不在ノ際ハ在席會員中ヨリ議長ヲ選舉スルモトス

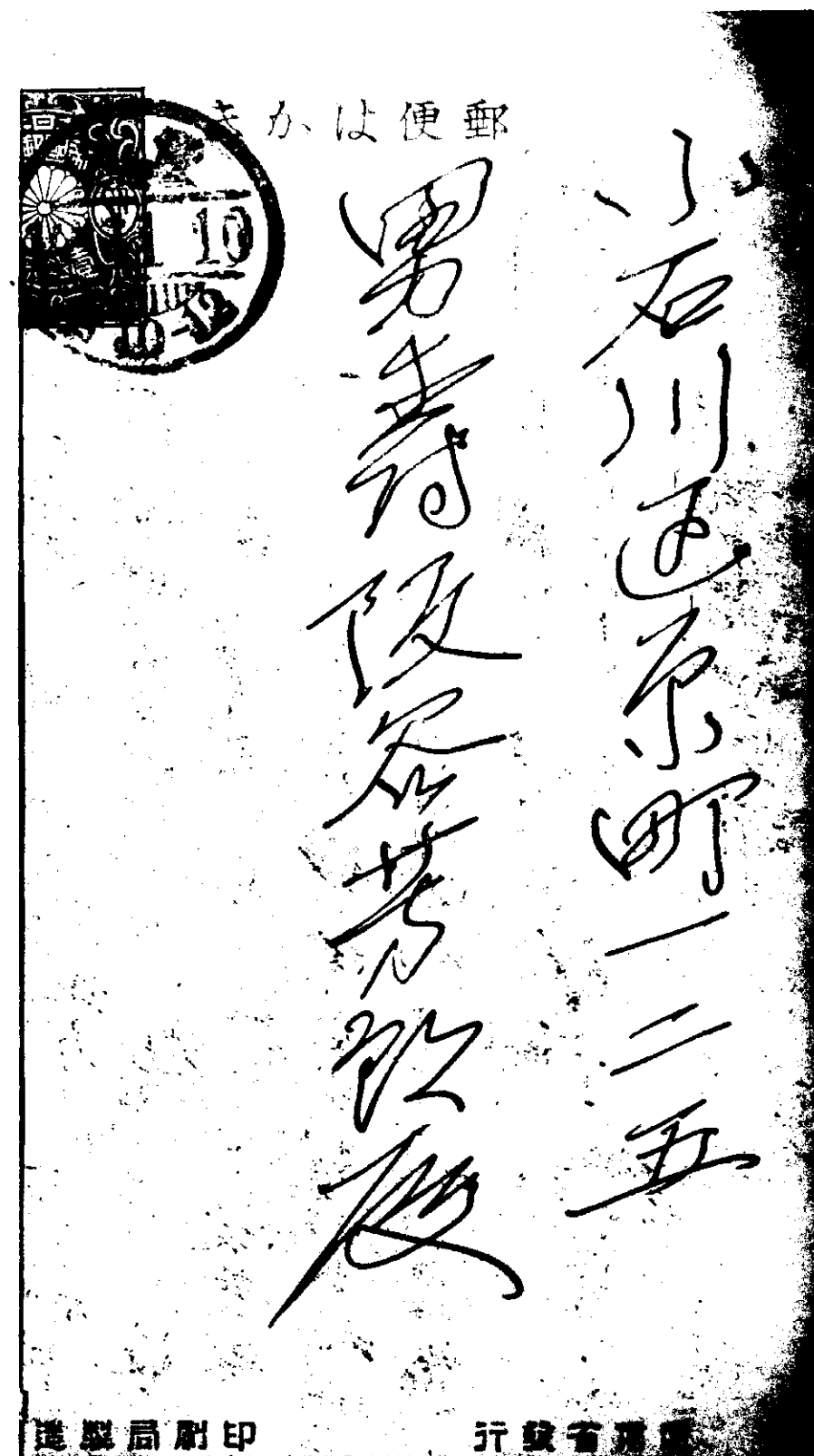
第六條 幹事ハ會長ノ命ヲ受ケテ會務ヲ掌リ且會議ノ準備ヲナス

第七條 本會ノ經費ハ必要ニ應ジ會員ヨリ醵出ス

朝鮮情况視察の上九州関西各地方を巡回し到
朝鮮問題講演會を催し多大の効果を收め最
終京山此處を細井肇事君の報告を聴取致度候
間来る五月十六日(金曜)午後二時芝区櫻田本郷町
上品番地櫻田俱樂部二御来臨被成下度此致御
案内申上候 敬具

大正十二年十一月十日

朝鮮問題有志會準備委員



103
104



少子と原田一五

男爵阪谷芳郎下

十三才百下

受

蔵書印 (蔵書印)

蔵書印 (蔵書印)

蔵書印

蔵書印 (蔵書印)

蔵書印 (蔵書印)

リ申候所目録

重宝校二大

片中学校二七

のは公開講演

蔵書印 (蔵書印)

蔵書印

蔵書印 (蔵書印)

假事務所移轉御通知

拜啓益々御清祥為邦家大慶に奉存候
陳者去る上月十六日櫻田俱樂部において朝鮮狀
況視察の上九州關西各地に朝鮮問題を講
演し歸京たる細井肇君より震災に關する
朝鮮の民心歴遊各縣の朝鮮人現状に關し報
告あり更に同君より善後策に關する希望書
件の申出有之其趣同席上の意見に基づき假事
務所を左記に移轉する事と相成候旨此紙
及御通知候也

大正十一年十月二十日

朝鮮問題有志會準備委員

左記

朝鮮問題有志會假事務所

東京中區池谷元五(細井肇君内)

東京中遊谷三九五
細井 啓
敬
長野(上田長野松本)各縣におき朝鮮問題
講演し尚引續き年内に千葉茨城埼玉群馬
栃木各縣歴遊の豫定に有之何地におそれ非
常の歓迎相受け其の一般父兄並に学校生
徒の熱心豫想の外にありつぐ本事業の
重たふる意思を痛感致居候小生は當分本
事業に専心し能ふくんば全國を歴遊し現
代國民並に次代國民に對し遍く朝鮮問題
の正解を求め内鮮結合の機運促進を圖り
度何卒各位におかれども御聲援御盡力
を賜は度不取敢中煩。御報告旁私信を
以て寸楮如此に御座候 拜 具

敬
長野(上田長野松本)各縣におき朝鮮問題

拜啓同封(参考添付書面の趣旨に基き)

既に本日までに長崎福岡山口廣島岡山兵庫

長野(上田長野松本)各縣におき朝鮮問題を

講演し尚引續き年内に千葉茨城埼玉群馬

栃木各縣歴遊の豫定に有之何地におそれ非

常の歓迎相受け其の一般父兄並に学校生

徒の熱心豫想の外にありつぐ本事業の

重たふる意思を痛感致居候小生は當分本

事業に専心し能ふくんば全國を歴遊し現

代國民並に次代國民に對し遍く朝鮮問題

の正解を求め内鮮結合の機運促進を圖り

度何卒各位におかれども御聲援御盡力

を賜は度不取敢中煩。御報告旁私信を

以て寸楮如此に御座候 拜 具

東京中遊谷三九五

細井 啓

肅啓今回の震火災直後在京濱朝鮮人の行動に關し誇大なる流言各地に行はれ今や全國到る所一種憎惡の感情を以つて朝鮮人に對する傾向有之申すまでもなき事ながら日韓併合以來朝鮮人は我が新附の弟妹にして假りに其の民族心性に指摘すべき欠點ありとするも开は五百年間に亘る李朝の惡政之が積痼をなせるものに他ならず寧ろ同情に勝へざるもの有之苟くも師父たり長兄たるべき内地人は飽くまでも温情慈懷を以つて此の孤弱扶けなき可憐なる弟妹を抱擁慈育し其の失性を補導して完全なる人格に到らしむるこそ當然の責務なるにただ憎惡の感情のみを以つて之に臨まんか徒らに朝鮮人の怨恨を深からしむるのみにて其の結果は反目乖離遂には欠裂の外なきに至り可申、日韓併合當時の聖旨に悖戾する最も甚だしと被存候自由討究社においては過去四年間に二十三卷四十書目の難解なる朝鮮古史古書を言文一致に譯解して朝鮮民族心性の研究に従事致し來たり候所今回の事變に會し空しく拱默を守る能はず殊に不肖は過般東京において開催せられたる朝鮮問題有志會の實行委員に指名せられ居候關係も有之現代國民並びに次代國民たるべき青年男女の對鮮觀念を誤まらざらめんが爲め全國を巡回し一般父兄、高等學校、中學校、女學校各生徒に對し

震火災の教訓と朝鮮人問題

の題下に一場の講演相試み度不日錦地拜訪の心算に有之何卒其節は一時間半乃至二時間の講演時間御差繰り相願度(一般聴衆の爲めには會場の準備だに貴方にて整へらるゝを得ば喜んで講演の求めに應じ申候)念の爲め左に東京において開催せられたる朝鮮問題有志會の新聞記事を添へ豫め貴意を得度奉牋如此に御座候 敬具

東京中道谷二九五 自由討究會
朝鮮問題有志會實行委員
細井 肇

高等學校校長殿
高等商(工)業學校校長殿
師範學校校長殿
中學校校長殿
高等女學校校長殿
各地新聞社長殿

對鮮政策協議

朝鮮有志が會合して

湯淺警視總監の説明

大正十二年九月二十五日
東京日日新聞所載
九月二十六日
大阪毎日新聞所載

今回の震災に際して内鮮人間に種々の出来事や誤解があつたので之等の問題を解決すると共に我對鮮政策を如何にするかに關して有志の會合が二十四日午後二時から櫻田俱樂部に於て催された
目賀田、阪谷兩男、山田、吉野、井上(通)各博士、木内重四郎、石塚英藏、秋山定輔、下岡忠治、頭本元貞諸氏及び湯淺警視總監其他十數名出席
目賀田男座長席に着き湯淺警視總監から今回の震災に於ける鮮人問題に就て説明し之に對し種々質問應答あり、各自意見を交換したが要するに此際鮮人を保護し且物資を給與すると共に歸國希望者に對しては手當を支給して歸國せしめ官民朝野の誤解を根本的に一掃し行くは治鮮方針を改めて漸次日韓併合に對する明治大帝の御詔勅の御趣旨に副ふやうに努力すべきであるといふやうな意見が多く結局山田三良、松岡靜雄、目賀田種太郎、副島八十六、阿部充家、細井肇、増田正雄、頭本元貞の八氏を實行委員に舉げ今後の實際運動に着手することとし同六時散會

東京市

(朝鮮國民會)

男爵阪谷芳郎閣下

十三年四月三十日

五福、瑞雲

親展



事城高某令漢野也
曰氏今創立事務
乃其人

海唇堂即清初寺也

陳在亦系知：面り内解ノ

融和：未夕徹亭所行

城之至ラサレノミナラズ動スレハ

反テ反目瞻視也誰反セント

スルノ傾向アリ実ニ反ニシテ

蘇軾詩集卷之四

陳玄内系祖三面り内解

融和“未夕徹夢的實行”

城々至らん／＼ナラス
動スレハ

反子反目瞻視
於離反七上

スルノ傾向アリ実ニ憂ふニ堪ハス

今日志未就，江湖諸君子，

榜選爲子所代，趙者經綏、

作り日民会ヲ組織スルコトト

我々就テハ此の創設委員

佐夏布中中錫練

中村俊彦印 三巻、五ノ親

市橋亭少作天有邊下在實

者言曰何幸微表ノアハシヤ

市橋邊守作及有邊下在

為之因何幸微表ノ人計

市橋邊守之本為茶表為

厚力及及有之敬也

大正十三年八月

市橋邊守及有邊下在

市橋邊守及有邊下在

市橋邊守及有邊下在

市橋邊守及有邊下在

市橋邊守及有邊下在

市橋邊守及有邊下在

市橋邊守及有邊下在

市橋邊守及有邊下在

市橋邊守及有邊下在

市橋邊守及有邊下在

市橋邊守及有邊下在

外一月

市橋邊守及有邊下在

故阪谷子爵記念事業會

故阪谷子爵記念事業會

故阪谷子爵記念事業會

故阪谷子爵記念事業會

故阪谷子爵記念事業會

朝鮮農林株式會社

專務取締役

佐藤虎次郎

京城府吉靈町一丁目三十八番地
電話 一五五七番

朝鮮總督府中樞院參議

正四位勳三等 申 錫 麟

朝鮮總督府囑託

中村健太

京城府舟橋町二丁目
電話 光化門二三番

| | | | |
|---|--------------------------------|-------------------|---|
| 謝有秋寺遠小高近古小吳後高小後藤福福深文深潮玄元松松松松藤九山矢矢山山大山山釘黑工草黑野牛武長長成中永中中名南北宋 | 倉月尾藤杉藤城杉藤林藤田島清道傳東惠勝松雅竹鶴香杉長治男富次 | 外馬左猛兵謹應管彥虎源建之亦一貞次 | 茂純都三郎作八源助堂治善雄駿六平進八郎恕鐸郎助翺常州郎盛郎昇雄吉衛次造郎輔郎雄昇郎雄城郎郎造亮三彥幹緯郎啓臣偏雄薰郎吟 |
|---|--------------------------------|-------------------|---|

鈴住末壽全望森守鳳閣閣閣閣閣廣泥新執柴志申進史申島申釋篠三宮三弓菊魚金金菊切金金金金金金姜金金金蔡櫻佐佐澤澤佐佐齊佐酒蘆赤青青天吾有荒安安安青
 木井森繁月屋塚江谷庄行崎尾田浦林好制池山藤村村藤々藤佐見田井森木日孫賀井藤柳
 外聖聖悟泳奎泳泳大澤良祐猪崎辰一鶴應幸允重東篤潤允漢鎮錫漢元性德容基虎七木隆常初又國商綱
 太富太榮正次次治太龍春治有泰重謙良太小態九亮太正次太直德戒次子光太三太
 郎男良郎旭勉一夫太壽植穠綺植郎郎郎郎吉源均馬煥麟一馬芳策彝次彦郎謙龜煥準卓郎品鎮奎玉泰陸永瑞昌珠斗一鐵郎平一郎太吉之郎郎吉英三郎勝豐郎郎善浩郎

同民會創立趣旨

極東の天地は日に益々多事ならんこと日本國民は極東の文化を促進し世界の平和に貢獻すべき天職を有す協心同力の必要今日に於て最も切なり居を朝鮮半島に占むる者或は父祖以來此に住せるあ

同民會創立趣旨

極東の天地は日に益々多事ならん。日本國民は極東の文化を促進し世界の平和に貢獻すへき天職を有す。協心同力の必要。今日に於て最も切なり。居を朝鮮半島に占むる者。或は父祖以來此に住せるあり。或は近年に至りて移り來たれるあり。雖も共に日本國民たるの自覺を有せざるべからず。日本國民は東亞に繋がる先進者なり。日本國の盛衰隆替は實に東亞全體の運命を左右するものなり。吾人の責たるまた重からずや。

彼の歐洲の大戦亂は數年の前に於て終熄せりと雖も列強競争の形勢は更に緩和せらるゝ所なし。列強の競争は財力と智力と學力との競争なり。其の財力を富まし其の智力を盡し其の學力を示すへき最好の地として列強は何れも眼を吾か極東に注けり。極東の天壇は必ずや列強競争の中心と化し去らざる能はず。此時に當りて能く列強の間に介在し正義の主張を狂射すして能く彼等を牽制し永遠の平和を維持するに努むへきもの吾か日本國民を措て之を他に求むるを得ずや。日本國民は此の本事に當り能く其の責を果し其の任を全ふするによりて以て自己の實力を世界に示すへきなり。

朝鮮半島は實に極東の咽喉なり。彼の列強と吾か日本國との接觸に於て之が關門たるへき地位に在り。此の半島に住する者は同文同種の民にして今や共に日本國民たり。共に日本國民としての光榮を分かち又日本國民としての責任を分つへき者なり。然るに内は融和の實未だ全からずして動もすれば敵徒に感情に趁せて互に相離反し反目嫉視せんとする傾向あり。外は矯激浮薄の思想澎湃として迫り將に我が善徳の東洋恩潮を覆ふべしとあり。茲に於て其の結核を醫ふし互に相砥礪し相扶持して勤勉努力の風習と剛健誠實の氣象とを養成し以て百年の大計を構づるは洵に今日に於ける急務なり。況んや這次關東地方の今古未曾有の大災害は實に我國民の大試練にして正さに凡ての過去の迷想を一掃し清新の意氣と勇猛の努力とを傾注し改造復興の業に勤まざるべからざる秋に於ておや我等不敏と雖も此に感ずる所あり。江湖有素なる諸君子の指導を得て同民會を創立し左記綱領により聊か獻替の一助たらしめんとす。幸に微衷の在る所を察し力を本會の發展に盡さるゝ志士仁人多かるべし。利を獨り其等の慶のみならん亦實に邦家の大幸たるへき也。

同民會の綱領

- 一、亞細亞民族結合の基礎として内睦融和の徹底的實行を期す
- 一、質實剛健の氣風を養ひ輕佻浮薄の思想を排す
- 一、勤勉力行の風を興し怠惰情弱の弊を戒む

同民會創立趣旨

極東の天地は日に益々多事ならんこと日本國民は極東の文化を促進し世界の平和に貢獻すべき天職を有す協心同力の必要今日に於て最も切なり居を朝鮮半島に占むる者或は父祖以來此に住せるあり或は近年に至りて移り來たれるありと雖も共に日本國民たるの自覺を有せざるべからず日本國民は東亞に於ける先進者なり日本國の盛衰隆替は實に東亞全體の運命を左右するものなり吾人の責たるまた重からずや

彼の歐洲の大戦亂は數年の前に於て終熄せりと雖も列強競争の形勢は更に緩和せらるゝ所なし列強の競争は財力と智力と學力との競争なり其の財力を富まし其の智力を盡し其の學力を示すべき最好の地として列強は何れも眼を吾が極東に注けり極東の天壤は必ずや列強競争の中心と化し去らざる能はず此時に當りて能く列強の間に介在し正義の主張を枉けずして能く彼等を牽制し永遠の平和を維持するに努むべきもの吾が日本國民を措て之を他に求むるを得んや日本國民は此の大事に當り能く其の責を果し其の任を全うするによりて以て自己の實力を世界に示すべきなり

朝鮮半島は實に極東の咽喉なり彼の列強と吾が日本國との接觸に於て之が關門たるべき地位に在り此の半島に住する者は同其國權の民にして今や共に日本國民たり共に日本國民としての光榮を分かち又日本國民としての責任を分つべき者なり然るに内は融和の實未だ全からずして動もすれば徒に感情に趁せて互に相離反し反目嫉視せんとする傾向あり外は矯激浮薄の思想澎湃として迫り將に我が素樸の東洋風潮を盡せんとするあり茲に於て其の結合を堅うし互に相砥礪し相扶持して勤勉努力の風習と剛健誠實の氣象とを養成し以て百年の大計を樹つるは洵に今日に於ける急務なり況んや這次關東地方の今古未曾有の大災害は實に我國民の大試練にして正さに凡ての過去の迷想を一掃し清新の意氣と勇猛の努力とを傾注し改造復興の業に勵まざるべからざる秋に於ておや某等不敏と雖も此に感ずる所あり江湖有力なる諸君子の指導を得て同民會を創立し左記綱領により聊か獻替の一助たらしめんとす幸に微衷の在る所を察し力を本會の發展に盡さるゝ志士仁人多からば何ぞ獨り某等の慶のみならん亦實に邦家の大幸たるべき也

綱領

- 一、亞細亞民族結合の基調として内鮮融和の徹底的實行を期す
- 一、質實剛健の氣風を養ひ輕佻浮薄の思潮を排す
- 一、勤勉力行の風を興して放縱情弱の弊を戒む

同民會規程

第一章 總則

- 一、本會左記諸條を以て其の宗旨を定む。
イ、亞細亞民族結合ノ基調トシテ内鮮融和ノ徹底の實行ヲ期ス
ロ、實質剛健ノ氣風ヲ養ヒ輕佻浮薄ノ思潮ヲ排ス
ハ、勤勉力行ノ風ヲ興シテ放縱情弱ノ弊ヲ瘉ス
ニ、本會ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ

- イ、講演會講習會活動寫眞會等ヲ開催スルコト
ロ、會報ヲ發行シ必要ニ應ジ文章刊行ハ必要ナルモノハ之ヲ出ス
ハ、綱領ノ本旨ヲ實現スル爲メ特ニ朝鮮ノ美風良俗ヲ闡揚シ文化ヲ促進シ國民性ヲ向上スルコト
ニ、必要ニ應ジ各種ノ調査ヲ行フコト
ハ、各種ノ修養園遊藝場等其ノ必要ナルモノハ之ヲ設ケテ同民會ノ各機關ニ附屬シテ之ヲ經營スルコト
其ノ他評議員會ニテ決議シタル事項ハ之ヲ行フコト

第二章 組織

- 一、本會ハ同民會ト稱ス
ニ、本會ノ事務所ハ京城府ニ設ケル
三、必要ニ應ジ地方ニ本會ノ支所ヲ設ケル
四、本會ハ左ノ役員ヲ置ク
會長一名 副會長一名 理事七名 內三名ヲ常務理事トス 評議員二十五名
ニ、必要ニ應ジ本會ニ總裁副總裁ヲ推戴シ又顧問ヲ聘スルコト
三、評議員ハ本會ノ發起人中ヨリ互選ス欠員アリタル下ヤハ評議員會ノ推薦ニ依リテ補充ス
四、會長副會長及理事ハ評議員會ニ於テ推薦ス常務理事ハ理事會ニ於テ互選ス
五、支部ノ役員及組織ハ評議員會ノ議ヲ經テ決定ス
六、理事ノ任期ハ二年トス但シ重任ヲ擔ヒタル者ハ其ノ再選ノ可否ヲ決定ス

第三章 經費

- 一、本會ノ會員ヲ分テ名譽會員贊助會員特別會員正會員トシテ之ノ地位ヲ定ム
二、本會ニ功勞アル者又ハ他國アリテ本會ノ趣旨ニ賛同セラル者ニシテ評議員會ニ推薦シタル者ヲ名譽會員トス
三、本會ノ趣旨ヲ傳播スル爲メ一時金ニ百圓以上者ハ名譽會員トシテ之ノ地位ヲ定ム
年賦ニテ三百圓以上ヲ寄附スル者ハ贊助會員トシテ之ノ地位ヲ定ム
四、本會ノ趣旨ヲ賛同シ毎年會費拾圓ヲ納ムル者ヲ特別會員又會費二圓ヲ納ムル者ヲ正會員トス

第四章 附則

- 一、本會ハ左記諸條を以て其の宗旨を定む。
イ、亞細亞民族結合ノ基調トシテ内鮮融和ノ徹底の實行ヲ期ス
ロ、實質剛健ノ氣風ヲ養ヒ輕佻浮薄ノ思潮ヲ排ス
ハ、勤勉力行ノ風ヲ興シテ放縱情弱ノ弊ヲ瘉ス
ニ、本會ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ

第五章 附則

- 一、本會ハ左記諸條を以て其の宗旨を定む。
イ、亞細亞民族結合ノ基調トシテ内鮮融和ノ徹底の實行ヲ期ス
ロ、實質剛健ノ氣風ヲ養ヒ輕佻浮薄ノ思潮ヲ排ス
ハ、勤勉力行ノ風ヲ興シテ放縱情弱ノ弊ヲ瘉ス
ニ、本會ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ

第六章 附則

- 一、本會ハ左記諸條を以て其の宗旨を定む。
イ、亞細亞民族結合ノ基調トシテ内鮮融和ノ徹底の實行ヲ期ス
ロ、實質剛健ノ氣風ヲ養ヒ輕佻浮薄ノ思潮ヲ排ス
ハ、勤勉力行ノ風ヲ興シテ放縱情弱ノ弊ヲ瘉ス
ニ、本會ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ

同民會 創立規程

男爵及...

106

京城商業會議所內
同民會創立事務所
創立委員長 北條時敬

東京山石川延原
一三六
東京山石川延原



15 欠

謹啓愈御清穆ニ被爲涉奉慶賀候陳者本月十五日ヲトシ左記ノ通り本會創立總會並ニ發會式舉行致候間萬障御差繰御來臨被成下度此段御通知申上候 敬具

大正十三年四月 日

京城商業會議所内
同民會創立事務所

創立委員長 北條 時 敬

一、期日 四月十五日(火曜)

一、場所 京城長谷川町朝鮮ホテル

創立總會 午後一時

創立委員長挨拶
規約通過報告
評議員互選定告
休議員會
役員推選報告
發會式 午後二時半

會長挨拶
來賓祝電朗讀
祝辭

講演會
場所 京城長谷川町公會堂
時間 四月十五日午後七時半開會

同民會創立趣旨

極東の天地は日に益々多事ならん。日本國民は極東の文化を促進し世界の平和に貢獻すへき天職を有す。協心同力の必要。今日に於て最も切なり。居を朝鮮半島に占むる者。或は父祖以來此に住せるあり。或は近年に至りて移り來たれるあり。雖も共に日本國民たるの自覺を有せざるへからず。日本國民は東亞に於ける先進者なり。日本國の盛衰隆替は實に東亞全體の運命を左右するものなり。吾人の責たるまた重からずや。

彼の歐洲の大戦亂は數年の前に於て終熄せり。雖も列強競争の形勢は更に緩和せらるゝ所なし。列強の競争は財力と智力と學力との競争なり。其の財力を富まし其の智力を盡し其の學力を示すへき最好の地として列強は何れも眼を吾か極東に注けり。極東の天地は必ずや列強競争の中心と化し去らざる能はず。此時に當りて能く列強の間に介在し正義の主張を枉けずして能く彼等を牽制し永遠の平和を維持するに努むへきもの。吾か日本國民を措て之を他に求むるを得んや。日本國民は此の大事に當り能く其の責を果し其の任を全うするによりて以て自己の實力を世界に示すへきなり。

朝鮮半島は實に極東の咽喉なり。彼の列強と吾か日本國との接觸に於て之が關門たるへき地位に在り。此の半島に住する者は同文同種の民にして今や共に日本國民たり。共に日本國民としての光榮を分かち又日本國民としての責任を分つへき者なり。然るに内は融和の實未だ全からずして動もすれば徒に感情に趁せて互に相離反し反目嫉視せんとする傾向あり。外は矯激浮薄の思想澎湃として迫り將に我か至純の東洋思潮を蠱毒せんとするあり。玆に於て其の結合を堅うし互に相砥礪し相扶持して勤勉努力の風習と剛健誠實の氣象とを養成し以て百年の大計を樹つるは洵に今日に於ける急務なり。況んや這次關東地方の今古未曾有の大災害は實に我國民の大試鍊にして正さに凡ての過去の迷想を一掃し清新の意氣と勇猛の努力とを傾注し改造復興の業に勵まざるへからざる秋に於ておや某等不敏と雖も此に感ずる所あり。江湖有力なる諸君子の指導を得て同民會を創立し左記綱領により聊か獻替の一助たらしめんとす。幸に微衷の在る所を察し力を本會の發展に盡さるゝ志士仁人多からば何ぞ獨り某等の慶のみならん。亦實に邦家の太幸たるへき也。

綱 領

- 一、亞細亞民族結合の基調として内鮮融和の徹底的實行を期す
- 一、質實剛健の氣風を養ひ輕佻浮薄の思潮を排す
- 一、勤勉力行の風を興して放縱惰弱の弊を戒む

大正十二年十一月一日

同民會規約

第一事 業

- 一、本會ハ左記綱領ヲ達成スルヲ以テ目的トス
イ、亞細亞民族結合ノ基調トシテ内融和ノ徹底の實行ヲ期ス
ロ、質實剛健ノ氣風ヲ養ヒ輕佻浮薄ノ思潮ヲ排ス
ハ、勤勉力行ノ風ヲ興シテ放縱情弱ノ弊ヲ戒ム
- 二、本會ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ
イ、講演會講習會活動寫真會等ヲ開催スルコト
ロ、會報ヲ發行シ必要ニ應シ文書ヲ刊行スルコト
ハ、綱領ノ本旨ヲ實現スル爲メ特ニ朝鮮ノ美風良俗ヲ闡揚シ文化ノ促進生活ノ向上ヲ圖ルコト
ニ、必要ニ應シ各種ノ調査ヲナシ公表スルコト
ホ、各種ノ修養團體ト連絡シ其ノ發達ヲ援助スルコト
ヘ、其ノ他評議員會ニテ決議シタル事項

第二 名 稱

- 一、本會ハ同民會ト稱ス
- 二、本會ノ事務所ハ京城府
- ニ置ク
- 三、必要ニ應シ地方ニ本會ノ支部ヲ設置ス

第三 經 費

- 一、本會ノ經費ハ基本資産ノ利子基本資産ニ屬セザル有志ノ寄附金及會員ノ會費ヲ以テ之ヲ支辨ス

第四 役 員

- 一、本會ニ左ノ役員ヲ置ク
會長一名副會長二名理事二十名(内三名ヲ常務理事トス)監事二名評議員若干名
- 二、本會ニ總裁副總裁各一名ヲ推戴シ又顧問及相談役若干名ヲ置クコトアルベシ
- 三、評議員ハ本會創立ノ際發起人中ヨリ之ヲ互選シ其ノ後ハ評議員會ニ於テ決ス
- 四、會長副會長理事及監事ハ評議員會ニ於テ推戴ス常務理事ハ理事會ニ於テ互選ス
- 五、支部ノ役員及組織ハ評議員會ノ議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム
- 六、理事及監事ノ任期ハ二箇年トス但シ重任ヲ妨ケズ

第五 會 員

- 一、本會ノ會員ヲ分チテ名譽會員贊助會員特別會員正會員トス
- 二、本會ニ功勞アル者又ハ德望アリテ本會ノ趣旨ニ賛同セラル、者ニシテ評議員會ニテ推薦シタル者ヲ名譽會員トス
- 三、本會ノ趣旨ヲ賛同シ一時金一百圓以上若クハ一年間月賦ニテ十圓以上又ハ五箇年賦ニテ三百圓以上ヲ寄附スル者ヲ贊助會員トス
- 四、本會ノ趣旨ヲ賛同シ毎年會費拾圓ヲ納ムル者ヲ特別會員又會費二圓ヲ納ムル者ヲ正會員トス

第六 會 議

- 一、會議ヲ分チテ理事會評議員會議トス
- 二、理事會ハ會長隨時之ヲ招集シ會務ヲ協議ス
- 三、評議員會ハ定期(四月)若クハ臨時ニ會長之ヲ招集シ必要ナル事項ヲ決議ス

同民會

創立趣旨書
並規約書

東. 市. 丁. 石. 川. 原. 町. 一. 三. 丁.
坂. 谷. 北. 方. 部. 長.



東城長谷川町二丁目

同氏会事務所

佐藤慶次郎

中村健太郎

中村健太郎

事務所事務所
大正十一年四月廿六日付

拜啓時下春陽の候益々御清康奉賀候陳
者豫て御配慮を煩し候同民會去る四月
十五日創立を告げ申候處生等其の常務
理事に選定せられ候淺學菲才到底其の
任に非す候得共大方の御後援を得て驚
鈍を盡し度考に御座候就ては今後一層
の御援助と御指導とを賜り度奉願上候
先は就任の御挨拶旁御願迄如此に御座
候
敬具

大正十三年四月 日

同民會事務所

佐藤虎次郎

申 錫 麟

中村健太郎

男爵
阪谷芳郎殿



永代石川原無二二六
阪谷芳郎殿

十三年四月廿五日

肅啓益々御清穆奉慶賀候

諸テ我同民會ハ各位ノ御指導ニヨ

リ漸ク發展ノ緒ニ相付候トハ申セ

京城府寬勳洞一百九十八番地(舊竹洞宮)

同民會本部

電話光化門長

番

肅啓益々御清穆奉慶賀候

偕テ我同民會ハ各位ノ御指導ニヨ
リ漸ク發展ノ緒ニ相付候トハ申セ
尙前途殊ニ會員諸士ノ御後援ニ俟
ツ處多大ニ御座候何卒御知己へ御
紹介等萬事格別ノ御聲援被下度御
願申上候

尙去ル四月十五日總會ニ於テ理事
會へ委任相成候規約修正ノ義去ル
四月廿六日開催ノ理事會ニ於テ別
紙ノ通り改定仕候間御諒承被下度
右御通知旁々御依頼申上候 敬具

追テ本會ハ京城商業會議所内ノ假事務所
ニ執務罷在候處豫テ改修中ノ工程ヲ終ヘ
去ル十二日左記へ移轉致候條併テ御了承
被下度候

京城府寬勳洞一九八ノ一

(竹洞宮跡)

大正十三年五月 日

同民會本部

殿

同民會創立趣旨

歐洲の大戦亂は數年の前に於て終熄せりと雖も列強競争の形勢は更に緩和せらるゝ所なし列強の競争は財力と智力と學力との競争なり其の財力を富まし其の智力を盡し其の學力を示すへき最好の地として列強は何れも眼を吾か極東に注けり極東の天地は必ずや列強競争の中心と化し去らざる能はず此時に當りて能く列強の間に介在し正義の主張を掲げしめて能く永遠の平和を維持するに努むべきもの吾か日本國民を措て之を他に求むるを得んや日本國民は此の大事に當り能く其の責を果し其の任を全うするによりて以て自己の實力を世界に示すへきなり然るに内は融和の實未だ全からずして動もすれば徒に感情に趁せて互に相離反し反目嫉視せんとする傾向あり外は矯激浮薄の思想澎湃として迫り將に我か至純の東洋思潮を蠱毒せんぞ茲に於て其の結合を堅うし互に相砥礪し相扶持して勤勉努力の風習を剛健誠實の氣象を養成し以て百年の大計を樹つるは洵に今日に於ける急務なり某等不敏も此に感ずる所あり江湖諸君子の賛同を得て同民會を創立し左記綱領を提けて蹶起奮進せんぞ欲す幸に微衷の在る所を察し力を本會に盡さるゝ志士仁人あらは何ぞ獨り某等の慶のみならん亦實に邦家の大幸たるへき也

綱領

- 一、大局に高處して内鮮融和の徹底的實行を期す
- 一、實實剛健の氣風を養ひ輕佻浮薄の思潮を排す
- 一、勤勉力行の風を興して放縱惰弱の弊を戒む

大正十三年四月十五日

同民會役員名簿

(イロハ順)

| | | | |
|------|-------------|-----------|----------|
| 會長 | 北條時敬 | 安藤又三郎 | 侯爵 李 完 用 |
| 副會長 | 男爵 李 載 克 | 公爵 德川 家 達 | |
| 顧問 | 侯爵 朴 泳 孝 | 子爵 澁澤 榮 一 | |
| 相談役 | 伯爵 宋 秉 駿 | 趙 鎮 泰 | 劉 猛 |
| | 富田 儀 作 | 谷 多 喜 磨 | 野 中 清 |
| | 香椎源太郎 | 松山常次郎 | 秋月左都夫 |
| | 前田 昇 | | 有 馬 純 吉 |
| 理事 | 宮岡直記 | | |
| | 方 奎 煥 | 李 炳 烈 | 李 範 昇 |
| | 李 幹 鎬 | 李 升 鉉 | 大村友之丞 |
| | 高橋章之助 | 高山 孝 行 | 曹 秉 相 |
| | 釘本藤次郎 | 大和與次郎 | 山 岸 富 雄 |
| | 荒井初太郎 | 佐藤虎次郎 | 申 錫 麟 |
| 會計 | 渡邊彌幸 | 元 惠 常 | |
| 常任理事 | 中村健太郎 | 佐藤虎次郎 | 申 錫 麟 |
| 幹事 | 杉市郎平 | | |
| 幹事 | 河内山樂三 | 韓 相 龍 | |
| 監事 | 有賀光豊(評議員會長) | | |
| 評議員 | 方 奎 煥 | 朴 承 稷 | 堀内滿輔 |
| | 張 燾 鎰 | 李 斗 鎰 | 李 炳 烈 |
| | 劉 海 鍾 | 李 元 錫 | 李 升 鉉 |
| | 大村百藏 | 渡邊彌幸 | 大村友之丞 |
| | 高山孝行 | 曹 秉 相 | 渡邊定一郎 |
| | 釘本藤次郎 | 工藤武城 | 中村健太郎 |
| | 元 惠 常 | 立 東 翔 | 大和與次郎 |
| | 小林源六 | 小杉謹八 | 藤井寛太郎 |
| | 足立丈次郎 | 赤木萬二郎 | 吳 台 煥 |
| | 澤村亮一 | 蔡 基 斗 | 佐藤虎次郎 |
| | 金 漢 奎 | 魚 允 迪 | 金 榮 漢 |
| | 執行猪太郎 | 閔 大 植 | 申 錫 麟 |
| | 住井辰男 | | 全 聖 旭 |
| | | | 杉市郎平 |
| | | | 朴 東 奎 |
| | | | 李 範 昇 |
| | | | 柳 一 宜 |
| | | | 恩田銅吉 |
| | | | 高橋章之助 |
| | | | 永 井 啓 |
| | | | 山 岸 富 雄 |
| | | | 高 義 駿 |
| | | | 荒井初太郎 |
| | | | 佐 瀨 熊 鐵 |
| | | | 金 漢 陸 |
| | | | 申 應 熙 |
| | | | 杉市郎平 |

同民會規約

第一事 業

- 一、本會ハ左記綱領ヲ達成スルヲ以テ目的トス
イ、大局ニ高處シテ内鮮融和ノ徹底的實行ヲ期ス
ロ、質實剛健ノ氣風ヲ養ヒ輕佻浮薄ノ思潮ヲ排ス
ハ、勤勉力行ノ風ヲ興シテ放縱情弱ノ弊ヲ戒ム
- 二、本會ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ
イ、講演會講習會活動寫眞會等ヲ開催スルコト
ロ、會報ヲ發行シ必要ニ應シ文書ヲ刊行スルコト
ハ、美風良俗ヲ闡揚シ趣味ノ向上ヲ圖リ人材ノ養成勞資ノ協調農村ノ振興及ビ社會改善ニ關スル方法ヲ講究スルコト
ニ、必要ニ應シ各種ノ調査ヲ公表スルコト
ホ、本會ト趣旨ヲ同フスル各種ノ團體ト連絡シ其ノ發達ヲ助長スルコト
ヘ、其ノ他評議員會ニテ決議シタル事項

第二名 稱

- 一、本會ハ同民會ト稱ス
- 二、本會ハ京城府寬勳洞百九十八番地ニ置ク
- 三、必要ノ地ニ本會ノ支部ヲ設置ス

第三經 費

- 一、本會ノ經費ハ基本資産ノ利子基本資産ニ屬セザル有志ノ寄附金及會員ノ會費ヲ以テ之ヲ支辨ス

第四役 員

- 一、本會ニ左ノ役員ヲ置ク
會長一名副會長二名理事二十名(内三名ヲ常任理事トス)監事二名評議員若干名
- 二、本會ニ總裁副總裁各一名ヲ推戴シ又顧問及相談役若干名ヲ置クコトアルベシ
- 三、評議員ハ本會創立ノ際發起人中ヨリ之ヲ互選シ其ノ後ハ總會ニ於テ之ヲ決ス
- 四、會長副會長理事及監事ハ評議員會ニ於テ推薦ス常任理事ハ理事會ニ於テ互選ス
- 五、支部ノ役員及組織ハ評議員會ノ議ヲ經テ別ニ之ヲ定ム
- 六、理事及監事ノ任期ハ二箇年トス但シ重任ヲ妨ケズ

第五會 員

- 一、本會ノ會員ヲ分チテ名譽會員贊助會員特別會員正會員トス
- 二、名譽會員ハ本會ニ功勞アリ又ハ德望アリテ評議員會ニテ推薦シタル者トス
- 三、贊助會員ハ一時金一百圓以上若クハ一箇年間月賦ニテ十圓以上又ハ五箇年賦ニテ三百圓以上ヲ齎出スル者トス
- 四、特別會員ハ毎年會費十圓正會員ハ會費二圓ヲ齎出スル者トス

第六會 議

- 一、會議ヲ分チテ理事會評議員會總會トス
- 二、理事會ハ會長之ヲ招集シ會務ヲ協議ス
- 三、評議員會ハ會長之ヲ招集シ必要ナル事項ヲ決議ス
- 四、總會ハ必要ニ應シ會長之ヲ招集ス

附 則

- 一、本規約ノ改正ハ總會ノ決議ヲ要ス

同民會

創立趣旨書
並規約書

東京市小石川區藤町二二六

男爵阪谷芳郎殿

十二月廿六日

109



友人堀江氏より贈り物に付

打

京城府若草町三十五番地

同民會本部

電話本局三〇八六番
振替口座京城一三七二三番

(甲號)

同民會財團法人寄付行爲

第一條 本法人ハ同民會財團法人ト稱ス

第二條 本法人ハ同民會ノ爲メ其事業遂行ニ要スル財産ヲ所有シ之ヲ供給スルヲ以テ目的トス

第三條 本法人ハ其事務所ヲ京畿道京城府若草町三十五番地ニ置ク

第四條 本法人設立ノ日ニ於ケル基本財産ハ別紙目錄記載ノ現金及有價證券トス

第五條 左ノ各號ノ一ツニ該當スルモノハ凡ヘテ之ヲ本法人ノ基本財産ニ編入スルモノトス

一、特ニ基本財産トシテ本法人ニ寄付セラル、財産
一、同民會實行豫算ノ剩餘金ニシテ同會ヨリ寄付アリタルモノ

第六條 本法人ノ目的遂行上基本財産ヲ處分セントスルトキハ理事會ニ於テ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

第七條 基本財産タル金錢ハ之ヲ確實ナル銀行ニ預入レ又ハ確實ナル有價證券トシテ之ヲ管理スルモノトス

第八條 本法人ノ財産管理上要スル經費ハ凡ヘテ同民會ノ豫算ニ於テ之ヲ支辨スルモノトス

第九條 本法人ニ理事七名監事二名ヲ置ク

第十條 理事及監事ハ同民會評議員會ニ於テ之ヲ選舉スルモノトス

第十一條 理事及監事ノ任期ハ二年トス

第十二條 死亡、辭任、資格喪失其他ノ事由ニ依リ理事及監事ニ決員ヲ生シタルトキハ第十條ニ依リ補充選舉ヲ行フモ

同民會財團法人寄付行爲

- 第一條 本法人ハ同民會財團法人ト稱ス
- 第二條 本法人ハ同民會ノ爲メ其事業遂行ニ要スル財産ヲ所有シ之ヲ供給スルヲ以テ目的トス
- 第三條 本法人ハ其事務所ヲ京畿道京城府若草町三十五番地ニ置ク
- 第四條 本法人設立ノ日ニ於ケル基本財産ハ別紙目錄記載ノ現金及有價證券トス
- 第五條 左ノ各號ノ一ツニ該當スルモノハ凡ヘテ之ヲ本法人ノ基本財産ニ編入スルモノトス
- 一、特ニ基本財産トシテ本法人ニ寄付セラル、財産
- 一、同民會實行豫算ノ剩餘金ニシテ同會ヨリ寄付アリタルモノ
- 第六條 本法人ノ目的遂行上基本財産ヲ處分セントスルトキハ理事會ニ於テ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス
- 第七條 基本財産タル金錢ハ之ヲ確實ナル銀行ニ預入レ又ハ確實ナル有價證券トシテ之ヲ管理スルモノトス
- 第八條 本法人ノ財産管理上要スル經費ハ凡ヘテ同民會ノ豫算ニ於テ之ヲ支辨スルモノトス
- 第九條 本法人ニ理事七名監事二名ヲ置ク
- 第十條 理事及監事ハ同民會評議員會ニ於テ之ヲ選舉スルモノトス
- 第十一條 理事及監事ノ任期ハ二年トス
- 第十二條 死亡、辭任、資格喪失其他ノ事由ニ依リ理事及監事ニ缺員ヲ生シタルトキハ第十條ニ依リ補缺選舉ヲ行フモノトス
- 但補缺理事及監事ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス
- 第十三條 理事ハ理事會ヲ組織シ理事長一名ヲ互選ス、理事長ハ法人ヲ代表シ理事會ヲ招集シ其議長トナリ其他理事會ニ關スル一切ノ事務ヲ處理スルモノトス
- 第十四條 理事會ニ於テ決議スヘキ事項ハ豫メ各理事ニ通知スルモノトス
- 理事會ニ於テハ理事全員ノ同意アルニアラサレハ通知以外ノ事項ニ付決議スルコトヲ得ス
- 第十五條 本寄付行爲ノ變更又ハ本法人ヲ解散セントスル場合ハ理事會ノ決議ニ基キ同民會總會ニ於テ出席會員三分ノ二以上ノ同意アルヲ要ス
- 第十六條 本法人解散ノ場合ニ於テハ本法人ノ財産ハ第十五條ノ手續ニ準シ其處分方法ヲ決定スルモノトス
- 附 則
- 第十七條 本法人設立ノ際ニ於ケル理事及監事ハ左ノ如ク指定ス

理 事

男爵

李 載 克

安 藤 又 三 郎

申 藤 錫 麟

佐 藤 虎 次 郎

中 村 健 太 郎

渡 邊 彌 幸

元 惠 常

監 事

韓 相 龍

河 內 山 樂 三

大正 年 月 日

設 立 者

男爵

李 載 克

安 藤 又 三 郎

同民會財團法人寄付行為

- 第一條 本法人ハ同民會財團法人ト稱ス
- 第二條 本法人ハ同民會ノ爲メ其事業遂行ニ要スル財産ヲ所有シ之ヲ供給スルヲ以テ目的トス
- 第三條 本法人ハ其事務所ヲ京畿道京城府若草町三十五番地ニ置ク
- 第四條 本法人設立ノ日ニ於ケル基本財産ハ別紙目錄記載ノ現金及有價證券トス
- 第五條 左ノ各號ノ一ツニ該當スルモノハ凡ヘテ之ヲ本法人ノ基本財産ニ編入スルモノトス
- 一、特ニ基本財産トシテ本法人ニ寄付セラル、財産
- 一、同民會實行豫算ノ剩餘金ニシテ同會ヨリ寄付アリタルモノ
- 第六條 本法人ノ目的遂行上基本財産ヲ處分セントスルトキハ理事會ニ於テ三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス
- 第七條 基本財産タル金錢ハ之ヲ確實ナル銀行ニ預入レ又ハ確實ナル有價證券トシテ之ヲ管理スルモノトス
- 第八條 本法人ノ財産管理上要スル經費ハ凡ヘテ同民會ノ豫算ニ於テ之ヲ支辨スルモノトス
- 第九條 本法人ニ理事七名監事二名ヲ置ク
- 第十條 理事及監事ハ同民會評議員會ニ於テ之ヲ選舉スルモノトス
- 第十一條 理事及監事ノ任期ハ二年トス
- 第十二條 死亡、辭任、資格喪失其他ノ事由ニ依リ理事及監事ニ缺員ヲ生シタルトキハ第十條ニ依リ補缺選舉ヲ行フモノトス
- 但補缺理事及監事ノ任期ハ前任者ノ殘任期トス
- 第十三條 理事ハ理事會ヲ組織シ理事長一名ヲ互選ス、理事長ハ法人ヲ代表シ理事會ヲ招集シ其議長トナリ其他理事會ニ關スル一切ノ事務ヲ處理スルモノトス
- 第十四條 理事會ニ於テ決議スヘキ事項ハ豫メ各理事ニ通知スルモノトス
- 第十五條 理事會ニ於テハ理事全員ノ同意アルニアラサレハ通知以外ノ事項ニ付決議スルコトヲ得ス
- 本寄付行為ノ變更又ハ本法人ヲ解散セントスル場合ハ理事會ノ決議ニ基キ同民會總會ニ於テ出席會員三分ノ二以上ノ同意アルヲ要ス
- 第十六條 本法人解散ノ場合ニ於テハ本法人ノ財産ハ第十五條ノ手續ニ準シ其處分方法ヲ決定スルモノトス
- 附 則
- 第十七條 本法人設立ノ際ニ於ケル理事及監事ハ左ノ如ク指定ス

理 事

男爵

李 載 克
安 藤 又 三 郎
申 藤 錫 麟
佐 藤 虎 次 郎
中 村 健 太 郎
渡 邊 彌 幸
元 惠 常

監 事

韓 相 龍
河 內 山 樂 三

設立者

男爵

李 載 克
安 藤 又 三 郎

大正 年 月 日

相談役 (イロハ順)

伯爵 高島平三郎

評議員 (イロハ順) 丸山鶴吉

伊藤藤雄

井上久

井上久

石原磯次

服部豊

花園佐

林本蒼

橋本蒼

丹羽清次

新田耕

西村宗

西源太

堀直

方台

朴炳

朴斗

苦地造酒

富野繁

趙南

池成

陣友

沈東

李容

李在

梁相

李弼

劉秉

柳秉

李謙

李康

李恒

岡部新太

小川勝

大垣丈

大浦一

和田八

和川千

川上禮

兼古

韓翼

吉川義

谷小

田中

田中

田中

竹智

竹上

田代

宋仲

宋達

宋達

宋達

宋達

松原徹

松本雅

前本勝

真木仙

增田三

嚴柱

嚴上

淵田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

福田

同本第二九〇號

大正十三年十二月二十日

同民會々長 北條時敬

陸石芳郎 殿

謹啓時下嚴寒の候益々御清安に被爲涉奉慶賀候緒て本會々務は大方の多大なる御同情と御援助に依り順調に進展致候就ては今同理事會及評議員會の決議を経て財團法人組織の事に相決候間此際總會を招集の上御審議相願度存候處歳末御繁忙の砌りに御座候へば便宜書面總會の承認を経て至急出願の手續致度候、尙會務の進展に伴ひ相談役及評議員増員の必要を認め去る十二月十三日評議員會の承認を得左記案件提案致候間併せて御承認被成下度此段得貴意度候
追て大正十四年一月十日迄に御回答に接せざる場合は御承認認め候間此儀御諒知被下度特に申添候

議 案

- 一、財團法人組織及別紙(甲號)財團法人寄付行爲案竝ニ右出願ニ關スル設立者及役員別紙(甲號末尾)ノ通り承認ノ件
- 二、別紙(甲號)寄付行爲ニ對シ主務官廳ニ於テ修正ノ指示アリシ場合ハ其修正方ヲ常任理事ニ委任スル事ヲ承認ノ件
- 三、相談役及評議員増員別紙(乙號)ノ通り承認ノ件

△備考……以上ハ大正十三年十二月十三日評議員會ニ於テ承認決議セラレタリ

肅啓 暑中御見舞申上候

諸君豫テ其筋ニ出願中ノ本會財團法人ハ去ル六月十八日附ヲ以テ許
可セラレ同月二十九日登記ノ手續ヲ了シ候、其詳細ハ(同民)ニ掲載
致置候間御承知ノ事ト存候ヘ共爲念右御報申上候
尙會報所載ノ通り客月大邸ニ慶尙北道支部ノ設置、來ル本月二十七
日ヨリ第一回同民夏季大學ノ開催、又今朝鮮蠶絲業助長ノ爲メ朝
鮮蠶絲會ト共同シテ高等蠶業講習會開催ノ豫定等、本會々務ハ逐次
順調ニ進展致シ誠ニ御同慶ニ不堪候
右暑中御見舞旁御報申上度如斯御座候
敬具

大正十四年七月

日

同

民

會

〔京城府若草町三三五〕
電話本局三〇八六番
〔振替口座京城三三三三番〕

110

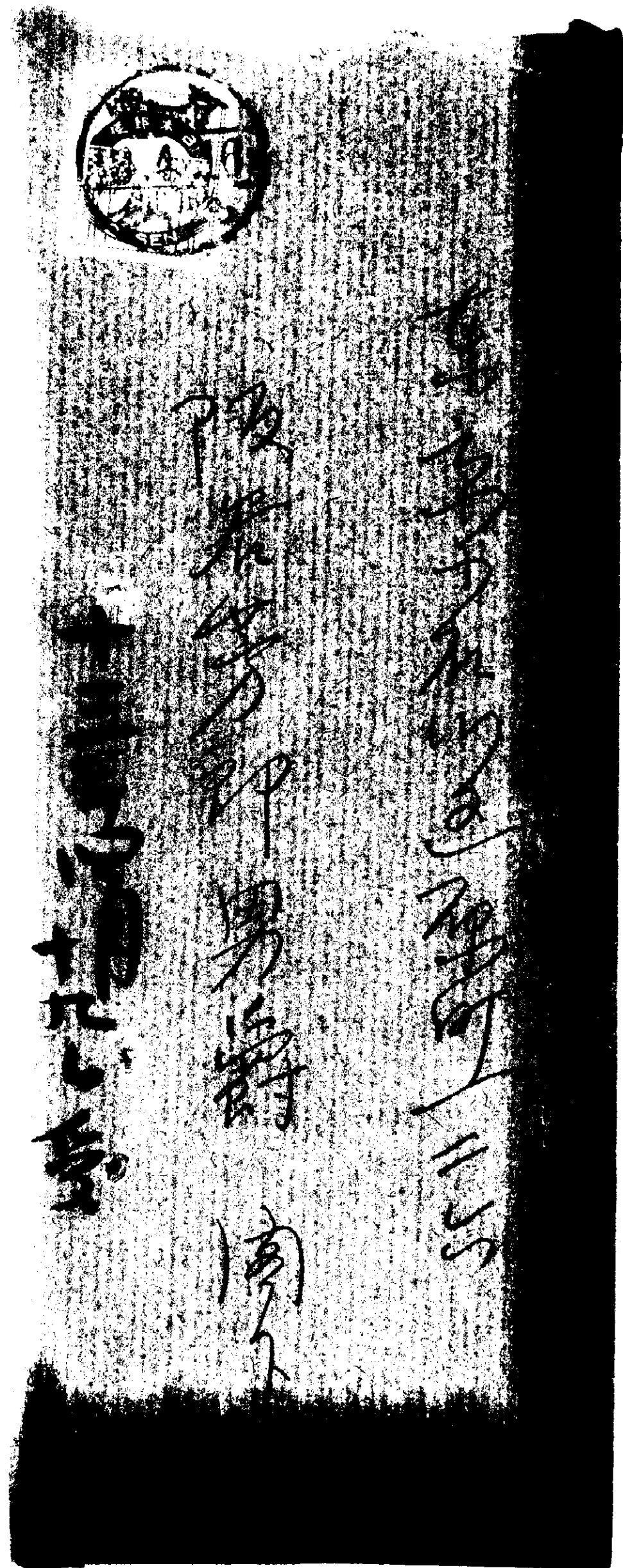


郵便はか

東京市小石川区東町一丁目
阪谷芳郎 氏

印刷局製

通達省行



宣言

我朝鮮ノ趨勢ハ大體ニ於テ著シキ進展ヲ見タノデアアル然シ現下ノ如キ朝鮮人ノ低劣ナル文化ト貧弱ナル經濟トヲ以テ如何ニシテ將來ニ善處シ其生存ヲ保持シ其繁榮ヲ期待シ得ベキカ之レ實ニ吾人焦眉ノ重大問題デアアル

惟フニ日韓併合ハ時代ノ要求ニヨリテ兩民族ガ渾然一體ヲ成シ内ハ民生ノ康福ト國家ノ隆運ヲ増進シ外ハ東洋ノ平和ヲ保障シ以テ世界ノ進運ニ順應センガ爲メニ外ナラナイノデアアル然ラバ即チ我朝鮮人タルモノ蒙テ啓キテ大局ヲ達觀シ衆心一致生存繁榮ヲ圖ルベキコトハ當面セル急問題ニシテ而カモ又向上進展ノ第一義デアアル



明
第
一
卷

眞弱ナル
眉ノ重大
増進シ外
人タル
天向上進

一
十
八
回
結
束
註
記

宣言

我朝鮮ノ趨勢ハ大體ニ於テ著シキ進展ヲ見タノデアアル然シ現下ノ如キ朝鮮人ノ低劣ナル文化ト貧弱ナル經濟トヲ以テ如何ニシテ將來ニ善處シ其生存ヲ保持シ其繁榮ヲ期待シ得ベキカ之レ實ニ吾人焦眉ノ重大問題デアアル

惟フニ日韓併合ハ時代ノ要求ニヨリテ兩民族ガ渾然一體ヲ成シ内ハ民生ノ康福ト國家ノ隆運ヲ増進シ外ハ東洋ノ平和ヲ保障シ以テ世界ノ進運ニ順應センガ爲メニ外ナラナイノデアアル然ラバ即チ我朝鮮人タルモノ蒙テ啓キテ大局ヲ達觀シ衆心一致生存繁榮ヲ圖ルベキコトハ當面セル急問題ニシテ而カモ又向上進展ノ第一義デアアル

然ルニ我朝鮮人ハ年來架空的獨立運動ヲ以テ幾多ノ生命ト財產ヲ犧牲ニ供シ何等ノ所得ナカリシハ世人ノ共ニ認ムルトコロデアアルニモ拘ハラズ尙今一部偏見者流ハ時機ノ到來ヲ夢想シ人心ヲ煽動眩惑ナラシメ無事ノ生靈ヲシテ其堵ニ安スル能ハサラシムルノミナラズ彼共產主義ノ如キ過激思想ヲ招徠シ其眞相ト利害トヲ深く考究スルトコロナク徒ラニ机上ノ空論又ハ奇矯ナル辯說ニ迷ハサレテ敢テ輕舉妄動ヲナスガ如キハ實ニ吾人ノ遺憾ニ堪ヘサルトコロデアアル

吾人ガ眞ニ民族ヲ愛シ國家ヲ憂フル誠意アラバ須ク國家社會ノ安寧秩序ヲ尊重シ新局面ヲ合法的ニ展開シ吾人ガ實生活ニ適合ナル施政ノ改善教育ノ振興産業ノ開發其他一切ヲ向上促進セシムルノガ最先急務ナルハ論ヲ俟タサルトコロデアアル而シテ之ガ實現ニハ先ツ官民ガ一致協力シテ各般ノ施設及改善ヲ行ヒ社會ノ健全ナル發達ヲ計リ内鮮融和ヲ徹底ナラシメ兩民族ノ共存共榮ノ實ヲ擧ゲ勞資ヲ協調シテ一般國民ノ生活基礎ヲ安固ナラシメ以ツテ國家百年ノ大計ヲ樹立スルヲ期セナケレバナラヌデアアル

故ニ吾人同志ハ茲ニ感スルトコロアリ驟然奮起シ左ノ綱領ヲ掲ゲ由來一切ノ因習情弊ヲ打破シ一切ノ黨派觀念ヲ超越シ小異ヲ捨テ大同ニ合シ空論ヲ排シ實狀ニ基キテ吾人所期ノ目的ニ勵精邁進セントス實クハ大方人士我等ノ微衷ヲ諒トシ齊聲贊同セラレンコトヲ

綱領

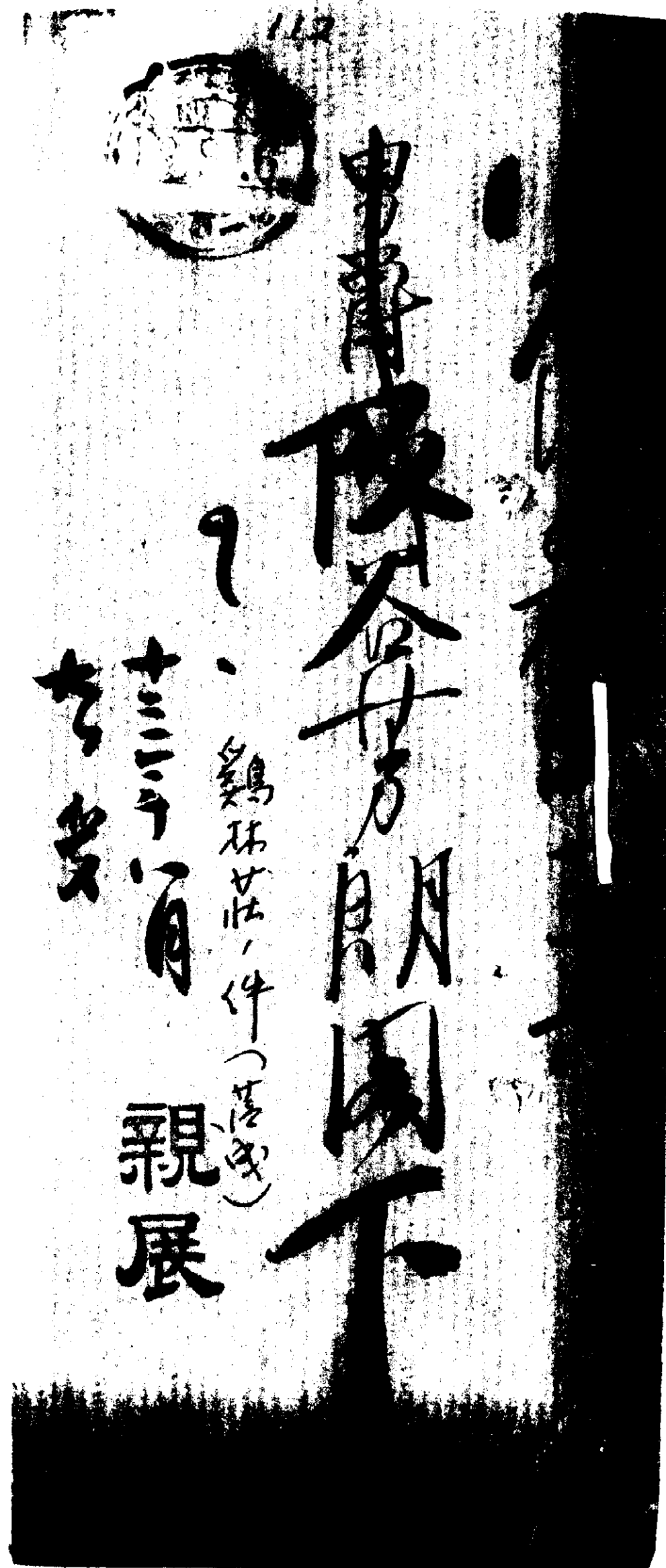
- 一、官民一致施政改善
- 二、大同團結思想善導
- 三、勞資協調生活安定

大正十三年三月二十五日

各派有志聯盟發起人

(イロハ順)

| | | | |
|-----|------------|-----|------------|
| 朴炳哲 | (維民會) | 朴海遠 | (朝鮮經濟會) |
| 朴海默 | (朝鮮小作人相助會) | 朴春琴 | (勞働相愛會) |
| 李豐載 | (維民會) | 李炳烈 | (國民協會) |
| 李東雨 | (國民協會) | 李東嶽 | (朝鮮小作人相助會) |
| 李昌煥 | (朝鮮小作人相助會) | 李升鉉 | (朝鮮經濟會) |
| 李容漢 | (朝鮮小作人相助會) | 李啓浩 | (朝鮮小作人相助會) |
| 李喜侃 | (同光會) | 柳秉龍 | (維民會) |
| 李永錫 | (國民協會) | 劉文煥 | (矯風會) |
| 劉秉珮 | (矯風會) | 羅弘錫 | (朝鮮小作人相助會) |
| 禹成鉉 | (國民協會) | 高義駿 | (國民協會) |
| 鄭圭煥 | (同光會) | 鄭鎮弘 | (儒道振興會) |
| 蔡基斗 | (朝鮮小作人相助會) | 金明濬 | (國民協會) |
| 金禹植 | (國民協會) | 金泰勳 | (維民會) |
| 金相尚 | (青林社) | 金重煥 | (矯風會) |
| 姜麟祐 | (國民協會) | 申錫麟 | (國民會) |
| 閔甲植 | (維民會) | 千英基 | (大正親睦會) |
| 芮宗錫 | (大正親睦會) | | |

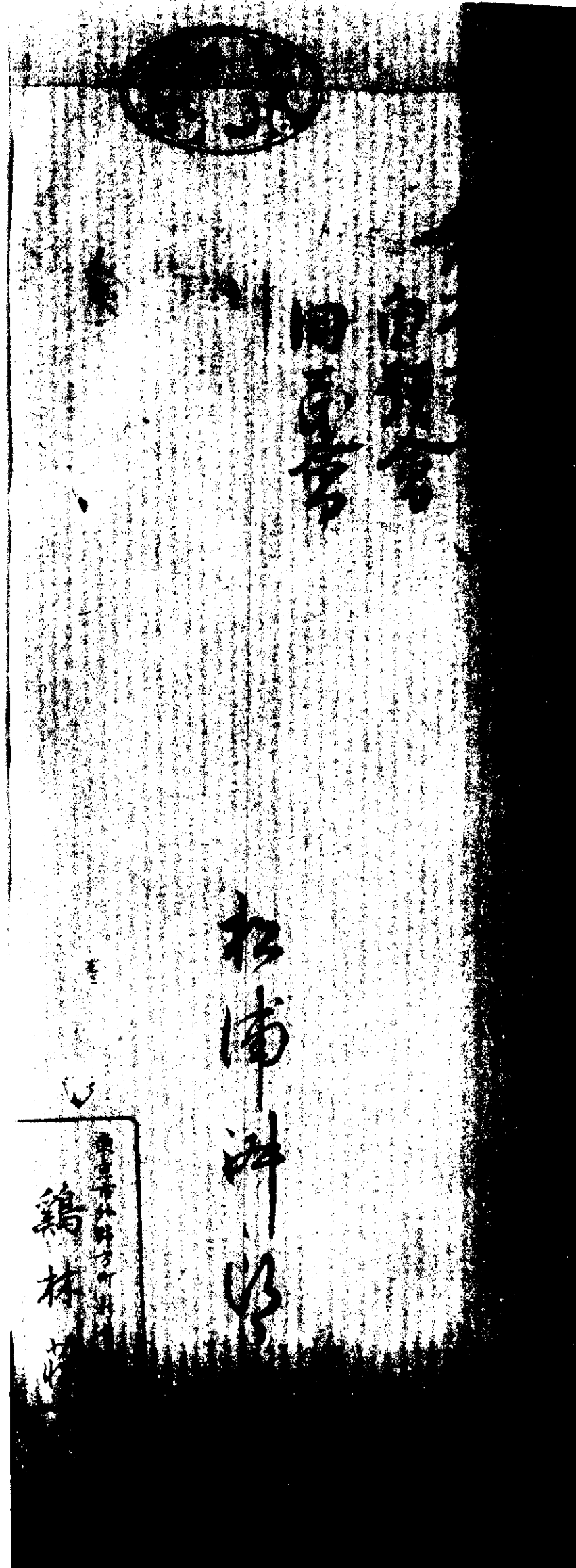


申
陳
公
月
閣
下

雞
林
莊
件
落
展
親

親
展

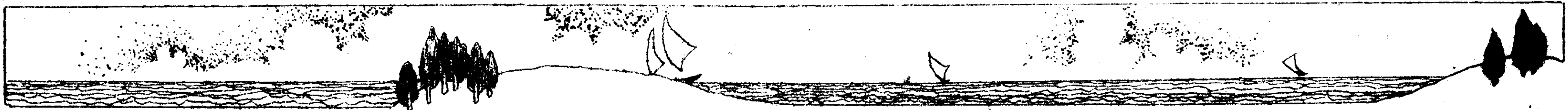
肅啓酷暑之折柄、彌々御清穆邦家之為に奉慶賀候。陳者
 豫てより御厚誼に奉辱候。鷄林莊儀漸々莊舍落成仕。本月
 五日より開莊致候。聞乍他事御放念被下度候。
 新莊舍は經費參萬參千餘圓を投ぜる。洋風二階建にして
 建坪二〇七坪、室數三三室、加之に二四六坪の農園を有
 し、更に一二〇人之收容被致候。斯くとも東京に於て朝鮮



肅啓酷暑之折柄彌々御清穆邦家之為に奉慶賀候 陳者
 豫てより御厚誼に奉辱候鶏林莊儀漸々莊舎落成仕り本月
 五日より開莊致候間午他事御放念被下度候
 新莊舎は經費參萬參千餘圓を投ぜる洋風二階建にして
 建坪二〇七坪、室數三二室、加之に二四六坪の農園を有
 し優に一〇〇人を收容被致候 斯くとも東京に於て朝鮮
 人の為に設けられたる機関として未だ之以上のもは
 無之かりしかと奉存候

當莊の政府當局より委託せられ候業務は簡易宿泊のみ
 に候も在京鮮人の現状に鑑み渡來鮮人の趨勢に想到れば
 尚且慊らざる所有之候まゝ別紙記載之通更に職業紹介、
 授産事業、労働學校、朝鮮文庫の四業を追加し之を大成
 を期し度奉存候

申迄もなく今日在京せる朝鮮人は学生労働者の區別な
 く共に將來全朝鮮を指導すべき地位に置かるべきものに
 して、明治初期に於ける洋行歸の人々の地位を御追想被
 下而して清末革命の中心人物を想起し現在朝鮮内地に於
 ける諸種の民衆運動の實相を御透察被下候は茲に小
 の呶々を要すまじと奉存候 一介無名の書生の業として
 或は大海の水を干さんとする讒なけんも茲に想到らば為
 さざる得ず候 永遠に向つて放つ努力の矢が地に落つる
 と落ちざるとは敢へて小の問ふ所に非らず、啻その一
 矢一矢に報國の信念の籠るや否やを恐るゝのみに候
 既に大成を期して追加事業の計画を樹て夫々教場授産
 場等の建築を完了致候得共鶏林莊は微力なる小箇人の
 經營に係り僅かに肱股と頼むべき鮮人有志の献身的努力
 に據り支持せるに過ぎず候間其等の設備及維持に到つて
 は意餘つて枝及ばず徒らに空拳拱拱以て弟妹の不遇に涙
 せる許に御座候 冀ふば既に事業の端緒に就き而も大
 成の一步に於て逡巡せる小の鶏林莊の内情を御賢察被下
 御聲援下さらん事を零丁窮を訴ふる弟妹と共に奉願上候
 敬 白



鷗林莊事業概観

鷗林莊ハ朝鮮人ノ苦學生及労働者ヲ救済シ内鮮ノ融和ヲ期スルヲ以テ目的トス コノ目的ヲ達成セシガ為ニ左記ノ事業ヲ經營ス

委託事業

朝鮮自治 本業勢ハ政府ノ委託ニ係リ之ガ為ニ宿舍建築及設備費三〇三八圓餘ヲ下附ナル 木賃宿生活ヲ餘儀ナラセシメ又居住難ニ困窮セル朝鮮人ヲ一泊一人拾五錢ハ風呂弁一ニテ宿泊セシメ以テ不規故散ナル生活ヲ去ラシメ其社會的地位ヲ向上セシムルモノトス 收容人員一五〇人 八月五日ヨリ業務開始セリハ経営費ノ補助ハナシ

直営事業

職業紹介 社會事情ニ適ズ又過ル處ナクシテ失業セル朝鮮人ノ為ニ無料ヲ以テ就職ノ途ヲ導クルヲ以テ各日能力性向ニ適合セシ方面ニ向上ヲ促シ以テ生活ノ安定ヲ圖ルモノトス 尚通信機關ヲ利用シテ漢末鮮人ニ充分ナル用意ト理解トヲ興ス以テ内鮮親我ノ意志ノ疏通ヲ圖ルハ人事相談ヲモ含ム 事務所完成セルモ電話及設備ニ不足ナルヲ以テ九月上旬開業ノ豫定ナリ

朝鮮文庫

一般内地人ニ朝鮮事情ヲ周知セシムルト共ニ朝鮮人ノ讀書勉學ノ伴侶トナリ其西性ノ陶冶ニ資スル為ニ無料ヲ以テ公開ス 既ニ朝鮮總督府始メ鮮民各新聞雜誌ヨリ寄贈アリ八月五日ヨリ公開セリ 然レトモ圖書ハ未タ數フルニ足ラス 文庫室十二坪設備半バ完成セリ

労働学校

國語ヲ知ラズ習俗ヲ解セズ朝鮮人ニ無料ヲ以テ日常會話及禮儀ヲ教授シ以テ内鮮親善ノ橋樑ヲ排除セントス 朝鮮人労働者ノ六割ニ分ハ無學文盲同ニ割一ハ國語不通者ナリハ警視廳調査ノ既ニ二十八坪ノ教室ヲ完成セルモ設備ニ到ツチハ手及バズ 秋冷ノ候ヨリ開校ノ見込

授産事業

失業鮮人ノ應急的救済ト兼テ一般在在者ノ経済的ノ不安ヲ艾除シ以テ自治ノ根底ヲ鞏固ナラシムルヲノトス 拾坪半ノ校産場及二十四坪ノ農園ハ完成セルモ之ヲ設備費充分ナラズ目下開業セルハ筆耕業ノミ 尚將來ハ朝鮮手工藝品ノ製作販賣及各種使賃ノ養成ヲナス希望ヲ有セリ

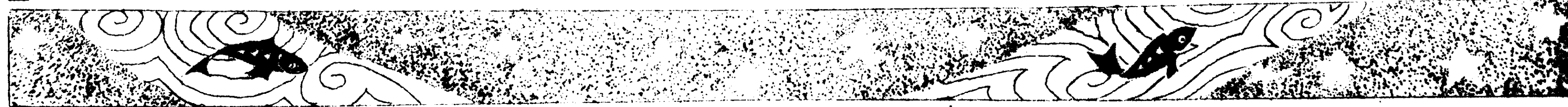
其外莊舎内ニハ集會室、喫食室、藥房ノ設備アリ、集會室ニテハ隨時茶話會懇談會等ヲ催シ、喫食室ハ常時開放シ以テ在在者ノ苦勞ヲ慰藉シ併テ相互ノ親睦ヲ圖ルモノトス、乍然喫食器具ハ未ダ資金不足ノ為ニナシ、藥房ハ施療ノ便ヲ得サルモノ其他施療救護ノ必要アルモノハ實費給與又ハ臨時ニ方法ヲ講ジ之ヲ救済ノ遺憾ナキヲ期セリ (以上)

東京市外野方町新井三九〇番地

大正十三年八月上海

鷗林莊主 松浦淑郎

鷗林莊授産部職員



謹啓時下並御清穉之段慶賀之至に奉存美陳者
豫て種々御高配を忝うし難有奉鳴謝矣
就ては最近状況御報告のため別冊要覽其他刊行
致矣間御高覽に供し度此段得貴意矣 敬具

大正十三年九月五日

京城府天然洞三一

向上會館長中野高菴

陳者府内天然洞所在向上會館の事業は朝野の甚大なる聲援と内部職員の格別なる精勵とにより開設以來至極順調に進捗しつゝあるやに被存候これ誠に半島將來の爲め欣幸とする處に有之候につき陰に陽にその充實發展を援け益々本事業をして有終の美を濟さしめ度茲に向上會館後援會を組織仕り左記第一期事業を計劃致候様の次第に御座候邦家多事の秋進んで本會に御加盟被成下以て吾等こそその志を偕にせられん事切望に堪へざる處に御座候 敬 具

追て 同會館事業の概要は向上會館發行「要覽」又は實地につき御承知被成下度尙本會規約は裏面を御高覽願上候

大正十三年七月

[illegible]

第一期事業計劃要項

一金五萬圓也

製品販賣部開設資金提供

備考

イ、現在向上會館産業部製品ハ府内某會社内ニ向上會館通信販賣部ヲ設置シ同會社ヲシテ傳習材料供給、既製品販賣等ノ事ヲ委任シツ、アルモ敎授材料ノ選擇其他ニ關シ不便ナカラズ

口、若シ上掲金額ヲ資金トシテ提供シ同會館ヲシテ製品販賣ヲ直營セシムレバ右ノ欠陥ヲ一掃シ得ルト共ニ更ニ進ンデ至廉ノ價格ヲ以テ同部製品ヲ直接需用者ニ供給シ得ベク

ハ、尙僅少ニテモ益金アラバ産業部事業ノ充實擴張ノ資金中ニコレヲ補填シ得ベシ

備考二

イ、上掲金額ハ朝鮮内ニ於テ本會々員ヲ募集シ會費ノ醵出ヲ持チテコレヲ提供セントス
ロ、更ニ向上會館焦眉ノ急務タル別館並ニ寄宿舍建設費及財産法人組織積立金等ニ要ス
ル資金約十五萬圓ハ内地有志ノ醵金ニ待タントス

以上

本會贊助員

(イロハ順)

| | | | |
|------------|---------|-------------|----------|
| 朝鮮總督府土木部長 | 原 靜雄 | 朝鮮銀行 總裁 | 野 中 |
| 朝鮮總督府殖產局長 | 西 村 保吉 | 朝鮮實業銀行 頭取代理 | 山口 太兵衛 |
| 朝鮮總督府知事 | 朴 泳 孝 | 朝鮮總督府警務局長 | 丸 山 鶴吉 |
| 朝鮮商業銀行頭取 | 趙 實秋 | 朝鮮新聞社 副社長 | 權 藤 四郎 |
| 朝鮮總督府內務局長 | 李 完 泰 | 京城日々新聞社長 | 有 馬 純吉 |
| 朝鮮總督府內務局理事 | 李 夏 榮 | 朝鮮殖產銀行 頭取 | 有 賀 光三 |
| 朝鮮總督府內務局理事 | 李 允 用 | 朝鮮總督府專賣局長 | 青 木 戒三 |
| 朝鮮總督府內務局理事 | 大塚 常三郎 | 滿鐵京城鐵道局長 | 安 藤 又三郎 |
| 朝鮮總督府內務局理事 | 尾崎 敬義 | 京城日報社長 | 秋 月 左都夫 |
| 朝鮮總督府內務局理事 | 渡邊 定一郎 | 京城覆審法院檢察長 | 佐 藤 春樹 |
| 朝鮮總督府內務局理事 | 柿 原 琢郎 | 京城地方法院檢察長 | 齊 藤 庄三郎 |
| 朝鮮總督府內務局理事 | 蒲 原 久四郎 | 朝鮮總督府鐵道部長 | 弓 削 幸太郎 |
| 朝鮮總督府內務局理事 | 韓 相 龍 | 李 王 職 次官 | 篠 田 治策 |
| 朝鮮總督府內務局理事 | 橫 田 五郎 | 京城株式會社 現物取役 | 平 岡 光三郎 |
| 朝鮮總督府內務局理事 | 谷 多 喜麿 | 引所事務取役 | 関 泳 綺 |
| 朝鮮總督府內務局理事 | 中 村 竹藏 | 朝鮮總督府庶務部長 | 関 大 植 |
| 朝鮮總督府內務局理事 | 長 野 幹 | 京城覆審法院檢察長 | 膳 守 屋 榮夫 |
| 朝鮮總督府內務局理事 | 武者 鍊三 | | 膳 鉦 次郎 |

向上會館後援會規約

- 第一條 本會ハ向上會館後援會ト稱シ事務所ヲ京城府天然洞三十一番地向上會館(電話光化門四九九番)内ニ置ク
- 第二條 本會ハ向上會館ノ事業ヲ後援シ主トシテ經濟的援助ヲナスヲ以テ目的トス
- 第三條 前條ノ目的ヲ達センカテ廣ク同志ノ會員ヲ募リ所定會費ノ騰出ヲ仰クモノトス但シ必要ニ應ジ講演會演藝會等ヲ催スコトアルヘシ
- 第四條 會員ヲ分チテ左ノ三種トス
- 一、通常會員
 - 一、特別會員
 - 一、名譽會員
- 第五條 通常會員ハ本會ノ目的ヲ賛同シ五ヶ年間毎月金壹圓宛若クハ一時金貳百五十圓ヲ騰出スルモノトス
- 特別會員ハ本會ノ目的ヲ賛同シ五ヶ年間毎月金五圓宛若クハ一時金貳百五十圓ヲ騰出スルモノトス
- 名譽會員ハ本會ノ目的ヲ賛同シ五ヶ年間毎月金拾圓宛若クハ一時金五百圓已上ヲ騰出スルモノトス

- 第五條 本會會運進展ニ關シ重要事項ヲ商議スル爲贊助員若干名ヲ置ク但シ贊助員ハ本會役員會ニ於テ推薦シ會長コレヲ依囑ス
- 第六條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
- 會長 一名
 - 副會長 二名
 - 主 事 一名
 - 理事 若干名
 - 評議員 若干名
 - 會計 二名
 - 書記 一名
- 第七條 會長ハ會務ヲ統理シ本會ヲ代表ス
- 副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキハ之ヲ代理ス
- 主事ハ會長ノ命ニ從ヒ本會ノ主務ニ任ス
- 理事ハ主事ヲ補ケ專ラ會務擴張ノ任ニ當ル
- 評議員ハ本會ノ重要事項ヲ審議ス
- 會計ハ金錢出納ノ事ヲ掌ル
- 書記ハ上職ノ命ヲ承ケ庶務記録ノ任ニ當ル

- 第八條 會長ハ向上會館評議員會ニ於テ之ヲ推薦シ其他ノ役員ハ會長ノ指名ニヨリコレヲ委囑ス
- 第九條 但役員ノ任期ハ本會閉鎖ノ時マテトス欠員トナリタル時ハ隨時補欠スルモノトス
- 第十條 本會役員ノ會合ハ會長ノ召集ニヨリ隨時之ヲ開催ス
- 第十一條 本會ハ會員ニ對シ毎年五月ニ於テ事業報告並ニ向上會館年報ヲ回附スルモノトス
- 第十二條 本會ハ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル
- 附 則
- 第十二條 本會則ハ評議員會ノ決議ニ依ラサレハ變更スルコトヲ得ス

謹啟時下並御清穉之段慶賀之至に奉存美陳者
豫て種々御高配を忝うし難有奉鳴謝矣
就ては最近状況御報告のため別冊要覽其他刊行
致矣間御高覧に供し度此段得貴意矣 敬具

大正十三年九月五日

京城府天然洞三一

向上會館長中野高旅

肅啓 時下彌々御清祥之段慶賀の至に奉存候
陳者府内天然洞所在向上會館の事業は朝野の甚大なる聲援と
内部職員の格別なる精勵により開設以來至極順調に進捗し
つゝあるやに被存候これ誠に半島將來の爲め欣幸とする處に
有之候につき陰に陽にその充實發展を援け益々本事業をして
有終の美を濟さしめ度茲に向上會館後援會を組織仕り左記第
一期事業を計劃致候様の次第に御座候邦家多事の秋進んで本
會に御加盟被成下以て吾等こそその志を偕にせられん事切望に
堪はざる處に御座候 敬 具

追て 同會館事業の概要は向上會館發行「要覽」又は實地につき御承
知被成下度尙本會規約は裏面を御高覽願上候

大正十三年七月

| | |
|-------|-----------|
| 會 長 | 松 寺 竹 雄 |
| 副 會 長 | 張 田 憲 常 植 |
| 主 事 | 和 田 常 市 |
| 理 事 | 佐 々 木 淨 鏡 |
| 同 理 | 山 口 太 兵 衛 |
| 同 理 | 三 好 和 三 郎 |
| 同 理 | 天 日 常 次 郎 |
| 同 理 | 小 林 源 六 郎 |
| 同 理 | 山 岸 祐 太 郎 |
| 同 理 | 淵 上 貞 助 郎 |
| 評 議 員 | 廣 江 澤 次 郎 |
| 同 理 | 增 田 三 穂 郎 |
| 同 理 | 三 田 政 治 郎 |
| 同 理 | 新 井 虎 一 郎 |
| 同 理 | 城 臺 太 六 郎 |
| 同 理 | 播 本 恒 太 郎 |
| 同 理 | 中 江 富 十 郎 |
| 同 理 | 西 川 篤 次 郎 |
| 同 理 | 進 川 辰 馬 郎 |
| 同 理 | 信 澤 定 吉 郎 |

第一期事業計劃要項

一金五萬圓也

製品販賣部開設資金提供

備考一

イ、現在向上會館産業部製品ハ府内某會社内ニ向上會館通信販賣部ヲ設置シ同會社ヲシ
テ傳習材料供給、既製品販賣等ノ事ヲ委任シツ、アルモ教授材料ノ選擇其他ニ關シ不
便尠ナカラズ

ロ、若シ上掲金額ヲ資金トシテ提供シ同會館ヲシテ製品販賣ヲ直營セシムレバ右ノ欠陥
ヲ一掃シ得ルト共ニ更ニ進シテ至廉ノ價格ヲ以テ同部製品ヲ直接需用者ニ供給シ得ベ
ク

ハ、尙僅少ニテモ益金アラバ産業部事業ノ充實擴張ノ資金中ニコレヲ補填シ得ベシ

備考二

イ、上掲金額ハ朝鮮内ニ於テ本會々員ヲ募集シ會費ノ騰出ヲ持テコレヲ提供セントス
ロ、更ニ向上會館焦眉ノ急務タル別館並ニ寄宿舎建設費及財産法人組織積立金等ニ要ス
ル資金約十五萬圓ハ内地有志ノ贈金ニ待タントス

以上

理事 若干名
評議員 若干名
會計 二名
書記 一名

第七條 會長ハ會務ヲ統理シ本會ヲ代表ス

副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキハ之ヲ代理ス

主事ハ會長ノ命ニ從ヒ本會ノ主務ニ任ス

理事ハ主事ヲ補ケ專ラ會務擴張ノ任ニ當ル

評議員ハ本會ノ重要事項ヲ審議ス

會計ハ金錢出納ノ事ヲ掌ル

書記ハ上職ノ命ヲ承ケ庶務記録ノ任ニ當ル

第八條 會長ハ向上會館評議員會ニ於テ之ヲ推薦シ其他ノ役員ハ會長ノ指名ニヨリコレヲ

委嘱ス

但役員ノ任期ハ本會閉鎖ノ時マテトス欠員トナリタル時ハ隨時補充スルモノトス

第九條 本會役員ノ會合ハ會長ノ召集ニヨリ隨時之ヲ開催ス

第十條 本會ハ會員ニ對シ毎年五月ニ於テ事業報告並ニ向上會館年報ヲ回附スルモノトス

第十一條 本會々計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第十二條 本會則ハ評議員會ノ決議ニ依ラサレハ變更スルコトヲ得ス

忘事業會

覽要館會上向

月七年三十正大



位置

京城府天然洞三十一番地

起工竣工

大正十年十月十五日起工

大正十一年八月七日起工

敷地坪數(三口合計)

三千三百八十五坪六分三勺

建物樣式及建坪

本館 煉瓦造スレート葺二階家

建坪二百二十二坪一合八勺

特別教室 木造瓦葺平屋

建坪四十坪

倉宅 木造瓦葺平屋

建坪二十三坪餘

建築費

金八萬八千五百三十三圓餘

經常費(大正十三年度)

金四萬零千六百三十三圓也

理事 若干名
評議員 若干名
會計 二名
書記 一名

第七條 會長ハ會務ヲ統理シ本會ヲ代表ス
副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキハ之ヲ代理ス

主事ハ會長ノ命ニ從ヒ本會ノ主務ニ任ス
理事ハ主事ヲ補ケ專ラ會務擴張ノ任ニ當ル

評議員ハ本會ノ重要事項ヲ審議ス
會計ハ金錢出納ノ事ヲ掌ル

書記ハ上職ノ命ヲ承ケ庶務記録ノ任ニ當ル
第八條 會長ハ向上會館評議員會ニ於テ之ヲ推薦シ其他ノ役員ハ會長ノ指名ニヨリコレヲ

委屬ス

但役員ノ任期ハ本會閉鎖ノ時マテトス欠員トナリタル時ハ隨時補欠スルモノトス

第九條 本會役員ノ會令ハ會長ノ召集ニヨリ隨時之ヲ開催ス

第十條 本會ハ會員ニ對シ毎年五月ニ於テ事業報告並ニ向上會館年報ヲ回附スルモノトス

第十一條 本會々計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

附則

第十二條 本會則ハ評議員會ノ決議ニ依ラサレハ變更スルコトヲ得ス

忘事業會

覽要館會上向

月七年三十正大

宮内省



位置

京城府天然洞三十一番地

起工竣工

大正十年十月十五日起工
大正十一年八月七日起工

敷地坪數 (三口合計)

三千三百八十五坪六分三釐

建物樣式及建坪

本館 煉瓦造スレート葺二階家

建坪二百二十二坪一合八勺

特別教室 木造瓦葺平屋

建坪四十坪

倉庫 木造瓦葺平屋

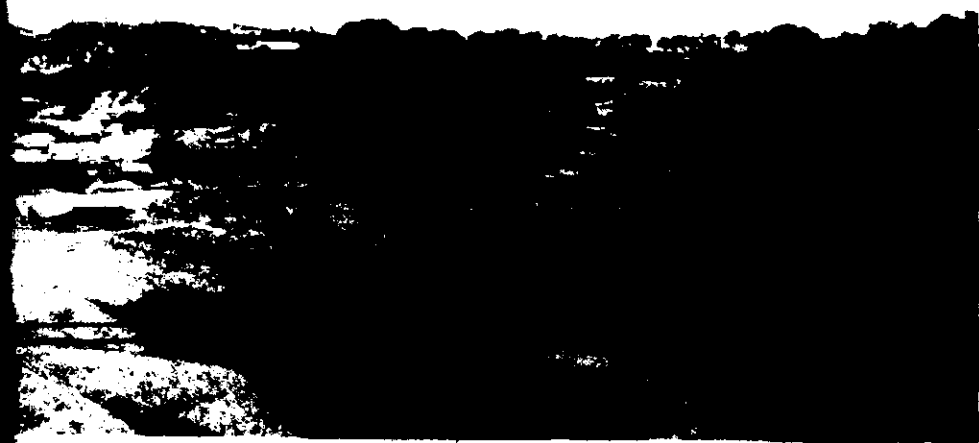
建坪二十三坪餘

建築費

金八萬八千五百三十三圓餘

經常費 (大正十三年度)

金四萬零千六百三十三圓也



講堂



設内 立者 氏 惠



全 景



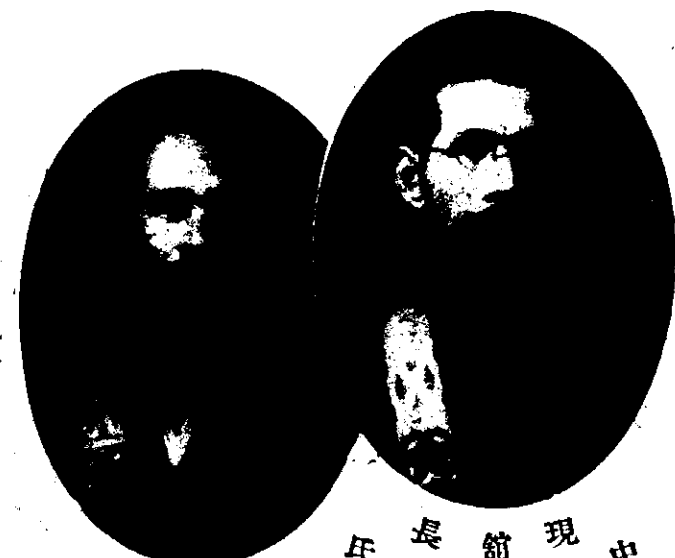
講 堂



後援會 松崎 氏 先生 徒 監 六 氏



教 職 員



中野 現 館 高 氏 長 坂 氏 後援會主 鏡 氏



洋 服 科 實 習



男 子 向 上 體 操



向 上 女 子 技 藝 學 校 實 科 實 習



洋 靴 科 實 習



產 業 部 學 科 教 授



通 信 販 賣 部



會覽即覽展品製
催開て於に堂會公城京秋昨



望眺のりよ堂講



氏 孝 立 設 内 後



景



操體上向子女



授教科學校學藝技子女上向



氏 長 會 授 後 松
雄 竹 寺



氏 監 徒 生 小
六 源 林



員 職 教



氏 事 主 會 授 後 佐
鏡 大 々



店商屋子るせ賣販か品製科製洋



員 部 球 庭



習實科實校學藝技子女上向



習實科靴

父のいづくし母子のなさけとにあふれた家。親の心と子の心とがほんとうに融けあふことのできる家。さうしたへだたりのない家を作つて新附一千七百萬の兄弟達の前に開放したい。これが私共の長い／＼間の念願であつたのであります。

一昨年の八月止むにやまれぬ右の願ひがこの建物の竣工によつて満足されその年の十月から仕事をはじめ過去一年有半を兎にも角にも歩んで参りました。業を授けることによつて彼等を富まし學を興へる事によつて彼等の智力を進め信に生きしむることによつて彼等に絶對の安心を與へたいといふのであります。

向上會館はいふ迄もなく私共人間同志のきかない心から企てられたる名利の家ではなくて如來大愛の心胸から湧き上れる聖なる「めぐみのやかた」であります。このあたゝかきやかたの中に新らしき兄弟達と共に住み共に語り共になぐさめあつて永遠の旅路にいそしむ生活をしてゐることがわが向上會館經營の根本精神なのであります。

長年月の間磨げられたる子供等のたましひはたゞ母のなさけによつてのみ暖めやわらぐべきであります。眞實の光を見失ひたる子のまなこはたゞ父のいづくしみによつてのみ開け醒むべきであります。わが向上會館の事業は親のこころの具體化したる事業である限り日を追ひ月の進むにつれて益々展げ益々榮えて参りますことを信じて疑はぬものであります。

私共はこの意味に於て世の御縁ある方々のあたゝかき御聲援と切なる御鞭撻との下にこの偉大なる如來行の完成に向つて努力し精進させていたゞくことを人生無上の光榮と感ずるものであります。

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|------------------|-------------------|------------------|----------------|----------------|-------------------|-----------------|---------------|------------|------------------|-------------------|----------------|----------------|--------------|-------------------|------------------|---------------|---------------|---------------------|-------------------|-----------------|-----------------|--------------------|-------------------|----------------|--------------------|------------------|-------------------|---------------|----------------|---------------|----------------|-----------------|-----------------|
| 朝鮮總督府土木局長 原村保雄 | 朝鮮總督府殖產局長 西村永 | 朝鮮總督府農務局長 時實秋繼 | 朝鮮總督府內務局長 李允榮 | 朝鮮總督府子爵 李允榮 | 朝鮮總督府男爵 李允榮 | 朝鮮總督府社會部理事 李允榮 | 東京洋行會社理事 李允榮 | 朝鮮議會廳所 李允榮 | 副會頭 李允榮 | 京城地方法院檢察正 浦原久 | 京城總督府通信局長 韓原四郎 | 漢城銀行頭取 橫田五郎 | 高等法院院長 谷村喜藏 | 京城府尹 長野竹藏 | 朝鮮總督府學務局長 長野竹藏 | 朝鮮電氣株式會社 武者鍊三 | 專務取締役 武者鍊三 | 朝鮮銀行頭取 野中清 | 朝鮮實業銀行頭取代理 山口太兵衛 | 朝鮮總督府警務局長 丸山鶴吉 | 朝鮮新聞社社長 權馬四郎 | 京城口新聞社長 有賀光豐 | 朝鮮總督府專賣局長 青木戒三郎 | 滿鐵京城鐵道局長 安藤又三郎 | 京城口報社長 秋月左夫 | 京城地方法院檢察局長 佐藤春樹 | 京城地方法院部長 齊藤三郎 | 朝鮮總督府鐵道部長 齊藤三郎 | 李王職次官 篠田治策 | 專務取締役 平岡光三郎 | 李王職長官 岡田冰植 | 韓一銀行頭取 岡田冰植 | 朝鮮總督府庶務部長 頭取 | 京城覆審法院院長 膳次郎 |
|-------------------|------------------|-------------------|------------------|----------------|----------------|-------------------|-----------------|---------------|------------|------------------|-------------------|----------------|----------------|--------------|-------------------|------------------|---------------|---------------|---------------------|-------------------|-----------------|-----------------|--------------------|-------------------|----------------|--------------------|------------------|-------------------|---------------|----------------|---------------|----------------|-----------------|-----------------|

本會館設立者漢内式惠師は朝鮮在任十有餘年の久しきに
透り朝鮮人教化に關し不動の識見と抱負とを有せり。大
正七年春眞大谷派朝鮮布教管理者に推舉せられ京城別院
輪船の職を兼ねるに及び京城その他洋内須要の地に於て朝
鮮人専用の教化機關を設立し以て朝鮮人の物質的並に精神
圓に達せるを以て同年十月直に建築に着手したり。

建築工事中は和田常市山口日本兵衛の兩氏次第總務兼合
計として三好和三郎追良馬增田三穗天宮常川山岸祐太郎
の五氏は建築委員としてそれ、工事監督の任に當れる
を以て耐久力外觀等の點に於て多大の得益ありたる事

學科教授 全傳習生ヲ學力ノ程度ニヨリ六學級ニ分チ毎朝五十分
間、公民トシテ必要ナル學科(修身國語算術珠算英語
代數簿記等)ヲ教授ス

傳習生數

| 洋服科(七十六名) | 洋靴科(二十四名) |
|------------|-----------|
| 高等科第一期 十三名 | 高等科第一期 五名 |
| 本科第三期 十六名 | 本科第三期 六名 |
| 全 第二期 十九名 | 全 第二期 二名 |
| 全 第一期 二十八名 | 全 第一期 十一名 |

向上女子技藝學校

開設 大正十三年四月一日
目的 朝鮮人子女ニ一家ノ主婦トシテ必要ナル學力及常識ヲ
與ヘ且ミシン裁縫ヲ中心トスル職業的技藝ヲ授ク

修業年限 二ケ年
備考 大正十五年度ヨリ高等科設立ノ豫定

入學資格 普通學校四年修了程度
教授科目 學科(每週十五時間)
修身(2)國語(6)朝鮮語(1)算術(3)家事(1)圖畫(1)
音樂(1)
實科(每週二十七時間)
ミシン裁縫(24)普通裁縫(3)
備考 刺繍縫物等ノ手藝ハ科外ニ於テコレヲ授ク

生徒數 三十六名(第一學年)

補助員(イロハ順)

| | |
|------------|-------|
| 朝鮮總督府土木部長 | 原 靜 |
| 朝鮮總督府殖産局長 | 西村 保吉 |
| 京畿道知事 | 朴 永吉 |
| 朝鮮商會銀行頭取 | 李 允 |
| 朝鮮總督府內務局長 | 李 夏 |
| 東京市會社理事 | 大 常三 |
| 京畿道會社理事 | 尾崎 敬義 |
| 副會頭 | 渡邊 一郎 |
| 京城地方法院檢察正 | 浦原 四郎 |
| 京城地方法院檢察副正 | 韓 相 |
| 京城府法院檢察官 | 谷 五郎 |
| 京城府檢察官 | 中 野 |
| 京城府檢察官 | 長 村 |
| 京城府檢察官 | 武 野 |
| 京城府檢察官 | 山口 兵衛 |
| 朝鮮總督府警務局長 | 丸 山 |
| 朝鮮總督府警務副局長 | 權 四郎 |
| 京城口新聞社長 | 有 馬 |
| 朝鮮殖産銀行頭取 | 青 木 |
| 朝鮮總督府專賣局長 | 安 藤 |
| 京城日報社長 | 秋 左 |
| 京城府審判廳檢察官 | 佐 藤 |
| 京城府審判廳檢察官 | 齊 藤 |
| 京城府審判廳檢察官 | 弓 田 |
| 京城府審判廳檢察官 | 矢 野 |
| 京城府審判廳檢察官 | 李 治 |
| 京城府審判廳檢察官 | 平 岡 |
| 京城府審判廳檢察官 | 岡 光 |
| 京城府審判廳檢察官 | 大 三 |
| 京城府審判廳檢察官 | 鉦 次 |
| 京城府審判廳檢察官 | 大 次郎 |

沿革

本會館設立者漢内式嘉師は朝鮮在仕十有餘年の久しきに
透り朝鮮人教化に關し不動の誠見と抱負とを有せらる。大
正七年春漢宗大谷派朝鮮布教管理者に推せられ京城別院
輪番の職を兼ねるに及び京城その他朝鮮内須要の地に於て朝
鮮人専用の教化機關を設立して朝鮮人の物質的並に精神
的生活を向上せしむるの必要を痛感しつゝありたり。
時恰も大正八年三月全鮮に亘り朝鮮獨立運動の烽火起
るや齊かにその舉事その妄動を觀察し常に知己の人々に對
して教化機關設立の急務を強調する處ありたり。
次で大正八年九月漢總督並に水野政務總監の新たに朝
鮮總督府に着任せらるゝの際南大門驛頭漢の爆彈を投ず
る者あり。同師亦出迎の一行中にありて自らこの兇變を目
撃し遂に平素の所信を斷行すべき時機至れりとなし直に大
谷派本山に出現して如上の事情を具陳し精神的にも物質的
にも應分の援助を與へられん事を請願したり。本山に於て
も法主始め寺務の要路者は一派朝鮮開教の歴史に鑑み直に
請願の趣を尤可し建築資金の内金參萬圓を下附せらるゝ事
となりこゝに漸く理想實現の曙光を認むる事を得たり。
次で朝鮮總督府に於ても師並に本山の熱誠に鑑み大正九
年一月六日附を以て現在本館敷地一千八百坪一合五勺の
無料貸付を認可せられたるによりその前途に益々光明燦然
たる者あるに至れり。
大正十年六月事業内容及建築に關する細密なる考案成り
十五名の發起人と共にこれを天下に發表す。幸にして朝野
の甚大なる賛同を得期月ならずして寄附金申込總額約六萬

圓に達せるを以て同年十月直に建築に着手したり。
建築工事中は和田常市山口本兵衛の兩氏は建築總務兼會
計として三好和三郎進馬増田三禮天日常次郎山岸祐太郎
の五氏は建築委員としてそれ〴〵工事監督の任に當りたる
を以て耐久力外觀等の點に於て多大の裨益ありたる事言
ふを得たり。
建築既に成り設備亦大半を了したるを以て八月八日直に
事務を開始し事業着手の準備を成し同年十月一日より産業
傳習部を開始して現在に及ぶ當部の内容たる洋服科及洋靴
科の設置は本會館發起人中の一人小林源六氏の建議に依
る者たり。
超て大正十二年四月一日修學部の事業として朝鮮總督
府私立學校規定により實業夜學校を開設したり各大學出身
者及京城高等商業學校出身者等各々教職の任にあり生徒亦
子々として勉學したるも諸種の事情により大正十三年三月
三十一日を以てこれを閉鎖しこれに代ふるに東宮同妃兩殿
下の御成婚を記念せんがため翌四月一日より向上女子技藝
學校の設立を以てし現在に至れり。
本事業の始終長くも天聽に達し大正十一年十二の兩年に亘
り紀元の佳節に當り少なからぬ御内帑金の御下賜を拜戴し
又講堂の佛龕築造に際し李王殿下よりその榮達實として金
參千圓の御下附を見更に朝鮮總督府はその建設並に維持に
關し多大の援助を與へられ又朝鮮總督府法務局長松寺竹雄
氏以下朝野の名士舉つて本會館事業の充實發展を援けられ
つゝあるは當事者一同の恐慌感激措く能はざる處なり。

向上女子技藝學校學則

第一章 總則

- 第一條 向上會館規則第二條ニヨリ本會館内ニ向上女子技藝學校ヲ設置ス
- 第二條 本校ハ朝鮮人女子ニ須要ナル普通教育ヲ授ケ併テ生活ニ必要ナル實用的技能ヲ修得セシムルヲ以テ目的トス
- 第三條 本校生徒ノ定員ヲ百二十名トシ修業年限ヲ二ケ年トス
- 第四條 本校教科目ハ修身、國語、朝鮮語、算術、家事、裁縫、手藝、圖書、音樂ノ九科目トス
- 第五條 右教科目課程及每週教授時間數ハ左ノ如シ

| 學科 | 第一學年課程 | 第二學年課程 |
|-----|-------------------|-------------------|
| 修身 | 修身ノ要旨 | 修身ノ要旨 |
| 國語 | 讀方、解釋、會話、書取、作文、習字 | 讀方、解釋、會話、書取、作文、習字 |
| 朝鮮語 | 讀方、解釋、會話、書取 | 讀方、解釋、會話、書取 |
| 算術 | 數、分數、小數、諸等 | 數、分數、小數、諸等 |
| 家事 | 家事ノ概要 | 家事ノ概要 |
| 裁縫 | 裁方、縫方、繕方 | 裁方、縫方、繕方 |
| 圖書 | 圖書ノ在 | 圖書ノ在 |
| 音樂 | 單音、唱歌 | 單音、唱歌 |
| 計 | 四二 | 四二 |

第二章 學年學期及休業

- 第六條 學年ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル
- 第七條 學年ヲ分テ左ノ三學期トス
- 第一學期 四月一日ニ始マリ八月三十一日ニ終ル
- 第二學期 九月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ル
- 第三學期 一月一日ニ始マリ三月三十一日ニ終ル
- 休業日ハ左ノ如シ
- 祝日 大祭日 日曜
- 春期休業 自三月二十六日 至三月三十一日
- 夏期休業 自八月十八日 至八月三十一日
- 冬期休業 自十二月十九日 至十二月三十一日
- 朝鮮總督府始政記念日十月一日
- 向上會館記念日 六月十日

第四章 入學在學及退學

- 第九條 本校ノ入學時期ハ學年ノ始メヨリ三十日以内トス
- 第十條 本校ニ入學スル時ハ臨時入學ヲ許スコトアルヘシ
- 第十一條 本校ノ入學ヲ許スベキモノハ身體強健品行方正ニシテ本校所定ノ課程ヲ卒ハリ得ル見込アルモノニ限ル
- 第十二條 本校第一學年ニ入學ヲ許スヘキモノハ年齡滿十二歲以上ニ達シ普通學校第四學年ノ課程ヲ修了シタルモノ又ハ之ト同等以上ノ學力ヲ有スルモノニ限ル
- 第十三條 本校第二學年ニ入學ヲ許スヘキモノハ本校第一學年ノ課程ヲ修了シタルモノ又ハコレト同等以上ノ學力技能ヲ有スルモノニ限ル
- 第十四條 入學志願者ハ左記第一號様式ニ依ル入學願書ニ履歷書ヲ添ヘ本校ニ提出スヘシ
- 第十五條 入學志願者ハ前條ノ入學願書ニ卒業又ハ修業ニ關スル出身學校長ノ證明書ヲ添付スルカ或ハ卒業又ハ修業證書ノ檢閱ヲ受クヘシ
- 第十六條 入學ノ許可ヲ受ケタルモノハ指定ノ期日内ニ左記第二號様式ニ依リ在學證書ヲ提出スヘシ
- 第十七條 保證人ハ入學者ノ尊親屬又ハコレニ代リテ身元引受ノ責ニ任シ得ヘキモノタルヘシ保證人ニシテ遠隔ノ地ニ居住スル時ハ京城府内ニ居住シ身元引受ノ責ニ任シ得ヘキト年以テハ主ヲ代理保證人トナスヘシ
- 第十八條 保證人及代理保證人ニシテ前條ノ資格ヲ失フカ若クハ死亡其他ノ事由ニヨリ變更ヲ要スル時ハ更ニコレニ代ルヘキ保證人ヲ選ビ速カニ本校校長ニ届出スヘシ
- 第十九條 代理保證人ヲ不適當ト認メタル時ハコレヲ變更セシムルコトアルヘシ

- 第十八條 保證人代理保證人ニシテ轉居轉職改名改印等ノ場合ニハ速カニ本校校長ニ届出スヘシ
- 第十九條 生徒ノ願屆書類ニハ凡テ保證人若クハ代理保證人ノ連署ヲ要スルモノトス
- 第二十條 學校長ハ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノニハ退學ヲ命ス
- 一、品行不良ニシテ改悛ノ見込ナシト認メタル者
- 二、正當ノ事由ナク引續キ一ケ月以上欠席シタルモノ及出席常ナラサルモノ
- 三、學力技能劣等ニシテ成績ノ見込ナシト認メタルモノ
- 退學セントスルモノハ其理由ヲ具シ保證人又ハ代理保證人連署ヲ以テ本校校長ニ願出テ之ヲ許可ヲ受クヘシ

第五章 賞罰及獎勵金

- 第二十一條 本校校長ハ左ノ各項ノ一ニ該當スルモノニハ賞品又ハ賞狀ヲ授與ス
- 一、品行方正學技優秀ノモノ
- 二、精勤ノモノ
- 三、特ニ他ノ模範トナルヘキ行為アリタルモノ
- 生徒ニ對シ訓育上必要ト認ムルトキハ懲戒ヲ加フルコトアルヘシ懲戒ハ戒諭、謹慎、停學ノ三トス
- 第二十二條 第二學年生徒中裁縫技能ノ優秀ナルモノニ對シ獎勵金ヲ授與スルコトアルヘシ

第六章 試驗及成績

- 第二十三條 試驗ハ分テ學期及學年試驗トシ學期試驗ハ第一第二學期末ニコレヲ行ヒ學年試驗ハ學年末ニコレヲ行フ
- 第二十四條 但シ不得已事情ニヨリ試驗ニ欠席セルモノニ對シハ追試驗ヲ行フコトアルヘシ
- 第二十五條 全學年間ノ學業成績ト平素ノ操行トヲ考查シテ修業並ニ卒業ヲ判定ス
- 第二十六條 第一學年ノ課程ヲ修了シタルモノニハ修業證書全教科ヲ卒業シタルモノニハ卒業證書ヲ授與ス

第七章 授業料

- 第二十七條 授業料ハ一人一ケ月金八十錢トシ毎月十日コレヲ徵集ス
- 第一條 本學則施行ニ關スル細則ハ本校校長コレヲ定ム

(第一號様式)

入學願書

一、志願 向上女子技藝學校第 學年

二、戶主トノ關係 戶主何某何女又ハ妹(本人戶主ナラハ本人戶主ト書クヘシ)

右者御校ヘ入學志願ニ付御許可相成度履歷書相添ヘ保證人連署ヲ以テ此段奉願候也

大正何年何月何日

本籍 本人 何 某

現住所 本人 何 某

父(又ハ兄等) 保證人 何 某

現住所 保證人 何 某

向上女子技藝學校長 殿

(第二號様式)

在學證書

私儀今般御校ヘ入學御許可相成候ニ付テハ御規則命令固ク相守リ一意勉勵可致候仍テ證書如斯候也

大正何年何月何日

本人 何 某

前記ノ通り相守ラセ監督保護ニ任スルハ勿論本人ニ係ル一切ノ事件ハ拙者ニ於テ引受可申仍テ連署致候也

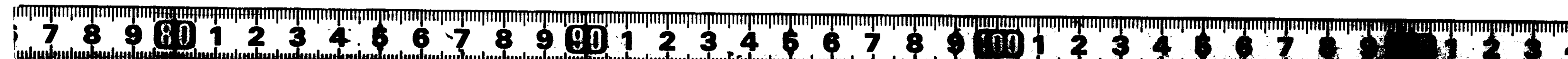
大正何年何月何日

本籍 本人 何 某

現住所 本人 何 某

職業 本人トノ關係 保證人(又ハ代理保證人) 何 某

向上女子技藝學校長 殿

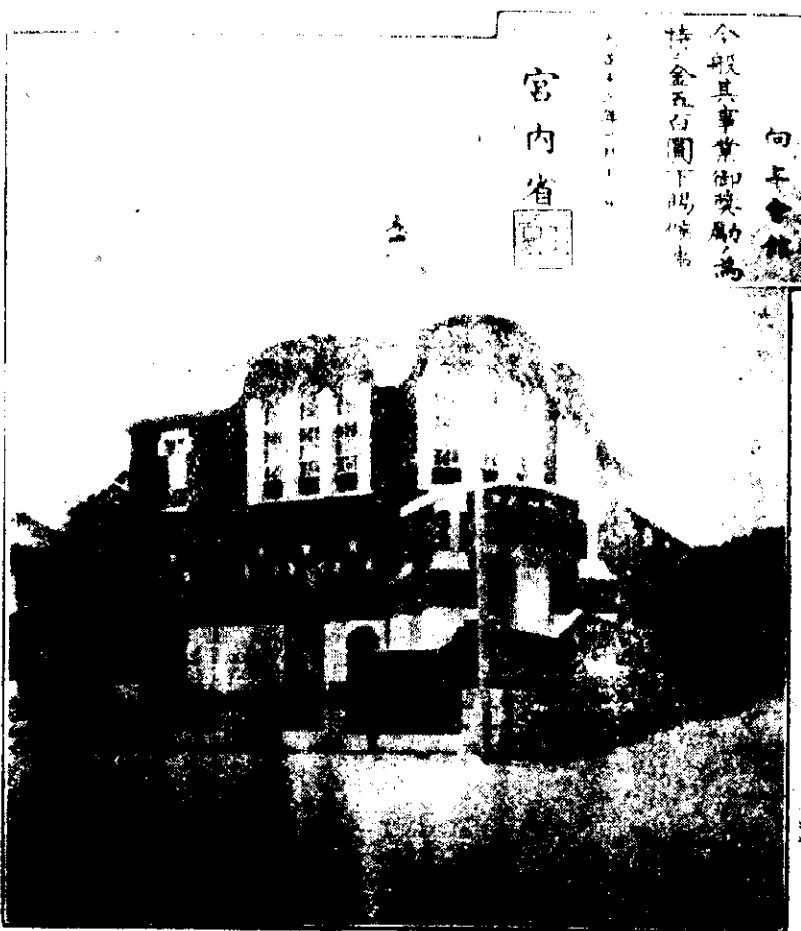




本館主合聯工商城京月七年本
店賣館會上向るけにトッケーマ



操体上向



館本館會上向



習實科縫裁シシ



習實科學

本校の特色

國家を富まし社會を健全なる活動體に造るべき爲には男はがりの力ではない。若しその國家その社會が他より少しでも見劣りがするやうであるならば、その責任は婦人も半分負ふべきであります。朝鮮の婦人の大部分は今迄眠つて居た。學問も知らぬ知識も知らぬ。たゞ内房になす事なくその日のを送つて居ればよい。勤らく事は却つて家や良人の體面を傷けるものといふやうに、活動的の方面は絶対に男の手ばかりに委ねられて居たやうであります。いふ迄もなく働かないで食へるやうならそれでも結構、書物を読まずに世の中の大勢が明らかになるなら何の文句もありません。しかしながら競争はげしき現代にはそれは全く出来ない相談であります。一步たつたおくれだ感ある朝鮮の婦人は、これから一生懸命にかけ出さなくてはなりません。いつ迄も昔の夢を見て居る譯には参りませぬ。若くともつらくとも、自ら身體に鞭打つて進まねばならぬ時世となつた事を深く覺悟しなければならぬのであります。

一家の内政をまかされるべき大切な婦人が、安閑として居て一家の榮える道理はございませぬ。子女の養育に絶對的な責任と權利を持つて居る妻が無智無能でどうして世界に名を擧げるやうな立派な子供を社會に送り出す事ができませうか。如何なる方面から考へましても朝鮮の婦人は今迄のやうな状態で満足して居る事のできぬ事情にある事は明白なのであります。さてかういふ苦しい、つらい世の中となつて來た原因について考へて見なければならませぬ。それは決して日韓合併の爲でもなければ、世界に急に仕事が増へて來た爲でもありません。元來人間は働らく事がその使命なのであります。適度に働らいてこの世の中を一步一步立派な世界に向上させて行くといふ事は人間だけに與へられた特權なのであります。ですから働らくといふ事は吾々に與へられた使命と特權とをそのまゝ實行して居る事になつて居るのであります。世の中が複雑になつてくるのは人々がこの使命と特權とを一步一步自覺して來るからであります。飯を食ふのも働らく爲であれば、家庭を持つのも働らく爲である。それ故に働らくといふ事は苦しい事でもなくつまらぬ事でもなく最も尊く最も愉快なものであるであります。飯を食ふために働らくのもなければ、家庭を持つために働らくのもありません。ほんとうに情しい事ではありませんか。五十年の一生を、食つて寝て起る、たゞ動物共のする事と同じ事ばかりに費してしまふ。庭や役場の民衆を汚したばかりで、いつの間にか赤線一本で葬られてしまふ。これが今迄の朝鮮婦人の運命だつたのかと思へばお互に胸がふさがるやうに感ぜられます。奮ひ立たねばならませぬ。立つて勇ましく歩み出さねばならませぬ。

向上女子技藝學校は専ら朝鮮婦人の味方となり、忠實なる參謀となり親里となる爲に生れました。その内容は裏面に記載してある學則の通りであります。しかしこの校が他の學校と多少その趣を異にする點だけはお話ししておきたいと存じます。この學校の特長とする處は學科を習ひながら一生身につく職業的技藝が教はるゝといふ點にあります。學科を習ふのは他日一家の責任ある主婦となる爲であります。世の進むにつれて婦人に知識の必要な事は、前にも述べておきましたが、その必要な知識を得て行く爲には、益々高い教育を受けなければならませぬ。勿論學校の教育ばかりで世の中に處して行くに必要なる知識全部が得られる譯のものでもありません。併し人問として無教育であるといふ事は甚だしく悲しいと思ひます。それ故にこの學校では女子高等普通學校程度以上の學科を教授します。歴史地理理科等の諸學科は學科の中から省かれて居ますが、修身國語算術等の諸學科を習つて居るうちに知らず知らずわかつて行くやうになつて居ます。英語も課外に毎週一時間づゝ教授されます。型にはまつた學科を型にはまつた教授法で教へるのでなく、實力本位常識養成本位の教授法を採用して居ますから、授業中は愉快に面白く學科に興味を持ちながら勉強する事ができるやうになつて居ます。

次にこの學校ではミシン縫裁を一週間に二十四時間づゝ教授します。これは他の學校にあまり例のない課科であります。今日迄普通の女學校では縫裁科はありましてはほんの少しばかりでありまして、それも主として自家用の縫裁を教へるだけでありましたが、この學校では特にミシン縫裁に主力をつくす事になつて居ます。男女小供服、ワイシャツ、エプロン、ソフトカラーなど店へ出しては恥かしくない品物がどつ／＼作り得るやうになります。卒業の晩その腕前で職業婦人となつて、思ひの工場に勤らく事もできるし、主婦となつて育児炊事等の傍ら、副業的に一家の収入を増す事もできます。又編物刺繍等もやはりなるべく職業的なものを選んで、科外にこれを教授するやうになつて居ます。寫真にある納涼マークットの向上會館賣店へはこの學校から刺繡した夏テーブル掛けや瓶敷、ペン先拭きなど合計百五十點ほど出品いたしました。一つも残らず賣切れてしまひました。

この學校の課科は大体右のやうな趣旨から組立てられてありますが、その外身體をよくするため毎朝授業前に向上体操をやります。僅か五六分しかかゝらぬ簡単な体操ですが、足の運動、腕の運動、首の運動、腰の運動、呼吸運動の五部に分れて居て保健上よほど有効であるやうには思はれます。〔寫眞參照〕修業年限が短期で授業料が少額であるといふ事も特長の一つであります。修業年限の短かい事は行く々々々々高等科を作つて更に高等なる學術・技藝を學ばうとする方々の便宜を圖る豫定となつて居ますが、先づこの二ヶ年の間に女子高等普通學校程度の學力と、一人前の職業的技藝とを修得する事ができるやうになつてゐるのであります。右のやうに向上女子技藝學校は朝鮮婦人界の現状を憂へ、出來得るだけの親切と注意を加へて經營されて居ます。所謂學校式の行き方ではなく、全く家庭的であります。先生も生徒も一つ心となつてこの朝鮮を富まし、美しくしやうといふのであります。あなたが入学以前に以上の事を知つて居て下さる事を大さう便宜といたしますので、その大略をお話しいたしました次第であります。

涼納催主會合
店賣館會上

向上會館產業部規定

第一條 本部ハ朝鮮人子弟ヲシテ一定ノ産業ヲ傳習セシメ正業ニ就カシムルヲ以テ目的トス

第二條 本部ニ左ノ各科ヲ置ク

洋 服 科

洋 靴 科

但シ各科ニ高等部ヲ設ク高等部ノ規定ハ別ニ之ヲ定ム

本部傳習生ノ定員ヲ百八十名トシ各科ノ傳習期間ヲ十八ヶ月トス

第三條 各科ノ傳習科目及課程左ノ如シ

第四條 各科ノ傳習科目及課程左ノ如シ

(一) 洋服科

第一期 學生服、普通ズボン

第二期 高等ズボン、チヨツキ、簡易ナル上衣、裏返シ修繕等

第三期 上衣、オーバーコート、トンビ等其他一般裁縫

(二) 洋靴科

第一期 學生靴、子供靴

第二期 普通靴

第三期 高等靴

傳習時間數ハ一日九時間以内トス

但シ必要ニ應シテコレヲ増減スルコトアルヘシ

傳習期間ヲ分チテ左ノ三期トス

第一期 自四月一日起至翌年三月三十一日

第二期 自十月一日起至翌年三月三十一日

第三期 自四月一日起至翌年三月三十一日

休業日ハ左ノ如シ

祝日

第一日 第三日 曜日

向上會館創立記念日

冬期休業 自十二月二十九日至一月四日

但シ以上ノ外臨時休業ヲナスコトアルヘシ

傳習志願者ニ對シテハ身體檢査及學力試驗其他ヲ行ヒソノ成績ニヨリ傳習ヲ許可ス

各科第一期ニ傳習ヲ許可スヘキ時期ハ各傳習期間ノ最初ヨリ二十日以内トス

各科第一期ニ傳習ヲ許可スヘキモノハ年齡十二年以上ニシテ普通學校第四學年ノ課程ヲ修了シタル者及コレト同等以上ノ學力ヲ有スルモノタルヘシ

傳習志願者ハ第一號様式ニ依リ傳習願書ニ履歷書並ニ民籍謄本ヲ添ヘ館長ニ提出スヘシ

傳習志願者ハ前條ノ傳習願書ニ卒業又ハ修了ニ關スル出身學校長ノ證明書ヲ添付スルカ或ハ卒業又ハ修了證書ノ檢閲ヲ受クヘシ

傳習ノ許可ヲ受ケタルモノハ指定ノ期日內ニ第二號様式ニヨリ傳習證書ヲ提出スヘシ

保證人ハ傳習生ノ尊屬親又ハコレニ代リテ身元引受ノ責ニ任シ得ヘキモノタルヘシ保證人ニシテ遠隔ノ地ニ居住スル時ハ京城府內ニ居住シ身元引受ノ責ニ任シ得ヘキ丁年以上ノ戶主ヲ代理保證人トナスヘシ

保證人及代理保證人ニシテ前條ノ資格ヲ失フカ若クハ死亡其他止ムヲ得サル事由ニヨリ變更ヲ要スル時ハ更ニコレニ代ルヘキ保證人ヲ選ビ速カニ館長ニ届出スヘシ

代理保證人ヲ不適當ト認メタルトキハ之ヲ變更セシムルコトアルヘシ

保證人代理保證人ニシテ轉居、轉職、改名改印等ノ場合ニハ速カニ館長ニ届出スヘシ

館長ハ左ノ各號ノ一ニ該當スルモノニハ退去ヲ命ス

一、性行不良ニシテ改悛ノ見込ナシト認メタルモノ
二、正當ノ事由ナク引續キ一ヶ月以上欠席シタル者及出席常ナラサルモノ
三、技能劣等ニシテ成業ノ見込ナシト認メタルモノ
傳習生ニシテ傳習ヲ廢止セントスルモノハ其理由ヲ具シ保證人又ハ代理保證人連署ヲ以テ館長ニ願出テソノ許可ヲ受クヘシ
第二十條 各期課程ノ修了又ハ全教科ノ卒業ヲ認ムルニハ平素ノ技能ヲ考查シテ之ヲ定ム
第二十一條 各科ノ全課程ヲ修了シタルモノニハ卒業證書ヲ授與スル館長ハ左ノ各項ノ一ニ該當スルモノニハ賞品又ハ賞狀ヲ授與ス
第二十二條 一、品行方正技能優秀ノ者
二、精勤ノ者
三、特ニ他ノ模範トナルヘキ行爲アリタル者
傳習生ニ對シ傳習上必要ト認ムルトキハ懲戒ヲ加フル事アルヘシ
第二十三條 懲戒ハ戒飾、謹慎、傳習停止ノ三トス
傳習ヲ許可セラレタルモノハ傳習料トシテ金十八圓ヲ前納スヘシ
第二十四條 但シ半途ニ傳習ヲ廢止スルモノト雖モ返戻セス
傳習生ニシテ特別ノ事情アルモノニハ審議ノ上傳習料ヲ減免スルコトアルヘシ
第二十五條 各科第二期第三期ノ傳習生ニ對シテハソノ技能ニ應ジテ工賃ヲ支給ス
第二十六條 附 則
第二十七條 本規定施行ニ關スル細則ハ館長コレヲ定ム
第一號様式

傳習願書

一、志願產業部科何某

一、戶主トノ關係 戶主何某男又ハ弟（本人戶主ナラハ本人戶主ト書クヘシ）

一、家業及資産其戶主ノ職業及資産

右ノ通り傳習志願ニ付御許可相成度履歴書竝ニ民籍謄本相添ヘ保證人連署ヲ以テ此段奉願候也

大正 年 月 日

本籍 現住所 本人 何某印

本籍 現住所 本人 何某印

父又ハ兄等 保證人 何某印

向上會館長 殿

第二號様式

傳習證書

私儀今般貴館產業部 科へ傳習御許可相成候ニ付テハ御規則命令固ク相守リ一意勉勵可致候仍テ證書如斯候也

大正 年 月 日

右

前記ノ通り相守ラセ監督保護ニ任スルハ勿論本人ニ係ル一切ノ事件ハ拙者ニ於テ引受可申仍テ連署候也

大正 年 月 日

右

本籍

現住所

職業、本人トノ關係

保證人(又ハ代理保證人) 何 某

生 年 月 日

殿

向上會館

は父のいつくしみと母のなげきが一つ涙の雫となつてこぼれおちたるめぐみの家であります。朝から晩まで親のあたゝかい心が満ち／＼して、私共を何とぞして立派な人間に育て上げてやりたいといふ精神ばかりの動いてゐる一大家庭であります。今その事業の一部分たる産業部の大体についてお話をいたし、尙この部に入つて職業を學ぼうとする人々の参考に供する事といたします。

産業部は

洋服科
靴科
洋裁科

の二つに別れてゐます。洋服も洋靴も共に將來有望な職業であることはいふ迄もありません。それでこの部ではこの二つを選択した譯であります。従来内地の徒弟制度では兩方共一人前の職人となるのに少くとも五六年はかゝつたものであります。しかしこの部ではたつた

一年半で本科が卒業できるやうになつてゐます。本科を卒業して尙高等なる技術を研究したい人々は高等科へ入ることもできます。高等科の修業年限も同じく一年半であります。

この部の特長は仕事を習ひながら工賃がもらへる点にあります。自分の熱心と技術によつては七ヶ月目からは一日五六十銭から七八十銭、十三ヶ月目からは一日七十八十銭から一圓位の工賃が得られるやうになつてゐます。又成績が見事で全出席の月は工賃の一割を奨励歩増金として支給されます。

入學の時には

十 八 圖

の傳習料を納めなければなりません。これは入學した月から向ふ六ヶ月分の傳習料であります。つまり二ヶ月三圓宛六ヶ月分の傳習料を前納する譯であります。このお金を納めるといふ事がやがて自分の職業を忠實に習ふ事のできる基となるのであります。つまり一生身につく職業を得る爲の資本となるのであります。是非納めなくてはなりません。

入學志願者は春ならば四月秋ならば九月の

二 十 日

迄に願書（規則書第一號様式）を提出する事となつてゐます。願書に添へて民衆本と履歴書を出します。その時卒業又は修業した學校からもらった證書を持つて來て事務所で檢閲を受けます。願書と履歴書の用紙は會館から差上げますからその用紙に認めて提出すればよいのです。保証人の資格その他は裏面の規則書に規定してありますからそれを見てください。

さて入學試験は左の數項に別れてゐます。

- 一、状況記入
- 二、身体検査
- 三、口頭試問
- 四、學科試験

一から三までは試験の第一日に施行されます。状況記入といふのは入學以前に本人及家庭の状況を知つて置く爲に行ふのであります。これはこちらから書き入れるべき用紙を渡しますからその用紙に書き入れればよいのです。（鉛筆持参）身体検査は身体の各部を檢

査しますから裸又はサルマタをはいて来る方がよく、口頭試問の時は國語ではつくりと答へ、學科試験の時は國語と算術とで鉛筆消ゴム小刀を用意しなければなりません。國語と算術の試験は普通學校四年修了の程度で出ます。又試験期日及時間は願書締切の日（二十日）に會館に掲示されます。入學を許可された人々の名前は試験終了後三日以内に同じく掲示場に掲示されます。首尾よく入學ができましたらその月の三十日迄に前記傳習料と

傳習證書（規則書第二號様式）

とを提出し追つて入學式が舉行され、その翌日から授業を受けられる事になるのです。

以上に入學以前のお話をしたのでこれから入學以後の事について少しく述べておきます。

どんな仕事でもそれに熟達し成功するには先づ第一に身体を強くしなければなりません。従来この大切な事をおろそかにしたため、立派な身体と青雲の志を抱いてゐながら、中途で斃れてしまつた人々は數限りもない事と思ひます。ですから向上會館では毎朝授業にとりかゝる前に全員揃つて

向上 体操

をやる事になつて居ます。五六分間しかかゝらぬ簡単な体操です。又志望者は庭球部員となつて放課後テニスもできるやうになつてゐます。

毎朝体操が終わると四十分間學科を教授します。現在普通科が三學級、高等科が二學級ありまして、普通科では修身、國語、算術、珠算、高等科では修身、國語、英語、珠算、代數、簿記などの教授を受けます。自身の學力に應じてどの學級へでも志願する事ができます。

學科が終わると補習授業が始まります。授業は大抵一日八時間平均です。この毎日の八時間があなたの全生涯を支配する大切な時間なのでありますから、心を充分に引きしめて傳習を受けるだけの用意を怠れないやうにしなければなりません。

精神講話

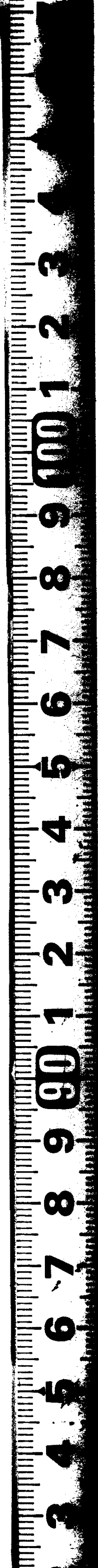
以上を第二第四の日程には授業前講室に集合してを聞き、授業後全員總がうりで館内全体を美化する爲に大掃除をする例になつてゐます。月に一回は娛樂會が開かれ、最近設備された向上文庫は貸出閱覽を許され多くの館友に重寶がられてゐます。若し不幸にして病氣にかゝれば赤十字社診療部で丁寧に診察していただき、藥費も多少割引していただく事となつてゐ、又散髪器機を備付けて何時でも使用できるやうにしてあり、家庭の遠方にある人々の爲に寄宿舎も設けられてあります。（但し唯今は満員ですが、人員があれば入舎できます）

右のやうにこの部では學問をならひ、身体を強くし、精神を鍛錬しその上七ヶ月目から工賃をもらひながら一生身につく職業を持つて行く事ができます。尙精神上の煩悶やその他不幸な事の起つた場合には親切に相談に乗り出来るだけ力になり合ふ事となつてゐます。

以上大体お話を終りました。古人も申しましたやうに「意志のある處には必ず道があります。」お互に眞面目で而も本氣の人間となり自らも生き甲斐のある生活を営み、そして又社會の爲にも出来るだけの力を盡し、この朝鮮をしまことよろこびの湧き上る樂土たらしめなければならぬ事と思ひます。

感謝錄

向上會館



本會館の建築竝に經營に關し金品の御寄贈其他に
依り御援助の榮を賜ひたる芳名を録し以て感謝の
微意を捧ぐ

大正十三年八月

一金五百圓也

今般其事業御獎勵ノ爲特二金五百圓下賜
候事

大正十二年二月十一日

宮 内 省

一金五百圓也

今般其事業御獎勵ノ爲特二金五百圓下賜
候事

大正十三年二月十一日

宮 内 省

一 建築竝に設備に關する御援助

二

| | | |
|----------|-----|-------------|
| 一金參千圓也 | 同 | 李 王 職 殿 |
| 一金五千圓也 | | 朝鮮總督府 殿 |
| 一金參萬圓也 | | 大谷派本山 殿 |
| 一金壹萬圓也 | 京 城 | 森 辰 男 殿 |
| 一金壹萬圓也 | 同 | 小 林 源 六 殿 |
| 一金五千圓也 | 東 京 | 村 井 吉 兵 衛 殿 |
| 一金參千圓也 | 京 城 | 和 田 常 市 殿 |
| 一金參千圓也 | 同 | 朝 鮮 銀 行 殿 |
| 一金貳千七百圓也 | 同 | 三 好 和 三 郎 殿 |
| 一金貳千六百圓也 | 同 | 新 井 虎 太 郎 殿 |

| | | |
|----------|---|-------------|
| 一金貳千參百圓也 | 同 | 天 日 常 次 郎 殿 |
| 一金貳千圓也 | 同 | 城 臺 一 六 殿 |
| 一金貳千圓也 | 同 | 廣 江 澤 次 郎 殿 |
| 一金貳千圓也 | 同 | 信 澤 定 吉 殿 |
| 一金貳千圓也 | 同 | 播 本 恒 太 郎 殿 |
| 一金貳千圓也 | 同 | 中 江 富 十 郎 殿 |
| 一金貳千圓也 | 同 | 滿鐵京城管理局 殿 |
| 一金壹千五百圓也 | 同 | 山 岸 祐 太 郎 殿 |
| 一金壹千五百圓也 | 同 | 殖 産 銀 行 殿 |
| 一金壹千五百圓也 | 同 | 東洋拓殖株式會社 殿 |
| 一金壹千貳百圓也 | 同 | 山 口 太 兵 衛 殿 |
| 一金壹千圓也 | 同 | 仁川米豆取引所 殿 |

三

| | | |
|--------|---|-------------|
| 一金壹千圓也 | 同 | 增田三穂股 |
| 一金壹千圓也 | 同 | 西川篤次郎股 |
| 一金壹千圓也 | 同 | 南源兵衛股 |
| 一金壹千圓也 | 同 | 本吉清一殿 |
| 一金壹千圓也 | 同 | 北村正夫殿 |
| 一金壹千圓也 | 同 | 京城現物株式取引市場股 |
| 一金六百圓也 | 同 | 加藤車次郎股 |
| 一金六百圓也 | 同 | 潮上貞助股 |
| 一金五百圓也 | 同 | 遠辰馬股 |
| 一金五百圓也 | 同 | 三田政治郎股 |
| 一金五百圓也 | 同 | 森久兵衛股 |
| 一金五百圓也 | 同 | 小杉謹八股 |

| | | |
|--------|---|-----------|
| 一金五百圓也 | 同 | 板倉光秀股 |
| 一金五百圓也 | 同 | 久保田さを股 |
| 一金五百圓也 | 同 | 茂呂朔治股 |
| 一金五百圓也 | 同 | 竹田しも股 |
| 一金五百圓也 | 同 | 荒井初太郎股 |
| 一金五百圓也 | 同 | 京城電氣株式會社股 |
| 一金五百圓也 | 同 | 大和與次郎股 |
| 一金四百圓也 | 同 | 第一銀行股 |
| 一金四百圓也 | 同 | 三井物産株式會社股 |
| 一金四百圓也 | 同 | 不二興業株式會社股 |
| 一金參百圓也 | 同 | 高橋千代吉股 |
| 一金參百圓也 | 同 | 吉田源藏股 |

一金參百圓也
一金參百圓也
一金參百圓也
一金參百圓也
一金參百圓也
一金參百圓也
一金參百圓也
一金參百圓也
一金參百圓也
一金參百圓也
一金參百圓也

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
京城

馬場たき殿
戸嶋祐太郎殿
古賀福太郎殿
塚谷しか殿
大塚文吉殿
藤井佐規殿
戸田安次郎殿
寺田駒次郎殿
森芳太郎殿
瀧川静江殿
藤田米三郎殿
漢城銀行殿

六

一金參百圓也
一金貳百圓也
一金貳百圓也
一金貳百圓也
一金貳百圓也
一金貳百圓也
一金貳百圓也
一金貳百圓也
一金貳百圓也
一金貳百圓也
一金貳百圓也
一金壹百五十圓也

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

朝鮮實業銀行殿
田中丸治平殿
松原榮殿
末松熊彦殿
田中三郎殿
近澤茂平殿
平井勳殿
田端俊純殿
近藤修殿
朝鮮商業銀行殿
宮部音次郎殿
韓一銀行殿

七

| | | | |
|-----------|----|----|--------|
| 一金壹百五十拾圓也 | 同 | 京城 | 十八銀行殿 |
| 一金壹百貳拾五圓也 | 同 | | 櫻谷與三郎殿 |
| 一金壹百圓也 | 同 | | 鈴木文次郎殿 |
| 一金壹百圓也 | 同 | | 建部永吉殿 |
| 一金壹百圓也 | 同 | | 淺野藤吉殿 |
| 一金壹百圓也 | 同 | | 延命大外殿 |
| 一金壹百圓也 | 同 | | 川井昌一殿 |
| 一金壹百圓也 | 同 | | 光井香殿 |
| 一金壹百圓也 | 同 | | 荒浪芳子殿 |
| 一金壹百圓也 | 越後 | | 川上佐之助殿 |
| 一金參拾圓也 | 京城 | | 好田貞次郎殿 |
| 一金貳拾圓也 | 同 | | 末松久子殿 |

| | | | |
|--------|----|----|---------|
| 一金拾五圓也 | 同 | 總浦 | 平原喜藏殿 |
| 一金拾五圓也 | 同 | 京城 | 渡邊圓照殿 |
| 一金拾圓也 | 同 | | 西川九藏殿 |
| 一金拾圓也 | 同 | | 南野藤吉殿 |
| 一金拾圓也 | 同 | | 河內傳次郎殿 |
| 一金拾圓也 | 南平 | | 市村堅正殿 |
| 一金五圓也 | 京城 | | 無量林仁三郎殿 |
| 一金五圓也 | 同 | | 澤崎修殿 |
| 一金五圓也 | 同 | | 中村要之助殿 |
| 一金五圓也 | 同 | | 柳說真殿 |

合計金拾壹萬六千六百拾五圓也

一、宅地 壹千八百八十坪一合五勺 (本館敷地)

一、同 四十二坪一合五勺 (宿舍敷地)

一、風致沼 貳千六百六十三坪三合三勺 (蓮池)

右三口官有地無償貸附セラル

一、府内内資洞所在舊長興庫建物二棟建坪合計二十一坪七合四勺煉瓦塀十四間六分木造門一箇所

右大正十年九月六日朝鮮總督ヨリ本會館建築材料トシテ無償讓與セラル

一、本 尊 阿彌陀佛木像一軀

青 森 德 英 殿

一、佛 具 (火舎香爐一基、香盒一、華蓋一對、御佛飯器一對、盛精)

同 小 林 源 六 殿

一、羅 網 一 基

信 小 林 源 六 殿

一、五具足 一式

中 江 富 十 郎 殿

一、菊 灯 一對

同 氏 殿

一、上 卓 一 基

若 林 卯 兵 衛 殿

一、時 形 掛 一 個

兒 島 久 次 郎 殿

一、櫻 樹 六十本

廣 江 澤 次 郎 殿

一、卓 子 掛 一枚

産業部第一回卒業生一同

一、黒塗角盆 一枚

同 上

二 經營に關する御援助

| | | |
|---------------|------------|----------|
| 一金壹千五百圓也 | (大正十一年度補助) | 朝鮮總督府殿 |
| 一金貳百五十圓也 | (同年附度) | サルタレル財團殿 |
| 一金四千圓也 | (大正十二年度補助) | 朝鮮總督府殿 |
| 一金貳千圓也 | (同上) | 大谷派本山殿 |
| 一金貳百五十圓也 | (同上) | 京城府廳殿 |
| 一金參百圓也 | (同年附度) | サルタレル財團殿 |
| 一金五千九拾七圓貳拾七錢也 | 京城 | 小林源六殿 |
| 一金壹百圓也 | 同 | 加藤重三郎殿 |
| 一金拾圓也 | 同 | 張憲植殿 |
| 一金拾圓也 | 同 | 矢嶋杉造殿 |

合計金壹萬參千五百拾七圓貳拾七錢也

三 後援會々員芳名

| 名譽會員 | 京城 | |
|------|----|---------|
| 同 | 同 | 和田常市殿 |
| 同 | 同 | 中江富士郎殿 |
| 同 | 同 | 信澤定吉殿 |
| 同 | 同 | 進辰馬殿 |
| 同 | 同 | 城臺一六殿 |
| 同 | 同 | 西川篤次郎殿 |
| 同 | 同 | 三好和三郎殿 |
| 同 | 同 | 新井虎太郎殿 |
| 同 | 同 | 津留崎一殿 |
| 同 | 同 | 津留崎キミ子殿 |

四

一五

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

(同) (同) (即納) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (同)

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 京
城

馬場梅子殿
高原駒太郎殿
鎌田半六殿
大坪文吉殿
桑原捨次郎殿
千田常次郎殿
森芳太郎殿
宇野妻八殿
西川檜三郎殿
古賀福太郎殿
宮部音治郎殿
小原新吉殿

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

(同) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (一口)

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

大澤義誠殿
櫻谷與作殿
平福末次良殿
中村金十郎殿
有吉朔三殿
山田萬作殿
竹田茂助殿
勝野スィ殿
平松ツル殿
飯田類次郎殿
高田九一殿
大石南山殿

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

(同) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (同)

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 京
城

織田 信吾殿
法野 源次郎殿
森下 勘太郎殿
本田 與四治郎殿
中尾 啓一殿
江口 虎次郎殿
吉崎 文作殿
井村 久造殿
大橋 サ子殿
野村 梅治郎殿
中尾 種治殿
林 みや殿

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

(同) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (同) (同)

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

赤荻 與三郎殿
重富 イクノ殿
岡 與一殿
藤野 たつ殿
丹羽 賢太郎殿
西村 政治郎殿
田中 九節子殿
兒島 久次郎殿
近藤 修殿
鶴田 松次郎殿
向田 喜三郎殿
延命 大外殿

同

(同)

京城

丸

毛

サ

ダ

殿

二〇

(大藏經總目)

市內
政令
方朗
標
無
人
題
親
展

拜啟
仰請榮收奉覽
陳若此度又少朝鮮

九月廿五日
青島
山東
青島
青島
青島

拜啟

御清案及奉覽

陳者此度又少朝鮮

人救濟、國に御令

力被取不恨、赴、威、

至り、沙、度、

其、度、度、度、度、

名、度、度、度、度、

標、度、度、度、度、

有、度、度、度、度、

所、度、度、度、度、

度、度、度、度、度、

有、度、度、度、度、

有、度、度、度、度、

有、度、度、度、度、

日鮮融和提唱

大正十一年十月十六日

陸軍主計監

從四位
勳三等
功四級

濱名寬祐

法號祖光

自邸

曹洞宗兩大本山支那問島別院開基
東京市小石川區關口町九九
電話牛込三七二〇番

(非賣品)

日鮮融和提唱

標次

| | |
|-----------------------------|----|
| 一、提唱…………… | 一 |
| 一、日韓併合を以て優勝劣敗の結果なりとせん乎…………… | 一 |
| 一、曠患の叫…………… | 三 |
| 一、不逞鮮人…………… | 四 |
| 一、教育勅語に對する鮮人心理…………… | 五 |
| 一、鮮人と宗教…………… | 七 |
| 一、困つたことは神道教義の孤峭…………… | 一〇 |
| 一、神道教の教化成績は佛教に優る…………… | 二 |

十三年十月
廿五

一、有史以來未曾有の大患……… 一四

二、朝鮮も大和も一の大八州族……… 一七

一、日鮮融和の心樞……… 一九

二、同祖同裔の大因縁……… 二二

一、内鮮同裔會の設立……… 二四

一、祖宗の大道は我等が行持に依りて通達する……… 二五

標次終

日鮮融和提唱

濱名祖光述

提唱

任那府遷つて内に入り筑紫の太宰府と爲つてから以來、波濤の洶湧に阻てられて、日鮮と分れたる兩域の大八洲民族は、時來つて其の古に復り一域の民となつたが、然も猶其の融和なるものが、單に寒暄を問を爲す他人行儀に止つて、肺腑の眞より發する家族的の愛に臻らざるは何ぞや、蓋日韓併合其のものを同祖同裔の大因縁からと理解せず、却つてそれを優勝劣敗の結果と思惟するからであらう、若夫

日韓併合を以て優勝劣敗の結果なりとせん乎

論理は頗る殺伐のものと爲らねば成らぬ、何となれば吾人は優勝劣敗の外に併合の原因の何者をも有たざるを以て、飽まで其の優勝慾を擅にし、苟も優者の地位を覆へすに堪

る虞あるものは、是にもあれ非にもあれ、其の總てを根絶するに勉むべきであらう、若も學問がそれならば鮮人に學問を許してはならぬ、今在る彼等の學校も之を燒棄るを可とする、若も富がそれならば、鮮人に富を有たしてはならぬ、今在る彼等の富も之を沒收するを可とする、鮮人に郡村自治を恩恵して其の自治體に財産を有たしめんとする計畫の如きは以ての外の不心得と謂はねばならぬ、其のかはり鮮人側に在つても優秀の地位を轉覆す可き一切の行動は其の任意である、呪ふも可、慍るも可、檄文を飛ばすも可、爆彈を投げても可、それ等に何の遠慮も要らぬことである、然る時は優勝劣敗の結果をして更に最後の結果に到達せしめ得るであらう、故に日韓併合を以て優勝劣敗の結果と爲さば、論理は斯の如く殺伐のものとなり、何日か最後の血戦を爲さねば成らぬ羽目に陥るべき理路を辿りつゝあることを自他共に自覺せねばならぬ。

然るに鮮人に在つては語る者も語らざる者も、心の中は、日韓併合を以て優勝劣敗の結果なりとするに一致し居るものゝ如うである、されどそれを優勝劣敗の結果と爲さば、論理は頗る殺伐のものとなり、彼我の福祉にあらざるを以て、思慮をこゝに致すの士は、日韓併合を以て共存共榮を目的とする兩族合意の結果なりと慰諭し、又東洋平和の爲なり

と説示す、然れども鮮人未だこれに服せず、却つて

瞋恚の叫

を放つて曰ふ、

日韓併合は垂亡の貴族と一部の野心政事家が日本の狼心を迎へて成せる野合にして國民の與り知らざる所なり、故に兩族合意の結果など言ふは單に形式取締の胡廢化してあつて人を欺瞞する者の言である、百の形式取締は一の事實に勝たぬ、それを共存共榮の目的だと言ふが、屈辱の共存は共存に愉なく、降伏の共榮は共榮に譽がない、將又東洋平和の爲と言ふが、東洋の平和は韓國を不可侵の獨立國とするに限る、論より證據、日本の狼吞に因りて支那もこれに脅かされ、露西亞もこれに脅かされ、遠き亞米利加もへ其の脅威の隣國に及ぶを嫉みて陰に支那に與しつゝあるに非ずや、と。

而して彼等は併合當時授爵されたる朝鮮貴族を目して國を賣つて得たる代價を私せる者と罵る、凡これ等の叫を爲す者を稱して

不逞鮮人

四

と呼ぶのであるが、審に彼我の情勢に察て仁恕を加へねば成らぬことであらう、慧を植ゑずして識をのみ授くる今の教育法にては、不逞日人をさへ多からしめて居るのであれば、何ぞ獨り不逞鮮人の輩出をのみ怪むことが出来やう、強盜の徒鼠竊の輩は別として不逞鮮人の多くは書物の一冊は讀んでゐる者である、學問をして智識を擡げた者ほど其の叫は峻峭である、須らく其の本に反り其の始を稽ふべきであらう。

是を世界の先進國に觀るに、其の最初より文部の政を將つて殖民地に蒞む者はない、必先づ之に灌ぐに水を以てして土性を軟化するに努め、然る後之に播くに其の國の種子を以てするを常とする、所謂水とは心理の融劑である、歐洲諸國では宗教を以て其の融劑として居る、土性の軟化を先にすべきを覺らず倉皇として碇碇の上に瑞穂の種を播き、直に瑞穂の實を收穫せんと焦りたる我が帝國の如きは稀であらう、是を以て瑞穂を收穫せんと希圖は意外にも棘だらけの茨の實を收穫せねばならぬ結果を現成しつゝあるのである、其の痛切なる適例はいとも畏れ多きことながら、

教育勅語に對する鮮人心理

の其の上に現れ來つてゐる。

教育勅語に我が皇祖皇宗國を肇むること宏遠にと勅らせ給へるを、夫は日本の皇祖皇宗であつて吾等の識つたことかはと鮮人は嘯く、これに對し否爾の祖宗であると説き諭すべき何の辯をも有たずに、只文部の政令に遵ふだけのことで何となるべき、又勅語に世々厥の美を濟せるはと勅らせ給へるを、それは日本人の己惚であつて其の己惚の下に古來朝鮮は何程迷惑してゐるか分らぬと彼等唧つ、これに對し否爾等祖先の濟せる美を併せ勅らせ給へるのであると説き聽かすべき何の辨も有たずして、徒に式日の儀法に拘ふだけのことで勅語を忝しむるに庶幾らずや、克く忠に克く孝には鮮人然りと頷き、その通りであるから是非朝鮮を獨立せしめて忠孝を完ふせねば成らずと逆取す、其の逆取や即ち不逞である、瑞穂の種を卸して茨を收穫する所以なのである。

苟も皇室の神聖を景仰するに未だ慣れざる新附の民に向つて教育勅語を捧讀せんとならば、先づ之に對する用意が無くては叶はぬことである、我が皇祖皇宗は即ち亦朝鮮の皇祖

皇宗であると説き聴かすだけの辯を有たねばならぬ、世々の濟美は即ち亦朝鮮世々の美を併せ宣ふのであると諭し聴かすだけの辯を有たねばならぬ、其の用意なくしては暗夜に明珠を投ずると同じく、人をして剣を按じて視せしむるを免れぬ、借問す吾人に其の用意なるもの有りしや。

今の政事家も貴族も學者も操觚者も宗教家も、鮮人に對しては教育勸語の義解を有たぬのである、何と釋くべきかを知らぬのである、然らば爰に大なる當惑を有つべきである、然るに其の當惑をも有たぬのである、要するに朝鮮人といふことを忘れて居るのであらう、從つて何の方面の人も、鮮人に對して日韓併合を理解せしむべき哲理的言辭を有たぬ、而して只管に東洋平和の爲なるを千語し、徒爾に合意の結果なるを萬言するのみである、斯る國際的政治的若くは民事法廷的の論理を以て、焉んぞ優勝劣敗の結果と思念する鮮人二千萬の心的操守を奪ふことが出來やう。

凡そ事物には體と相と用との三者が無ければならぬ、例へば吾人の面目は相にして活動は用なるが如し、而して宇宙は吾人の體である、體より相を現し相より用を生ず、即ち吾人である、此の理以て日韓併合を釋くべし、即ち併合は相にして共存共榮及び東洋平和

はその用である、故に日韓併合を以て合意と爲す者も優勝劣敗と爲す者も俱に相の上の靜に屬し、又共存共榮の目的とか東洋平和の爲とか言ふも用の上の釋明に過ぎぬ、用の上の釋明を以てして焉んぞ相の上の靜を止むるを得ん、相の上の靜を止めんと欲せば、其の相を現したる體を説かなければ千百年を経るも靜を止むることは出來ない、論より證據、彼等鮮人は用の上の釋明に耳を貸さうとせず、悲しき吾等は民族あつて國を有たぬと叫び姦賊國を賣れりと雖山川豈斯の民を捨てんやと叫び、困勉以て學を積み力作以て富を蓄へ據つて以て獨立の大業を克成せんと呼び、吾等は國の民にあらずして世界の人なりと叫ぶ、是れ其の叫ぶ者のみを不逞鮮人として罰すべきであらうか、由來不用意にして斯かる叫を爲さしむるに至れる吾人こそ已に罪ありとして其の已を罰すべきではあるまいか。叫の過激なるものは鎮むるに難からず、然れども其の沈痛なる者は治むるに易からず、就中根を宗教に有する者を最も治め難しとす、故に叫を聴く者は其の叫ぶ者の宗教如何を稽查しなければならぬ、今

鮮人と宗教

との心的道交を稽ふるに、天道、侍天、太乙、青林等の各種教團は概して儒佛道三學の糟粕を捏合せた如うな者なるも、内に朝鮮古來の對神觀念が潜在してゐる、從つて我が神道教と最も縁相近き者であらねばならぬ、從つて亦朝鮮の魂は基督教よりも何よりも此等教團の内に在するのであれば、其の教義の淺薄孟浪杜撰の故を以て一概に輕視することは出来ない、其の道とする所のもの、其の神とする所のものは、彼等の奉じて朝鮮の道朝鮮の神とする所なれば、其の道と神とは朝鮮と云ふ國土が堅く結附けられてあつて不可分のものにされてある、處が日韓併合と云ふ事相の見成に由り、國土は日本に奪去られ殘されたるは道と神だけである、彼等慨く、從つて彼等は道と神とを護すること猶亡國の遺臣が竊に其の君の子を護するが如き心で居るらしい、何時か再び國土を取戻して昔に返へさうとの心掛も有つてゐるに相違ない、それが爲か何うかは知らぬが、我が政府も天道・侍天等の諸教團に對しては宗教と認むるを肯んぜずして専ら警察取締の下に置き、而して監視してゐる、結局彼等諸教團の大衆を如何に仕やうと爲るのであらうか。

鮮民統治の事に從ふ我が官憲間に國風移殖といふ言葉がある、其の國風移殖を宗教の上觀察するに、明治四十三年八月二十九日日韓併合の大詔煥發せられてより茲に十有六年、

今や内地臣民の朝鮮に居住する者約三十八萬人なるも、其の表敬の齋場たる日本神祇の宮社は僅に四十に足らぬ、のみならず鮮人にして之に類首き表敬するは殆ど無い、教育勸励に對してさへ敬虔の念を捧げざる鮮人に對しては、天照大神の御宮建立も、畏れ多きことながら彼等に何の意義をも有たしめ得ない、それに較ぶれば佛寺は遙に彼等を收獲し易い、何となれば佛の教義には國の境もなく位の尊卑もないからである、從つて其の信徒の數日本佛教は一萬二千人朝鮮佛教は十七萬人と號せらる、基督は更に彼等を糾合し易い、何となれば神聖は天の神より外に無く人間界に神聖の座を設くるは是れ神に負くものなりとの主張があるからである、從つて其の信徒四十萬の多きに上つてゐる、即彼等鮮人は我が皇祖皇宗を餘所のものと思惟し敬を捧ぐるを願はざる者、相率ゐて我が神聖の座より遠ざかり心を國もなく尊卑の別もなき處に悠遊せしめんとする者、儻くは己の事ふべき神聖を上天に求めて翻つて人間界の神聖を呪はんとする者に庶幾い、古より亡國の遺臣が宗教に遁るゝ所以率ねこれに類してゐる、爰に大に考ふべきことは、朝鮮總督府の統計に依る諸宗教一切の信徒其數大約十萬以外の鮮人は全然無宗教者であるのか何うかである、二千萬ともいはるゝ民衆の中僅少六十萬だけが有宗教者にして餘は悉く無宗教なりとは猶

道上許せぬことである、古來朝鮮には山氣治亂の考、鬼神禍福の説、川澤吉凶の辯、巫祝降神の行等がある、これ等の者は自ら天道・侍天・太乙・青林等の諸教に潜在してゐるのであれば、審詳に調査したら、それ等の諸教には意外の大衆が心を緊けて居ることが發見されやう、又さう豫計して統治の策を講ずべきではなからうか、其の策といふは此等の諸教團を我が神道教の宗派と認めてやることである、勿論今直にといふのではない、吾人に宗教と認めてやるだけの安心が成らなければ何うすることも出来ぬのであるが何にせよ安心の出来る方へ導き前め行かねばならぬ、それは我が純神道の容儀に響はしむることなのであるが、

困つたことは神道教義の孤峭

である、吾人は神道容儀の中に生れたる臣民にはあれど、何ういふものか、神は拜むべくして親むべからず、畏るべくして懷く可からずとの感がしてならぬ、佛の慈にして親むべく基督の愛にして懷くべきに關はらず、我が國の神は何うしたことが峻峭にし、慈容愛語に乏しい、これでは朝鮮の諸教團を籠攬するに難く且孤嚴に過ぐ、少くも朝鮮各教團の

天とする所のものを祖宗の天に併せ吞むだけの宏量がなくてはならぬ、又其の道とする所のものを祖宗の道に抱擁するだけの雅懷がなくてはならぬ、并に其の神とする所のものを祖宗の分神なりとするだけの融通がなくては叶はぬ、何れにもせよ彼の天道教又は侍天教などの類を籠攬して、天理教や金光教などと同様に、我が神道一派とするだけの經綸は、朝鮮統治上是非必要であつて、現在及び將來に造營さるゝ我が神祇の宮社をして光を放つに至らしむる所以である、神ありと雖威なく、靈ありと雖も光なき宮社は、朝鮮統治に何等の貢獻を齎さぬであらう、是れ専ら宗教を超越する純神道の識者に對する徹衷の披瀝であるが、翻つて宗教的神道と鮮人との關係に觀れば、

神道教の教化成績は佛教に優る

所ある如うである、之を大正十二年の統計に觀るに、佛教が十六宗派三百十五個の教所を以てして鮮人一萬一千六百人を信徒とするに對し、神道教は四教派九十四個の布教所を以てして七千二百人の朝鮮信徒を有して居る、即ち之を布教所の數に依りて比例すれば、佛は三十七人の信徒を有し、神は七十七人の信徒を有する譯なのである、宗教を超越し

てゐる所の純神道を以て奉齋する神祇の社は、常に森闢として、一個の鮮人も請つて願首く者なきに、宗教として扱はるゝ天理教や金光教が是だけの信徒を嬴得たは、一たい怎ういふわけなのであらうか、朝鮮を以て念とする者の深く考ふべき所のことであらう、又これに反して大社教が僅に信徒八名より得られずして殆ど布教止息の姿に成果たのも意考へねば成らぬことである、此等の事實に依つて觀れば、出雲の神にせよ大和の神にせよ日本の神とあつては、鮮人それに稽首を仕ない、而して金神といふやうな世界の果の鬼門にまで達く神、言換えれば日本一國の神でない神には稽首をすることが知られる、斯ういふ思想で宗教を暗中摸索し行かば末は怎ふなるであらう、左なきだに朝鮮二千萬民衆は、猜嫉的に曲學的に特種部落へ墮化しつつあるのであらう、更に宗教的にもさうなつては未だ甚案じられる、然し天理教でも金光教でも我が神道一派なるに於て、それが佛の信徒三十七人を有するに對し七十七人の信徒を有するはいさゝか將來に心強い所がある、何卒それが鮮人の有する先天的因縁からであつて欲しい、斯ういへばとて吾人は決して佛教を疎する者ではない、要するに鮮人も吾人と齊しく我が祖宗の疏族遠裔なることを因縁理法の各種見成間に確めたい願からである。

吾人は吾人を祖宗の疏族遠裔なりとして自負するに憚らぬ、從つて吾人は日本の神を以て最も因縁深き者と自信する、吾人は亦佛と深き因縁を保つ、それは假構故作からでなく、神佛一體の大理法より神縁即佛縁に繋がれてゐるからである、神佛一體は究極の至理である、然るに明治維新の初、時の政府から佛は佛、神は神と引分けられてより以來、本地垂迹の説神佛一體の論は久しく熄んでゐるが、而も猶靖國神社百萬の靈魂は、國祭に神として齋を受け、家祭には佛として供を受け、神佛一體が實際に現象されてゐる、今朝日統治の上に於ても神佛一體の宿説を喚起さすには居られない、若も佛門の僧侶が神を外にして佛を説くに於ては、之に歸依する鮮人は相率ゐて我が神聖の中心より遠ざかる結果となるであらう、何にしても日本佛教の歸依者に非ずして印度佛教の歸依者たるを認め、吾人が佛教を以て家々の宗旨とする所以は、それに捧ぐる歸依と渴仰とが我が祖宗に對する歸依渴仰に一致するからである、是れぞ即ち國化せる日本佛教の日本佛教たる所にして神を以て骨となし佛を以て肉と爲せる特異の國教なのである、嘗ては印度教であつた佛教が、國化して日本教と爲つたのは、神佛一體の極致眞理が斯國に於て顯現されたからである、今若朝鮮布教の上に於て、神佛一體の所説を、明治維新の初のやうに禁制せ

か、僧侶は相率ゐて日本教を去り印度教に還る外ない、左にきだに世界の風潮や新しき學說などに打たれて思想に變化を來し國化の佛教より脱して、初代佛教に還らんとのか、僧侶間に湧起らんとする危険の此の際なれば、政府も民間も善々注意しなければならぬ、其れは兎も角として、今の僧侶が神佛一體説を朝鮮布教の上に何故應用しないのかを吾人は怪まずに居られない、彼等は朝鮮に四十萬の信徒を有する基督教團を見て空しく後に隨着してゐるやうであるが、蓋これに向つて本地垂迹の論陣を張り基督を以て某菩薩の靈化なりと主張せざる、其の勇氣さへあらば、侍天・天道等と稱する鮮人教團の神とする所、ものを神佛一體の所説を執つて佛とも爲し得べく祖宗の分神とも爲し得べく、其の教と其の人とを并收めて以て我が物と爲すにあれば、其の得る所必偉大なるものあらん、要するに朝鮮の思想統治は是非とも我が神佛二教の精神的結合に待たねばならぬのである。今や我が帝國は

有史以來未曾有の大患

に罹つてゐる、彼等鮮人の叫なる獨立は、如何に叫ぶとも永劫誓ひはすまい、去れど彼

等二十萬民衆が特種部落に墮化しつゝあるを如何にして禦がんとはする、教育勸諭に對する彼等の念的無敬虔は明に特種思想の表徴である、此の思想を包藏して獨立不能の天地に瞋恚し、内に陰に優秀の地位を轉覆せんとする禍心を蘊藏して、歳と共に痼と成り癰と成らば、則如何、今帝國の臣民は七千餘萬であるが、内に鮮人二十萬が居るのである、即ち自己をば皇室の疏族遠裔と理解し衷心より神聖の座を神聖の座と仰いで居る吾人五千萬は對し、それを餘所のもの、如く思惟し居る鮮人二十萬があるのである、其の關係は五に對する二なのである、普通選舉を率土の濱にまで遍く行ふとしたら、七百の議席の中に二百は鮮人の占むる所となるのである、其の二百が特種思想の者であるならば國は大亂であらねばならぬ、例を換えて言へば七貫目の人が二貫目の病を有つてゐると同じなのである、全體量は七貫目であつても、己の骨肉は五貫目であつて餘の二貫目は骨肉と相容れざる瘡氣なのである、二十貫目の人が百匁の條蟲をもつてゐるさへ大患なるに、七貫目の人が二貫目の病氣を有つてゐて如何ならう、而してこの大患は恐懼措く能はざる處にまで累を及ぼし居るを轉た恐懼するのである。

攝政宮殿下が歐洲御巡歷の途に上らせ給ふ折、民間の人々が御身邊をお氣問ひ申上げた

一六
るは何の爲であつたらう、恙なく遠く御遠慮をも請せられ兼ては臺灣北海道をも見そなはせ給へる殿下を、我が領土内なる朝鮮へ御案内申上げ兼ね、明治大帝の宏謨を親しく滿鮮の山野に偲ばせ給ふやう御勸め申上ぐるに躊躇するは何の爲であらう、虎の門の不敬事舞は一狂漢子の血迷からであるが、鮮族の心理の底には幾何の不祥拳銃が潜み居るか分らぬ、吾人の不用意なる克く忠克く孝は、偶以て彼等に逆取され其の拳銃に勇氣ある彈藥の發填を爲さしめた嫌がある、實に有史以來の大事變が眼前に展開されてゐるのである。

この大患を眼前に控へながら、國の選良たる政黨は、憲法發布以來毎も現内閣の倒壊を期するの一點張で、心魂の一切を擧げて之に齟齬してゐるが、何時の現内閣でも皇室中心主義の忠良閣員であつて、不逞思想の亂人ではない、何もその方へばかり弓矢を向けるが能事でもあるまい、蓋そそれだけの心勢をば、眼前に展開されてゐる國家未曾有の大患に向ける、幾たび現内閣を倒壊したからとて夫れて此の大患が癒る譯でもあるまいに、抑々嗚呼の事どもである、又學者の方面を見れば、多くは新しきを是れ街つて學を賣るに厭々とし、鮮人に對しても慧を植ゑんとはせず只識をのみ是露ぐ、蓋そ獨逸の昔なせる所と學んで國民思想の統一に貢獻せざる、夫の獨逸は聯邦を打破して一邦に取纏むるに猶太を

る前途を有して居るが、其の聯邦民族の異種多様なるに拘はらず、これを同祖同裔の一民衆なりとするに成功して克く其の強大を成したのである、夫れには權略も挾まれ方便も用ひられ牽強附會も含まれてゐるが、然も能く史學を因にし宗教を縁にして其の民衆の國祖同裔なるを立證し鼓吹し信據せしめたのである、我が帝國も亦日韓の關係に於て是非をこれに成功しなければならぬ立場に在る、それにも關らず世の學者とも謂はる、知識の人々が、嘗て思をこゝに致さざるは何ういふ譯なのであるか。

高天原が南洋に在うとも小亞細亞に在うとも日韓の關係を定むるに其處まで溯る必要はない、又我が古代の祖先が北から飛來したか西から渡航したかも、差當り日韓の關係を定むる上に論議する必要はない、其の遠き由來は姑く擱くとして、

朝鮮も大和も一の大八州族

なることだけは確なる事實である、從つて此の兩民族の間には相互共に異民族の威念が無かつたことも事實の上に徴せられ、その交通も外國貿易の威念でなく内國通運の親交であつたことも確め得らるゝ、而してこの大八洲民族の或時代の策源地が今の出雲長門の邊

から九州北部朝鮮南部へかけての一圓相中に在つたことも窺はれる、此の策源地より兩派に分れて行動を起し、一は東北に進展し、其の東北に進展したるは蝦夷・土蜘蛛等の異民族を驅逐討夷して今や樺太の北部にまで達し、而して征夷大將軍の偉號は直此間まで存在したのである、其の西北に發展した同族は夙く鴨綠圖們の界に達し、猶其の界を踰えて遠く進出したるが、支那・蒙古・女眞・契丹等の異民族に遭遇して八進八退し爾來數次其の入寇を受けたれど、猶能く領土を鴨綠圖們の線に維持して強に降らず大に化せられず克く其の族を自ら保つて今日に至つたのである、故に西北に發展して朝鮮と稱し東北に進展して大和と號しても其の本を尋ねれば一の大八洲民族なのである。

去れば大八洲の歴史は古い、去りながら朝鮮の歴史は策源地より西北に發展を起したる其の時に拵まるべきである、大和の歴史も亦さうであつて策源地より東北に進展を起したる其の時に拵まらねばならぬ、其の以前は一の大八洲史であつて朝鮮族も大和族も同一の祖先を其の史中に有つてゐるのである、即ち兩同族の皇祖は其の史中にゐますのである。

大和記録・朝鮮記録と分れて一は東北發展の歴史となり一は西北發展の歴史となれる其の歴史の起源が、何時の世に在つたかは猶考證を要する所なるが、神武天皇の東征よりは遙に以前の事であらねばならぬ、其の時代に於て夙く大和の中津國に錦旗を進めたのであつたが優勢なる異民族の侵寇に餘儀なくされて都を日向に遷したのであることが史實の上に考證され得る、この考證よりすれば神武天皇の東征は中津國回復の師なることが知られる、此の間に於ても西北發展の同族は其の發展を擴め、鴨綠圖們の線に向つて邁往したのであつた。

斯く大觀し來れば北部樺太に翻り居る日章旗は、鮮人側よりも之を見て同族の進展と謳歌せねば成るまい、又西伯利の北に鮮人の一部落ありと聞いては、日人側も之を同族の發展と譁呼せずには居られまい、實に大八洲族は日本海を内海にすべく西より東より北へ北へと進展しつゝあるのであれば、胥に俱に興味を以て之を援け、艱難相倚り水旱相恤り、同祖同裔の睦を以て先天の使命に盡瘁すべきである、斯く情理を通達し來れば教育勸諭の難有さを胥に俱に身に泌みて感ぜずには居られまい、そこに

日鮮融和の心樞

が存在する。

我が皇祖皇宗と勅のらせ給ひたる皇祖皇宗は、大八洲民族の皇祖皇宗にてゐますのであれば、即亦同族なる朝鮮の皇祖皇宗なること申すまでも無いことである、世々厥の美を濟せるはと勅らせ給へるは、大八洲民族の發展を愛させたのであれば、同族なる朝鮮の敵國外患に耐えて克く其の族を保持したる幾多の歴史は、即世々の濟美であつて勅語に包含さるゝこと勿論の儀である、若能く同祖同裔の睦を悟らば、爰に同祖同裔の大因縁が悟れやう、日韓同盟して清國と戦ひ露國と戦へるも其の同盟は大八洲民族の其の古より有する同祖同裔の大因縁からである、即東北と西北とに分れて進展したる大和記録と朝鮮記録とが此に合して大記録を作つたのであれば、獨大和記録のみの濟美でなく亦朝鮮記録の濟美なのであつて與に誇を一にしてゐるのであると悟らねばならぬ、日韓併合の眞義も固よりさうであつて併合そのものは全く同祖同裔の大因縁からである、由來西北に發展したる我が同族朝鮮は、鴨綠圖們の線をも踰えて遠く大領土を擴張したのであつたが、優勢なる異民族に遭遇した許りでなく時に同族間に瓜分をも來し、同族當初の雄志阻喪の止なきに至れるに加へて、隋・唐・元・清及び契丹等の入寇を経て、積弱遂に痼を成せる悲運に陥つたのは、東北に進展せる同族大和の纔に蝦夷なる異民族に遭遇したるのみなる

に比し、幸不幸の差僅に雲泥のみではない、爲に貧富の違をこゝに生じ強弱の差をこゝに現なし、清に併せらるゝは僅に免れたるも、露に吞まるゝは殆ど免れがたく、優秀なる大八洲民族の一半は將に異民族の臣妾たらんとするに至つたことを忘れては成らぬ、是に於て同族大和は其の富強に倚りて起ち、萬骨を將つて乾坤を塔する底の冒險に出たのであるが、是れぞ即ち

同祖同裔の大因縁

が然らしめたのである、この大因縁が同裔を以て同裔が將に異民族に吞まれんとするを救ひ而して其の本に反り其の古に復つて久しく分れるたる同裔と同裔とが合體したのであれば、合體そのものは因縁勢力の然らしめた所であつて靈的自然の理法即神道教義から言へば神慮なるものである、これを日韓併合といふのであれば、優勝劣敗の結果などいふ殺伐的のものでないことは無論であつて、總て夫等の論理を超越したる最勝最美の靈的理法からであることを悟らねばならぬ。

理法は斯くも昭々であるが、之を我が同裔の總てに靈的と悟らしむるは容易の業でない、

何うしても國の仕事として其處に到らしむるより外に有力の辦法はないのであるが、それにしては政事家・學者・宗教家・貴族・操觚者の連袂蹶起に頼まねばならぬ、孰にしても歴史・地文・風俗・言語・宗教等の諸學が與に一致して闡明に勉むるに依りて得られるのである、獨逸は嘗て之に努力して雜多の民衆を同祖同裔の者に成し遂げた、今吾人は大和と朝鮮とが、俱に同祖一族の者なることを自覺せしむれば即足るのであつて、牽強會も要らぬのである、其の自覺を促すには先其の大本として史實を闡明すると共に史實の關聯を因縁理法より釋明し、以て同祖を顯彰し、同裔を鼓吹し、その同祖同裔の大因縁に適從なる者は以て榮え、背叛なる者は以て亡ぶる所以を信仰せしむるに至つて、百疑に消え、百瞋に亡せ、融和に濟るのである、若夫知を格することゝに及ばずして徒に政法武力と物質經營のみを以て蒞まば二千萬の鮮民は歳と共に特種部落に墮化して國の頑癩と爲り、大癌と爲り、或は世界の潮流に棹して愛蘭とも爲り匈牙利とも爲らん。吾人は、待に議論を提げて夫れで足れりとする者ではない、分相應の融和籌策を實行しやうと仕て居る者である、是を以て其の順序として

内鮮同裔會の設立

を現下の必要事と考へたのである、見渡す所世間には會といふ者が何處にも存在して數であるが、其の多くは概して空言に止まり、其の唯一の事業は紙上の宣傳に過ぎるやうである、苟も會を興し衆と與に志を成さんと欲せば、是非とも處と事との二つの者を有たなければならぬ、吾人はその所謂處なるものに就て探査幾年を重ね、終に帝國一大事因縁の新邦土に接したのである、夫は支那の間島である。

間島とは支那吉林省東南部の一大土壌の稱であつて、南北滿洲をいふに對しては東遼東ともいふべき大陸である、東は靈嶺に連つて蒼茫渾々坐るに女真靉靺の古國を偲ばしむる傍に、今に頻りに過激思想が貿易されぬる、南は圖們江の屈曲に緣りて我が朝鮮咸鏡北道と犬牙交錯の形を成し、加藤清正が妙法蓮華の旗を進めたる兀良哈國の名が今猶山道の稱となつて残つてゐるが、其の附近一帯には不逞思想が南去北來してゐる、其の住民は敦化寧古塔へ掛けて約五十萬、北滿及び西伯利亞へ掛けて約八十萬、嚮ては朝鮮とある、これだけの人口の者が不逞思想や赤露主義に鼓動されて、鮮内地千九百萬の者と往復

して風氣を惡化しては、露國との條約に過激思想を宣傳してはならぬと責めるところで、夫れはほんの表門の張紙に過ぎないで裏門からは潮のやうに、宣傳が自國民に由りて推されて來るのである、故に如何な惡疫に出遇つても感染しないだけの豫防注射が出先の者に最も必要である、それは同祖を顯彰し同裔を理解せしむる其の事が注射なのであるが、その事は姑く措き、斯くも鮮人が其の故國を去つて勇往北進し、不毛を開拓し、人烟を繁盛し、自我的殖民に成功しつゝ行く様を帝國經世家は如何に之を味はんとはする、或る先天的因縁に依る隠れたる大勢力に導かれ推されてのことなるべしと味ふ外なからう、其の先天的因縁とは何か、即それは前に言へる大八洲民族中の西北に發展して朝鮮と爲れる者の子孫が祖先よりの因縁に導かれ且推されて只管にそれを辿りつゝあることなのである、而して亦それは東北に進展して太和と爲れる同族子孫の樁本にまで達するに相應して、日本海を我が内海と爲すべく進みつゝあるのである、寔に是れ我が皇祖皇宗の雄圖宏議が同裔の子孫に依りて正に現出しつゝあるのであると景仰せねば成らぬ所なのである、然し皇宗の行持は我等が行持に依りて見成し、

祖宗の大道は我等が行持に依りて通達する

ものなることを忘れては成ぬ、我等は應に如何なる行持を將て同族朝鮮の北進に追隨すべきであるか、餘所の土地であつて見れば政治法律を將て追隨は出來ない、武力も亦其の時期でない、然らば何か、何も追隨すること相成らずとして偏に無策に抛つて置くならば、祖宗の大道は通達するに由なしであらう、物質上の援は黄金を以てしても出來やうが、思想上の大助は宗教を追隨するより外ない、宗教を卻け例に依つて文部の政を追隨せしめんと試みるならば、夫れこそ亦前車の轍であらう、瑞穂の種を卸して棘だらけの茨を散獲しなければ成らぬ結果となること請合である、不肖祖光に考ふる所あり、分を忘れずて魄より始むるの聲に倣ひ、産を傾けて寺を亂想の淵する所亂氣の渦く所なる間島に建ちし、曹洞宗兩大本山の別院と爲し、學徳裕なる名僧を請じて鮮人教化の道場に供へた、其の目的は同祖一族の大因縁より説いて間島數十萬鮮人の思想を善化し、猶前んでは因縁の北進に追隨して祖宗の宏謨を遐域に顯彰せんとするに在るも、孤舟志空むく遠く一劍望、還た迷ふの慨に沈み居るのである、蕭々たる一寺院を以て争てこの大願を成就し得べき

是非とも一大學校を興して鮮人の子弟を教成せなければならぬ、又學問と宗教との一致に依る濟世軍を編制し、間島全土を縦横に跋渉せしめて同祖一族の大主義を宣布すると共に、冤を慰め艱苦を救ひ四大脅威（拙著間島觀世要論に其の概を記す）に對抗せしむるの壯舉に出でなければならぬ、是れを即前に言へる内鮮同裔會の事業なるものである、故に同裔會は日鮮の同祖同裔なる所以を史實に依りて闡明せんとする者なれば考古諸學士の贊助に頼らねばならぬ、又其の史實の由緒聯繫を因縁の理法に依りて釋明せんとする者なれば宗教諸博士の指教に頼らねばならぬ、而して之を内外に宣傳するを務とする者なれば操觚諸君子の扶掖に待たねばならぬ、且夫是を紙上の宣傳に止めず間島を以て主義實行の處と爲し、正學を興して子弟を收攬し、濟世軍を起して父兄を糾合するを事とするに於て、個人の得て爲す可からざるものは當路相將の明鑒に倚らねばならぬ、本是獨逸に在つては帝室と國との一大事業と爲せる所のもの、不肖祖光安んぞ能く之に當らん、但夫れ之を憂ふるの深き、乃ち爰に是を提唱し并せて以て天下憂國の士に懇ふる次第なのである。

日鮮融和提唱 終

内鮮同裔會趣旨

帝國現下の情勢に於て朝鮮二千萬民衆が日韓併合を優勝劣敗の結果と思惟するより大患なるは莫し斯く思惟する意識其のものは即ち特種思想にして亂氣これに渦まき亂音これより流れ發して曠域の叫と爲り潜んで不逞の咒と爲り時には謀叛の檄と爲り又妄舉の彈と爲る而して其の特種思想は歳と共に國の頑癩と作り大癩たらんとす而して又其の二千萬民衆は宗教に對して今方に暗中摸索の狀に在るも其の宗教觀は國を外にしての事にして國を内にしての事ならず國の境も無く位の上下も無き處に心を遊ばしめて亡國の恨を遣らんとする者の如し換言すれば國の民たるを嫌ひ相率ゐて我が神聖の座より遠ざかり超國家の教義の裏に自我の人たらんと希ふ者に庶幾し恐らくは宗教も亦叛民思想の淵たらん若夫れ政を以てして其の人を民とする能はず教を以てして亦其の人を民とする能はずんば其の人を殺し盡すか若くは分裂の外無かるべし此の大患は内鮮衆の雙方が雙方互に歴史を殊にする異民族なりとし暗に反目する心の機微に病源伏在す

何ぞ料らん内鮮兩族は歴史の基礎を同うし天潢分派の源流を同うし祖宗を同うし族を同うす即ち今の内鮮衆は同一祖宗の疏族遠裔なれば其の親みは格別ならざる可からず其の歴史といふものも本は大八洲史が大和記録と朝鮮記録とに別れ其れが今やまた一に復歸して大記録を成しつゝあるにあれば他の異民族に對し齊しく世々の美を俱ごもに濟し來れる次第にして其の間に優劣の隔あるに非ず若能く知をこゝに格し一族の親交を本に復さば反目忽ちこゝに失せ大患立ろにこゝに癒え相互の福祉に光明自ら煥發せらる可し

是を以て吾人は内鮮の同祖同裔なる所以を偽なき史實の上より闡明せんと企圖し並に其の史實の關聯を因縁理法より釋明して同裔共存の有意義なるを其の上に顯彰せんと企圖する者なり所謂因縁理法とは神道教義に於ては神慮なるもの佛道教義に於ては佛力なる者にして其の一致の上に大日本國教の眞髓と精華存す乃ち吾人は之に依りて同祖一族の史的因縁なるものが同裔を主宰する大勢力なる所以を論證し其の因縁勢力に適從の者は榮え背叛の者は亡ぶる自然理法に依據して榮を懲戒し亡を誠飭し以て同裔の共存共榮に貢獻せんとを企圖す素は大業にして個人の得て成す可からざる者願はくば朝野の君子内鮮の志士偕に此の企圖に賛し現下の大患を其の未だ癩癥ならざるに醫治せんとを只管に冀ふにぞある乃爰に内鮮同裔會綱領を草し廣く大方の士君子に告ぐと云爾

内鮮同裔會綱領

第一條 本會は内鮮同裔會と稱し本部を東京に置き支部を要處に置く

第二條 本會は内鮮の同祖同裔なる所以を史實に依りて顯彰し且其の史實の關聯を因縁理法に依りて釋明し之に由りて内鮮の融和を圖り其の福祉を増進するを主義目的とす

第三條 本會は左列事項を事業と爲す

- 一、前條の主義目的を廣く内外に宣傳すること
- 二、日支露三國の緩衝要地にして且亂想紛糾の處なる東滿洲間島に日本國教を興隆し其の歸依と渴仰とを將つて我が祖宗に對する歸依渴仰に一致せしむること

三、前項の要地に正學を興し同裔の子弟を教成善化すること

四、又前項の要地に本會の主義目的に依る救世軍を編組し同裔の父兄を糾合收攬して偕に外來の亂想に對抗し並に同裔實生活上の諸般脅威を除いて救援を行ふこと

五、前項の要地より西伯利又は北滿に前進する同裔に跟隨して本會の主義目的並事業を偕に前進せしむること

第四條 本會は會員の精神的結合とす從つて本會の經費は内外の特志寄贈に頼る外規定的離出を會員に強要すること無し

第五條 第三條の事業に要する資金は會員の協議に由り隨時其の方途を講ずるものとす

第六條 本會の會員たらんと欲する者は名刺又は紙片に意思表示を爲せば足る但諾否は本會の任意とす

第七條 本會の會則章程規約等は會員の協議に由り追て之を定む

東京市小石川區關口町百九十九番地
濱名邸内(電話半八三七二〇番)

内鮮同裔會創立假事務所

創立主唱者 濱 名 祖 光

内 鮮 同 裔 會

趣 旨
綱 領

116

朝鮮人子弟補達令

十四年一月三日

直原豊四郎

十四年一月三日

直原豊四郎

大庭景夫

直原豊四郎

東京市牛込區馬場下町三五

東京市牛込區馬場下町三五

大庭景夫
男爵 黒田長和

陽本男爵

東京市小石川區
原町百廿六番地
阪谷榮三

十二月
日 解 和 口 地
大庭景夫
東京市牛込區馬場下町三五
直原豐四郎
大庭景夫
東京市牛込區馬場下町三五
直原豐四郎

協
丁酉年
一月三日
直原景夫
二月二日
直原大庭景夫
下園景夫
東京市牛込區馬場下町三五

十二月
日 解 和 口 地
大庭景夫
東京市牛込區馬場下町三五
直原豐四郎
大庭景夫
東京市牛込區馬場下町三五
直原豐四郎

東京市牛込區馬場下町三五

大庭景夫
男爵 黒田長和
阪谷榮三

朝鮮人子弟職業補導會事業試驗計劃書

別冊趣意書は吾人の經驗を基調として組立てたる鮮人救済の唯一の方策であるので直に之を
決行したのであるが惜しい事には世上未だ此提案に對して十分の確信を得ざるが如ければ
しばらくある試みとして本案を實行し以つて別冊趣意書の豫備行爲とするものである

註一、本案は別冊趣意書に計畫せるもの、百分の一の規模であつて其人員は五十二名であ
る

二、朝鮮各道より四名宛を詮衡募集するものである

三、別冊趣意書は全部徒弟として雇傭先へ住込むものとして立案したが本案に於ても亦
その心持に此の變りはないが大事を踏んで合宿、通勤の方法をとつたが相互に理解
し合つた場合は即時之を住込ませるのです

設備費

一金壹萬四千七百四拾六圓也

内譯

一金壹萬貳千圓也

本會事務所及宿舍百貳拾坪
六拾坪(三人一室七疊) 拾坪 事務室

五坪 浴室 拾坪 食堂

拾坪 廚房 貳拾坪 病室物置其他

五坪 娛樂室

一金千五百圓

一金六百七拾六圓

一金貳百七拾圓

一金參百圓

電話架設費
蒲團五十二人分
蚊帳十八張
食器風呂場設備

一金貳萬千壹百拾五圓也

一ヶ年五十二人に要する經費

人事費

一金壹萬四千四百六拾圓

一金參千六百圓

一金參千圓

一金九百六拾圓

一金千貳百圓

一金七百貳拾圓

一金壹千九百八拾圓

事務所及宿舍費

一金千四百貳拾圓

一金百貳拾圓

一金百圓

一金參百圓

一金參百圓

一金參百六拾圓

一金貳百四拾圓

旅費

一金千圓

移入子弟移送費

一金千參百圓

募集費

一金五百貳拾圓

食費

一金四千七百四拾五圓

衣費

一金貳百六拾圓

醫藥費

一金貳百六拾圓

送還費

一金壹百五拾圓

成業見込なきものの送還費

以上

大正十四年一月 日

東京市牛込區馬場下町三十五番地

朝鮮人子弟職業補導會

朝鮮政策に關する一意見書
及朝鮮人救濟一方策

十一年一月五日
直在堂
大慶

朝鮮政策に關する意見書

大庭景夫

直原豐四郎

經濟資源に乏しき我が日本が、その接壤地にして又物資の豊富なる滿蒙を「我が特殊的地位」に置かんとするは、吾等が生存上の痛烈なる要求にして、何人と雖も之を是認す。若し之をしも否定せんか、

我が經濟的獨立は完成せられざるべく、生存權は蹂躪せらるべきなり。

而も吾人の不可思議とする所は、かの滿蒙を以て重大視する者が、一方に於て朝鮮問題を輕んずる傾向の存在する事なり。然れども吾輩をして言はしむれば「朝鮮を離れて滿蒙論なし」。換言すれば、眞實なる滿蒙論は先づ眞實なる朝鮮論策に出發す。

日鮮の地理的關係に就ては固より論なし。而も世人多くは單純なる植民地として觀るの外、徹底したる朝鮮觀を抱懷せず。而して植民地としての朝鮮觀は、やがて之を基調としたる對鮮政策となり、百般の施設經營皆茲に出づ。而もそれ等の政策は果して吾人の期待に副ひたるや否や。

願れば、日鮮の併合は一變の統體を伴はず、一滴の血潮を見ず、遙く中外をして憤慨措く能はざらし

む。是もとより彼我當局の腐敗その宜しさに因るは言ふを俟たずと雖、他方韓國民の數年の機微紛々、生民爲に其の培に安んずる處なく、仰いて新政を嚮慕したるに因す。而して爾來春秋十有餘年、人心漸く離り、不穩の狀勢日に盛ならんとす。抑、如何の原因によるか。

或ものはこれを民族自決の反影とし、また或ものは共產主義などの外來思想の傳播にありとなす。その何れも或る程度までは事實なるべし。然れども、かくの如きはあまりに皮相の短見にして、且又鮮人を見ること、あまりに甘きに過ぎ。吾人の見を以てすれば、所謂「思想羈化」と云ひ「狀勢不穩」と稱するもの、其因は、所謂外來思想の影響にもあらず、また區々たる獨立論者の仕業にもあらず。若しそれ斯る思想を背景とせる運動なりせば、毫も憂ふるに足らずとす。何となれば、外來思想なるものは、畢竟するに輸入思想にして、付焼刃に過ぎざればなり。他力宗にして自力本願にあらざればなり。また若し獨立論の影響なりとせば、それは餘りに現實を無視したるイリ、ジョンに過ぎざればなり。たゞ吾人はその眞因の外的事情にあらずして、彼等鮮人の事實に則する内面的心理的動搖の發展と、彼等に望む内地人の態度及び政策に就て一大憂苦を禁ざる能はざるものあり。

朝鮮に於ける現時の憂患は、決してかの萬歲巖ぎにあらず、彼等の抱く思想にもあらず、自治の運動にもあらず。從順羊の如き彼等鮮人の多數が、その生活苦に喘ぎつゝある貧困てふ事實の存在なり。貧困てふ事實に則する心理的動搖なり。此の事實と此の動搖こそ、他の何物にも代へ難き恐怖すべき現象

にして、此の問題は直面せる彼等は、生活に對する不安と焦燥とは絶えず背かされつゝあり。見よ、苦學數年、漸くにして學堂より社會へ送り出されたる所謂インテリゲンチヤは就くに職なきため不平と不満とに其の日を送り、兩班の多數のものは急激なる政治的革新と經濟眼の失格より自暴自棄の支配に委ねらるゝにあらずや。若し斯る狀態にして續かんか、彼等は事あるごとに餓死すべきか。否、死を賭しても餓死の狀態より脱せんと圖るや知るべきのみ。此の時こそ、日鮮間の連係は寸斷せらるべく、思ふて茲に至れば、慷慨としてまづ盾に粟を生ぜしむ。

斯る狀態の下にある鮮人を顧みずして何をか救済と云ふ、又かゝる狀態を放置して何をか政治といふ。吾人敢て救済といふ、必ずしも米鹽を給與するの謂にあらず。また斯の如きは、幾十等億の言を以てしても救ふに難きのみならず、眞に彼等を生かす所以にあらざればなり。然らば如何にして彼を生かすか。其の途他なし、曰く産業の開發、曰く經濟的安定を圖るにあり。

下閣政務總監は最近憲政會政務調査會に於て、その朝鮮統治方針を述べて、「第一に鮮人生活の向上發展を圖れ」と喝破す。言や必ずしも新味なしと雖、舊套政治家に聽く可らざる人間味を含蓄す。然れど吾人も亦鮮人生活の向上發展を圖るを以て第一義となす點に於て、總監の言に全幅の共鳴を致す。然れども吾人の問はんとする處は、其の方法の如何にあらずして、方法のよつて生ずる、根本的觀念にあり。もし此の根本にして一步を誤らんか、百の施設、百の法令、却つて徒に事態を劇化せしめんのみなり。

此の點は終て、吾人の世に問はんとするは、所謂植民地觀念の更新にあらず。近代植民政策の命ずる處に従へば、植民地は其の本國の利益の爲に存在するものにあらずして、植民地とれ自身の爲に經營するを以て眼目となすが如し。而も吾人は、しかく朝鮮を待遇したるや否や。總ゆる企業は内地人によりて經營せられ、その金融機關は内地の爲に、また内地人の利用に放任せられざりしか。多數の移民（内地人）は鮮人の間に割込まざりしや。強壓的態度に出でし實例なかりしや。爲政者は彼等の進言に耳を傾けしや。觀じ來れば、吾人の踏み來りし對朝鮮政策は、多くは失敗の歴史のみ。植民政策の本義に對する違反のみ。奚んぞよく發展あらん。暗黒たる悲風の捲き起らんとする、もとより其の處のみ。

朝鮮の文化の到底内地に及ばざるや論なし。眞に朝鮮をして現代文化の恩澤に浴せしめんとせば、親情を傾けて彼等を啓發誘導し、互に兄弟愛の至誠を致すべきにあらずや。而して是れ即ち植民政策の本義にあらずや。

抑舊式なる植民政策の教ゆる苦き經驗は、吾人之を愛蘭に見るなり。實に愛蘭過去八百年の歴史は、宗教問題・土地問題・工業問題を混淆せる不斷の葛藤史なり。征服民族の横暴に對する被征服民族の反抗の歴史なり。世に朝鮮を論ずるもの、之を極東の愛蘭となすが如しと雖、其の内容に於ては大に異なり。即ち、英國の愛蘭に望むや極めて酷にして、壓倒せざれば止まざらんとするも、吾人の朝鮮に對するは全く然らず。そこに宗教的憎惡もなく、また經濟的搾取もなく、只管後進民族の發展・興隆を仰望するの

襟度を示すも、惜むらくは己の心を以て之を人に強ゆ。換言すれば、盲目愛に溺れて他の意志を尊重する事を知らず。更に碎いて云へば、「あ爲めごかしのひとりよがり」の觀なきにあらず。而も其の結果は同一なり。植民地に臨む態度及び政策の極めて至難なるそれ斯くの如し。而も猶、吾人をして言はしむれば、彼朝鮮人の經濟的自立にして達成せられざる限り不穩の狀態は永遠に解けざる謎なるべし。肥沃なる地質、廣潤なる土地を持つ朝鮮人が尙貧窮なる生活に沈淪せるは一見甚だ奇なるが如きも實は然らず。森林密生し、水利備はり、道路完成するも、彼等の生活は常に安定する所なかるべし。即ち彼等は吾人と伍して經濟戰裡に馳驅すべく、餘に貧弱なる財囊の持主にして、且餘に貧弱なる頭腦の持主なるが故に、ハンデキャップなくしての競争は、到底彼等の堪ふる所にあらず。無住の土地は措いて問はず、先住民族の存在する植民地に於て、彼等を放漫なる自由競争に放置するは吾人の與みせざる所、吾人に極言を許さんか、彼等に自治を與ふるか、然らざれば國內關稅を起して朝鮮内陸に於ける産業の保護政策の施設を主張せんとす。

然れども、如斯はかの愛蘭ダブリンの郊外モントゼロムに永久の眠につけるトーマス・ドラモンド如き、英人にして愛蘭總督となり、しかも政敵オーコンネルをして「愛蘭出身の政客と雖、ドラモンド以上の善政を布き得るものなし」と云はしめたる底の、血あり涙あり而して更に勇氣ある人物にあらずれば、よく是等のことを斷行すること能はざるべし。鮮人生活の向上發展の真意義は、實に更改したる

吾輩の主張する鮮人救済の一方策

經濟的自立の手段として吾人の提唱して止まざる處のものは、彼等に職業教育を施すにあり、一つは之を學堂に待つべく、現に總督府に於て銳意經營なしつゝあるが如きは、吾人の以て甚だ意を強うする所のものなりと雖、よく茲に學び得る者は其數と範圍とに於て限られ、理論に偏して實用的ならざるは學校教育の通弊なりとす。而も業を終へたる彼等が多くは帝國に對して反感を帶ぶるの傾向を有するは何人も認むる處にして、是れ徒に學んで而も自立し能はざるが故なりとす。即ち吾人の茲に主張せんとする所のものは、是等の弊を補はんとする徒弟制教育法にして、先づ彼等鮮人子弟を内地に移入して、商工農漁業の家庭に入れ、そが徒弟として實際的技術を習得せしめんとするにあり。而も徒弟となさんとする子弟は、その年齢十二三歳を超えざる程度たらんとす。其の理由とする處のものは、

- 一、技術の習得に容易なること、
- 二、技術の熟練に相當の歳月を要すること、
- 三、言語・風俗・習慣に慣れ易きこと、
- 四、家庭に慣れ易く親しみ易きこと、
- 五、内地に於ける失業問題の解決に抵觸せざること、等により。

以上は吾人の幼童を擇びたる理由の主たるものなり。而して幾年かの徒弟生活は、必然的に熟練なる

技術の持主たるは言ふを須たざる處、既に熟練なる技術者たる以上、彼等が其の郷里に歸來するも、最早往年の「求むるに職なく勵むに業なき」遊民徒食の徒にあらず、よく内地人と伍して經濟戦線の闘士と化すべきや知るべきのみ。唯環境の薄俸兒、そが實力を發揮する機會を得ざりしのみ。

職業教育は其の名に於て、ある種の偏見を抱くものなきにあらずと雖、經濟的自立は之と離れて存在せざるべく、自信ある「腕の人」「經濟人」としての修業は、今日の鮮人に最大の急務なりと信ず。かゝる企たるや、その謂ふところに高遠なる理想の閃なく、寧ろ其の聲や低しとするも、その實用的効果の點に於て、吾人の經驗は確に相當の成績を擧ぐるを信じて疑はざるなり。即ち吾人の提議する所のものは、毎年五千人以上の鮮人子弟を内地に移さんとするものなり。

而して十年間之を繰返すとき、五萬人の内地通は朝鮮に撒布せらるべきなり。千七百萬人中の五萬人は必ずしも多數ならずと雖、各村二十人の内地通の存在は、ひとり地方村落の空氣を一新するのみならず、所謂自由労働者の醸成せる陰鬱なる空氣と異り、其處に生々の氣の躍動する朝鮮を發見し得べきにあらずや。而も要する費用は僅に十ヶ年四百萬圓を計上するに過ぎず。

世に日鮮融和を説くや久し。而して、之を目的として多數の機關の設立を見たりと雖、未だ真にその使命を果したるものあるを聞かず。是れ吾人の立つて微力を盡さんとする所以なり。若し果して吾人の提議にして具體化せんか、そは偶、吾人の日頃望んで止まざりし所謂日鮮融和の途は、茲に自から通ずる

にあらずや。更に具體的に言へば、日鮮兩者の提携となり、結婚關係を生むに至るや必せり。桃李物語
らざれど自から徑をなすとは、此の間の消息を洩らす絶好の詩句にあらずして何ぞや。

近時經濟界は不況の極にあるが故に、失業に對する解決の途に朝野を擧げて奔命に續るゝとき、鮮人
子弟移入の果して可能なるや否や、此の點に關しては或は多少の危惧を抱く人士あるが如し。吾人も當
初この計畫をなすに際し同様の疑念を有し、親しく各方面に涉りて調査研究を遂げたる結果、こは全然
吾人の杞憂に過ぎざるのみならず、寧ろ却つて内地に於ける徒弟問題の解決に一道の光明を與ふるもの
として非常なる歡迎を受けるの狀態にあるを發見し、更に一層この事業の完成に勇氣付けられたるもの
なり。これを一言にして云はゞ、今日の失業問題中、これ等の徒弟は何等内地人の求職に障害を與へざ
るのみか、寧ろ求人多くして其の人なさに苦みつゝある現況に於て、鮮人子弟の移入によりて多大の便
宜を享受し得ることは、各公私職業紹介所、社會局及び各種家内の工業組合責任者の明言せる所なり。

吾人の計畫の實行は如上せる處の如し。是れ日鮮問題解決の急務にして、而も日鮮相互の利便を伴ふ
の策と信ず。若しそれ震災時に於ける突發事件に思ひを致さば、何物か以て彼等鮮人に報ゆるは眞實な
る日本、公正なる日本の、正に探るべき態度にして、亦その責任にあらずや。此の責任の遂行は、是等
ドン底生活に沈淪せる鮮人に職を與ふるにあり。而して之を與ふると否とは、延いて日鮮兩者一家の成
否の岐るゝ處ならずんばあらず。

朝鮮人子弟職業補導會趣意書

全編三冊
直奉三冊
大正四年

朝鮮人子弟職業補導會趣意書

私達が朝鮮と云ふ問題を提供せられるときまづ第一に想到するのは政治的にもまた社會的にも状態不穩と云ふ抽象的觀念の存在する事である。そしてこの觀念は、朝鮮をどんな風に觀てゐやうとも、共通の心理である。即ち状態不穩なるが故に鎮壓し撲滅せんとするものと、更に之よりも過つて、この觀念の背景をなす事實を探究して之が對策を講ぜんとするものとの二つの傾向があるが、そのいづれも状態不穩と云ふ觀念の存在の認識に及んでは同じである。調査が不足だから不穩の徒が駭動するのだ、調査を増しさへすればグーの音を出さしはしないと。警察政治を主張するが如きは前者の一例であり、あの萬歲騒の如きは、容易なる生活者にとつては騒がなが爲めの騒ぎとしてはあまりに高價な犠牲であつたにも拘はらず、附和雷同を餘義なくせられたのは「食へない」と云ふ事實から生れた悲惨なる心理的作用の表現であるが故に彼等に容易なる生活を待たしむることのみが不穩の状态から一轉して平和なる朝鮮を招來する根本策であるとするのが後者の例である。

そして私達も、また、後者の側に立つものである、何となれば「容易なる生活」と云ふ事は本質的に普遍性と永遠性に富めるが爲めであるのみならず、そこに、溫い情味と明るい氣分が漂ふに反して前者に於ては冷酷、峻厳、など云ふ暗い氣分を醸成するからである。

現代の朝鮮が政治的に封鎖の状態にあるのは事態をして愈紛糾せしむる禍因なるが故に之を解放を期すべきは云ふまでもないが、之と同時に彼等鮮人の生活の安定の爲めに全幅の經綸を表現するにあらざれば「人心遂に日本を

去る」の危険から免がれ難きと思はない譯には行かないのである。

私達はこゝに生活の安定と云つたが、明日の鮮人は、ともかくも、今日の鮮人は、その経済人としての地位の極めて低いことは争ひ難い事實である。試に朝鮮の内陸を旅行して見給へ、隨處にかうした場面の展開してゐるのを氣付であらふ。

先づ釜山から北上して京城を経て新義州に將た元山に亦本回から別れて本浦に致る全朝鮮のあるが儘の姿を汽車の窓から瞥見するとき先づ第一に目につくのは禿々たる山と云ふ山光れたる野や水田、田、蕪草かと見まがふ家々之等がよく彼等の貧弱なる経済力を示してあまりあるものである。

一度汽車より下りて仔細に彼等の仕事振りを見よ、鐵道沿線と云はず苟も石工の働いてゐる處を、石を積むもの、石を割るもの、所謂ハツペをかけて山から取出すものゝ大部分のものは朝鮮人にあらずして支那人であるかまた内地人である。多少でも市街を形造つてゐる町市街と云ふ市街に於て、朝に夕に、妙な風態の野菜賣りも支那人がかなりの勢力を占めてゐる、彼等鮮人はかうした幼稚な技術にすら支那人に劣つてゐるのである。

若し更に田園の間に立つて鮮人農夫の作業振りを見よ。宛として悠々とした太古の民其儘の姿ではないか、技術の幼稚さは云ふまでもないが、彼等の日に愛用してゐる農具の粗雑なるまことに一驚に値するものがあるではないか。船と云ふ船、船を行く船子、杓、櫂、之で能率の上る筈はないではないか。話は轉じて極はないが彼等の腰にぶらさけてゐる真瓜切りのナイフは即ち彼等の刺殺に持ゆる刺刀ではないか。一丁の鋸、一丁の鑿のそれ等はあらゆる場合に應用せらるゝ建築道具ではないか、木挽に、左官に、すべてがさうしたあたりに彷徨つてゐるのである。

物質を運搬する陸上の機關としては牛馬の背が最有力なものである、近時道路の竣工につれて、荷車の必要を見るやうになつたが、それとても、語るに足りない依然として、チゲ群の活躍に委してゐるのが今日の朝鮮の姿である。かうしたノンキナ朝鮮にも拘はらず、物價高と云ひ近代的な經濟戰と云ふ世界風にまで無慮に吹き廻されてゐる事が食ひかねる事實となつて現はれて不穩の病狀を更にし深酷ならしめたものと思ふてゐる。

私達はかう云ふ風に朝鮮を観てゐるが故によくかゝる不穩の狀態から脱却せんが爲めには何はさて置きまづ生活の安定を圖る事が第一義である事を信じなければなりません。

そして生活の安定を圖る事は經濟人としての彼等を作り上げる事である然らば如何にして經濟人となさんとするか、この問題の解決こそ實に世界不安の根源をなすものであつて思想的に政治經濟的に社會的にも論戰の酣なる所以であるので之に對して容易に斷案を下す事は不遜の責を免れ難いのであるがそれにも拘はらず私達は之に答へて技術教育を授ける事のみがよく之を救ふと云ふ事を敢てせんとするものである。

而して如何な技術を授けるかは

一、個人の性質によるもの

二、本人の希望によるもの

を斟酌して之に加ふるに親切と理解とを以つて彼等を輔導し以つて經濟人としての立場を朝鮮人に與へんが爲めに生れだのが私達の鮮人子弟職業輔導會である諸君於てもどうか私達の微衷を汲み以て指導後援せられん事を切望してやみません。

朝鮮人子弟職業補導會事業計劃大要

(イ) 朝鮮人子弟を毎年度五千名を内地各地に移して家内の職業を授けんとするものなり(十ヶ年間)

「五千名を選ばる理由 朝鮮全道の面積は二千五百四十四面なり一面とは内地に置ける〇〇村と云ふが如し一面として一面より二名を探らんとするは十三歳を超えざる子弟なるが故に一人旅を厭ふを以て特に二人とせり。

二 家内職業を選ばる理由 彼等の成長後朝鮮に歸來するも容易に職業に着手し得るを以てなり。

三 家内の職業の種類 理髮、洗濯、大工、左官、井掘、石工、製車、建具、印刷、造船、海苔製造、織物、玩具、指物、鍛冶、製菓、料理。

畜産製材其他農業漁業に關する一般。

四 子弟の年齢 (十三歳を超えざるものを移す理由)

内地に於ける徒弟需用者に就て聞くに眞の熟練者となるには十三歳を超えざるものを欲するもの十中の八九を占む。

(ロ) 移入子弟と需用先との關係

移入子弟に關しては本會に於て身元本保証人になりてそれ〴〵需用先に年期奉公となすものとす。

(ハ) 移入子弟の地域的散布方面

(ニ) 募集朝鮮人子弟方法

東京、名古屋、大阪(京都神戸を含む)、岡山、福岡、

一 本會に於て朝鮮各道面事務所に購讀せる新聞紙に廣告する事

二 總督府、道廳、郡廳面事務所の了解援助の下に募集並詮衡方を依頼する事

三 本會直接人を各道に派して「詮衡」を圖る事

(ホ) 移入方法と宿舍

鮮地に於て募集の都度募集地と同一方面の地に旅館を指定し其處に集合せしめ五十人以上の團體を作り本會役員の手により内地の指定地に送届くる事而して内地に於ては東京及大阪に於ける本會直營の宿舍に、其他の場所に於ては指定旅館に收容す。

(ヘ) 本會の組織と經營

本會は日鮮間の有力者の援助により之を財團法人としてその資源は寄附金及その筋の補助金によるものとす

(ト) 本會事務所と宿舍

事務所及び移入朝鮮人子弟の臨時及應急に備ふる爲本會會館の設立をなさんとす。

| | |
|----------|-------|
| 東京事務所及宿舍 | 約三百坪 |
| 大阪 | 貳百五十坪 |
| 二十萬圓 | |
| 京城及釜山 | 各五十坪 |

(チ) 本會經常費

年額 三十萬六千五百圓也

内 譯

人件費

一金九萬三千八百圓也 理事及監事若干名 職員 四十六名 依託員 四名 雜使小者 二十四名

旅費

一金拾萬圓也 五千人輸送費及職員旅費(京城東京間一人二十一圓なるが團體旅行の割引を計上して)

募集費

一金五萬圓也 五千人指定地に集合するまでの費用(一人十圓宛)

食費

一金五萬圓也 雇主引取り迄の食費(一日一圓十十分)

衣類費

一金貳萬五千圓也 雇主引取の際和服支給(一人宛五圓)

事務費

一金一萬五千圓也 本支社費、其他

醫藥費

一金五萬圓也 診療費

送還費

一金七千五百圓也 移入人員の内五分即ち貳百五十名は成業見込なきものゝ退還費

(リ) 本會はその本部を東京に置く

以上は本會經營方法の概要を述べたるものである而して私はその最後に於て内地に於ける移入子弟の需用先の状態を述べて見たいと思ふものである。

私達の前にも述べたるが如く單純に彼等を食はしめる事が私達の目的でなくして彼等が成業してその故郷に歸來の後、その習得したる技術を應用して極めて容易に職を開始しそれによつて容易なる生活を講じ得る職業をとの考へから大工業を避けて家内の職業を選定したものである、そしてそれ等の家内の職業家の家庭に年期率公的に雇傭せしめんとするものである。

以下は代表的家内職業家の鮮人子弟移入に關する私達との對話の概要である。

一、東京印刷業組合 組長杉山義雄氏(秀英舎主)曰く私の會社には毎年四五百人位のを矢張り採用してゐるのだから使つて見ませう、私はかなり古くから内地人だ朝鮮人だと云つて區別するのがいけない併合したからには矢張り日本人なのだからそれで待遇してやるべきである從がつて入用なだけは雇入れるのに何の雇託はありません唯能率の點がどうだらうと云ふ事柄を考へるが故に相當の訓練さへすれば使つてよろしい殊に彼等の日常の

生活振りからと云ふ日鮮の將來に鑑みて貴説の如く職を興へることは是非世間と共に一番研究してやらなくてはならないと考へるのである。日鮮の眞の融和は日本建國の精神からすると朝鮮への遷都こそ最良にして亦最後のものとさへ日頃から考へて居るのでかつては之に關する私見を發表せんとした事もあるがいろいろの事情からやめてはいるが依然として考へた考へは持つてゐる。

東京には約千軒ばかりの印刷業者があるがその内組合加入のものが六百戸ばかりであるが相當に需用がある事を信する近々組合の寄合があるから相談して置ませう、と。

一、東京理髮業聯合組合長 小野寺氏曰く「若しさうした朝鮮の子供が來てくれればどれだけ私達の營業の上に便宜があるか知れませんが、この營業に一番苦痛を感じて居るのは弟子の拂底と云ふ事ですと云ふのは時勢の變遷かも知れませんが、それよりか十二三歳の子供は之を賃銀取りに出してもかなりの金をとるものだから、將來の爲めによくないと知りながらも目先の苦しさからその方へ出すので弟子になりてがないのです、それに一方に衛生上の問題からしていろんな設備を必要としますので營業費は嵩んで行きます、やがてそれらは一般顧客への負擔になつて行きます、また近來は阪神方面では組合に加入してゐない支那人の同業者が廉い料金で營業してゐるので問題化せんとしてゐるが、いづれ東京方面へも進入してくるでせう。

かゝる場合、鮮人の子弟が雇傭し得られるとすると眞に理髮業者にとつては救ひの神なのです、そしてそれらは一般顧客への利益であります。弟子のゐない理髮業者は極めて經營の困難なので見様によれば之が財産とも云ふべき極端大切なものです。

今東京市内外四千戸許りの同業者が居りますが唯れもが弟子のいないのに苦んでゐますのですから是非御決行をなさいませんか、尙組合の決議でも必要としますれば何時なりとも寄合協議を致してよろしい」と。

一、西洋洗濯業者組合世話役 増田氏曰く「本業は市内約七百戸ありますそして一戸當り一人六分の不足を示して居ります。本營業は主として徒弟に負ふ處が多いのです、それは力業を要するよりも繊細なる作業が多いからです、石工組合幹事 水野氏曰く「市内組合加入者は四百五十あります何が何れも徒弟の拂底に苦しんで居ります、もし此計劃が行なはれますれば當組合員の欣びは申すまでもありますまいその事は組合長に相談せずとも明言が出来ます、青山の石勝さんが十五六歳より徴兵検査まで勤続すれば金壹千圓を提供すると云ふ徒弟募集の貼付を出したがそれでも應募者がなかつたとのことですがどこも徒弟になりてがないので困つて居ります尤も本業は他の仕事と異つて根氣が要るのですがしかし成業の後はその収入は相當にあるのですから一番御心配下さいませんか、製菓業組合 村井氏曰く「本業は三年もやりますれば容易に一人前になれるのですから朝鮮などには打付の仕事ではないでせうか、弟子のいないのに變りはありません、組合は二百四五十軒あります。」

大正十三年十月 日

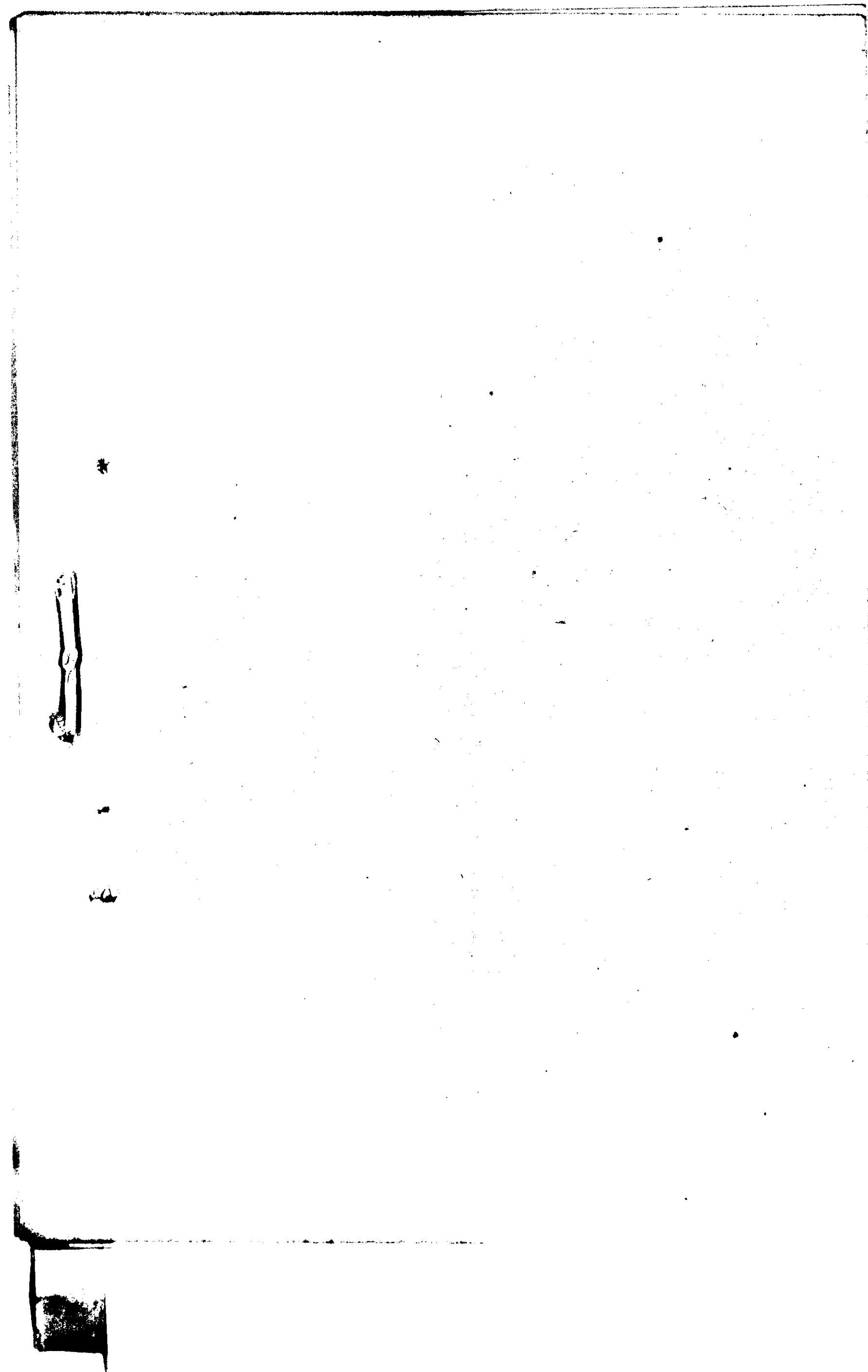
東京市牛込區馬場下町三五番地

朝鮮人子弟職業補導會

廣東省銀行

入五十三卷十日

[illegible][illegible]



上谷區原所二
段谷芳郎先生



上谷區原所二

段谷芳郎先生

牛工
三
直原
二

...

...

...

有女議會

深谷陳公社

富田中不願

親見陽廷長

時同新果殊

何有深宅

山寺碑と宋東

在寺殊に熱

玉燈子何

小生

本心録を以て

往くは

...

後予作以來
萬事未嘗不事

在朝在野の

識者外は件々

秘のく有る言を

深長を力親に

主五人を微力者

。高か及御方正に

く立るは難と

士主と誅、道性

ありき

此の代に

紀世らき

此の代のさねは
観せらるゝ家、これ

興杰一着東家

に金運、始末に

冥するも、いそと家

主し、平あ一徳

四歌、一水根ふた

見、愛ふもの、かみ

東上に、貴山、性、年

秋、先、生、

長、人、の、家、を、大、心、

見、東、上、に、有、力、な、味

方、に、なる、書、と、徳、

の、大、心、を、大、心、

方々なる盛と成さ

日と大に成る如く欣

ひと成る如く

小生

微力にして又其識

を多き事候ふべし

未だ既に社内に

成りし事なる其係

に多き事候ふべし

之と其体化するの義

を多し事候ふべし

可なりと成る如く

道なりと成る如く

神なりと成る如く

お初め目、あうね

詩云子思子

初見冒之安了也

仁德不可不有也

仁德不可不有也

少學之始

耳

直原山

山谷芳郎先生

序

小石川区原町一三六
阪谷芳郎閣下

謹啓
本年三月五日

國民協會長 尹 甲 炳

朝鮮京城

肅啓

益々御清榮之段爲邦家大賀此事
に奉存候陳者我が國民協會創立
以來既に七年最も眞摯且穩健な
る主張の下に朝鮮に國政參與の
權を附與すべきことを力説し來
りしことは朝野の等しく認めら
るゝ所と存候その梗概は本書添
付の別冊に掲記致し置き候間御
高覽を賜り度候茲に第四回建白
書を政府に提出するに當り特に
御詮議を以て政府を御鞭撻被成
下朝鮮二千萬民衆の願望を速に
達成されんことに御援助賜はら
んことを伏て奉懇願候 敬具

大正十四年二月 日

國民協會長 尹 甲 炳

殿

衆議院議員選舉法ヲ朝鮮ニ施行セ

ラレムコトヲ望ムノ件建白書(寫)

附國民協會ノ沿革ト現狀

建白書(第四回)

建白書

建白書

政府ハ速ニ衆議院議員選舉法ヲ朝鮮ニ施行セラレムコトヲ望ム

右建白ス

理由

表ニ熾然タル文化輝キ裏ニ鬱鬱タル不平ノ醜態ヲ見ル之レ朝鮮現下ノ狀態ナリ世泰平ナレト民安カ
ラス文明ノ惠澤滋シト雖思想徒ニ混沌ス今ニシテ救済ノ方策ヲ樹ツルニ非レハ蕭牆ノ禍無キヲ保シ難
シ之レ憂國ノ士ノ等ク長嘆措カサル所ナリトス。

曩ルニ日韓合併ノ事行ハレテ既ニ十有五年皇風全道ニ洽ク山河爲ニ拓ケ民生爲ニ裕フ眞ニ之レ聖代
ノ恩澤ナリ文明日ト共ニ進ミ民智月ト共ニ啓ク此ノ事實ノ前ニ立ツモノ誰カ亦往時ニ比シテ隔世ノ感
無キを得タラム然リト雖之レ單ニ文明ソノモノニ對スル一偏ノ稱讃ニ止マリ今尙ホ二千萬民衆ノ不平
高調シ思想徒ニ混沌タル所以ノモノ抑モ何ニ依リテ然ルカ之レ爲政者ノ最モ深慮ヲ要スル所ニシテ之
レカ原因ヲ探究シ其ノ弊端ヲ芟除スルハ現下ノ朝鮮ニ於ケル最急要事タルヲ失ハサルナリ。

惟願今日朝鮮ハ斷然テ昨刻ノ朝鮮ニ非ス今日ノ朝鮮又永久ニ今日ノ朝鮮ニ非サル也疑々乎トシ
テ其ト其ト進ミ須臾モ其ト底止スル所ヲ知ラス而モ尙ホ之ニ處スルノ方策依然トシテ舊套ヲ脱セテ
其カ斷然テ策ノ得タル所ニ非サルヲ論ナシ宜ク民心ノ趨ク所ヲ察シ之ニ適應スヘキ施實ヲ知ヘテ
半島百年ノ治平ヲ固メセシムヘキ也。

抑モ日韓合併ノ事ヲヤ兩民族共通ノ幸福ヲ爲セ行ハレタル十五年間ノ事實ニシテ今日莫ク根柢ヲ
云應スヘキ要ナシト雖モ尙ホ十年ヲシテ彼ノ騷擾ヲ勃發セシメ醜ヲ天下ニ暴露シタルニ非スヤ斯ク
テモ尙ホ兩民族共通ノ幸福ヲ爲セ行ハレタル合併ナリト謂ヒ得ヘキ乎更ニ謂フ新政府カレテ既ニ五年
一視同仁ノ大詔ヲ拜シ等シク 陛下ノ臣民トシテ秋毫ノ差異アルコトナキヲ聲明セラレタリト雖モ
權利ノ伸長ヲ許サレシ朝鮮民衆ノ前途轉タ暗澹タルノ威禁シ難キモノアリ之レ即チ現下ノ思想動搖シ
テ底止スル所ヲ知ラサル禍源タリ而テ二千萬民衆ノ異口同音ニ絶叫シ要求シテ已マサルモノハ實ニ完
全ナル國民トシテノ必須條件タル國政參與ノ權ニ外ナラス等シク 陛下ノ赤子トシテ生ラ日本帝國ニ
享ケナカラ獨リ朝鮮ノ民衆ノミ國政ニ參與スルコトヲ許サレサルハ尙ホ亡國ノ遺民トシテ顧ミラレサ
ルハ假ルヤ然ラストモ往々ニ疑ヲ猜疑ニ走リ徒ニ憤慨シ易キ朝鮮ノ民衆ナリ此ノ屈辱ヲ久シウセシム
ルハ國策ノ上ニ斷シテ探ラサル所ナリ其ノ參政權要求ノ聲タルヤ此ノ屈辱ヨリ解放サレ眞ニ帝國臣民
タルノ名實ヲ具備セントスルニ二千萬民衆ノ肺腑ヨリ迸ル熱誠ノ叫ビナリ寧ロ悲壯ノ觀アリト謂ヒツヘ

尙現代ノ國家組織ハ國民の國家ニシテ民族の國家ニ非サルコトハ朝鮮民衆ノ既ニ熟知スル所ナリ尙
國民念ノ高潮ニ伴ヒ自國國家ヲ構成分子タルノ自覺漸ク濃厚ナラントスルノ秋不合連ナル差別待遇
ヲ變テ其ノ朝鮮民衆ノ斷シテ忍テ能ハタル所一視同仁ハ既ニ 陛下ノ大詔ニ明カナリ區々タル民度ヲ
差テ以テ論スヘキニ非ニ朝鮮民衆ノ熱望スル所亦 陛下ノ大御心ニ應ヘ奉ラムガ爲メニ外ナラザル也
下名等眞ニ朝鮮ノ情勢ヲ憂ヒ之ヲ救済スルノ道ハ朝鮮ニ國政參與ノ權ヲ及ホスノ外無キヲ察シ大正
九年帝國議會ニ衆議院議員選舉法ヲ朝鮮ニ施行セラレムコトヲ望ムノ件ヲ請願シ二度之ヲ重テ衆議
院ヲ糾弾セタル所トナレリ爾來益々發奮ノ力實施促進ニ力ヲ致スコト年有リ二度政府ニ建白ヲ今日
又第四回ノ建白書ヲ閣下ニ提出スルノ光榮ヲ得タリ。

尙熱望ニ應ミルニ朝鮮統治ノ事タルハ艱難ニ至難ノ業ニシテ一朝ニシテ克ク其ノ理想ニ到達シ得ヘシトハ
固ヨリ思サヘキニ非サレトモ幸ニシテ當局人アリ古聖民ヲ治ムルノ法今代人ヲ化スルノ術ヲ參酌シ其
ハ宜シキニ從ヘバ亦敢テ難シト云フ可カラス即チ之ヲ朝鮮現下ノ民情ニ照シ其ノ最モ欲求シテ已マサ
ル處ニ至ルヘ以テ朝鮮ニ二千萬民衆ノ前途ニ一道ノ光明ヲ投シ其ノ趨向スル所ヲ示サハ忽ニシテ民心漸
平ニ歸セシコト火ヲ暗ルヨリモ燎カ也。

然ルニ朝鮮ノ文化未タ進マズ參政權附與ノ時期尙早シト論セラル、如キハ下名等ノ容易ニ首肯シ能

ハ其ノ所ナシトス而テ其ノ參政ノ方法ニ至リテハ自治領ト見做スカ又ハ内地ノ延長ト見做スカヤヨリテ自ラ策ノ岐ルヘキハ論ヲ俟タサル所ナルカ既ニ合併ノ理想タル兩國一家ノ實ヲ舉クルニアリテハ内地延長主義ニ則ルコトノ最モ合法的ナリトスルニ異論無ク合併以來十有五年實ニ此ノ主義ノ下ニ一貫シ來レルハ内外ノ等シク認ムル所ナリ從テ參政ノ方法亦帝國議會ニ議員ヲ選出スルコトノ最モ合理的ナルハ今更報說ノ要無カルヘシ殊ニ第四十四帝國議會ニ於テ衆議院ハ滿場一致ヲ以テ下名等ノ願意ヲ採擇セラレタリ茲ニ於テ衆議院議員選舉法ヲ朝鮮ニ施行サルヘキハ唯時期ノ問題トシテノ其難ヲレタルモノナリシガ爾來既ニ四ヶ年ヲ經朝鮮ノ文物大ニ革マリ民度亦著シク向上シテ復タ昔日ノ比ニ非ス殊ニ參政權要求ノ叫ビ全半島ニ横溢スルモ其ノ未タ達セラレサルヲ見テハ漸ク失望ノ色アリ遂ニ今日ノ如キ民心ノ動搖ヲ來シ將來更ニ益々紛糾ノ免レ難キモノアルヲ憂ヘシム閣下ノ明斷速ニ茲ニ及モ朝鮮ニ衆議院議員選舉法ヲ施行シテ混亂セル民心ノ安定ニ資セラレムコト切望ニ堪ヘサル也

今ヤ内地ニ於テハ普通選舉ノ權既ニ熟シ閣下ノ英明克ク之カ解決ヲ與ヘラレムトス此ノ機會ニ於テ朝鮮民衆ノ願望ヲ達成セシメラル、コトハ最モ公明ノ施措タルヲ疑ハス下名等亦既ニ其ノ秋ナルヲ信スルモノナリ然リト雖事ハ全ク閣下ノ裁斷ニ俟ツノ他ナシ若シ不幸ニシテ直ニ其ノ實現ヲ斷ル尙ホ故障アリトセラル、ナラハ宜シク茲ニ豫定ノ時期ヲ宜明セラルヘシ下名等亦其ノ公約ヲ得テ足リトセム而テ將來完全ナル權利ノ行使ニ對スル訓練ヲ積マシムルノ要アリト認メラル、ニ於テハ其ノ

實施ノ期ニ至ルマテ暫定的制度トシテ朝鮮ニ特殊ノ議會ヲ設ケ以テ其ノ訓練ニ資スルモ一策ナルヘク或ハ有聲議員ノ互選又ハ勅選ノ制ヲ適用シテ先ツ貴族院ニ朝鮮人ヲ參與セシムルモヨシ特別選舉區域ヲ定メテ文化程度ノ昂上セル都市ニ衆議院議員選舉法ヲ施行スルモ亦妨ケス要スルニ參政權附與ノ標的ヲ掲ケテ迷路ニ立テル朝鮮ノ民衆ニ其ノ嚮背ヲ定メシムレハ以テ德トセムノミ。

併シナカラ之レ何レモ内地延長主義ニ依ル暫定的準備制度タルニ於テノミ施行サルヘキモノニシテ固ヨリ根本ノ解決策ニ非ルヤ論スルマテモ無シ幸ニ閣下臺閣ノ首班ニ列セラレ克ク朝鮮ノ現狀ヲ知悉セラル下名等偏ニ閣下寬仁ノ高德ニ信倚シ速ニ願意ノ達成セラレムコトヲ期ス素ヨリ一身一家ノ爲ニ言フモノニ非ラス事ハ二千萬民衆ノ上ニアリ帝國ノ健全ナル發展ニ資セムトスルノ至意ニ出ツ莫クハ閣下之ヲ諒セラレ朝鮮民衆ノ上ニ明鑑ヲ垂レサセラレムコトヲ。

大正十四年二月 日

國民協會長 尹 甲 炳
從四位勳三等

外會員一同

內閣總理大臣 子爵 加藤 高明 閣下

國民協會ノ沿革ニ就テ

國民協會ノ沿革ト現勢

一、獨立運動ト本會ノ創立

日韓合併ハ大勢ノ然ラシメタ所デアツテ朝鮮人ガ如何程痛感ギ異人種ガ如何程偏動シテモ大局ハ牢乎トシテ搖ガスベキモノデハ無カツタノデアル然ルニ合併後其ノ統治方針ガ朝鮮ノ民心ニ適合シナカツタ結果十年ナラズシテ彼ノ獨立運動ヲ勃發セシメ無智ノ民衆ヲシテ朝鮮獨立ノ可能性有ルガ如キ觀念ヲ抱懷セシメルニ至ツタコトハ洵ニ國家ノ不幸ニシテ且ツ内鮮融和ノ上ニ一大暗影ヲ投ジタルモノト云ハネバナラヌ。

當時朝鮮ノ戰者中ニハ此ノ事象ニ對シテ深く憂慮スルト共ニ善後策ヲ講ジテ時局ノ匡救ニ努力シタルモ勢ク無カツタノデアアルガ故開元植氏ノ如キハ其ノ中ノ最も出色シタ一人デアツタノデアアル開氏ハ獨立運動ノ嚆矢モ職ヲ高陽郡守ニ奉ジテ居タガ混亂セル時局ニ直面シテ之ヲ座視スルニ忍ビズ慨然起ツテ各階級ノ人達ト會見シ大ニ意見ヲ交換シテ結果民間ノ智識階級ト總督府當局トノ間ニ意志ノ疏通ヲ圖ル事ガ當面ノ最大急務タルコトヲ認メ策ヲ奮勵ニ獻ジルト同時ニ二回ニ亘リ運動ニ對スル私見ヲ新聞紙上ニ發表シ朝鮮民衆ノ輕舉妄動ヲ諷メ飽迄帝國臣民タル自覺ノ下ニ合理的ナ權利ノ伸張ヲ圖ラネバナラヌコトヲ力説シ民衆ノ覺醒ヲ促シタノデアアル殊ニ合併後ニ於テ一連會ノ如キ親日團體マデモ解散セシメテ一切朝鮮人ノ政治ヲ誣ルコトヲ禁ジ又ハ言論ヲ極度ニ抑壓シテ結果トシテ親日思想ヲ懷イテ居ルモノモ其ノ勢力ヲ伸張スル事ヲ得セシメナカツタノデアアルガ之レヲ單ニ排日ノ色彩アル團體ノミノ解散ニ止メ一連會ノ如キ親日派ノ團體ハ存置セシメテ民間ノ有力ナ機關タラシメルトカ或ハ排日鼓吹ノ新聞雜誌ヲ撲滅スルト同時ニ

日宣傳、新聞雜誌の編輯、シメタナラハ合併後、十年間ニ親日思想ハ激増トシテ、勃興シ精神の、朝鮮和ノ實業事
が得ルコトモ困難ヲ無キヲシテ、アラウガ親日團體迄モ排日團體ト一律ニ解散サセテ、ハ統治策ヲ謀リ、ハ因トモ
見ラレタナラ、アル元植民其他人國志ハ漸ク過去ノ此ノ缺陷ニ鑑ミ、新ニ一ノ團體ヲ組織シ、之ヲ據テ民心を導導時局
區款ノ成果、ハシメ、トテ、期シ新日本主義ヲ大旗ト掲ゲテ、協成俱樂部ノ設立時事新聞發行ノ許可ヲ出願シ、ハシメ、ハ
三

二、官制改革ト本會ノ對策

然ルニ、隨後極端ニ動搖シタル民心ハ容易ニ安定セズ、所謂智識階級ノ人達モ昂奮シタル群衆心理ニ恐怖ヲ來シ、夫一
身ノ苟安ヲ圖ルニ汲々タル有様デアツタガ偶々總督以下更迭ノ報傳ハルト同時ニ觀望性ニ富ム朝鮮ノ民衆ハ早クモ中
立シテ推移ヲ觀望スルヲ以テ得策ト看取シ、閔氏ガ協成俱樂部ヲ設立シタ際ノ如キ出席者僅カニ十二名ニ過クナク、ハ
ナ狀態デアツタノデアル當時一部朝鮮ノ政客等ハ總督府幹部ノ更迭ヲ見越シテ、物ニ東京ニ行キ要路ノ大官ヲ壓訪シテ
朝鮮ニ自治ヲ施行スルコトガ朝鮮民衆ノ最モ希望シテ居ルモノノ如ク吹聴シタモノモアツタガ大部分ノ意見トシテハ
朝鮮ヲ自治領植民地タラシメルコトヲ好マズ、真ニ朝鮮民族ノ幸福ヲ増進シ文化ヲ向上セシメルニハ内地延長主義ニ則
ル同化政策ヲ布クコトヲ以テ最良ノ策ト論セラレテ居タノデ、閔氏其他ハ多數ノ同志ヲ糾合シ、東上シテ反自治運動ノ興
論ヲ喚起スベク計畫ヲ將ニ編纂セシメ、トシテ、居タ時突然總督府官制ノ改革及濟慶總督並ニ水野政務總監親任ガ發表サレ
タ爲メニ東上ノ計畫ハ一先中止シタノデアツタ。
而シテ總督以下ノ著任ニ先ツ濟慶總督ノ轉任方針ガ文化喚起ニヨルコトヲ傳ヘ、聞イタ一部ノ朝鮮人ハ之レ日本政

府が民族自決主義ノ機關ニ轉易シタモノト觀ジ、甚シキニ至ツテハ獨立運動ノ爲メニ日本政府ノ統治方針ガ變更サレ、武
斷政治ニ代ルニ文化政治ヲ以テスルヤウニナツタノデアルカラ尙進ンデ激烈ナ獨立運動ヲ繼續スレバ、建ニ朝鮮ノ獨立
ガ實現サレルダラウト云ウヤウナ妄言ヲ盡クモノガ續出シタ又他ノ一部ノ間ニハ今後總督府ガ朝鮮人ニ對シテ高壓手
段ニ出ナク、ゴトヲ豫想シテ、此際群衆心理ニ背馳スルヤウナ態度ヲ取ルコトハ自ラ不利益ヲ招クモノト解悟スルモノモ
アツタ爲メニ平素親日思想ヲ懷イテ居タモノモ殊更ニ中立ノ態度ヲ取ルヤウニナリ、最初閔元植氏ト一致行動ヲ探ルベ
ク約束シテ居タ天道教大正親睦會等ノ一派並ニ法曹界青年團ノ人士等マデ、前言ヲ食ンデ約束ヲ破棄スルニ至ツタノデ
アル此間ニ於テ閔元植氏並ニ其ノ同志等ハ濟慶總督ガ文化政治ヲ以テ朝鮮ニ臨ムノハ偶々騷擾鎮壓ノ一轉機ニ於テ時
勢ニ應慮スル應慮ヲ行ヒ、謙意ヲ以テ朝鮮人ノ文化ヲ向上セシメ、内鮮一家ノ實ヲ舉ゲシムベク百年ノ大計ヲ樹テタモノ
ト信ジ、此ノ文化政治ノ下ニ朝鮮人ノ權利ヲ伸張シ自由ヲ獲得シテ實生活ノ安定ヲ圖ラネバ、ナラヌト認メタノデアツタ
然ルニ大正八年九月一日濟慶總督並ニ水野政務總監ガ南大門驛頭ニ最初ノ一步ヲ印シタ利那不幸ニシテ爆彈事件ヲ
惹起シテ民心ヲ更ニ恟々タラシメ、亞イデ呂運亨事件及大同團事件等ガ續發シテ民心ハ益々惡化ノ傾向ヲ生ジ、朝鮮民族
ノ前途ハ實ニ暗澹タルモノアルニ至ツタノデアルガ、閔元植氏ハコノ滔々タル奔流ニ棹サシ、毅然トシテ動スルコトナク
一意朝鮮民族覺醒ノ警鐘ヲ亂打スベク、大正八年十月同志ハ謀ツテ新日本主義ノ宣言書ヲ發シ、之ヲ中外ニ頒布シ、次デ濟
慶總督以下總督府ノ新幹部ト會見シ、真意ヲ披瀝シテ諒解ヲ求メルト共ニ同年十一月東京大阪等内地ノ要地ニ赴キ、朝野
ノ名士ニ向ツテ新日本主義ノ宣傳ヲ努メ、海唇五旬ニシテ京城ニ歸ツタ後從來ノ協成俱樂部ヲ改メテ國民協會トナシ、其
ノ規模ヲ擴張シテ政治的訓練ノ團體トシテ主義綱領ヲ定メ、之ヲ天下ニ宣明シテ主義ノ貫徹ヲ期スルコトヲナツタノデ

三、參政權ノ請願及建白

斯クテ國民協會ヲ設立シタル閣元植氏ハ時局收拾ノ方策ハ朝鮮人ニ日本帝國臣民タルノ自覺ヲ爲サシメルコトニア
ルトノ斷案ヲ下シ此ノ自覺ヲ喚起セシメルニハ朝鮮人ヲ國政ニ參與セシメルコトガ其ノ根幹デアルト信ジ大正九年一
月同志百六名ノ連署ヲ以テ第四十二帝國議會ニ左ノ如キ第一回ノ參政權要求請願書ヲ提出シタノデアル。

第一回請願書

主 旨

衆議院議員選舉法ヲ朝鮮ニ施行セラレント望ム

理 由

朝鮮現下ノ民情ハ憂慮ニ堪ヘサルモノアリ若シ此ノ狀態ヲ以テ進マバ獨リ邦家ノ爲ニ不利ナルノミナラス實ニ朝
鮮人ノ爲メニ不幸ノ極ト謂フベシ下名等ハ竊ニ日本帝國ノ前途ト朝鮮民族ノ將來トヲ思ヒ一日モ平安ナル能ハズ仍
テ自ラ操ラス微力ヲ同胞ノ爲ニ致シ併セテ邦家ノ爲ニ貢獻スル所アラントシ日夜同志ト共ニ民心救済ノ方策ニ苦心
シ慎重審議ノ結果茲ニ諸願ヲ爲スコトニ決意セリ

惟フニ日韓兩國ノ併合ハ實ニ已ムヲ得ザルモ出デタルモノニシテ今日ヨリ之ヲ觀ルモ朝鮮民族自存ノ方途ト多ク
他ニ途ナキコト一般朝鮮人ノ諒解シ得ル所ナリ然レドモ併合ノ結果ハ朝鮮人トシテ其ノ期待ニ反シタル點甚シト爲

ズ他ナシ日本國民タルノ自覺ヲ得ル能ハザルコト是ナリ即チ朝鮮人ハ日本ノ民族ニ入リシト雖國民トシテ内地人ト
同一ノ地位ニ立テリトノ信念ヲ有スル能ハズ諸ヲ換ヘテ言ヘバ併合ニ依リ日鮮一家トナレルニ拘ラズ朝鮮人ハ家族
ノ一員タル自覺ヲ喚起スル能ハズ恰モ他家ニ寄食セル如キ感ナシトセズ而シテ其結果ハ延イテ國家觀念ヲ缺乏シ日
本ハ獨リ日本民族ノ日本ニシテ朝鮮ハ日本民族ノ朝鮮タリ朝鮮民族ハ唯亡國ノ遺民トシテ日本ノ統治ヲ受クルモノ
ノ如ク思惟スルニ至レリ下名等ハ朝鮮ノ民心安定ヲ缺キ百般ノ施設ニ對シ故ラニ猶豫ノ眼ヲ以テ之ヲ觀ルノ傾キア
ルノハ畢竟此一事ニ懸念セルモノナルコトヲ信ゼリ隨テ民心救済ノ根本方策ハ朝鮮人ヲシテ等シク日本國民タルノ
自覺ヲ喚起セシムルニ在ルコトヲ痛切ニ感ゼリ

朝鮮統治ノ大本ハ朝鮮人ノ同化ニ在リ總督府亦一視同仁ノ聖旨ヲ體シ内鮮人差別撤廢ノ實現ニ努メ朝鮮人官吏ノ
待遇ヲ改メ其ノ任用ノ範圍ヲ廣クシ言論ノ自由ヲ認メ諮問機關ヲ設ケテ民意暢達ノ途ヲ開キ漸ク漸ク地方自治制
度ヲ施シテドスルノ意アリ又政治ニ關スル集會結社ニ付テモ近ク之レガ禁ヲ解クノ方針ナルガ如シ下名等ハ當局者
心ノ存スル所ヲ諒トシ衷心感謝ノ意ヲ表スルモノナリ然レドモ退イテ惟フニ是レ皆朝鮮人ニ對スル德政ニ外ナラズ
朝鮮人ハ唯經濟ノ星澤ニ浴スト爾フベキノミ日本帝國ノ政治ニ關シテハ朝鮮人在任ノ人民ハ全ク之ニ與ラズ乃チ内地
ニ在リテハ各地方ノ住民皆議員ヲ選出シ國政ニ參與シ得ルニ拘ラズ朝鮮ニ於テハ然ラズ換言セバ朝鮮ノ住民ハ唯經
治ヲ受テ將來自治ヲ爲ス希望アルノミニシテ自ラ國政ニ參與スルコトヲ得ザルナリ下名等ハ日本憲法ノ下ニ於テ參
政權ガ國民ノ最も重要ナル權利ナルコト及朝鮮ニ關スル利害ノ問題ト雖一ニ内地選出ノ議員ニ依リ決セララルコト
ヲ思ヒ朝鮮人ガ國民トシテノ自覺ヲ得ル能ハザル一大障礙ノ此點ニ存スルコトニ想到シ參政權ノ附與ヲ以テ朝鮮人

ノ國民タルノ自覺ヲ喚起スル嚆山ノ方法ナルコトヲ察知スルト同時ニ民心ヲ救済スル根本ノ對策亦之ヲ措イテ他ニ
事ハモテザルコトヲ確信スルニ至レリ

朝鮮人ニ參政權ヲ與フルニ付テハ或ハ時機尙早シトノ論アルベシ而シテ其理由ハ主トシテ朝鮮人ノ生活ノ程度及
智識ノ程度ヲ根據トスルモノナルベク教育ノ普及並ニ程度國貨自給ノ能力兵役義務ノ有無等ニ關聯シタル條件ナル
コトヲ想像スルニ難カラズ下名等は等ノ點ニ對シ唯兵役義務ノ負擔ハ朝鮮人ノ苦痛トセザル所ナルノミナラズ朝
鮮人ニ徵兵令ヲ適用セザルハ寧ろ國民トシテノ本分ヲ盡サシメザルモノナリトノ反感ヲ起サシムルノ餘地ヲ存スル
コト及朝鮮人ヲ兵員ニ加フルコトノ必ズシモ危懼ヲ要セザルコトヲ一言スルニ止メ今多クヲ述ベザルベシト雖
モ然レテ朝鮮ヨリ若干ノ議員ヲ選出スルニ付朝鮮人中議員ニ過タル者無シトハ信セズ又之ガ選舉ヲ爲ス人民ニ在リテ
モ選舉ノ何物タルコトヲ理解セザルガ如キ者殆ド稀ナルベク況ヤ今後言論集會結社等ノ解禁ニ伴ヒ政治思想ノ開發
總體ハ必漸行ハルベキヲ以テ選舉ノ事深ク意ニ介スルヲ要セズト信ゼリ殊ニ此問題タル朝鮮人ニノミ限定セララル
ニ非ズ我國人及選舉人中ニハ多數ノ内地人ヲ包含スルコトヲ慮ハザルベカラズ又一面ニハ地方自治制度ヲ實施シ
テ人民ノ政治的訓練ヲ積マシムルヲ必要ナリトスル論アルベク内地ニ於ケル北海道青森縣ノ如キニ非ズト雖下名等
ハ自治制度ノ經驗ヲ以テ參政權附與ノ適當ノ要件ナリトハ辯セズ内地ノ先例ノ嫌キハ今日ノ時勢ヨリ專ラ寧ろ
爲スニ適セズト思惟セリ且雖テ世界ノ大勢ヲ觀ルニ曠古ノ大戦ヲ經タル一般ノ思潮ハ近來著シク變轉シ人民ノ政
治的覺醒ハ益々其度ヲ加ヘントスルノ徵アリ内地ニ在リテモ亦普通選舉ノ聲既ニ響キガ如シ此秋ニ方リ獨リ朝
鮮人ハ國民當然ノ權利タル參政權ヲ有セズ國家ノ機關トシテ國政ヲ論議スルノ途全ク杜絶セラレタルノ嘆息シトセ

ズ朝鮮人ヲシテ國民タルノ自覺ヲ起サシムルノ策蓋シ參政權ヲ附與スルヨリ急ナルハ無カルベシ故ニ下名等ハ參政
權ノ附與ヲ以テ朝鮮人同化ノ根本策ト爲スト同時ニ刻下ノ民心ヲ救済スル喫緊ノ對策トシテ朝鮮ニ衆議院議員選舉
法ヲ施行セラレンコトヲ切望シテ已マザルナリ敢テ區々ノ私情ニ依リ此請願ヲ爲スモノニ非ズ之ニ依リテ朝鮮民族
ノ前途ニ光明ヲ與ヘ之ヲ陶治シテ堅實ナル日本國民ト化シ以テ國運ノ隆昌ニ資シ併セテ日本國民タル幸福ヲ享樂セ
シメントスルニ外ナラズ

右及請願候也

大正九年二月 日

國民協會々長 関 元 植

外百五名連署

而シテ其ノ結果ハ衆議院分科會ニ於テ政府ニ參考送附ト決定シタルノミニテ本會議上程ニ先テ衆議院ガ解散サレタ
爲メニ遽ニ採擇ノ運びニ至ラナカッタノデアルガ越エテ大正九年六月臨時議會開カル、ヤ更ニ同志六百十四名ノ連署
ヲ得関元植氏自ラ之ヲ携帶シテ東京シテ第四十三帝國議會ニ左ノ如キ第二回請願書ヲ提出シタルデアルガ案ヨリ臨時議
會ノ事トテ會期短カ、リシ爲メ採擇サレル迄モナク閉會トナツタノデアル。

第二回請願書

主 旨

衆議院議員選舉法ヲ朝鮮ニ施行セラレンコトヲ望ム

下名等ハ朝鮮ノ現狀ニ對シ最善措ク能ハズ義ニ第四十二議會ノ開會ニ際シ所思ヲ披瀝シテ請願スル所アリシガ過
々解散ニ達ヒテ目的ヲ達スルコトヲ得ズ今專ニ此ノ請願ヲ爲スノ己ムナキニ至レリ
併合以來政府ハ銳意朝鮮ノ開發ニ努力シ其ノ効果顯著ナルモノアリ而シテ朝鮮人亦奮發ノ誠意ト新政ノ惠澤トヲ
感ゼザルニ非ズ然ルニ昨春騒擾一タビ起リテ後ハ民心ノ安定ヲ缺キ朝鮮ノ前途頗ル憂慮スベキモノアルニ至リ今
於テ根本的解決ノ策ヲ執ルニ非ザレバ或ハ惡ル朝鮮ヲシテ永ク難治ノ地方タラシメンコトヲ下名等ハ微力ヲ顯ミ
圖志トス民心ヲ救済シテ內鮮一家ノ基礎ヲ確立セシメ日夜之ガ對策ニ苦心セリ
惟フニ日韓兩國ノ合一ハ己ムヲ得ザルノ歸結ニシテ一般朝鮮人ノ夙ニ了解セル所ナリ而モ內心日本ノ脅下ニ在ル
ヲ快シトセズ動モスレバ反國家的言動ヲ敢テスル者アリ殊ニ年歲事變ノ之ニ雷同スル者アルニ至リテハ實ニ昭代ノ
不祥事ト謂フベシ是レ畢竟日本國民タル自覺ヲ得ル能ハザルニ由ルモノニシテ即チ以爲ラク日本ハ朝鮮ヲ滅セリ朝
鮮人ハ唯亡國ノ遺民トシテ其統治ヲ受クルノミト此ノ感想ハ久シク朝鮮人ノ腦底ニ潛メル暗流ニシテ朝鮮統治ノ障
碍ハ常ニ這リ一動一静ニ存セリ故ニ之ガ根治ヲ施スニ非ザレバ如何ナル善政ト雖恐ラク其ノ効果乏シカルベシ下名等ハ
之ヲ人ニ責メ又自ラ奮ミ朝鮮統治ノ根本方策ノ一ニ朝鮮人ヲシテ日本國民タル自覺ヲ喚起セシムルニ在ルコトヲ痛
感シ親下ノ民心ヲ救済スル策ハ之ヲ措キテ他ニ求ムベカラザルコトヲ信ジテ疑ハズ
退リテ思フニ國民タルノ自覺ハ國民タルノ權利ヲ認メラルニ因リテ始メ生ズベシ然ルニ朝鮮人ハ國民意識ヲ
權利タル參政權ヲ有セズ即チ帝國議會アリ内地居住ノ人民ハ選舉權ヲ定ムル所ニ依リ議員ヲ選出シテ國政ニ參與ス

ルコトヲ得ルニ拘ラズ朝鮮ニ在リテハ選舉權ノ施行ナク議員ヲ選出スルコトヲ得ズ朝鮮ニ關スル事項ト雖總テ内地
選出ノ議員ニ依リテ決セラル語ヲ換ヘテ言ヘバ日本帝國ノ政治ハ内地人ノ政治ニシテ朝鮮人ハ全ク之ニ參與セザル
ナリ下名等ハ朝鮮人ノ國民タル自覺ヲ得ル能ハザル原因ヲ求メテ此ノ點ニ想到シ參政權附與ノ最モ急務ナルト同時
ニ一日モ忽諾ニ付スベカラザル問題ナルコトヲ感ゼリ

人或ハ朝鮮人ニ參政權ヲ附與スルノ時期尙早キヲ説ク者アリ然レドモ參政權ハ國民ノ當然享有スベキ權利ニシ
テ之ガ要件ハ國法ノ定ムル所ナキ既ニ朝鮮ガ日本ノ領土タリ朝鮮人ガ日本帝國ノ臣民タル以上之ヲ除外スベキ理由
存セズ要ハ其ノ實行ノ能否ト利弊ノ如何トニ在ルノミニシテ下名等ハ朝鮮人中若干ノ議員タルニ適スル者ナシトハ
信ズルコトヲ得ズ又之ガ選舉ヲ行フコト必ズシモ困難ナリトハ思惟セズ況ヤ戰後ノ世界ハ人類ノ政治的覺醒ヲ促シ
一般ノ愚癡ハ著シク進展セリ參政權ノ要望ハ僑民權ヲ伸張トシ言フベカラズ民衆ノ意思ヲ國政上ニ反映セシム
ルハ寧ロ人民ヲシテ政治的責任ヲ自覺セシメ國家觀念ヲ鞏固ナラシムル所以ノ途ナルベシ當路ニ於テ既ニ朝鮮人
於ル地方自治制度ノ必要ヲ認メ之ガ準備トシテ地方諮問機關ヲ設置セリ下名等ハ此ノ時機ニ於テ政府ノ方針ヲ決定
シ朝鮮ニ選舉法ヲ施行スベキコトヲ明カシ朝鮮ニ千萬民衆ヲシテ疑惑ヲ去リ國政ニ參與シ得ル確信ヲ下ニ日本國民
タル自覺ヲ喚起セシメ盡忠報國以テ臣民タル本分ヲ完ウセシメラレシコトヲ切望シテ已マザルナリ

右及請願候處

大正九年七月

日

國民協會會長 関

元 植

此ノ間ニ於テ閣元樞氏ノ誠意ハ深ク當局ノ認ムル所トナリ歸來後ソノ行動ニ就テハ相當援助セラル、ニ至リ閣氏モ大イニ力ヲ得テ急々主義ノ爲ニ献身的ノ奮闘ヲ續ケル決心ノ下ニ二月ニ亘リ各地方ヲ巡回シテ講演會ヲ開キ大イニ新日本主義ヲ宣傳スルト共ニ會勢ノ擴張ヲ圖ツタ結果僅々五十一名ノ出席者ヲ以テ設立シタ國民協會ヲシテ瞬ク間ニ三千餘名ノ會員ヲ有シ平壤大邱光州公州蔚山ノ五ヶ所ニ支部ヲ設立スルノ優勢ヲ得セシムルニ至ツタ次デ大正十年二月第四十四帝國議會ニ對シ左ノ如キ第三次ノ參政權請願ヲ爲スベク同志三千人ノ連署ヲ取纏メ閣氏自ラ幹部數名ヲ隨ヘテ東上シ二月十五日貴衆兩院ニ請願書提出ノ手續ヲ了ヘ之ガ採擇ノ運動ヲ開始セントシタ時偶々兎糞梁權漢ノ毒刃ニ罹リ東京驛ホテルニ於テ遂ニ主義ノ爲ニ殉ジタノデアル

第三回請願書

主 旨

衆議院議員選舉法ヲ朝鮮ニ施行セラレンコトヲ望ム

理 由

下名等同志ハ茲ニ第四十二議會及第四十三議會ニ於テ參政權要求ノ請願ヲ爲シタルモ遂ニ採擇ヲ得ズ茲ニ三度請願ヲ爲シ二千萬民衆ノ意思ヲ明ニセントス

併合後僅ニ十年未ダ同化ノ實果ヲズ人人心猶不安ノ狀態ニ在ルノ時突如トシテ參政權ノ要求ヲ爲ス或ハ其ノ時期

ニ非ザルノ歟アルベシ然レドモ參政權ハ帝國憲法ノ認ムル國民當然ノ權利ニシテ朝鮮ガ日本ノ領土トナリ朝鮮人ガ日本臣民トナレル以上之ガ享有ヲ要求スルハ必然ノ結果ニシテ毫モ怪シムニ足ラズ下名等敢テ事ヲ好ミ區々ノ私情ニ依リテ之ガ請願ヲ爲スニ非ザルナリ今ヤ朝鮮ノ現狀ハ或ハ獨立ヲ叫ビ或ハ自治ヲ唱ヘ表面頗ル混沌タリト雖是レ素日ヨリ多數朝鮮人ノ真意ニ非ズ何人モ心底ヨリ獨立ノ可能ヲ信ズル者ナク自治ノ如キハ机上ノ空論タルニ過ズズ獨リ參政權ノ要求ハ最も眞面目ナル全朝鮮人ノ熱望ノ聲ニシテ下名等請願者ノミノ希望ニ非ズ二千萬人中一人トシテ之ニ反對スベキ理由ヲ有セザルベシ

下名等ハ朝鮮ニ對スル政府ノ施設ニ付不満ヲ懷ク者ニ非ズ又新政ノ效果ニ因リ百事面目ヲ一新シタルハ朝鮮人トシテ感謝情ヲ能ハザル所ナリ然レドモ亡國ノ感情ハ一朝ニシテ消滅シ難ク況ヤ利害ノ判斷ノミニ依リテ之ヲ抑制シ得ルモノニ非ズ朝鮮統治ノ障礙ハ實ニ此ノ一點ニ存セリ故ニ之ヲ緩和スルニ非ザレバ縱令最善ノ政治ヲ行フモ恐ラク效果ナカルベシ而シテ下名等ハ之ガ對策ヲ案メテ地方自治ノ實施ト參政權附與トノ二大要件ヲ擧タリ

地方自治ニ付テハ當路亦其ノ必要ヲ認メ之ガ準備トシテ諮問機關ヲ設置シ地方自治ニ進ムノ階梯タラシメントス下名等ハ地方自治ノ即施ヲ望ムモノナリト雖既ニ之ガ曙光ヲ認ム姑ラク當路ノ施爲ニ一任シ時期ノ到來ヲ待ツノ外ナシ然レドモ參政權ニ付テハ政府ノ方針甚ダ鮮明ナラズ遠キ將來ニ於テハ或ハ之ヲ附與スルノ時期アルベシト雖近ク之ガ實現ヲ見ント至ク望ナキニ似タリ是レ朝鮮人ノ最も不安ヲ感ズル所ニシテ併合ヲ悔ユルノ念此ノ一事ヨリ胚胎セントス

愚フニ國ノ興亡ハ大勢ヲ然ラシムル所ニシテ已ムヲ得ザルノ歸結ナリ下名等ハ今ニ及ビテ併合ノ事實ヲ云爲スル

ノ蓋チキ知リ唯新骨ノ人民トシテ蓋チキ人民ト等シク國政ニ參與シ以テ國民タル權能ヲ行使シ其ノ本分ヲ盡ス
シトシテ實ヲノミ然ルニ民度ニ差アルヲ理由ト爲シ永ク殖民地トシテ特種ノ制度ヲ施キ別異ノ待遇ヲ爲サントスル
ハ朝鮮人ノ思フ能ハザル所ニシテ又政府ノ爲ニ敗ラザル所ナリ

下名等ハ敢テ事ヲ言フノ必要ヲ認メズ朝鮮人ハ日本帝國ノ臣民ナリト雖國政ニ參與スルヲ得ズ未ダ國民トシテ
ノ全資格ヲ有セズ故ニ唯其實格ヲ獲シトスルニ外ナラズ朝鮮ノ現在及將來ニ付テ考フルモ今ノ時ニ於テ政府ハ方針
ヲ宣示シ以テ朝鮮人ノ前途ニ光明ヲ投ズルハ事口實ノ得タルモノニ非ザルカ而モ尙ホ之ヲ察ル、ニ客ナラバ下名等
復タ利ヲカ言ハシ以上事理ヲ盡シ熱誠ヲ發シ敢テ此ノ請願ヲ爲ス幸ニ採擇ヲ得テ所志ヲ達センコトヲ

布及請願願也

大正八年二月 日

國民協會々長 関 元 植

外約三千名連署

朝鮮ノ独立國元植氏ハ大正八年三月一日廣播ノ勃發シタヨリ滿二ケ年間自ラ朝鮮民族ノ爲メニ勞心焦思奮闘努力
シテ動搖セシ民心ヲ安定シテ内鮮融和ノ基礎ヲ鞏固ニ朝鮮人ノ權利ヲ伸張シテ幸福ヲ増進セシメ當時局ヲ匡救ス
ルノ爲メナラズ進デ國家百年ノ大計ニ貢獻センコトヲ期シ一面ニハ國民協會ヲ統率シテ熱烈火ノ如ク反獨立運動ヲ繼續
シテ兩ハ時事新聞ヲ提テ編輯ノ言論ト嚴正ナル批判トヲ以テ朝鮮民衆ノ反省ヲ促スベク數十萬ノ私財ヲ費シ終ニ
ハ一命ヲ犠牲ニ供シタノデアル氏ノ意氣ノ輝 天絶ニ遲シ長クモ特旨ヲ以テ位階ヲ陞進シ勳四等ニ叙セラレタノデ

アルが迄ニシ氏モ九歳ノ下ニ於テ 天恩ノ優渥ナルニ感泣サレタデアラウ衆議院ニ於テモ氏ノ兇報ニ對シ滿座ノ同情
ヲ盡サレテ滿座ニ激シ以テ氏ガ生前ニ爲シタル『衆議院議員選舉法』朝鮮ニ施行セラレンコトヲ望ムトノ請願ヲ採擇
サレタノデアル

併シ大ガチ突然中心人物ヲ喪ヒタル國民協會ハ忽チ存亡ノ岐路ニ立チ會員間ニ於テモ兎角統一ヲ缺キ折角ノ結束モ
弛緩シテ一定ノ善後策ヲ樹テルモノ無キ上ニ資金ノ積立モ無カツタ爲メニ一時ハ現狀維持ノ道ヲ無イト思ハレモ種
ノ窮乏ニ陥リ前途實ニ暗澹タルモノアリ世上早クモ國民協會解體ノ外無シトマデ觀測サレルニ至ツタノデアルガ幸ニ
関氏ハ其ニ國民協會ヲ要シタ諸士ノ努力ニ依ツテ四月十日臨時大會ヲ開キ會長ニ金明澤氏副會長ニ鄭丙朝氏ヲ推シ
テ鄭丙朝氏ノ遺志ヲ次ガ事トシタノデアル

斯ク大變事ニ際シタル國民協會ハ極度ニ經費ヲ節約シ會員中ノ篤志家ノ寄附ニ依テ漸ク之ヲ支持シ事ヲ現狀
維持ト會員ノ結束ニ力ヲ盡シ惟ニ時機ノ到來ヲ俟ツコトトシタノデアル然ルニ文化政治ヲ布カレテ僅ニ一年ヲ經タル
ニモ拘ラズ不逞圖ノ陰謀ハ斷ズル日ナク雖ニ國境方面ハ匪賊ノ爲ニ常ニ脅ヤカサレル狀態ニアルノデ民心恟々トシテ
安堵セズ偶々傳ヘラレタ華盛頓會議ノ爲メト流言蜚語ガ盛ニ起リ良民ヲ煽動蠢惑スルモノ都鄙ニ瀰漫シ殆ド百鬼夜
行ノ觀ヲ呈スルニ至リ國民協會モ坐視スル能ハズ幹部ヲ各道ノ重要都市ニ派遣シテ講演會ヲ開キ華盛頓會議ノ真相ヲ
説明スルト同時ニ今後朝鮮人ノ取ルべき道ハ文化政治ノ下ニ實力ヲ養フ外無キコトヲ力説シタルニ多大ノ反響アリ多
數ノ善鳴者ヲ得テ會勢ヲ擴張シテ豫期以上ノ成績ヲ舉ゲル事ガ出来タノデアル

關氏ヲ衆議院ニ於ケル參政權願ノ採擇ハ朝鮮人ノ國政參與ニ一大光明ヲ投ゼラレタモノデアルガ未ダソノ實施ノ

時機等ニ關スル何等ノ聲明ヲ發シテ其ノ引續キ之ヲ實施促進ニ努メルコトナリ大正十一年三月同志八千有餘ノ連署ヲ得時ノ内閣總理大臣高橋平爵宛朝鮮總督府ヲ經テ左ノ如キ第一次ノ建白書ヲ提出シ會長金明澤氏ハ幹部數名ト共ニ東上シテ要路ニ陳情シ高橋首相カラ建白ノ趣旨ヲ諒トスル旨ノ答ヲ得テ歸朝シタ。

第一回建白書

下名等ハ大正九年一月同志百餘名ノ連署ヲ以テ朝鮮ニ衆議院議員選舉法ヲセラレンコトヲ望ム旨ノ請願ヲ衆議院ニ提出シ分科會ニ於テ參考送付ノ決定ヲ見タル後議會ノ解散ニ遭ヒ夏ニ同年六月ノ議會ニ附シ六百餘名ノ連署ヲ以テ再度ノ請願ヲ貴衆兩院ニ提出セシガ採否ノ決定ヲ見ルニ至ラズシテ議會ハ閉會トナレリ仍而翌十年二月三千餘名ノ連署ヲ以テ第三次ノ請願ヲ貴衆兩院ニ提出シ遂ニ衆議院ニ於テ採擇トナレリ此ノ請願ヲ採擇ハ帝國議會ノ各地方ヨリ選出シタル議員ヲ以テ組織セル一院ニ於テ朝鮮ヨリ議員ヲ選出セシムル必要アルコトヲ公式ニ認メタルモノユシテ朝鮮ノ前途ニ一大光明ヲ投ジタルモノト謂フベク茲ニ朝鮮ニ有スル一千八百萬ノ同胞ハ茲ニ始メテ國政ニ參與スル希望ヲ有シ得ルニ至リシモノナリ然レドモ是レ唯ダ議院ノ意思ノ表明タルニ止マリ之レガ實現ハ一ニ政府ノ意思ニ應レリ而シテ政府モ泰早ニ朝鮮ニ選舉法ヲ施行スル必要アルコトヲ認ムルモノノ如ク該請願ニ對シ原首相ガ議會ニ於テ言明シタル所ニ據リ之ヲ推知シ得ベシト雖其ノ時期ニ付テハ未ダ何等ノ確定アルヲ聞カズ若シ此ノ儘ニシテ經過セシカ違キ將來ニ於テハ殆ド其ノ望ナキニ似タリ是レ朝鮮人トシテ最モ安ゼザル所ナリ思フニ朝鮮ハ四千餘年ノ歴史ヲ有シ數國ナリシトモ一國トシテ存立セシモノナリ而シテ併合後十餘年ヲ經過シ新政府ノ基礎既ニ確立セル

今日ニ於テ總令一般文化ノ程度内地ニ若クザルモノアルトスルモ約二千萬ヲ數フル新附ノ民生ニ對シ本土ト其ノ待遇ヲ殊別シ長ク國政ニ參與スル權利ヲ行使セシメザルハ頗ル解スルニ苦ム所ナリ寧ロ此ノ際速ニ參政ノ權利ヲ國民トシテノ權能ヲ行使セシムルト同時ニ其ノ本分ヲ盡サシムルヲ至當ナリト思惟ス仍而茲ニ各方面ヲ代表スル同志ノ連署ヲ具シ朝鮮民衆ノ意思ヲ代表スル趣旨ニ方テ敢テ左ノ要請ヲ建白ス幸ニ採納アラントヲ

一、政府ハ此ノ際朝鮮ノ實情ヲ察シ最モ近キ將來ニ於テ衆議院議員選舉法ヲ朝鮮ニ施行スル旨ノ勅令ヲ發布セラレンコトヲ望ム

以上

大正十一年三月 日

國民協會長 金 明 濬

外八千五十八名

越ヘテ大正十二年二月更ニ同志一萬二千ノ連署ヲ以テ第二次建白書ヲ時ノ内閣總理大臣子爵加藤友三郎宛ニ提出シ翌十三年七月又復同志一萬三千有餘ノ調印シタル第三次建白書ヲ現内閣總理大臣子爵加藤高明宛ニ提出シ會長金明澤氏ハ再び幹部數人ト共ニ東上シテ加藤首相ニ面接シ普通問題ト共ニ朝鮮ノ參政權問題モ解決セラレン事ヲ要求シテ歸朝シタ即チ第二次第三次建白書ハ左ノ通りデアツタノデアル

第二回建白書

政府ハ朝鮮二千萬民衆ノ要望ニ應ジ速ニ衆議院議員選舉法ヲ朝鮮ニ施行セラレンコトヲ望ム
右建白ス

朝鮮ニ於テハ日本帝國ノ根本義ニ應ジ朝鮮ヲ以テ永ク特殊法域トシテ統治セラル、ノ要需ナラザルノミナラズ時勢ノ
日下各等ハ日韓併合ノ根本義ニ應ジ朝鮮ヲ以テ國政ニ參與セシムベキ途ヲ開カル、ハ頗ル機宜ヲ得タル措置ナルベク
推移ナレバ人心ノ趨嚮ヲ察シ朝鮮民衆ヲシテ國政ニ參與セシムベキ途ヲ開カル、ハ頗ル機宜ヲ得タル措置ナルベク
ヲ信ジ朝鮮ニ衆議院議員選舉法ヲ施行セラレシコトヲ帝國議會ニ建議セシコト三回大正十年第四十四帝國議會ニ於
テ衆議院ノ採擇スル處トナレリ仍而大正十一年一月更ニ同志一萬人連署ノ上此旨ヲ具シ速ニ選舉法施行ノ件ヲ決定
發布セラレン事ヲ建白セシガ今尙實現セラル、ニ至ラズ而シテ朝鮮二千萬民衆ハ國政ニ參與スルノ權利ヲ附與セラ
レザル爲メ一種ノ屈辱ト生活上ノ缺陷ヲ感ジツ、アリ衆議院ハ義ニ右掲ノ如ク既ニ諸願ヲ採擇セリ莫クバ政府ハ朝
鮮ノ實政ヲ洞察シ併セテ衆議院ノ意思ヲ尊重シ下名等ノ願意ヲ達成セシメラレンコトヲ

大正十二年三月 日

國民協會長 金 明 啓

外一萬一千二百九人

第三回建白書

政府ハ朝鮮民衆ノ要望ニ應ジ速ニ衆議院議員選舉法ヲ朝鮮ニ施行セラレンコトヲ望ム

右建白ス

理由

下名等ハ義ニ衆議院議員選舉法ヲ朝鮮ニ施行セラレンコトヲ冀ヒ帝國議會ニ請願スルコト三回大正十年第四十四
帝國議會ニ於テ衆議院ノ採擇スル處トナレリ茲ニ於テ平爾來大正十一年及同十二年ノ兩回ニ亘リ速ニ選舉法ノ發布
實施ヲ促ス爲メ狀ヲ具シ建白スル處アリシハ内外周知ノ事實ニシテ今更緊要ノ要ナカルベシ然ルニ今尙之レガ實現
ヲ見ルニ至ラザルハ下名等ノ頗ル遺憾トスル處ニシテ現下朝鮮ノ情勢ハ時代思潮ノ惡影響ヲ受ケ民心日ニ惡化セン
トスルノ傾向無キニアラズ從ツテ此際民心救済ノ根本策ヲ施スニアラザレバ帝國發展ノ前途ニ一大暗影ヲ投ズルノ
ミナラズ實ニ悔ヲ千載ニ遺スノ虞アリ蓋シ之レガ救済ノ途ハ朝鮮在任人民ニ參政權ヲ附與スルニ如カザルベキハ屢
次ノ請願建白克ク之レヲ竭セリ勿カニ念フニ日韓併合ノ根本義ハ内鮮兩民族ヲシテ同一ノ權義ヲ有シ帝國經營ノ任
務ヲ共ニ分チ共存共榮ノ實ヲ顯揚スルニアリ而シテ之レガ捷徑ハ一ニ參政權ヲ朝鮮在任民ニ附與スルニアルコト上
段既ニ説ク處ノ如クニシテ政府當局又克ク之レヲ知了セラル、ヲ信ジテ疑ハズ願クバ政府宜シク朝鮮現下ノ民情ヲ
察察セラレ速ニ下名等ノ願意ヲ達成セシメラレンコトヲ

大正十三年六月 日

國民協會長 金 明 啓

外一萬一千七百七十七人

四、本會ノ現狀

新ノ如クシテ國民協會ハ保護後民心極度ニ動搖セル點「新日本主義」ノ大旗ヲ建テテ設立シタル爲ニ一般人民ノ反感ヲ買ヒタルコト夥シク又官憲ノ援助保護ガ徹底セザル點アリシガ爲メニ會勢容易ニ振ハズ常ニ四面楚歌ノ中ニ憂鬱苦悶ヲ重ネテ終ニハ閔元植氏ヲ主戰ニ殉セシメ一時ハソノ維持サヘ困難ニ陥ラシメタルノデアルガ幸ニ會員ノ結束ニ依ツテ殆ト解散スベカリシ悲境ヲ挽回シ益々ソノ勢力ヲ發展セシメ得タコトハ獨リ本會員ノミノ欣幸トスル所デ無ク國家民族ノ爲メニ慶賀ニ堪エザル次第デアル

以上ハ大正八年以來國民協會ガ新日本主義ノ下ニ終始一貫民心ノ惡化左傾シタル中ニ屹然トシテ奮闘努力シタル概要ニシテ現ニ國民協會ハ鮮内ニ二十二箇所ノ支部ト二萬ノ會員ヲ有シソノ中ニハ官公吏タルモノ大學及專門學校ノ卒業者及地方ノ有力者名望家實業家等一千人以上ヲ算シ最モ穩健實ナル活動ヲ繼續シテ居ルノデアル

本年一月十八日定期大會ニ於テ會長金明澤氏任期満了セシヲ以テ元一進會幹部ニシテ夙ニ内鮮融和ノ爲メニ奮闘シ其ノ後永ラク官界ニアリシ前江原道知事尹甲炳氏ヲ會長ニ推舉シ幹部ノ更任會則ノ改正ヲ行ヒ以テ會務ノ刷新ヲ圖ルト同時ニ陳容ヲ整ヘ參政權要求ノ貫徹思想ノ善導生活ノ安定在滿同胞ノ保護國境方面ノ對策等ニ付キ積極的活動ヲ開始スベク畫策ヲ努メテ居ルノデアルガ茲ニ卷頭ニ掲グタ如ク第四回建白書ヲ加藤首相宛ニ提出スルト同時ニ朝鮮總督樞密院貴族院衆議院ノ議長ニ陳情書ヲ提出シ新會長自ラ幹部ト共ニ東上スルコトニナツタノデアル

五、朝鮮思想界ノ傾向

隨テ按ズルニ朝鮮總督ガ文化政治ヲ以テ朝鮮民衆ニ臨ミタルヲ見テ一部淺見者流ハ之ヲ保護ノ對策ト連斷シ最少シ驕グバ朝鮮ノ統治ヲ朝鮮人ニ委ス時機ガ遠カラザル將來ニ到來スベク夢想シテ各種ノ陰謀ハ國外ノ不逞輩ト相聯絡シテ間斷ナク計畫サレ夏ラニ鮮内ニ派出シタル各地ノ青年會及其他ノ諸團體ハ民族主義ヲ鼓吹シ排日思想ヲ宣傳シテ公々然僥倖ルトコロナク新ニ許可ヲ得テ發行スル諺文新聞雜誌等ハ競テ反國家的主義主張ヲ掲グテ民心ヲ荒廢ニ導ク爲メニ當局ノ諷意ハ毫モ民衆ニ徹底シナカツタノデアル之レ因ヨリ大局ヲ遠觀セザル偏見ニ依ルモノデハアルガ驕慢直僥文化政治ヲ以テ臨ミダコトハ民衆ニ調味ヲ示シタ嫌ヒガ無いデモナカツタ朝鮮ノ事情ニ暗ク朝鮮人ノ心理狀態ヲ解セザル新當局トシテハ朝鮮半島ヲ總督セシメタ獨立萬歲ノ聲ヲ系統アル示威運動ニシテ根據アル獨立運動ダト信ズルハ或ハ當然デアツタカモ知レナイガ所謂萬歲驕慢ガ蔓延シタノハ附和雷同性ニ富ム朝鮮人ノ常事デアツテ何等ノ系統モ根據モナク偶然ニ爆發シタル民族自決主義ノ導火線ニ由ツテ燎原ノ勢ヲ以テ傳播シタルニ過ギナカツタノデアル故ニ獨立思想ハ萬歲驕慢ニ依ツテ播種セラレ種々ノ不逞ヲ運動ハ思想ノ惡化ニ依ツテ激成セラレタルノデアルアツテ何等ノ決心ヤ成算ガアツテ行ハレタモノデ無ク單ニ時局ノ動搖ニ依ル一時の現象ニ過ギナカツタノデアル而シテ大正八年ニハ各學校ノ學生殆ト半分以上過學シタルニ拘ラズ大正九年ヨリハ全鮮ニ亘ツテ向學熱ガ勃興シ隨處ニ入學難ヲ叫バレタルニ見ルモ其ノ間ノ消息ヲ窺フニ難カラザルヲ知ルコトガ出來ルノデアル。故ニ驕慢後新當局ニ於テ斷然決心ノ下ニ高壓手段ヲ以テ臨ミ苟モ反國家的言動ヲ敢テスルモノニハ秋毫モ假借セズ彼等ヲシテ排日ヲ口ニシ獨立運動ヲ餘地ナカラシメタナラバ或ハ民心ヲ容易ニ安定セシムルヲ得タカモ知レナカツタ事ト思ハレル即チ萬歲驕慢ハ武力ノ鎮壓ニ依リテ靜マリ排日思想ハ文化政治ニ庇リテ熾ナリノ觀ナキヲ得ナイノデアル

「獨逸不逞黨」の行方タル種々ノ宣傳ハ、カラス民心ヲ煽惑シダガ五ヶ年ノ長イ間、教レモ感化ノ説空ノ論ニ依ツテ誤ラレテ居タモノモ現存ニ於テハ朝鮮獨立論ノ如キニ耳ヲ聳テモノ無ク不逞黨ニシテモ之ヲ口ニスルモノナキニ對シタヤウデアル併シ乍ラ民族主義ニ依ル獨立思想ノ變遷スルニ及ンデ更ニ共產主義ニ基ク過激思想ノ漸次播種シ來タルハ實ニ憂慮スベキ現象デアル現ニ朝鮮人ノ言論界及各結社等ニ就テ見ルニ新聞雜誌等ノ記事論說ハ共產主義ノ色彩ヲ帶ビザルモノナク名ヲ勞働問題、小作問題、學術研究、思想研究等ニ藉リタル階級闘争ノ端ヲ隱成シ現狀打破ノ方針ニ向テ邁マントセザルモノナキ狀態デアル。排日思想ノ鼓吹ヲ以テ唯一ノ旗幟トスル新聞紙モ内地人ノ社會主義者並共產主義者ノ文章及談話ヲ揭載宣傳シ勞働團體ノ如キモ内地ニ於タル主義者ト連絡ヲ取り、資本社ト水平社ト合同スルノ計畫ヲ企ツル如キヲ見レバ彼等ガ外ニハ露西亞ノ共產黨ト氣脈ヲ通ジ内ニハ内地人ノ主義者ト連絡ヲ取ツテ如何ニ其ノ目標ニ向ヒ邁進セツトスル心算アルガヲ推察スルニ足ルデアラウ。今ニ於テ之等ノ計畫運動ニ對シ嚴重ナル處置ニ出ヅルコトヲ誤ラバ、神メ無意味ナル盲目的運動モ漸次有黨派ナル智能的謀畫ニ移リ極度ヲ深クシテ禍ヲ將來ニ貽ス虞ロガ無イトモ限ラズノデアル。

元來朝鮮ヲ植民地ト云テ居ルガ決シテ植民地ヲ無ク内地ノ延長デアル朝鮮人ハ土民ニナラズシテ内地人ト是別ガモ陛下ノ赤子デアル。日本ガ朝鮮ヲ併合シタノハ歐米各國ノ復有セル植民地ト異ニ趣チ異ニシテ居ル隨ツテ其ノ政策モ歐米ト異ルベキハ勿論デアル。

日韓併合ノ大精神ハ軍ニ内諍兩民族ノ共存共榮ニアルモノナラズ兩民族ノ結合ニ依リ東洋ノ平和ヲ確保シ進ムガ白人種ノ朝鮮ニアル十億ノ有色人種ヲ人種差別ノ網ヨリ解放シテ永久ニ人類ノ平等世界平和ノ基礎ヲ築クニスル大使命

命ヲ有スルモノデアル。故ニ朝鮮統治ハ公明正大ナル政綱ヲ以テ兩民族ノ融合ヲ圖ルベク決シテ權謀術數ヲ弄シテ時ヲ彌縫糊塗スベキモノデハ無イ。惟フニ過去ニ於ケル朝鮮統治ノ良好ナル成績ヲ擧ゲ得ナカツタノハ善政主義ニ依ル武斷政治ト叛亂豫防方策ニ依ル探偵政治トガ其ノ禍ヲナシタモノデアル。素ヨリ風俗習慣ヲ異ニシ國民性ニ霄壤ノ相違ガアリ文化ノ程度ニ亦雲泥ノ差アル朝鮮民族ヲ統治スルニ内地ノ制度並法律ヲ其儘施行シテ名ニ於テ失ヒタル朝鮮人ニ對シテ實ニ於テモ何物ヲモ與ヘズ徒ラニ煩令苛法ヲ以テ準繩シナガラ斯クテモ尙ホ善政ヲ謳歌セヨトハ餘リニ無理ナ要求デハ無カツタカ殊ニ外交ノ辭令ニ巧ミニシテ面従腹背ノ特性ヲ有スル朝鮮人ヲ遇スルニ短氣激量ヲ以テシ失敬無禮ヲ加フコトヲ直チニ戒シ難キハ朝鮮人ナリトノ欺ヲ發シ而モ尙ホ朝鮮人ノ同化ヲ囑ユルトハ矛盾モ甚ダシト云フヲ外無イデアル。

現ニ朝鮮ノ邊境界ヲ察スルニ智識階級ニ屬スル青年ヲ中堅トシテ左傾シタル思想團體ト有産階級ニ屬スル團體ヲ中堅トシテ文化政治ヲ守ル福利ヲ増進セントスル政治團體トノ對立ヲ見ルガ如キ傾向ガアル即チ排日派對親日派ノ對峙ニシテ一方ハ極端現狀維持政策タルコトヲ目的トシテ進マントシ一方ハ現制度下ニ於テ合法的合理的ニ朝鮮人ノ權利ヲ伸張スルコトヲ標準トシテ行タモノデアル從ツテ排日派ノ勢力ガ擴大スレバ親日派ノ氣勢ハ衰微シ親日派ノ勢力ガ増進スレバ排日派ノ形勢衰微スベキハ自明ノ理デ今後時局ノ推移ハ必ズ此ノ兩勢力ノ消長如何ニ依リ左右セラルベキ五トハ實チ斷ルヨリモ明カチ解デアル。

親日朝鮮統治ノ任ハ庸ル庸劣者ハ克ク此ノ趨勢ヲ察シ國家主義ニ依ル右黨タルベキ黨派ハ之ヲ庇護擁護シテ其ノ勢力ヲ增長セシメ反國家的思想ヲ以テ左傾スルモノハ之ヲ抑壓シテ其ノ勢力ヲ減殺セシメ以テ國家社會ニ害毒ヲ貽サザ

ル維持力スベキハ當然ノ措置ト信ゼラレムデアル。然ルニ今日迄ノ當局者ノ態度ハ朝鮮民族ハ悉ク獨立思想ヲ抱イ
テ居ルモノヲテ親日ヲ標榜スルモノハ時機ノ不可ナキヲ見テ一身ノ安全ヲ圖リ私利私慾ヲ充サンガ爲ニ一時的
親日ノ假面ヲ被ルモノナリト誤解シ最モ氣骨ナキモノトシテ唾棄シ反テ排日ヲ事トスルモノヲ正直ナリト稱信シテ彼
等ヲ侮柔スルヲ以テ唯一ノ政策トスル親日ガ勿論親日ト稱スルモノニモ唾棄スベキ心情ノ持主ガ無イデモ無イガ、
サリトテニ新ノ如キモノガアルカヲ直チニ大局ヲ遠慮スル有爲ノ親日者迄モ見捨テ親日黨派ヲモ亦援助セザル
如キハ之レ正ニ朝鮮民族ヲ誑テ排日ノ惡黨ニ歸キシムルモノト斷ゼザルヲ得ナイノデアル死馬ノ骨ヲ買テコソ千里
ノ至ルガ如ク親日派ヲ援助シテコソ動搖セル民心ヲ安定ニ歸セシムルコトが出来ルデアラウ

愛蘭ガ常ニ英國ノ腹心ノ疾タルコトハ英人ガ愛蘭民族ヲ虐殺シ壓迫シタ爲メバカリデ無ク愛蘭國民黨ニ積極的援助
ヲ答ヒ「シンフエーン」黨ヲシテ跋扈セシメタ英人ノ過失モ見逃スルコトハ出来ナイノデアル當局者並ニ一般内地人ハ
愛蘭ヲ親ルト同時ニ親日朝鮮人ニ對シテ常ニ庇護援助ヲ惜マザランコトヲ切望シテ已マザル次第デアル

(以印刷代謄寫)

朝鮮民族ハ其ノ歴史ニ於テ常に外國ノ侵略ニ對シテ不屈ノ精神ヲ示シテ來リ今ニ至リテハ其ノ精神ヲ更に發揚シテ獨立ノ道ヲ邁進スルノ時ニ至リタルヲ見ルニ當リ我々ハ其ノ獨立ノ事業ニ對シテ如何ニ援助スルコトヲ考ヘンガ爲メ此ノ如ク其ノ現状ヲ分析シテ其ノ必要ナル援助ヲ示スルコトヲ企圖スルモノナリト信ス

故阪谷子爵記念事業會

肅啓新春之候益々御清祥之段奉慶賀候小生今回弊會第
十回定期大會ニ於テ役員改選ニ際シ會長ノ職ヲ去リ顧
問ニ囑託サレ候ニ就テハ今後一層努力勉勵シ平素ノ御
寵愛御期待ノ萬一二可奉副期シ候間何卒倍舊御高庇御
鞭撻ヲ賜ハリ度奉懇願候

先ハ不取敢以書中御挨拶迄如斯ニ御座候 草々敬具

大正十四年一月二十日

金 明 濬

朝鮮京城國民協會本部

故阪谷子爵記念事業會

肅啓新春之候愈々御清祥奉慶賀候
陳者小生今般國民協會長ニ選舉致サレ
候ニ就テハ爾後國家民族ノ爲ニ盡瘁
可仕候條何卒御高庇御鞭撻ヲ賜ハリ
度奉願上候先ハ右御挨拶迄申述度如
此御座候 草々敬具

大正十四年二月 日

國民協會長 尹 甲 炳

故阪谷子爵記念事業會

謹啓曩在錦地猥蒙 不遐慰撫之至若煦以陽教誨之勤
若薰以香凡係所幹幸賴方便顧以海外踈踪何修得此且
感且榮有不敢諉伏惟比日
尊候如宜僕 盛庇所加海陸利涉而及其歸城所勞太過
重嬰宿疴遂至委床一書修謝致茲稽緩罪負有深何以自
瀝惟冀時 賜德音永保舊眷草々不宣統希
愛照

大正十二年十二月 日

國民協會 李 東 雨 頓首

大正十二年十二月 日

國民協會總務 李 東 雨

關東一也院趣旨

大正十四年
三月十八日
119

宇宙は一大圖書館にして人類は購讀者に似たり吾等は此世に生を享けて亦講讀者の一人たり而も努めて以て社會文化の第一線に登らんと欲せは須らく大に學ざるべからず仍ち懷しき故郷を背にし父母の慈愛より離れ強固な意志を以つて關東遊學に志す 牛萬里異域に向ひ遠く玄海の荒波を渡りて學都に至れば風俗之れ異り言語亦通せず剩べ世界大戰の余波を受けりて不景氣風吹き荒び求むるに職なく頼るに人なし偶々之有りとするも難澁の事情あり 即ち學ばんとして學び得ず勤勞せんとして勤勞する能はず遂に彷徨し失望落膽する吾等苦學生の數止に二千を算す

玆に於てか吾等は此の窮境より吾等の同胞を脱出せしめんが爲め所謂『相互扶助』の信念の下に關東一也院なるものを組織して吾等苦學生の自衛向上の機關たらしめんとす

然りと雖も資力乏しくして之が目的の達成に苦しむものなり大方の諸先生宜しく如上の實情を御賢察の上是非御同情御垂援あらん事を希ふ

朝鮮苦學生關東一也院

本院代表者

南金崔金車
秉秉文貞善
麟敏國燮壽
金張金董李
正鳳長榕柱
旭述勳勳哲

關東一也院賛助員氏名

| | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 亦 | 島 | 福 | 池 | 外 | 山 | 關 | 河 | 有 | 山 | 中 | 永 | 頭 |
| 間 | 原 | 谷 | 園 | 山 | 道 | 屋 | 上 | 馬 | 田 | 野 | 井 | 山 |
| | | | 哲 | | | | | | | | 柳 | |
| 信 | 逸 | 益 | 太 | 國 | 襄 | 龍 | 哲 | 賴 | 耕 | 正 | 太 | |
| 義 | 三 | 三 | 郎 | 彦 | 一 | 吉 | 太 | 寧 | 作 | 剛 | 郎 | 滿 |

關東一也院

總務車善壽

東京市神田區猿樂町
貳丁目四番地
事務所

關東一也院

勸業部幹事 金貞燮

事務所
東京市神田區猿樂町
貳丁目四番地

大正十四年
三月五日

關東一也院趣旨

宇宙は一大圖書館にして人類は購讀者に似たり吾等は此世に生を享けて亦購讀者の一人たり而も努めて以て社會文化の第一線に登らんと欲せは須らく大に學ぶるべからず仍ち懷しき故郷を背にし父母の慈愛より離れ強固な意志を以つて關東遊學に志す 半萬里異域に向ひ遠く玄海の荒波を渡りて學都に至れば風俗之れ異り言語亦通せず剩へ世界大戰の余波を受けて不景氣風吹き荒び求むるに職なく頼るに人なし偶々之有りとするも難澁の事情あり即ち學ばんとして學び得ず勤勞せんとして勤勞する能はず遂に彷徨し失望落膽する吾等苦學生の數止に二千を算す 茲に於てか吾等は此の窮境より吾等の同胞を脱出せしめんが爲め所謂『相互扶助』の信念の下に關東一也院なるものを組織して吾等苦學生の自衛向上の機關たらしめんとす 然りと雖も資力乏しくして之が目的の達成に苦しむものなり大方の諸先生宜しく如上の實情を御賢察の上是非御同情御垂援あらん事を希ふ

朝鮮苦學生關東一也院

本院代表者

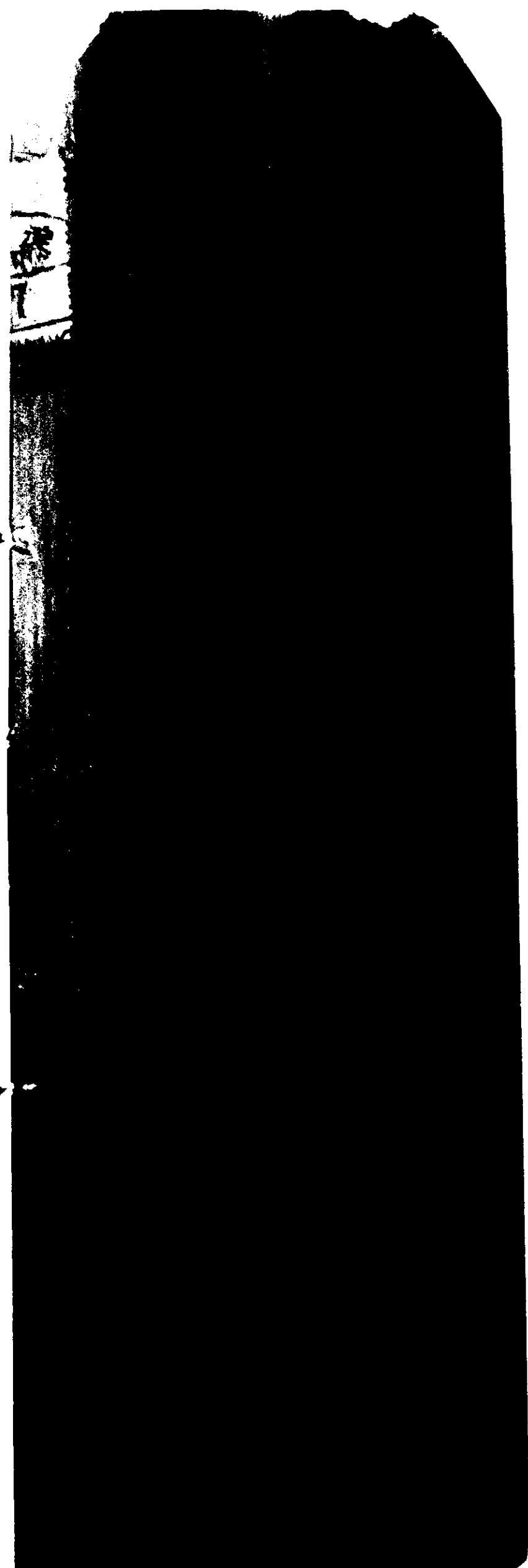
- | | |
|-------|-------|
| 車 營 壽 | 李 柱 哲 |
| 金 貞 燮 | 董 格 勳 |
| 崔 文 國 | 金 長 勳 |
| 金 秉 敏 | 張 鳳 述 |
| 南 秉 麟 | 金 正 旭 |

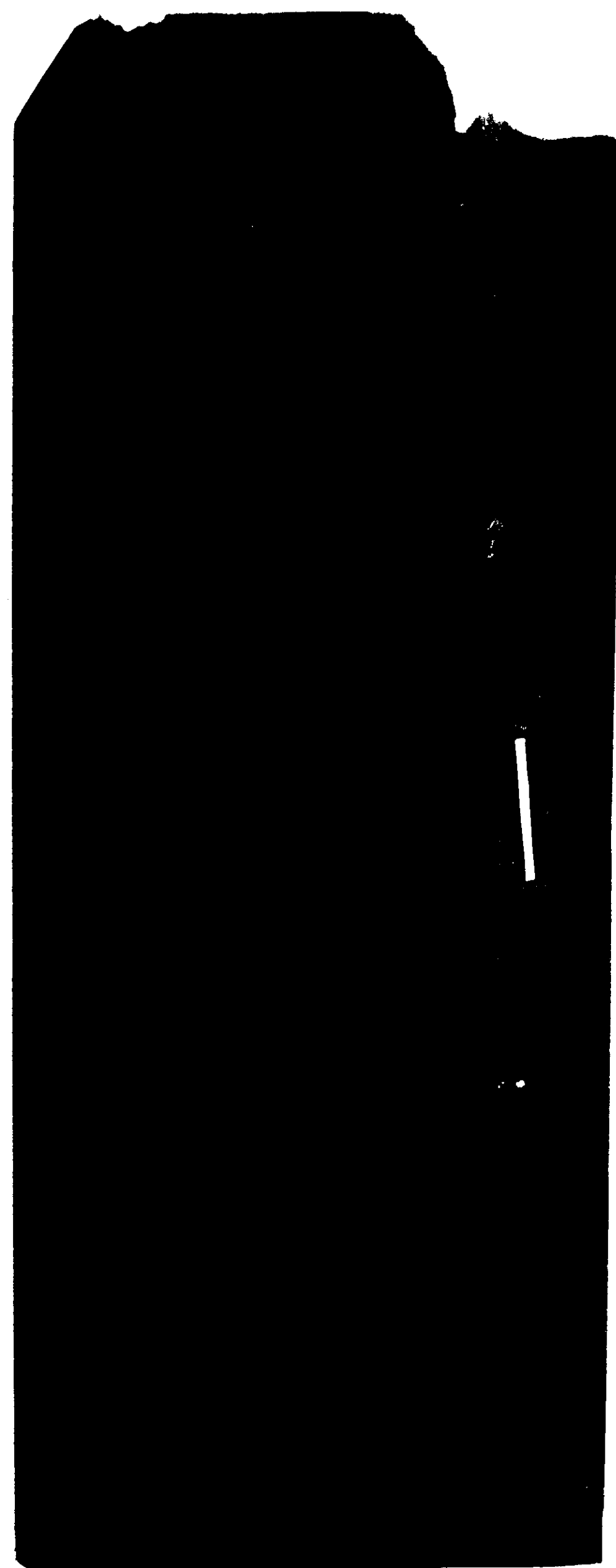
關東一也院賛助員氏名

- | | |
|--------------|----------|
| 外務省參與官衆議院議員 | 永井 柳 太郎 |
| 衆議院議員 | 中山 正 剛 |
| 衆議院議員同友會會長 | 山田 耕 作 |
| 衆議院議員 | 河上 賴 寧 |
| 文部省參與官衆議院議員 | 關屋 龍 吉 |
| 文部省普通學務局長 | 山道 襄 一 彦 |
| 衆議院議員 | 池園 哲 太 郎 |
| 東京市社會教育課長 | 福谷 益 三 郎 |
| 慶應義塾大學教授 | 島原 逸 三 義 |
| 同 | 間 信 義 |
| 文部省專門學務局學務課長 | 赤 間 信 義 |

順序不同

善隣學寮





善隣學寮

東洋民族親善協同を計る爲茲に善隣學寮を設立す。

善隣學寮は朝鮮、臺灣及中華民國、印度、暹羅、比列賓等の留學生を包容す。

善隣學寮は其民族的個性習慣を利導し各人各様の修學志望に對して便宜善導の方法を講ず。

善隣學寮は政治、法律、經濟等の研究者及醫學、藥學及土木、建築、產婆、看護術、寫眞術、活版術、乃至紡績、電氣、瓦斯の技術より硝子製造、自轉車、自動車等の操縱修繕等の技術に至るまで實地的研究者を收容す。

善隣學寮は男女學生を收容す。

善隣學寮は寮舍を家庭的平和の組織となし其家鄉萬里の感なからしむる適應の設備をなす。

善隣學寮設立につき茲に謹みて篤志諸賢の贊助を仰ぐ。

大正十四年五月

善隣學寮

| | |
|------|--------|
| 理事 | 三島彌吉 |
| 全 | 菅野勇七 |
| 全 | 小此木忠七郎 |
| 全 | 青柳有美 |
| 全 | 小田内通敏 |
| 全 | 湯谷磋一郎 |
| 全 | 橋本白水 |
| 常務理事 | 宇佐穩來彦 |
| 常務理事 | 福迫龜太郎 |

東京市外西巢鴨町六百六拾番地(香柏社内)

善隣學寮事務所

電話小石川五一八四番

(本寮は適當の時機に於て財團法人の組織となす)

設立費豫算

一金六萬圓也

學寮寄宿舍建設費
一人二坪當三百人建坪六百坪

一金壹萬圓也

講堂及娛樂室事務室建坪百坪

一金壹千八百圓也

壹千五百坪借地料坪當拾錢

一金參千貳百圓也

器具費

一金貳萬五千圓也

維持費

計金拾萬圓也

以上

振第七號

| 受領票 | |
|----------|-------|
| 口座番 | 加入者氏名 |
| 東京七二二三一番 | 善隣學寮 |
| 印附日局付受 | |

※印を附しある部は拂込人に於て記載せらるべし

| 拂込通知票 | |
|----------|-------|
| 口座番 | 加入者氏名 |
| 東京七二二三一番 | 善隣學寮 |
| 印附日局付受 | |

省信通

※印を附しある部は拂込人に於て記載せらるべし

| 拂込票 | |
|----------|-------|
| 口座番 | 加入者氏名 |
| 東京七二二三一番 | 善隣學寮 |
| 印附日局付受 | |

省信通

※印を附しある部は拂込人に於て記載せらるべし

| 査票 | |
|----------|-------|
| 口座番 | 加入者氏名 |
| 東京七二二三一番 | 善隣學寮 |
| 印附日局付受 | |

省信通



東京府立総合資料館蔵

阪谷芳郎

丁亥

朝陽新聞社蔵

申込書

一、朝鮮思想通信

部

(定價一部金五圓也)

右購讀申込候也

大正十五年 月 日

住所

貴氏名

朝鮮思想通信社 御中

四月廿三日

認可の指令

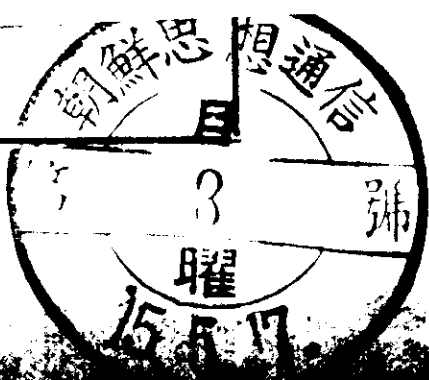
付いたしま

社誌著述等

部分を翻譯

これに依つ

て朝鮮同胞の眞の叫びや、諸問題に對する主張や態度を見て戴きたいと思ふのであります。古き時代は姑く舍き、大正九年東亞日報、朝鮮日報や時代日報が發行されて以來、幾百千篇の論文や得難き數々の參考資料が、内地人有識者の何等注意を喚起することなく消え失せて行くのは、眞に残念に存ぜられます。その議論は社會的環境や、民族的感情を異にする人達のものであるから、悉くが首肯に値するといふのではなく、寧ろ誤解や曲解に出でたのではないかと思はるるものがないでもないが、内地人たるものは、その是非曲直を問はず、一應は耳を傾けて聞いて見るだけの雅量はあるべきは、應は耳を傾けて聞いて見るべきは聽れ、誤れる





拜啓
かねて出願中の『朝鮮思想通信』は、去る四月廿三日
附朝鮮總督府から、新聞紙規則により認可の指令
を受けました。来る五月十五日から、発行いたしま
す。本通信は

日々發行せらるる朝鮮文の諸新聞雑誌著述等
の内より朝鮮研究に必要な主要部分を翻譯
し、謄寫印刷の上、即夜發行するもの

であつて、朝鮮文を讀み得ざる方々に、これに依つ
て朝鮮同胞の眞の叫びや、諸問題に對する主張や
態度を見て戴きたいと思ふのであります。古き時
代は姑く舍き、大正九年東亞日報、朝鮮日報や時代
日報が發行されて以來、幾百千篇の論文や得難き
數々の參考資料が、内地人有識者の何等注意を喚
起することなく消え失せて行くのは、眞に残念に
存ぜられます。その議論は社會的環境や、民族的感
情を異にする人達のものであるから、悉くが首肯
に値するといふのではなく、寧ろ誤解や曲解に出
でたのではないかと思はるものがないでもな
いが、内地人たるものは、その是非曲直を問はず、一
應は耳を傾けて聞いて見るだけの雅量はあるであつて
欲しいと思ひます。そして聽るべきは聽れ、誤れる
はドシ／＼匡して往くことは、實に必要な事と信じ
ます。

而して内地人が、これ等の事に注意を拂ふと否と
に拘らず、日々十二萬乃至十六七萬枚の新聞紙に
よつて、朝鮮民衆は遺憾なく教養され、誘導されつ
つあることを知るならば、その影響如何に付いて
は更に深甚の注意を要する次第であります。
私は以上のやうな趣旨から、眞に朝鮮を知り、朝鮮
同胞を理解せむと欲する方々に、本通信を御薦め
するのであります。そして本通信を通じて、この朝
鮮同胞の叫びを聽き、環境の相異から来る特種の
「氣分」や「感情」を幾分でも酌むで戴かむことを御願
ひするのであります。

大正十五年五月

京城黃金町三丁目

朝鮮思想通信社

電話本局一五七〇番
振替京城一五、一三三番

代表者 伊藤韓堂

敬白

数々の参考資料が、内地人有識者の何等注意を喚起することなく消え失せて行くのは、眞に残念に存ぜられます。その議論は社會的環境や、民族的感情を異にする人達のものであるから、悉くが首肯に値するといふのではなく、寧ろ誤解や曲解に出でたのではないかと思はるものがないでもないが、内地人たるものは、その是非曲直を問はず、一應は耳を傾けて聞いて見るだけの雅量はあるべきは、欲しいと思ひます。そして聽るべきは聽れ、誤れるはドシ／＼匡して往くことは、實に必要な事と信じます。

而して内地人が、これ等の事に注意を拂ふと否とに拘らず、日々十二萬乃至十六七萬枚の新聞紙によつて、朝鮮民衆は遺憾なく教養され、誘導されつつあることを知るならば、その影響如何に付いては更に深甚の注意を要する次第であります。私は以上のやうな趣旨から、眞に朝鮮を知り、朝鮮同胞を理解せむと欲する方々に、本通信を御薦めするのであります。そして本通信を通じて、この朝鮮同胞の叫びを聽き、環境の相異から来る特種の「氣分」や「感情」を幾分でも酌むで戴かむことを御願ひするのであります。

大正十五年五月

京城黃金町三丁目

朝鮮思想通信社

電話本局一五七〇番
振替京城一五、一三三番

代表者 伊藤 韓堂

敬白

一、本通信は来る五月十五日より發行す

一、本通信は日刊(毎日午後八九時頃發行)にして祭日の外休刊せず

一、本通信は本文外に時々數十枚乃至數百枚の参考資料を添付す

一、本通信は毎月末、表紙・目次等を添付し、綴込並に保存の便に供す

一、本通信の定價は一ヶ月金五圓なり(郵税共)

以上

朝鮮思想通信

京城 朝鮮思想通信社

代表者 伊藤 韓 堂

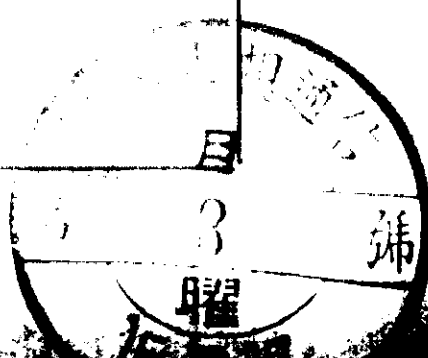
電話本局一五七〇番
振替京城一五、一三三番

◇本通信は大正十五年四月廿三日付新聞紙規則に依り認可されたるものなり
◇本通信は朝鮮文の諸新聞雜誌著述等より朝鮮の思想研究に必要な事項を
摘録し研究資料として提供するものなり
◇本通信は毎月末表紙目次等を添付し綴込並に保存の便に供す

大正十五年三月三十一日現在
日刊 毎日のみ発行

定額 金五円(税別) 発行所 京城黄金町三ノ三〇 朝鮮思想通信社

発行所 京城黄金町三ノ三〇
印刷所 京城黄金町三ノ三〇
印刷人 伊藤 韓 堂



朝鮮思想通信

朝鮮名士の京城帝國大學觀
五月五日(日) 朝鮮名士の京城帝國大學觀

朝鮮思想通信

朝鮮名士の京城帝國大學觀

百難を排して学ぶの事 (五月号雑誌新刊)

京城に大學の開かれたとは聞いたが余は其内容や現状に就ては何事耳にしたともなく又聞かうともしなかつた。それ程余は學界に對しては門外漢であると同時に老成隱居の身であるから社會に對して無責任であるとも知つてゐる。斯く城大について内容外形共に知る所がないのである。大學を去ると自命は通うて見たこともなく何等の知識も持たないが學校教育の最要機關であることだけは知つてゐる。又浸透されたことに代りては大に慶賀してゐる。しかし斯様な機關があるとも若し朝鮮青年が學修することか出来ないと又は校で學修しないとかいふことがありとすれば、その水ミミミに有名無実のものに歸して仕舞うから多量に於いても多數の朝鮮學生を養育する為めに極端な用放しをしなければならぬ。又一方朝鮮の青年も假令如何なる恥辱があつても學を屬まなければならぬと思ふ。若し入學に就いて難關があるならば、その難關は大に打破

朝鮮思想通信

朝鮮名士の京城帝國大學觀

百難を排して学ぶのみ (五月号雑誌新稿)

京城に大學の開かれたとは聞いたが余は其内容や現状に就ては何事耳にいたことなく又聞かうとしなかつた。それ程余は學界に對しては外漢であると同時に老成隱居の身であるから社會に對して無責任であるとも知つてゐる。斯く城大について内容外形共に知る所がないのである。大學なりとは自分を通して見たこともなく何等の認識も持たないが學校教育の最高機關であることだけは知つてゐるから誤されぬことに就いては大に慶賀してゐる。しかし斯様の機關があるも若し朝鮮青年が學修することが出来ないとか又は極めて學修しないとかいふことがありとすれば、それこそ一に有名無実のものに歸して仕舞うから當るに於いても多數の朝鮮學生を養育する為めに校門を閉ざさなければならぬ。又一方朝鮮の青年の事も假令如何なる恥辱があつても學を廢まなければならぬと思ふ。若し入學に就いて難關があるならば其の難關は大に打破

しなければならぬ。そして自ら努力し決して他を助けてはならないといふこと、
一言して置く次第である。(朝鮮日報社長李商在氏)

出来得る限り朝鮮人本位にせよ

教育に饑えてをる我が朝鮮に帝大が設置されたことを誰が喜ばないや。然し余の憂ふる可は朝鮮設立された京城大学が朝鮮人を本位とせざることになりはしないといふことである。若し或りとせば朝鮮人に限つては本邦並にある数多い大学へ行かざる所がないではなからうか。立派な大学即ち朝鮮の最高教育機関を手近に置くといつてそして教育は亦の他人が受くるやうな事になれば、寧ろ悪い方がましてある。確かな数字は知らないが城大附科の在學生で朝鮮人は僅か三割五分に過ぎないといふ。これに達しないといふことであるが、それは二重教育を受ける朝鮮人として免れ得ないことである。これについて徹底的の議論を試みんとすれば根本問題に立入らねばならぬ。朝鮮人本位の何なのといふことは結る一つの空論であり、又無理な注文である。出来はその程を越へ申すことの餘りに甚だしからうこととの外望をなくせねばならぬ。(附)

農村の社会理の創始者氏)

専賣局の利益絶断と鄉村凡俗の変遷

(十八日 時代日報論説)

昔は農村に入つて、親しい友達を訪ねると、お互に無言を喜び合つた。その握りの葉煙草を薦め、次いで幾杯の濁酒の杯を交はすのであった。その有様は詢に質素で、而も涼朴な鄉村の真実味が流石に露したものであつた。これ位の妙品は普通の農家には貯へがなくて、自作自給の生活に如くにも自由であり、お客の接待が何に事属しないのんびりした自在な生活であつた。そこに天真であり、爛漫である鄉村の涼風良俗の誇りであつたのである。

然るに近來の農村の狀態を見よ、昔の涼風良俗は一つも見えない。

二、中産階級の者は昔よりも一層奢侈に流れて、葉煙草や濁酒などは口にもしないが、中流以下の者は、日頃葉煙草の葉や、松葉など煙をたぐり、偏に末客でもある、相の中に深く深くしまつて置いた、長巻煙(長刻みの

煙草の名一袋でもあつたなら、それを取り出して客に勧めながら、
に煙草もお接待が出来ません、濁酒を一杯上げやうと考へても、半里も一里も離
れてゐる酒屋に走らねばならず、又往つた所で酒があるか、ないかも分りません、
ついでとも……と顔を赧めながら歎くのである。

三、これは農村の浮良な風俗が表を行きつ、ある一つの側と看做さ
ない。そして其の浮朴な御風がどうして、斯う表裏を行くかといふことについて、
一通り探索して見る必要がある。抑々時代の進化が風俗を一変し、その接待
の儀式までも変へて仕舞つたのだといふべき乎。殊に生活の似系統が、無益な
煙草の浪費を節約せしめたからだといふべきか。否、専ら官の利益を保護
のため不自然な勢力が、利令智迷より僻陋の津々浦々に至るまでも侵入して
生活の基礎を揺り動かしただけであつた。

四、煙草には自家用耕作、販賣用耕作を一切廃止し、耕作区域を指定し、
其の区域に耕作したものは土著(三葉の生長したものを)一枚でも残ら

煙草組合に納入せしめ、その上又局員組合員は始終農村を監視しながら、私藏煙草の有無を毎に調査して廻るが、其の耕作区域の耕作者でも何ともしることが出来ないに、耕作者以外の者に餘分があるべき筈でない。又煙草も自家用、販賣用を問はずして個人製造は絶対に禁止す、方針として、紅十字會社なるものを設立し其の會社の製造品を、各店に賣捌くことになるのである。その事業は益を計り、これから益は必し上がるまいから、農民は往つても煙草にありつけないやうになるのである。

五、元來、煙草や酒は無用の消費品である。健康、経済何れ、方面から見ても、害あるのみで利はないものである。だから假令それがなくなつても別に飯を食ふには当たらない。併し斯る結局を齎らすのが、風俗の改良或は生活の向上といふが自動的変革でなくて、生造の環境と成り得る。其の本質的事業の利益壟断に因り、農民民衆の血液の層一層吸収され、生活の破滅は年一年近づく現狀に過ぎないのであるから、斯る不自然な勢力の壓迫は

ら、由來の陋俗までなくなるとすれば、一歩を進めて其の有害無益を審み
癖を根本的に断ち去つたならば、血液の一部分が少く吸収され、経済的収減
が一日でも遠近されるではあるまいか。

◇ 八月附東西日報 横説堅説

○國華と協會に左衛官の許金と材料として、地方の富田主家と其の
詐欺取捨をせんとする者が居るさうだ。この子の秘傳か。

○東京に住居する元巡査部長は神事最も最近強盗罪に訴へられたと
うだ。政虎の總裁やへ換事局へ出入すること自家の如くする日本の
天や一巡査部長の強盗位は同敷外だ。

○今頃は國の革命は、独立して以來の激進なる政争が原因で、
各々自分ばかり偉いと思つて四令五到を能事とする朝野の所謂
有志者軍は一考し可也だ。

◇ 先生の防心令 (十八日附朝鮮日報時評)

◇ 吾輩は各方面からの非難攻撃を頗る猛烈であったにも拘らず、
想慮迫るに厥命を交した岡田文相は、今更に先生に防心令
を交せしむるやうである。

◇ 文相は生防心令を發表した後、大子總長會議を開き、
あったが世間の非難と忌避して非公式に全国官立大学校長に東京
に召集した上、訓示を授けんと決定したが、其の訓示の内容を以
ていへば、先生を有する教授諸君を文相府に通報する事、
師の安否あるに著し、刊行物等に於ては注意する事、
さうだ。

◇ 先生の非化傾向と絶対に防止せんと努力する者、
同時に、
満州の非化傾向と防止せんとする者は、
その非化傾向の防止である。先生は、
その防止に努力せしむる道程あり、
先生は、先生

損害額三百六十餘円を面民に賦課せんとする。處直に對し面内の興除拂
濟し其の不当事を賦課の理由を面長に訴すと共に面民大會を開催せんとせし
に對し感あるに於て禁止したるため面民其書面を以て有志の意見を徴し其善
後策を講究しつつあるがこれがため戸税の納入にも影響があるを以て即ち
之を對策講究中の由（感平）

◇家族墓地設置直を認可せよ（十八日付毎日申報）

朝鮮の墓地規則は去る明治四十五年、發布されたものを大正八年七月民意
暢達のため若干の修正を加へ自己の所有地三千坪以内に限り私設墓地
を設置することが許可されたが共同墓地は維持管理に甚しい困難
があるため未だセバウエス病院敷地内に於て墓地を協議するに及ば
ない等は近くこれが改正の建議を為す由であるが其の要点は共同墓地
に家族を以て区分したる墓地即ち家族墓地の設置であること。

大正十四年中の朝鮮社會運動概観(三)

東亞日報掲載(星山学人)

二 思想運動(續)

次に九月十日に開廷した國際共產黨事件の公判は一昨年十月に検挙された朝鮮最初の事件である。その公判廷に於て鄭在達、李載勲、西元計、権秉の四被告は社會主義者の力ある主張の一部であつて世人の階級観念の上に少くない印象を與へたのである。同二十一日の京城高等法院前一帶を騒がせた朝鮮労働黨決闘事件は労働黨員中幾人かの四國同盟友社から怪胎した事件で多数の車夫、水夫、及至正義者連の検挙が行はれたが、統一の氣運に向つて居つた昨年の社會運動史上には誠に遺憾千万の大不祥事である。同二十一日金風颯々たる京城には無産階級の勝利を意味する赤旗を掲揚するに

至ったのは人数以上に大劇期的事象を象徵すると共に他面には
 資本主義社会の内部に潜匿の沈痛を感ぜしめる朝鮮人として大勢
 超然の防衛し難きを嘆かしめ一般運動者等には更に勇躍せよと
 確信を與へた様であった。十一月七日の無産者革命記念日には例
 年に見られぬ盛況の準備があった。全朝鮮を通じて講演、記念式宣
 傳、標語作成等の準備が刻る處にあったが教養階級の慎重なる整成
 によつて、行動共に総て禁止され、唯赤雲領事館に於てのみ朝鮮に
 る爆竹聲裡に盛大なる記念式を挙行し多数の在米左傾団体
 代表が参席した。熱血の鼓動を抑制し得ない多くの主義者連は
 之を以て万一を記念しその日を送った。又思想運動方面の定例刊
 行物としては八月から週刊「朝鮮の光」が續刊された。以来二十
 日連続刊したが為政当局者の色眼鏡の下では思想の自由は分断
 學術的方面の記事まで一行とも不寛容のまゝにけしきをつけてしまふ

唯物質の力不足の經營者の心力を空費したのである。何時も一往
 であるが、昨年一年間は最も甚だしかった。以上の多くの記録其他、全部
 経営と主業者の年計実績である。又、苛酷なる壓迫を蒙るに至りし
 く云ふ必要はないが昨年一年を通じて経営者当局の政策は、果
 に比して、更に特殊な地歩を遂げた。年末の反動政策が昨年より一
 歩の極度に達して以来、其の程度は一日も過せばそれだけ甚だしく
 なった。紀念満漢、追悼、標語等は勿論、陶山書院（李退溪先生
 生）の書院）等、済漢、小樽、高爾、假想的問題報告、漢説、金親
 會、茶話會、其他二人以上の會合までも禁止し、年末には在日、國
 体の年賀状までも二三の例外を除いては全部押収した。権力と
 無制限に伸張することが出来るとの自信に、居る彼等も、又、その
 反動化がその適當の途をないことは知つてゐる筈である。併し、その
 の反動はこの大勢不利に陥んで不得止取つた所の一種の犠牲である。

我々は、この彼等の立場を、國情の情を察し、悔いもた、然るに
 後に轉ずる出来事は、年々、に於て、昨年の社會運動に於て、
 主眼するに至つた朝鮮金土に於ける社會主義者大檢挙事件、火
 曜會、北風會、労働組合、漢陽青年隊、新學堂青年隊、女
 性同友會、平壤労働同盟の重要幹部を初めとして、馬山、大邱、江
 華、新義州、元山等、に於ける左派団体幹部及主義者を網羅する者
 である。秘密統制事件（？）である。此の事件は、今後如何なる程に
 まゝ拡大するや、判断せざる事件である。其の内容如何は不明である。
 角、昨年の社會運動史上の大波瀾である。事件の進展に關しては、
 記載禁止となつたので、一般主義者は、論、世人の視線は、第一、
 年々、に於て、殊に年末の結末、時期に過ぎず、年間の印、績と、
 回想する時があるから、是れ、せる朝鮮社會運動界の氣分、人々、
 事件の波動に依りても、一層、緊張の度を増した様である。

三 労農運動

社会運動は社会階級運動であるならば、是を労働者と農民と農民と社会運動の中心であり、原動力であり、思相運動は政治的方面の社会主義的努力と云い得るならば、労働運動は経済的方面の社会主義的努力である。然るが故に労働運動は目的地主と農民工場主と職工の経済的格差の獲得に在るが、その初期にありては常に部分的利益に關する闘争となるのである。而して今日の朝鮮の如く産業的に工業の未発達に在る比較的保身的なる農民が社会階級の大多數を占めるが故に自らの運動がその中堅地位に在るものである。労働運動は労働者と農民と地主及び工場主とを對する搾取拒否の運動である併しながら経済的に壓迫を受けた農民であるから、その個人として

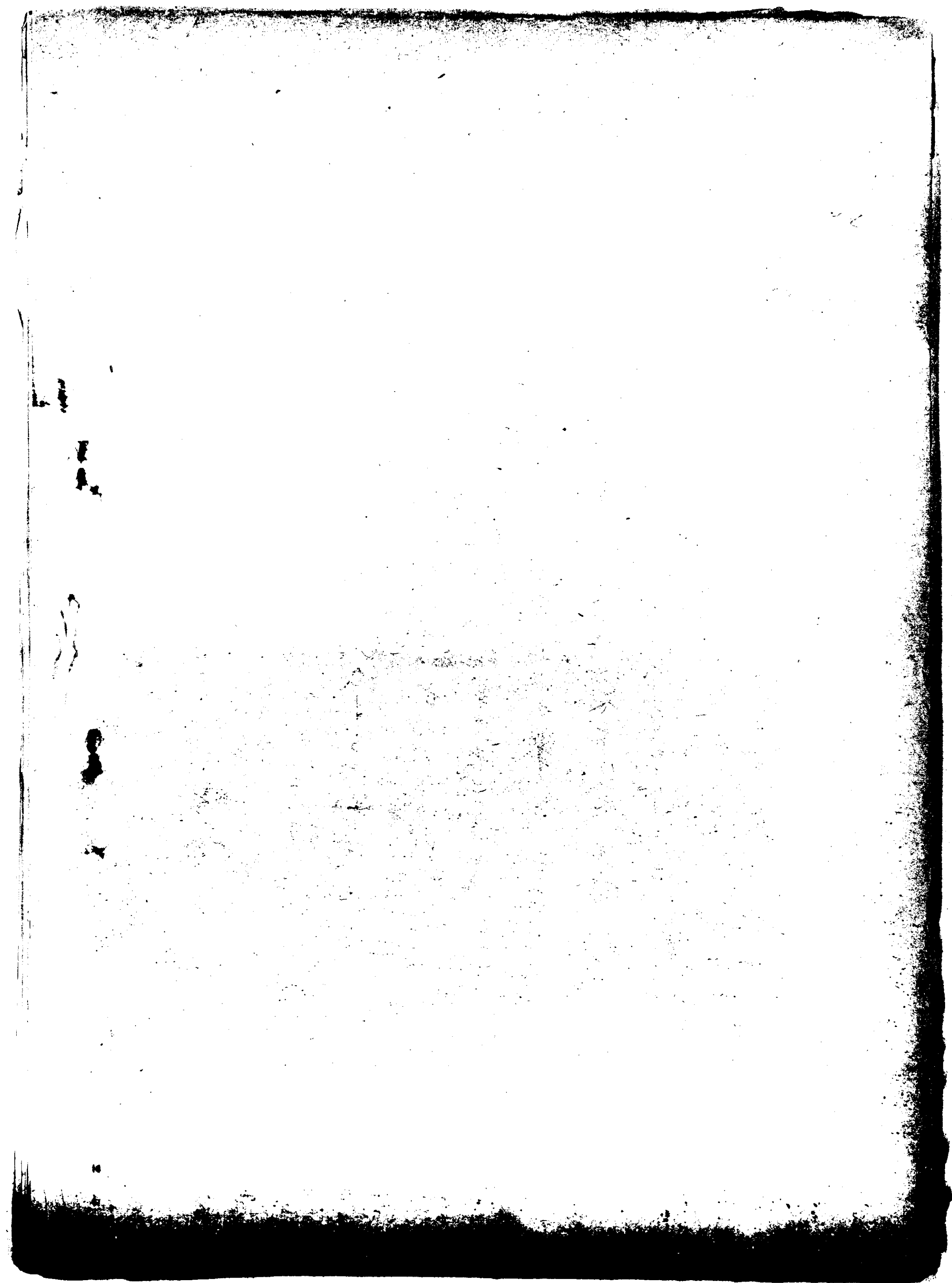
資本主義階級に反抗する事は出来ぬ。資本主義階級は、
 故に進歩に反抗せんとする時は、数回に團結する。この時、
 又必要となるのである。即ち團結の力に依つて、そのよりよく資本主義階級に反抗する
 ことが出来るのである。それ故に労働運動を盛んならしめんとするものは、
 労働者と農民の團結を組織しなければならぬ。即ち労働者と農民の
 民衆組合とを多く組織して、この労働者と労働組合と農民組合とを
 に加入せしめ、その團結を實現国にし、より以上力ある反抗力となる。
 か何より肝要である。それ故に朝鮮には前になつた労働組合と農民組合とを
 今や全鮮を通じてその数一千三百餘の多數に達した。而して、労働組合
 機關として労働組合と同様に組織されたのが既に一昨年より、労働組合
 労働組合の團結に加盟せざる労働組合もその数は、労働組合の
 労働組合の労働組合を組織した労働組合より、労働組合の労働組合
 高の發達であるのは、確しも認める能はれるのである。

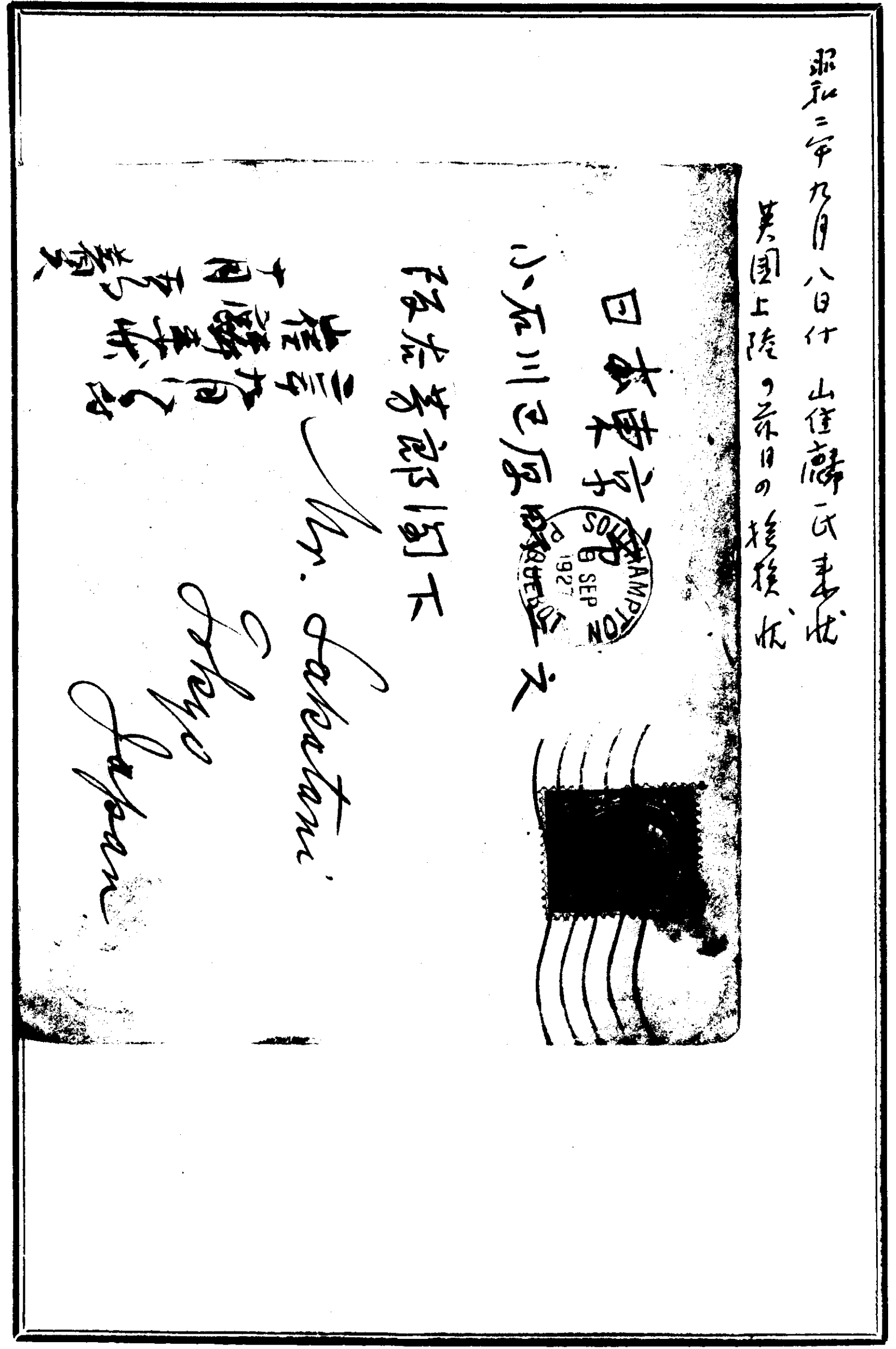
体であり、その形式に於て最高の發達であるのは誰しもを認める能
 はれるのである。而してその総和体の充實せる有機的作用が、細胞
 団体の發達を力強く促成し、各細胞団体の實質的發達、総和体
 の有機的活動に、決定的影響を及ぼすのである。併し朝鮮、この
 經濟的事情及び一般民智の暗昧に依る結果であらう。既、最高
 發達形式を備へた総和体が成立した程度に比して、労働者階級の
 實際はそれに伴ふだけの發達を遂げたとは見ることも出来ぬ。又
 他面より見るに労働者や農民等は、何等の組織も何等の模範もな
 いにも拘らず、團結的に資本家や地主に抗争した事實が在り、け
 だし、蓋し斯る抗争はそれ等が非組織体たるだけその戰術、非
 組織的なるが爲に大部介々失敗に終るけれども、斯る事實は、
 朝鮮の労働者階級が、團結的要素の豊富なるをいふ、
 るものと云ふべきである。朝鮮労働者階級は、
 一

後、この命令を禁止せられ、例年四月の定期総会も開催が出来ず、
従ってその結果として、事業方針は素より職員の満期改選等も出来ず、
またその結果として、その活動は頗る不自由を極めたのである。この結果、
従って有権者職員の数が不足する為、これに對する指導等、
の如く、なされた。併し昨年中、発生した各地の職業別労働組合、
連合して統一された。その回数から見て多いのを見ながら、その結果、
は見て取妙の度が大に増進した。團結力は従前より倍加し、
る各組織とも同じく、階級別年的色彩が頗る濃厚である。昨
年までは工業労働者の職業別数は、作業員数に比して、
少額であったが、昨年は大に盛んとなり、強んじ、
然る上、労働運動は新年期から新團體の誕生、
機関の組織、労働者懇親會等の會合は、
の数は、前年より倍増し、参加人数約二万五千人に達した。この結果、

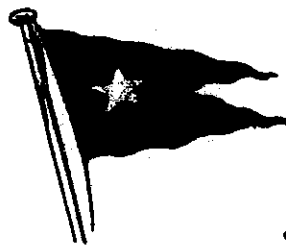
農村労働女工、平懐漆色女工、海越工業の賃金引上げ
求の要求を認め、市域電気会社乗務員五名、賃金増
懸待遇問題に係る大田事件は一時市域三十万市民の不安に象
となる困厄を感ぜしめた。或る電気関係者記述の述に依り、その罪
状が發覺したと同時に、会社に對して平素抱いて居た乗務員達
の不平が一時に爆發したものである。最初は彼等の提出した十四名
の件に對して会社が譲歩した為め解決の曙光が見えたが、以後
日を経過後の最後の談判に於て、会社の懐柔的欺瞞の策
が暴露し之に對する教官の無理な抑壓があったにも拘はらず、
事を決行した為め市域市域の時間生活者の遂に割が平時の四
十倍以上に達する様になり、就業者等に及ぼした被害を正確に
一件までも發生し、前後検査者が四十名近くにも達した。斯うな
形勢は甚だ危険なりしもの、戦術極めて非組織的なものであり、

大なる金力と官力との脅威の下に乗務員の譲歩に依りて再び後業
をしまった。以来此の結業次第に鑑り乗務員等は其の朱印を
金銀自体の非組織化にあるを切実に覚悟し、その組織と團結を目標
とする乗務員俱樂部を組織するに至った。此乗務員結業と一併に
大正印刷株式會社（朝鮮人の最も大なる印刷工場）に於ても同様の事
が起った。労働者側は最後まで抗争の決心を以て決死隊の組織ま
じり等々互譲に依り犠牲者を出す事なく無事解決した。四月には
平壤に於ては結業が連続して絶えなかった。平壤靴下職工大會の
依り四百餘名の靴下職工の結業となり職工側は雇主側の苛に
耐え難く結業し、更に結業要求に殺到し形勢が頗る不穏であった。こ
の頃平壤市内三十四軒の朝鮮ソバ屋には二百七十餘名が
結業の火の結業があった。





故阪谷子爵記念事業會



WHITE STAR LINE.

S.S.

お願
貴客の清静の段々明く候はる事地帯在中
種々有る事此就中初めの感謝の至に地帯中
有るに候育より積演出航以後する太平洋を
渡り米國に約三個月の間逗留するは既に
に静かある大西洋上の人と相成候ことも愈々明
なるは英國に上陸する久候中各地の安
神被下度候事此号

昭和二年九月一日

佐藤麟

頓首

阪谷男爵閣下

嚴重なる取締を望む

悪模様の横暴に就いて
(毎日申報社説)

公娼制度廢止説に就いては之を人類道義上に照して誰しも首肯せざる者はないであらう。しかし事實に於ては世間の諸般事が必ず道理と正義とがそのまゝ進行されないが如く今日直ちに其の廢止の實現を見ることは極めて困難と思はれる。我々社會の總ての制度及慣習はその正邪善惡を問はず我々社會としての必要及欲求に依り發生したものである。而してその歴史が永ければ永い程それを變革するに多大なる困難を感ずるのである(略)

成せしむるだけ整備された場合には論ずるまでもないが、若しそれが各人をして其の要求を充足せしむべき調和状態に在らざる場合にはその欲求が他の何者よりも熾烈なるだけ、それを充足する爲めに取る手段及行動は常軌として律すべからざるに至るべく、随つて社會の安寧及び秩序を紊亂し、風紀及調和を損傷すること莫大であらう。

公娼制度は即ち社會組織上に於ける、又はそれが發生する恐れのある缺陷に對する對策として發生したるものにして、我々社會の組織狀態が各人をしてその性慾を充足するに間然する所ない位發達整備の域に達する時にあらざれば一概にその制度を廢止することは疑問である。

即ち制度そのものは決して善美すべきものでもなく、希望すべきものではないにしても、社會に於ける他の缺陷を補足する爲めには已を得ずその存在を認むるに至るのである。唯我々は社會組織が未だ完全ならざるに依りその存在を必要とすることあるにしても、その制度が人道上又は正義觀に照して非難すべきものであり厭惡すべきものである以上、或るべく諸般の缺點及弊害を除去するに努力して許す範圍内に於てその犠牲を減少すべく圖らねばならぬのである。

法律を以て公娼の自由廢業を是認する等諸般の處置を講じて彼女等の生活上と人類保護に多大なる注意を加ふるに至るのは寧ろ當然のこと云ふべきである。しかし之等職業に従事する壽命の女子等は總ゆる悲惨と艱難に呻吟しつづめるのである。

大正十五年五月三日 (第三種郵便物認可) 第七四九號

在布哇天道教の同志に與ふ(上)

鳳谷生

(二十四行削除)全世界を範圍に萬億の教徒を持つた古い宗教家の眼から見れば、今日われ等が歡喜を或は鼻先で笑ふかも知れませんが、けれども地上の天國を建設せむとする勇士の一人は、目前の現實を無視し來世の天堂極樂を夢みる時代遅れの信徒百千よりも貴いのであります。私は只今布哇同道(譯註)同志(同志の意)に一言を告げるに當り先づわが教會の發展史を左の如く三期に分ちて申述べることに致します。

水雲先生の庚申年の創教から、義菴聖師の乙巳年「大告天下」せられた時までの前後四十年間を第一期と見ることが出来るのであります。この間が天道教の創創時代であつたわけだけ、最

も慘憺たる歴史の頁を占めてゐるのであります。水雲先生は創教五年目に、左道亂正の律で以て大邱重臺に於て斬刑を受けられ海月先生は甲午年に東學の亂を起し數十萬の生命と巨額の財産を賭したるも、三國軍隊の聯合攻撃により畢竟失敗に終つたのであります。續いて海月先生も矢張り左道亂正の律により成の年京城監獄に於て絞刑に處せられたのであります。

斯の如く生命財産に多くの犠牲を受けながらも、一般教徒同志は頑冥なる政府と貪官暴吏の迫害を受け西に東に追はれながらも、尚ほ且つ屈せずして暗裡に信教して來たのであります。即ち止むなく隠遁として續いて來たのである。故にその時の教徒同志は一日も早く顯進即ち表面的にも信徒の自由を得べき日の到來を渴望したのであります。海月先生は受刑の現場に於て一般信徒の苦しかるべき

心情を察せられ「子の死後十年を経ずして顯進となり、呪文の聲が京城の天地を振動せしむるであらう」と仰せられました果せる哉爾後十年にならざる甲辰の年に革新運動が起り乙巳に至つて義庵聖師は天道教の名を以て天下に告げ、弓乙旗を高く掲げるに及んで一般教徒同志は始めて安堵するに至つたのであります。その時に於ける教徒同志の犠牲的奮闘こそは、只今のわれ等としては想像も出来ないものであつたでせう。今迄生存してゐる老人教徒等の身体を検査して、見れば飢瘦杖跡の慘酷な傷がない人はいないのであります。

次には乙巳の「大告天下」以後より、義菴聖師の末年即ち庚申の年までを第二期と見るべきであります。その第二期の間は義菴聖師の統裁の下に各地に機關を配置し以て教理を闡明にし、儀式と制度を定め、小中専門學校

を經營し教會の面目を一新するに努力したのであります。而して甲寅年の前後から庚申に至るまでは、全鮮各地に大小教區(今の宗理院)が林立するに至り教徒の数は實に三百萬に達し朝鮮唯一の勢力を得るに至つたのであります。この間が僅か十四五年の短期に過ぎないのであるが、わが教勢は實に上述の如き長足の進歩と發展を遂げたのであります(未完 新人間より)

●日本人理事を排斥 忠南牙山郡道南水利組合は創立後僅か四ヶ月に過ぎざる今日に於て早くも各種の紛糾發生し評議員會を開いて善後策を講究する等頗る險惡な空氣に包まれてゐるが探聞する所によれば事の起りは同組合理事藤井氏が諸般の事務處理に公平を缺き且不正な行動を敢行する爲め組合員並に事務員一同の反目する所となり遂に表面的にまで排斥運動を起すに至つたものである(東亞)

同胞愛を發揮する時期

水害救済金を送らふ

(東亞日報社説)

洪水一退後の沙土を踏んで斃れたる同胞を求めれば同行と共に落ちて兩人一緒に溺死せる者等のことも頗る多くして慘狀其の極に達せりと威南よりの消息である。嗚呼これは同胞の難を座視したる我々に與へられた一片の暗示的教訓ではないであらうか。危難に遭遇したる同胞を救出するとは此際一片赤心の表現である。自己の生命の危きを知りつゝも救援の手を差し延ぶることは即ち神聖なる同胞愛の發露に非ずして何であらうか?

同胞よ!共に救援の手を差し延べよう。幾千幾百の生靈の運命は、刻一刻死の影に襲はれ、家を失へる父老、種なき兄弟、母に離れた兒女、この叫喚が諸君には聴こえないのだらうか? 雨

は猶降り續く、災害の範圍は更に擴大された。緊要なるものは先づ救急の策を施しつゝあるが暫時の風雨を凌ぎ得る飯食と一晩の温かい食事を與へる者々を除いては他に誰が居るたらうか。今は躊躇する時ではないこの急を救ふ爲めに急に行くべき時である。

或は六十餘戸の村落は全滅し或は十餘名の家族は全滅し或は樹上に蟠居して數日を過す者等の慘狀は形容に絶するものである母乳は満して嬰兒の哀呼する光景は想像するのみにても胸の痛みを覺ゆるのである。死者は既に五百を越へたと云はれ而して死を待つ許りの者に至つては其數は到底量り知り難いのである。新興、豊山、洪原、三水、甲山の一帯は饑飢そのまゝの生地獄を成せりといふも過言ではないのである。交通々信の杜絶で詳報は得られないが咸北咸津以北

地方の慘害もこれに劣らない模様である。

當局者は當局の責任上救済の途を講ずるのである。然れ共民間に於ては民間として當然救済の義務があり赤誠を以てこれに同情を表すべきではなからうか。一握の飯に表現されたる同胞愛の發露こそ總ゆる物質、それ以上に尚ほ貴重すべきであり本社が今江湖諸位に同情を求むる所以も亦茲にあるのである。既に救護第一班を組織して咸南一帯に派遣し充分なる調査を行ふと同時に危難の緩急に應じ他の救済機關と連絡して應急の策を講せんとするのである。本社に依頼される同情品は即刻前記救護班の手にて被災民に緊要なる物品として傳達されるであらう同胞愛の發揮は物質の多少を以て評せらるべきではないのである。富者の千金も貧者の一錢も皆同じく熱烈なる愛の發現である。同胞よ起て!一人でも奮起するとなく水害の救済に参加しよう。

莞島民に漁業權不許

日本人の既得權侵害だ

全南莞島郡青山面新興里は一個の孤島で住民の全部は漁業を専門に生活して來た所、大正五年に日本人島越仲藏が漁業權全部を獨占して以來職業を奪はれて各方面は離散したものの既に四十餘戸に達し生活難により自殺又は餓死したもの七人といふ悲惨な數字を示してゐるが之等住民は大正十四年以來沿海一帯に鯉魚の來遊するを發見し窮餘の一策として第三種船曳網漁業權を獲得すべく郡當局に願書を提出した所、昨年八月に至り日本人の既得權侵害だといふ理由の下に不許可處分を受け更に去る八月廿七日里面代表金一線外一名が郡廳に出頭し陳情する所あつたが郡では前記代表者の陳情が不得要領なりとし無謀にも小使をして暴力を以て逐出したので之に憤慨した代表等は更に道當局に陳情することゝなつた。

在布哇天道教の
同志に與ふ（下）

鳳谷生

その次は義菴聖師還元以後からを第三期と見るべきであります而して前述の如く第二期未までに教勢が大に進展は致しましたるが、併しその時の天道教は朝鮮的天道教であつて世界的には門外一步も出でなかつたといへるであります。所が三期の初まりからは人乃天主義を尙は一層世界的に宣傳することに努めた結果、日本の東京と支那の上海並に北京、露領の浦塩まで而も殆んど同時に弓乙旗が翻へるやうになつたのです。

而して人乃天主教は更に西伯利
 亞を経て遠く露都にまで入つて
 機關を作り、又更に佛蘭西や英
 吉利にまで進んで、今日では巴
 里、倫敦あたりからも誠米（敦
 徒から納める一食毎に一匙宛の米）が入

つて來る現象であります。併しわれ等はこれだけで決して満足するものではありません。所が今春に至り我等が平素多くの期待を持つてをつた布哇——東西兩半球の中央通路開闢たる樞要地の布哇に宗理院の設置されたとを我等は最も喜ぶのであります故に在布哇の教徒同志達に對しこの際一言希望を述べる積りであります。

前にも述べた如く、只今は内に於ては教會の總ての制度を一新し、信仰を益々堅實ならしむると同時に、外に於ては海外の發展に重きを置くべき第三期の初まりであります。布哇はその位置が世界的樞要地であるそれだけ、わが宗理院もそれに相應すべき機關を作らなければなりません。それが爲めには何よりも、奉徳（布教）に全力を注ぎ、以て多くの同志を得なければならぬのであります。われ等の遠大なる目的を達する點から見て、在布哇教

徒同志の役割は最も重大であると考へます。われ等の布徳は彼の外國人が自分達の利權を前に控へて、黄金を蒔き散らしながら宣教するものとはその根本精神に於て違つてゐる所を考へねばなりません。

而してわれ等は一面に於て布哇
との交通が不便であり、通信が
敏活でないことを一大遺憾に思
つてをります。屢々面對して嬉
しく所懐を述べ、相共に教理を
説き、教會の將來を協議し得る
とすれば、どんなに喜ばしいと
でありませう。終りに臨み開拓
初代の藝役者たる鄭鳳觀、金振
鎬、李聖三の諸氏に敬意を表し
て掛簾します(完||新人間より)

人乃天（詩）

牛耳洞人

君達は喰ふべきものがない時
でも
何時も饑く考へは持たずに
唯神のまします高い所のみを
仰ぎ見、そして拜みつ

『パンを恵み賜へ』と祈つたんだね
君達の信する神は——
決してアノ遠い、そして高い
天の上にまします
君達の最も近い、君達の身に
在はすのだ
だから神はキツト
憐れな君達に、パンを賜ふだ
らうよ
汗を流すことだ
そして働くことだ

新人間より

●夜學に無理な干渉 慶北榮州
郡内各所にある勞農夜學は二十個所以上に達し窮村農民の教育に不斷の努力をして來たのみならず今後尙は一同一ヶ所宛に擴張する計劃であつたが此程突然郡當局より私設學術講習所としての認可を得なければ廢止處分に附するとの通牒を發し簡易な夜學にまで無理な干渉をするので一般住民は郡當局の態度を非常に非難してをる(中外)

天道教の大衆的教化（上）

金明昊

朝鮮内の津々浦々、何處たるを問はず天道敎信徒のない所はないのであります。各地に旅行をする人は誰でも之を實地に感ずるでありませう。如何なる僻地にいつても高く弓乙旗（即ち天道敎旗）を掲げて天徳誦を讀む家があり、地上の天國建設に等しく効力して呉れる所の信徒あるを見る時、どんなに嬉しく且つ喜ばしきことでありませう。斯くも我等信徒は全朝鮮の所に擴がり、天道敎の力は全朝鮮の力となつてをります。茲に於て一つの心配は以上の如く全朝鮮の津々浦々にまで散在してをる我等信徒が果して全く同一な盡力をしてをるか否やかの問題であります。勿論努力をしてをる人も多いのではあるが、又左程の努力をしない人もない

はいへないのであります。而して努力といふ——その事に就いてろ／＼あるでありませうが、われ等は茲に誰でも努力し得べきものを見出し且つ實行することにはせねばなりません。然らばそれは何であるか。

先づ言葉を斯様に

致しませう。言葉は誰も使つてをるものです。人間と人間との間に立つて生きてゆくものとしては、誰でも言葉なしには生き得ることが出来ません。良い言葉も、悪い言葉も、悲しい言葉も、嬉しい言葉も——兎に角人間はさうした言葉を皆使つてをります。農夫は田や畑で、労働者は工場で、互に言葉といふものを交換してをる。茲に於て我等は成つてゐない言葉を恣に使つてはなりません。主義と目的の定まつてゐない人等は、よく詰らの言葉を使つてゐます。或る場合には鬼神説を否認しながらも而も鬼神を崇拜し、又或る

時には運命説を否認しながらも、ト者に會ひさへすれば直ちに將來の運命を聞いて見るのであります。彼等は斯の如く先づその使つてをる言葉から成つてゐないのであります。故に我々は如何に平易な、而して寧ろ馬鹿げた事柄のやうではあつても、言葉そのものを條理の立つやうに、使はねばならぬのであります。即ち畦などと交換する言葉でも、それが體ては

一種の説教となり

それによつて我等の生活が改善され、風俗が矯正されるものであらねばなりません。特別な場所に於て立派な辯士のなす講演説教をそれこそ、民衆を救済する所の眞の力あるものとなるべきであります。如何に窮村僻地に生活してをる信徒同志でも、必ず交換する人間ををり、言葉と交換する對手ををるべき筈でありますから、尋常な言葉の中に

も、大衆を覺醒せしむるに足るべき力のある言葉を常に使用せねばならぬのであります。例を擧げていへば、上述の如き鬼神説や、運命説が現はれる時にはそれが詰らぬ迷信であることを悟らしむるやうに骨折らねばならぬのであります。そして話題を換へて對手に何等かの新智識を與へるやう心掛けねばなりません(未完 新人間より)

●少年會義捐金還附強迫 朝鮮少年總聯盟金堤少年同盟では這般第一回朝鮮少年蹴球大會を開く事に決定、經營不足の爲め一般有志から義捐金三十二圓五十錢を受け取つた所、金堤署より前記義捐金並に同名簿を押收し同盟委員の一人たる郭福山君を呼出して該義捐金を一々返還せよと命じたので郭君は止むなく各義捐者を訪問しこれを返したく所有志一同は全部受取らず自費的義捐の理由まで書き署名捺印したが署より尙ほも干渉するので全部返還してしまつた【東亞】

せん(未完 新人間より)

日曜新聞 第三十三卷 第七四六號
昭和三年九月一日
天道的教化
（三）

（4）
日一十月八年三和昭
信通想思鮮朝

凶作も穀價は低廉
今年より決して上らぬ
今年の早稲により朝鮮産米は平年作一千五百萬石の二割強即ち約三百五十萬石の減収を豫儀なくされ一般穀價の暴騰を豫想し極度の恐慌を感してをるやうであるが、専門家の語る所によれば事實はこれに反し昨年の大豊作並に今年の満洲方面の豊作により穀價は平年作よりも決して上らぬことである。即ち今年の米價相場から見れば八月に入り約二ヶ月前より一石につき二圓五十錢位の騰貴を示したとはいへどもこれを昨年並に今年と更に平年作たる大正十五年の相場に對比すれば

十錢の安値となつてをる。以上は米價であるが然らば極貧者の常食とする外米並に満洲粟はどうかであるかといふに之等の最近の一石相場は

| | |
|------|-------|
| ▲臺灣米 | 二二圓〇〇 |
| ▲關貢米 | 二二圓〇〇 |
| ▲滿洲粟 | 一二圓三〇 |

で昨年に比し僅か數錢位の高價となつてをるに過ぎず、而もこの相場は朝鮮内の豊凶によつて左程變動すべき性質のものではないから凶作による穀價の騰貴は決して心配するに及ばざるものであらう【毎申】

●先生を對手に告訴 全南和順郡綾州面五里洞居住の金斗煥は綾州青年同盟支部の農民夜學教師朴文洙を對手に自分の長女金莫同（一八）に對する名譽毀損の告訴狀を光州地方法院檢察局に提起したが事件の内容は前記金莫同が農民夜學に一時通ひ其後家庭の反對により退學した所、退學後に於て同女の操行に關する種々面白からざる風説が傳へられるので多分教師朴文洙の受傷的宣傳によるものと信じ本訴に及んだものである【中外】

●點字講習開催 京城市内天然洞にある濟生院盲兒部では朝鮮盲兒協會主催の下に來 九月三日から五日間點字、盲文の講習會を開く事となつた【中外】

思想犯罪者の激増で
假監房を俄かに築造す
思想犯罪人が日を逐ふて激増するに從ひ刑務所内に於て主義宣傳をなす虞れある爲め司法當局では約四十萬圓の豫算を以て全朝鮮の刑務所監房を擴張し重要な思想犯罪人をそれ／＼獨房に收容せんとする計劃については既報の通りであるが、就中思想犯罪の最も多い京城西大門刑務所では既に狹隘を感ずるに至りたるを以て此の程建坪約百坪位の監房増築に着手し目下大なる勢を以て工事を急いでをる。尙ほこの監房は約百餘名を收容し得るもので専ら思想犯罪人のみ收容するさうである【東亞】

●講演して始末書 博川留學生會ではこの程地方巡迴講演を行つたが最終日たる去廿四日の講演中、韓東作外二名の講演が不穩であつたといふ理由の下に三人共博川署に呼出され一々始末書を懲せられた【東亞】

●歴史講座禁止 在京公州學生親睦會では六堂崔南善氏を講師とし去る廿八日から同地に於て朝鮮歴史講座を開催する事とし、韓公州署に集會許可方を出願した所、該署では道警察部の方針を理由に忠南管内に於けるこの種の講演及講座は絶対に禁止する旨の言渡があつた【東亞】

▲一面一校の實現が、財源難に難産のやうだが、平安南道では頗る奇抜なる解決方針を設けた

▲三ヶ面を併合して、一ヶ面宛とすれば、現在の普通學校數のみにでも立派に一面一校となる筈、これが妙案でなくてはならぬ【東亞】

（五）
日一十月八年三和昭
信通想思鮮朝

的教化 (下)

金 明 昊

更に又二十世紀の今日に於て未だに丁論を惜むような人がをればそれは世界大勢を説き、極く卑近な言葉を以て断髪の必要を力説すべきであり、虚禮を尙び偶像崇拜を事とする者に會ふならば、われ自らに向つてその位を設くべきを直接間接に説くべきであり、其他總ての風俗、習慣、制度に對し、その正邪善惡をよく判り得るやう、或は昔話に托し、或は諺の例を引いていふのが無學な大衆には最も必要であります。これは直接傳道するものとは立場が違ふ故に可成直接よりも間接に説くのがよいであります。次は總てを

斯様に實行する事

であります。凡そ如何なることを問はず、口先ばかりでいつて實行をしまつたならば、終に

は言葉の借用で片手結果となるのであります。故にわれ等は總ゆることを實行し以て他人に見せるやう努力しなければなりません。確かに良い事柄と考へて實行致しましては始めは勿論嘲笑を以て之に臨むのであります。けれども遂には感服するやうになる。一例を挙げれば過去に於ては奴隷に對し

敬語を使用すれば

誰も皆笑つてをりました。併しながら實際に奴隷に對してまで敬語を使ふ人に會へば、威服せざるを得ないのであります。今日、子供等に敬語を使ふのも矢張り同様であります。故に如何なることを論ぜず、苟も是なり真なりと考へる事柄については躊躇する所なく自ら實踐躬行して人に見せるのが何よりも力強い効果を得るのであります。多くの雄辯よりも些細な實行が、その効果に於て最も偉大である斯る見地から見ても、單に口先で以て人に天道教を勧めるよりも

先づ實行を天道教式に切り替へばなりません例を挙げれば

- ▲待人接物を天道教式に
- ▲冠婚喪祭を天道教式に
- ▲家庭生活を天道教式に

その他の人事萬般を天道教式になし以て、人が自からにそれを模範とするやうせねばなりません。私は未だに我が信徒同志にして、使ふ言葉も眞面目でなく實行の方面にも不足な点がないではないものと考へる一人であります。同志諸君が皆同じくこの二つを實行するならば、朝鮮全体が天道教化することも難事ではないと同時に、地上の天国建設も容易なる事と考へます。人種を教ふ人たらむとせば、これ位の事は是非共せねばならぬと思ひます(完)新人間より

の土木建築業者たる柳島吉良が擔任する事となり、該事業を遂行する爲めこの程同氏木浦に至り種々調査する所あつたが同氏は既願の坪數外に更に二萬坪の追願を甲乙兩案の折衷案ともいふべき缺點百五十間の建築をなす以て完全な築港工事にする意向のやうである。右の計劃によれば總工費は約百二十萬圓を要するから個人能力で新大事業の築港を完成するには國庫補助も相當仰ぐに至るべく尙ほ地元民等の熱誠ある後援も希望してをるやうで、元地住民には約十五萬圓の出資を求め他は事業計劃者側に於て工面しる地元住民の出資援助に對しては工事落成後純益の六割を配當する事として目下木浦の有志に交渉中である(東亞)

●國際青年デー禁止、來る九月二日の國際青年デーを記念、べく慶北善山、全北全州の各青年同盟に於て夫々準備中であつたが何れも禁止された(東亞)

奇怪な表彰式

(東亞日報地方時話)

去る廿九日午後二時、仁川府山手町公會堂に於て、仁川日本人富豪力武次郎氏の功勞表彰式を舉行し、力武氏に對し記念品として屏風一雙を贈つたことであつた。その力武氏は赤手空拳で朝鮮に來て數百萬圓の富を蓄へた人物である。同氏がどれ程仁川地方の爲めに貢獻したものであるか吾人は知らないのであるが、若し仁川地方の爲めに盡瘁する所あつたとすれば、それは自分等の利益の爲めであつて朝鮮人に對し如何なる貢獻をしたかを吾人は曾て聽かなかつたのである。せめていへば朝鮮人の部落にある大きな家は悉く力武氏が獨占してをるといふ貢獻位のものであらう。

×
力武氏の功勞を表彰したとか、せぬとか、そんなことは我等大衆の關知すべき必要もないけれ

ども、その表彰式の發起に所謂朝鮮人一流の資産家にして總ての公職に携つてをる某々等が出馬し、貧困なる朝鮮人間に駆け廻つて零細な金銭を集める一方表彰式の諸準備に奔走し、殊に或る者に至つては當該席上に於て祝辭を述べ等、普通の人間として想像もなし得ないほどの奇怪千萬な振舞をするが如きは其の心事全く測るべからざるものといはざるを得なかつた。その所謂表彰發起人たるもの、何れの字句に、朝鮮人として當然感謝を表しなければならぬ實績があるか。それは多く論じなくとも、その發起人たる自身の良心に於て判斷が出来るであらう。

×
發意を表したるもの、如く裝ふてその具に供したのには許すべからざるものである。殊に又彼等發起人等が自己の富力と公職の地位を利用して、貧窮な朝鮮人間の駆け廻つて零細な金銭を集め、それを以て彼等が活動の源泉に充當したのを、吾人は最も憎むのである。彼等發起人たる某々は昨年在滿同胞遭難の際に一圓の義捐も冷淡に拒絶した者達である。今回の力武氏表彰に對し少からの金銭を齎出したのは其の赤誠至り盡せりであらう。

×
彼等發起人中の或る者は、こんなことを平氣にいつてをる。即ち斯る手段を講じ以て、その富豪をして朝鮮人の公共事業に貢獻するやう仕向ければ、いはばないかと。われ等大衆は斯る不純な何物をは全然望みもしない。斯様な詰らぬことをいつて大衆を欺きつゝ、一個人の力武氏に對し阿附せんとするのが唾棄すべき所爲だといふのである。社

會の裡面に於て斯る芝居を籌策するもの、ある所以も吾人は想像することが出来る。斯る籌策に乗せられる人々の無智も憐むべきであるが、その籌策者としても豫期の收穫は愚か、具眼者の嘲笑を免れぬのみであらう。

●長春朝鮮人居留民會、在長春朝鮮人居留民會は今春以來或る種の不祥事件により役員對居留民間に紛糾を重ねて來たがこれが解決の爲め去る廿六日午前十一時より長春普通學校内に於て領事館の原田、佐藤兩書記生、警察署高等主任世上警部外數氏臨檢の下に臨時大會を開き役員の改選を行つた。會員總數二百三十七名の内、出席者百三十六名に達し、張會長より開會を宣し諸般の経過報告を終りたる後左の如く役員選舉を行ふた。

會長 金道根 副會長 盧聖鶴 議長 朴龍洙 會計 趙普根 評議員 李昌東 金東晚 許英(以下略)

朝鮮通信

郎三卯爾伊
端達木馬
一總平太漢京師
社信通鮮朝
六〇六一門化光話電
二二二一城京雲德

法廷に於て
(4)

種
換
(手記)

又被告は、被告を斯くも（略）を主張する者が、何故に日本人を妻とし、其處に何んか？理由が潜れぬやいひか？被告の性格からその將來の思想から見て、どういふ人でも必ず連累者があり、又被告は、煽動者があるに違ひないのであります支那服の事案と云ふの方面から考へれば、被告から謀殺の計劃である。よつて、刑法第一條により死刑を科す。

こう云ふ重大物を極刑にしないと、後の事の誠けにならなといふ言ひ終つたのであつた。

背景と地盤の解剖

續誌「三千里」より

崔麟氏

滄浪客

『天道教はそのまま、放つてをいても潰れる』それは、總督府の最高の方面から、獨りで流れて來た言葉ださうである。

(十六) 行削省

現在の天道教の裏面を見るに、第一の方法は、現下客觀的情勢から見て、到底不可能でありそれだからといふて、第二の方法を取らふといふのは、それは既に民衆の人氣（原文略）を買ふて其の時では天道ではない。而して百戰を経て來た古つたものの指導者がその間の事實を知ら

ないのでもなく、結局崔麟等最
高の船頭を天道教といふ船に乗
せて見やうといふ一つの藝頭に
過ぎながつたのである。

しかし此の結論は、某邊だけが有つてをる感想ではない。今日民間の急進論客達も、一樣に符節を合せたやうに持つてをるものであり、その理由を此の二つだけにすることは出来ないから、觀察の證據を此の以外に置かなければならぬ。

政民兩黨の提携運動

【毎日申報社説】

政民兩黨の提携運動は議會召集期の迫るに伴い漸く表面化せんとする模様である。即ち意外の突發的事情が發生せざる限り來週中には兩黨首腦の正式會合を併し、(一)立憲政治の本義に照して議會政治を擁護し、他に脅威されることなく憲法に認められた言論の自由を徹底せしめることに努力する事(二)政黨の不信用を回復する様相互協力する事を目標として、提携に關する折衝を開始する模様である。政黨が有つて無きが如き事態に放置されて既に一年有半、何等かの更生策を講ぜざれば或は永久に國民より見棄てられる運命に立ち至るかも知れざる所であり、又現在政黨政治議會政治を否認せむとする傾向が相當醜惡な露出される状態である。傳

此の最終目標に對する確信が生されざる以上如何に政民提携運動が表面化するにしても、結局提携運動そのものに終るべく、假令一時提携を期し得るにしても豫期したる政權が來ない日に直に分裂を免れないのである。然して現下の政情は、政民兩黨の提携に依つて直に政黨内閣が現出されるには餘りにも複雑微妙なるものがある。又政黨政治に對する國民の總意が到底此を許さざる状態であつて、如何に自負する所大なる政黨人等であつても莫逆此の大勢を理解せざることは無い筈である。目前の局面轉機を期することに焦燥して一時的提携を劃策し斷行せんとしても、全目的を達する政權獲得が結局幻影に過ぎないものであり、又政權獲得が結局幻影に過ぎざる以上目前の局面轉機には何等の意義をも認められぬ。そこに幾何の可能性を認められると云へよう。清浦内閣當時の護憲運動は、政黨自體の意思よりは國民總意に基づいたものであつた。特權階級の清浦内閣は國民の同意を

ざる所であり、又政黨に對する國民の信望が未だ離れなかつたのである。國民總意は政黨内閣を希望し、又政黨に對する責任を附與したものであつて、政黨憲政國民三黨の提携は意義が存し、又提携に依る効果を期し得たのである。然し現在の政黨内閣は國民の總意が必ずしも此を拒否せむとするものではないが決して満足するものではない。既成政黨が政權を掌握するのよりは寧ろ現内閣の存続されるのを希望するのである。次期政權を目標にする政民提携や憲法擁護には決して國民が共鳴せざる所であり、又現在内閣を送りて連帶責任を負ふた政民兩黨にして倒閣運動に當るのは自家撞着の甚だしきものである。而して倒閣運動に出ない限り次期政權の獲得は期し難く、次期政權を目標にせざる限り政民提携や憲法擁護運動は全然意味をなさな

は實現難に屬することである。但既成政黨の焦燥相は、物語る以外に、何等の意義を有し、何等の期待を掛けることが出来る

と云へよう。

朝鮮通信

崔麟氏 (續)

滄浪客

背景と地盤の解剖
崔麟氏 (續)
「天道教は、宗教團體だ」といふのも、一つは「天道教徒の團結は、積極的團結でない」といふ二つの條件である

結局天道教も、他の宗教と同様、科學の前に棄てられ、屈服してをり、であるから人類社會から逐はれて了ふであらうと、見る公式的無神論者の立場から見れば、天道教の立場から見れば、天道教は、宗教團體だといふのも、一つは「天道教徒の團結は、積極的團結でない」といふ二つの條件である

「天道教は、宗教團體だ」といふのも、一つは「天道教徒の團結は、積極的團結でない」といふ二つの條件である

天道教の創生は、李朝の末期、抑壓された民権を伸張する爲めに民衆運動が、宗教の法衣の袖に隠れて現はれたものである。恰も舊帝政露西亞の代に、一切の文化運動まで、正教運動の看板の下に入れなければならぬ。在が許されなかつた。同様に、萬一當時の治者が民衆の自由を、幾部分でも認定したならば、初代の崔麟氏も、國代の崔麟氏も、民衆運動の法衣の袖に隠れて現はれたものである。恰も舊帝政露西亞の代に、一切の文化運動まで、正教運動の看板の下に入れなければならぬ。在が許されなかつた。同様に、萬一當時の治者が民衆の自由を、幾部分でも認定したならば、初代の崔麟氏も、國代の崔麟氏も、民衆運動の法衣の袖に隠れて現はれたものである。

天道教の創生は、李朝の末期、抑壓された民権を伸張する爲めに民衆運動が、宗教の法衣の袖に隠れて現はれたものである。恰も舊帝政露西亞の代に、一切の文化運動まで、正教運動の看板の下に入れなければならぬ。在が許されなかつた。同様に、萬一當時の治者が民衆の自由を、幾部分でも認定したならば、初代の崔麟氏も、國代の崔麟氏も、民衆運動の法衣の袖に隠れて現はれたものである。

刊 日
朝鮮通信

皇太子殿下

御降詔
一萬人中

出する。○
さす二月廿五日壬午御成婚四十
親奉齋藤實子系の皇位を繼承承
継る應太子康寧が誕生遊ばぬれ
た。御教子二方とも御健全其
様なもせられ、皇室を初め内
侍共御親賀の慶儀を表すに大
第百あるの庚辰十四年に照宮殿
下の御誕生を初め、内親王親近殿
萬貴誕生御幸遊ばれたる、未だ
親王の御誕生を見えぬつた所、
今同進太張殿下の御誕生が御幸
天皇、皇后兩陛下を初め皇族内
外の喜びは益々衆なることを奉
奏仕る次第なり。

眞徳 聖武

て世界の大同の爲め、日本國民
の皇室を尊崇するの情は益々深
まり、近年に至りては皇室
中心の國民主義が最高潮に達し
てゐる。日本國民對於以ては皇
室は英國其他の皇室並異り、血
統的親近性と宗教的尊嚴を有せ
ちた工を、今日も東京電を見
れば、皇太子殿下御誕生のサイ
ヤを聞てや、奉祝の群衆が二
重橋前に集り萬歳を奉唱し、路
上は互に拍手を打つてを慶返
し、我々如きこと下ある世界何
れを問はず、日本國民の狂狂
なる慶祝は皇太子殿下の御誕生
を奉祝する氣分を以て論を過

かせられても、健全に御生育望
ばされ、後日、日本を世界の文
化を平和に随れて、人類の幸福
の爲めに大貢獻を爲さる英主
となせらるるやう祝福し奉る
次第である。

背景と地盤の解剖

(雜誌「三千里」より)

崔麟氏 (韓)

滄浪客

(筆略) 今日の朝鮮で、步調を
共にし得る最も多くの友を有す
る者は、崔麟氏であらう。又三

「朝鮮に間口通賣する彼方派の
シナカカリは、英雄がゐるなら
うか？」
「居ても居ないそれは即ち無學
民才」

この二つの結語は、徹頭徹尾
最も地盤に對する朝鮮民族の刻
待が如何に大きく深かいかを説
いて餘蘊あるものだと思ふと信ぜ
るのだから。

(完)

と云てゐる。然し、此の如き事、
 斯る時代、實業の盛衰に依つて、
 日本は今日非常時に處して處
 るといはれて居る。此の非常時
 が決して久しく續くものと思は
 れる。國家の生命が永遠なる
 と共に國家の非常時過時として
 發生するのみならず、國家の文
 化的使命は、脆弱なれば貴新に
 誕生遊ばれた皇太子陛下に於

南某地の青年富豪鮎川氏を以て
氏の事業に大金を傾注するシン
バの多いことも事實である。
氏の今日の背景と地盤が、一
朝一夕に出来たものでなく、三
十年間積立置かれ、巨額を築
つてゐる。鮎川氏の結核病は、
今日劇断で潰瘍以上の大出血を
臥せりて、脱床する前軍が為らう
と、かゝる手術を施さるゝ。

滿鐵改組の問題

南滿洲鐵道株式會社は創業以來二十七年を経過してをる。滿洲事業以來内外情勢が激變混濁その改革必要論が頻々發せられ、東軍は特務部を設け、財政調査、産業振興、其他經濟方面の廣範圍に亘り指揮監督を盡しつゝある内、滿鐵の改組問題、現地の經濟的發展に多大なる關係を有するを以て、研究を重ねた結果、近日その成案を見最近安原總承力で受けたとの報道があり、日滿各方面に多大の衝動を與へ、滿鐵の三萬社員は改組に反對を宣戰したとせる。

○天眞燦爛の新聞記者

見よ、此種新聞記者の喧嘩社説

○天眞燦爛の新聞記者

見よ、此種新聞記者の喧嘩社説

×
正式發言しない今日、各各方面から批判を避ける觀の態度を取れるは、招務省にては解剖的改組案は財界の要

求に辭は認めざるを以て不承なるを以てし建勳軍艦其他長閑側にも各得是非の意見を有してをるが、改組問題が世間に傳ふに伴れ、一時七十國連年の混濁を以て滿鐵線は六十國連に轉落し此邊も亦最近運集并効同社債の應募額は比較的少額である轉落の對界不況の近狀は皆上であらうが、此改組問題に關係を有するを觀察せれる。社内の改組はもはや滿鐵線の經濟參謀部で管掌は擧げざる意味されたるを以て、同一問題に對する上では又異なる。社會の現在の滿鐵事業版直系を傍案會社總體數十社に改組せらるるといふ理由は(一)内外情勢の變化(二)事業經理の合理化(三)日本實業の誘導(四)對滿政策の根本精神遂行等である。改組反對理由は(一)持株會社設立は不必要であること(二)軍部の會社支配權實施の統制機關以外の行政事務執行與は不可なり等である。改組問題が如何なるや、關東軍は再検討する必要を認むる、目下

滿鐵は協力して現地案を作成し、つゝあつた傳へ、及務務兼陸軍及外務の三省にても調査中といふことである。

最近日清戦争の時に、現地案は南滿鐵道の時期毎に、その首腦者を更迭して、從來から日本政黨の財源となつたの對策である。關係各省の反對氣勢を束示し、並を結果は、現地案の對面衝突を免れ、形勢であり、更に政治問題に速に進展するの覓解法であるが、現滿鐵内閣の運命までも左右する大問題であることは勿論である。現下日本内政問題中最重要な性質を帯び、如何に歸路を省よか、また豫備計畫など、しかし政治、經濟並關係者が多數であるだけ、世間は深甚な興味を以て其の發展を見なせる。

朝鮮米の年産高は、中大體十、二十萬石、米穀移出を除けば、凡そ八、九萬石、朝鮮内消費一

◇この八百萬石の白米を、誰れが何ういふ風に食ふてをるのか
は米當局の調査に依れば

◆日本人がゞ亞子遊園でさへ前衛軍將領石之井閣卿歸入幕に于て七萬兩を平均消費見手八升一年度一石卒身其の一層は常弊だが適量惜しみずしが去年三斗賣價騰貴の故に三升賣價も物難民衆が全街頭の精氣盡し受けた天足ではあるが仙次郎で春節限際惜月三斗販賣費盡すは堪忍ないやうであらば、

◆東亞子樂死するに、酒の豪量進類は悉くゆつ満洲果又典臣超前水豆式齋々莖夢半時番中至獨損毀於又は神や耽樂癡の實なきで、其の日を遣つ障なきであらば、又半金と云ふ代

◆これも史丹秘諷刺萬國帳中松陰の筆の廣空照欄舞の營養分は染ない草根茶皮で賑ひ賣、

◆本日此各封封陽儀紀事御封翌天更新するも、寒風身の邊日ぬき人事更に難しかん様丁に於ける。鰯米の餅は僅微丁

斷然嚴禁。世

三

切實な必要があるといはねばな

と位には大體欺れ易いことであ

南某賦の青羊富彙燦刃を故也

125

天送會七年

肥和堂印

故阪谷子爵記念事業會

天道教

其の七十年紀念を聴き
(朝鮮日報社説)

現實の社會、無邊の衆生等に對するに憐憫、憤懣、及び懊惱の情が先づ人道的純愛の泉から湧き来ることは、先驅者の胸には恒に同一である。しかしその救済と解放の手段に於いては、或は理想の彼岸に歸依の度濟をせんとし、權力層の人等の倫理的反省を促し社會生活の條件を改善せんとする者もあり、或は憐憫の對像たる抑壓を受ける大衆に對し其の鬭争的なる團結の「力」に依り自らを解放せんとを圖る者を生ずるのである。前者は宗教家、後者は最急的な現代の先驅者となるべきものである。かかる手段の差異に因りては往々互に氷炭の如き立場に對立するまでに至るものである。七十年前に於ける慶州の一角より起ち、廣濟衆生の大願を

繼げ、東學の名を以て廢政と窮乏の曠野に彷徨朝鮮人民衆の間には慨然奮起せる水雲崔濟愚のそれは前者の如くであつて後者に歸着したものである。彼は地方名門の出といへど其の實は一村夫子の身分である。村夫子として起ち、一世の風雲を捲起し朝鮮に於いて小さからざる史的作用を繼承せしめた。彼れ及びその天道教は偉なる所ありといふべきである。

歴史的機縁と社會的大意識を離れては獨自的に偉大なる一個人が鑄造さるるものではない。されば數千年受難の連續たる朝鮮史と五百年頹勢の末紀たる漢陽朝高宗前後の渙散せる朝鮮の社會を經緯と原野とするにあらざれば崔水雲が勃興することは出来ぬであらう。數千年の受難は即ち「朝鮮の血」の無慘なる流れであり、數千年積み重ねた漢化主義的又は崇外的傾向の跋扈は即ち當然早くより確立されあ

るべき「朝鮮心」の無難なる展開であつたのである。而して又當然擁護されなければならなかつたものは、昔も今も痛苦の裡に小さくなつてゐる白人たる民衆そのものであつた。此の三者の機括を夙に悟り、其の冒險の第一歩を踏み出したものは崔水雲であつたと見らる。彼れが斷頭臺に上り、其の後を繼ぐ者が彼の往ける處に行くことも寧ろ當然の因縁であらう。

地乃天、人乃神の思想は久遠なる原始時代より朝鮮人の生活を一貫せる所であり、天地山川の名稱を家屋身体及族統等に對する言語學的見地よりも充分に之を證明することが出来る。×

力を以て起る革命、舊には舊來の事あり、後には三教の一新の探的なものあり、其の簡素なる理論と粗約なる教義なりとはいへ、時代の民衆に於て魅力發揮する異因であつて東學黨の人等が大小の紋を以て重要な歴史的使命を繼承するに至つたのである。しかし水雲は本來未だ達者であつたであらうが、分立して一し得ざる今日の天道教を歴史的作業に於いて其の勢力を殺せしめた所がないでもない。これは受難期に於ける朝鮮人としては少なからず遺憾とするものである。彼等の意義ある奮闘は臨み大なる感慨あらむとす。

「女子の會合の席上に、男子の傍聴は不愉快である」といふ。×

檀友會慶北榮州支會では、日創立大會を開いたが、其は「女子の會合に男子の傍聴は不愉快だ」と一切の男子を排除した。これは、大變なものであつた。

(中外日報社説)

水雲崔濟愚が人乃天の思想を唱道し、天道教の基礎を立て、から七十年である。凡そ一民族の存在を世界に認識せしめんとすれば、其民族の精神から出た或る思想的産物がなければならぬことは贅言を要せぬ。天道教は實に朝鮮人の精神的産物である同教が儒佛仙三教の綜合的宗教体系なりと、と新しく其の價値の大小を論ずることはない。天道教は朝鮮獨特の思想的産物であつて、若し人乃天の思想的体系を近代朝鮮人の唯一なる思想的産物なりといふことが出来ないならば、少くともそれが世界に朝鮮人的存在を認識させることの出来る朝鮮人の思想的産物中の一つといひ得るであらう。是れ實にかかる意味の下に吾人は同教が今日を期して七十年の紀念式を盛大に擧ぐるに慶賀の意を表するものである。

しかし轉じて同教の過去と現在を觀察し、此機會に同教に對する數言の寄託をしたい。崔水雲より孫義菴に至るまでの同教は東學黨時代であつて史家特筆すべき政治的活動をしたが、乙巳(明治三十八年)に至り孫秉熙が初めて天道教なる名を世上に宣布してから、教會の組織と擴張に努力する一方、他方に於いては半島の社會教育にも相當の功績を立つるに力を注いだのであつた。而して天道教の此の時代は組織の時代ともいひ得べきであらう。しかし三一運動以後即ち孫義菴歿後の同教は如何なる状態なりや、約言すれば東學黨時代たる創始時代と組織時代を經由せる同教は今日に至りては分裂時代にありと見る事が出来る。

教、白自教等全く朝鮮には宗教洪水の如き感が無いでもない。細胞の分裂も是より甚しきはないであらう。斯く小宗教家小信仰者に根絶せざる宗教病の衝動を受け群衆が割據せる外に正統派を以て自任する天道教自体内にも兩派並立してをり、別に六任派だの聯合會だの稱する派まで分立してをるが、是れが分裂もすれば小教會の一つでも維持困難なるを感しつゝ尙廣濟衆生を唱道する勇氣ありや否や頗る疑はしいことである。何時の世にても萬事都合よく運ぶ秘訣は智者の不一致より愚者の團結にありといふことを水雲の信仰者諸君は知らねばならぬ。

斯くいふのは決して天道教を擅に批評せんが爲めではない。天道教が朝鮮人の精神的産物であり、殊に其の宗旨たる人乃天主義には動かすべからざる真理が含まれてをるものと認める。殊ことを認め、同教の發展を促すは當然の道理といはねばならぬ。同教が充實し發展するに同教自体には勿論、朝鮮民族にも有利ならんと斷言の下に吾人は同教信仰者諸君が信仰行動の間に存在せる矛盾を一日も速かに除去せよといふ要求に過ぎないのである。同一宗旨であり同一教堂にて侍日まで同じしつゝ新派舊派なる野俗にして雅量なき感情的境域線を固くし相互疾視するが如きことがあるならば、其の教々兩肩に擔ひ世界に躍出せんとする者としては當然避けねばならぬことである。冀くは今同教布徳七十年を記念する記念を記念する爲め新機轉を展開するあらむことを

◇故池上總監は安政四年四月生れで、昭和四年四月四日に死んだ。而其の名は四郎
◇凡が偶然ではあるが、四の字に因縁があつたことも不思議(中外)

◎ 甲 鐘を撞く朝鮮の天道教（上）

（雜誌批判三月號） 印 虎 珍

自分は天道教を愛する。否寧ろ愛するといふよりは、或る程度までの過渡期的役割を企待した。しかし遠うの昔に永遠に歸らぬ夢となつた。今更ら其の死體に鞭して、愚痴はこぼしたくない。たゞ其の原因でも知る爲めに解して見やう。

△天道教發生の原因 一個の社會的事實が發生するには、それに對する原因と動力がある筈である。故に天道教の前身たる東學の發生の原因も矢張り、其の當時社會的條件があつたのである。之を究明すれば、大別して三つに分つことが出来る。第一主觀的の國內諸條件、第二客觀的の國際的諸影響、第三古今東西思想に對する諸觀念であつた。然らば國內的條件は何うであつたか、興宣大院君が政權を執つた以後、農民の生活は窮困を一層深刻

（第三回）

127
土
朝鮮を信
不

なりしめた。それは資本主義文明を頑強に拒否しつつ、鎖國主義政策を唯一の看板とし、民衆を封建的領域下に益々隷屬せしめ、景福宮を再建して王室の威儀を發揚した。その結果として民衆に各種税率を増徴し、人民の貢役を過重ならしめた。それが爲め農村は一層破滅に直面し、實價二十分之一にも當らぬ當百錢を流通せしめ、一般經濟機構に一大破綻を招かしめた。而して當時の民衆をして、何等かの新たなる進路をあこがらしめざるを得なからしめた。

而して其の當時の國際的情勢は、隣邦中國には英、露、佛、獨、米、等の資本主義列強の激烈な侵略を受け、國勢は日に疲廢した。そして南支には基督教を背景とする洪秀全の叛亂が起り、四千年の老大國たる清國の運命は、風前の燈火の如き危機に直面した。又日本内地には明治維新を斷行し、新皇の氣運

天の勢であつたが、かかる國際的環境や大勢は、朝鮮に於いては政治的に開化、守舊兩派を激烈に對立せしめ、民衆をして封建と官僚の壓迫と擯取に堪へず、民衆的反抗運動の起る兆は十分である。茲に於いて人心は忽ち顛覆し、父不父、子不子、君不君、臣不臣となり、上下は無秩序となつたのであつた。これは過去に於ける既成宗教の當然踏むべき過程であり、ここに崔濟愚が登場して、東學が發生する諸條件となつたのである。

斯く天道教の過去は、其の當時必然性を有して、發生したのであり、之を領導せる領導者は何時も民衆の先驅者的役割を履み且演じたのであるが、天道教が朝鮮に生れ且長じ、それだけ發展したのは、當時民衆の要求に順應したからであつたが、今日では早くも民衆の意思に背反し百八十度的发展方向に走つた。これも當然の事である。(續前)

天道教

◎市鐘を撞く朝鮮の天道教（中）

（雜誌批判三月號） 印 虎 珍

△工場代で教會堂を建立 資本家は巨額の資金を投じて、工場を建て機械を導入し、原料を買ひ市場で勞働力を求めるので、初めて剩餘價值を搾取する。しかし天道教の領導者は群衆を前にして、欺瞞的暗示的の言葉を與へて、貧しい民衆の軽い財布をはたかせる。これを實際目睹しない者は、或はそんなことにあるまいと疑ふかも知れないが、事實は蔽ふことは出来ない。然らばこゝに二三の實例を挙げて見やう。

天道教の前身たる東學は、當時其の發祥地たる三南地方で大發展を告げた。しかし甲午（明治二十七年）の東學の亂の時、政府の大擧壓を受けたので、其の以後は三南地方は其の姿を消すばかり取衰へた。しかしそれと反

（第三編認可）（5）

彼の貧弱な火田民達の負擔では、年に十
口位には達するのである。然らば彼等は國稅
を幾ら宛位負擔してゐるかといふに、それは
悉く一二區に過ぎないであらう。天蓮教會
への獻納は、誠米、祈禱米、喜捨金、特別義
捐金等いろいろさまざまな理由を作り上げて、
此の貧民の財布から騙取するのである。義憤
の念ある者が、何うして黙返されやう。

△信徒の金で酒色に耽る 所謂教徒の義捐
金といふ名目の下に、食事毎に一人一匕づつ
の米代を合せた金と、一週間に米五合代を祈
禱米と稱して集めた代金を彼等は定期收入と
し、又非常收入として喜捨金、特別義捐金等
の名目の下に集めるのである。此の外にも各
種の口實を作つて、一週間に旅行費とか、京
京旅行費とか、何とか運動費とか、あらむ限
りの名目を以て、一戸毎に十圓以上の寄附金
を迫るのである。其の名目は作れば幾ら

◎甲 鐘を響く朝鮮の天道徒（下）

（雑誌批判三月號） 印 渡 珍

行く地方教徒の誠金、誠米を集めて、一體何に消費してをるか。見よ彼等所謂中央幹部なる者等の内で、妾を圓ふてをらぬ者は、一人もをらず、又毎日飽衣飽食長醉せざる者はないのである。彼等は自分の財産が有餘つて、豪奢な生活をしてをるのではなく、皆地方教徒が貧しい財布をはたいて、誠金だ誠米だといふて納めてをる其の金なのである。

△

天道徒の領導者達は、朝鮮農村の破滅に拍車を加へたいとふことが出来る。彼等は農民の愚昧を利用して、無定見な時局談や、下らない手段を用ひて民衆を欺瞞し、彼等の常套語たる「出来る出来る」（テンダテンダ）を唱へてをる。この「出来る出来る」といふ

：「第三編」……………(6)：

新兩班名簿ともいふべきものである」と、自
分の所有物が無ければ、借金しても金を出し
て、創建録に記載されねばならぬと振動して、
宣安と稱して三國苑を譲出せしめた。それで
地方教徒が、これこそ最後のものであるから
と力むで、萬難を排して三國苑出して所謂「
新兩班」料を拂つた。

△

それでも本計劃は豫定通りの成績を上げる
ことは出来なかつた。彼等はこれで甚だ失望
し、昔の如き華美な私生活を復活するには、
天道教自身の力では何うすることも出来ない
ことを覺り、他力に依つて發展を期せむとし
た。即ち彼等は自己の唯一の生命としてをる
布徳天下、廣濟衆生の標語を、弊履の如く棄
て、他の事業に首を突込み初めたのであつ
た。そして中外人士の笑の種となつてをる。

吾人は簡單ながら、天道教の前身京學が、朝
 鮮で發生したのは、それだけの特殊事情のあ
 つたことを語つたが、時代的產物といふもの
 は、瞬間的に其の時代さへ過去れば、其の役
 割は直に終りを告ぐるものである。如何なる
 者でも存在を必要とすればこそ發生し、それ
 に對する役割が終りを告ぐれば、消滅するも
 のである。それが消滅せねば不必要な存在と
 して副作用を起し、寧ろ害を及ぼすであらう。
 ……天道教そのものも其の發生當時、朝鮮
 の特殊事情から其の時は必要であつたかも知
 らないが、其の役割が終了して見れば、其の
 二相は殘粕として、朝鮮民衆に副作用の害を
 及ぼすことに間違ひはない。彼等領導者達の、
 多くことを知らぬ貪慾の犠牲となつた、地方
 士徒とそれは實に氣の毒だが、天道教は方に自
 ら手鐘を撞いてをる。(完)

（完）

故阪谷子爵記念事業會

東京市原町一三六

阪谷芳郎閣下

揮毫ニ由リ奉ル

昭和十三年

十一月二十九日

侍史

京城府寬勲町四番地
二
閑歌銘

明治三十三年十二月二日

お加申上候時之儀

冷之候

愈々起居荒く被

遊候事と奉存付之

至賀申上候

陳者下附被遊候

揮毫二枚は難有お取

付付之厚く情禮申上候

實は私儀年来情薰陶

立愛け日時に公松共情に

情愛顧に浴せられなるに

實は私儀年来此薰陶

立受け日時にも松若樹に

情愛願に浴せられたるに

奉任乍恐漏蒙子未情

願を申出候更情料寄

中にも不効如此情思召に

奉預此事は洵に感恩に

至に此愧情能はさる所に

情座於お更侍り情情揮

毫は私儀は難言情訓

辭と旦夕情守奉申は

勿論解人全儀も直に

致威銘せざるべからざる情

訓言と奉存重ねて候と

情禮申上候

先下は恐縮と至と乍奉存

孫威銘世さるべからざる情

訓言と奉存重ねて候

情禮申上候

先下は恐縮さるゝと乍奉存

以書中情禮申上さるゝ如

形に情座候

頓首再拜

昭和十三年十二月二日

関虎銘

阪谷男爵閣下

侍史

川名川區京町二二六

男爵 阪谷芳郎

國の文化の発展に
大いに貢献した
人物である

し古裕傳統が續々改變されて行くのであり、
之を陶器について云ふも、新羅及高麗の古墳は殆んど全部
非科學的なる方法により濫掘され悉し、古窯跡も好事家の單
純なる興味によつて荒廢されんとし、稍々見るべき傳統を保
留せる現陶業地も衰滅に近からんとしてゐるのであります
就ては此時に於て朝鮮陶器研究會を組織し

129.

昭和四年三月二十日 朝鮮陶器研究会 作

東京市外之目黒五台高地
今橋 藤 治
の

洋行

より隆乃大なるまで

はるかに、さき、四半、未

はるかの、隆乃大なるまで

同道より、さき、四半、未

仰より、隆乃大なるまで

研究、隆乃大なるまで

隆乃大なるまで、隆乃大なるまで

隆乃大なるまで、隆乃大なるまで

隆乃大なるまで、隆乃大なるまで

隆乃大なるまで、隆乃大なるまで

隆乃大なるまで、隆乃大なるまで

隆乃大なるまで、隆乃大なるまで

かきと何れ遠からず

財通、森、幸の各信地方

調査と書有る大坂、東京、

山形、加中、舞、う、う、う、

今、後、せ、に、を、ま、と

と、程、り、ま、す。

右、高、山、は、程、程、ま、は、が

其、の、み、て、あ、る、ま、す。

と、あ、る、

昭和四年三月十日

今、高、山、は、程、程、ま、は、が

男、愛、
阪、谷、芳、正、殿

信、市

此の如くであります
後念

昭和四年三月廿二

今村道徳

男要
陳谷芳以親

信市

前便より相う書状と

差しつきます

ご関心ありがとうございます

新刊

我邦に於る大陸傳來の文化は、直接支那よりせるものも少なくないが、又朝鮮を経由せるものが多く、而して其間に多少朝鮮化するものが更に轉じて我邦に傳來せるものは、大陸直傳のものより、却つて或意味に於て一層邦人に親しまれ、玩された事は争はれない事實であります。全時に又朝鮮の人は非常に傳統的、保守的である爲に、今に於て漢唐宋元明の古格を墨守して容易に改變しない風があります。此日本に影響し並に古格を保存せる事は東洋文化の調査研究上於る朝鮮の重要な點であります。然るに昨今歐米文明東漸の勢ひ旺なる、此半島の文化にも著しき影響變革あらんとし、而して古き傳統は一度斷絶すれば再び復興の由なからんとしてゐます。之は東洋文化の推移變遷研究上の危機であります。實際今日朝鮮では遺蹟古物が日々煙はせるのであります。古格傳統が續々改變されて行くのであります。之を陶器について云ふも、新羅及高麗の古墳は殆んど全部非科學的な方法により濫掘され悉し、古窯跡も好事家の單純なる興味によつて荒廢されんとし、稍々見るべき傳統を保留せる現陶業地も衰滅に近からんとしてゐるのであります。就ては此時に於て朝鮮陶器研究會を組織し

一、全鮮に亘る古陶窯跡（墳でなく窯のあつた所）約三百ヶ所を科學的且組織的に踏査し、窯の構造、焼方、品物の種類等を明かにし（從來全然着手されず、偶々あるものは甚だ非科學的なるを免れず）

二、茶道と共に邦人の趣味生活に深き交渉を有する高麗茶碗等の名窯、珍器の所産の場所、状態、歴史等を究め

三、之等工藝の大陸より傳來せる経路、次第を尋ね

四、我對馬、萩、唐津、高取、上野、木原山、現川、高麗摩等西日本の諸陶窯に對する關係を明にし

五、日鮮支の文化、工藝、産業等に關する交渉の跡を闡明し

六、現業地を調査して古格、傳統、特色を保存發揮せしむる

七、と共に將來の道を指示し、之を内外の主なる美術館及大學並に研究引等に寄贈陳列し、且會員の參考に供し

以て朝鮮陶器の事績を不朽ならしめんとする次第であります。而して斯の如き仕事は要するに其中心に人を得ると否とによるものであります。各位御承知の京城在住淺川伯教君は在鮮二十年、専ら此方面の研究に終始し、自ら陶器を作り茶道を解し既に全鮮に亘り約二百ヶ所の古陶窯跡を探り、而も自ら奉ずる事薄く、製作、鑑賞、研究の三方面を兼ねる點に於て此目的に最適せる、再び得難き人物であります。恐らく今日同君を中心

として此仕事を至急遂行完了してかかない時は、一千年の古跡
傳統が今日に傳はりながら見えず眼前に其煙滅を見送り而も
後日之を如何とし難きに到るのであります
古代美術工藝の所産の場所と其状態は今日現實に見る由ない
うちに、陶器だけは材料が不朽なると朝鮮人が傳統的保守的な
るため、辛くも奇蹟的に今日に残つたものであります。此窯
跡は心なき者が一度掘返せば絶対に原形を保つを得ず、再び原
狀を尋ねる途がないのであります。
而して此事業は東洋文明の先駆であり、又朝鮮文化に負ふ所多
く、殊に直接間接茶道の趣味精神に涵養さるゝ事深い日本人の
みのよくし得る所であり、且今日は其最後の時期であります。
就ては各位御多用中甚だ恐縮ではあります。御賛成の上御援
助を仰ぎたいと存じます。

朝鮮陶器研究會規約

- 一 本會は朝鮮陶器研究會と稱す
- 二 本會は事務所を東京市丸の内有樂館社團法人工政會内におく
- 三 本會は朝鮮陶器の研究を行なひ、之を工藝上及産業上の參考となし、且日鮮の文化的交渉の深く且古きを明かにし、東洋文化の研究發揚に貢獻するを以て目的とす
- 四 本會は昭和四年一月事業を開始し、滿三年を以て事業を完了するものとす但初年度は實地調査、次年度は實地調査並に整理、三年度は整理並出版等の事業を主とするものとす
- 五 本會會員は本會の目的を達成せしむるが爲に一ヶ年五百圓、三ヶ年一千五百圓の經費を負擔するものとす
- 六 但し會費は適宜分割、支拂をなす事を得
- 七 本會に賛助員をおく、賛助員は名望知識あつて本會の目的達成を援助ある者とし、會員總會に於て之を推薦し本人の承諾を得たるものとす
- 八 本會は其事業の進行に伴ひ講演、展覧、出版等をなす事あるべし
- 九 本會の會務は會員總會に於て之を決議執行す
- 十 賛助員は會員總會に出席し意見を述ぶる事を得但決議に加はらず
- 十一 本會の庶務會計を處理し會員總會の決議を執行する爲に理事

本會の會計は會計士の検査を経て會員總會に報告し其承認を
受くるものとす
十一、本會に研究員、研究補助員をかく事を得、研究員、研究補助
員には手當を給する事を得

をかく事を得
大、本會の會計は會計士の検査を経て會員總會に報告し其承認を
受くるものとす
十一、本會に研究員、研究補助員をかく事を得、研究員、研究補助
員には手當を給する事を得
以上

昭和五年五月十日
但し其十人部

東京市小石川區
原町百廿六番地
阪谷芳郎

故阪谷子爵記念事業會

東田瑞氏會金健中
新中
阿部充家
坂谷田の品討閣下

金 健 中
K. J. K. IM.
TEL. AOYAMA 30-1094
NO. 23 CHOME AOYAMA

尹 性 求
東京府下田谷代田七

五月十五日

財 團
人 東
亞 保
民 會
設 立
案

發 起 人 名 簿
黃 助 員 名 簿
趣 旨 及 規 約
收 支 目 論 見 書
華 南 帝 國 議 會 諮 議 院 採 擇 書

東亞保民會設立趣旨書

故國ヲ背ニシテ滿蒙ヲ指シ流轉セル全朝鮮十三道ノ鮮人ハ其數既に二百萬人ヲ越ヘ彼等ハ尙本相次イデ北進シツ、アル。彼等ハ世襲的ニ其暴威ヲ振ヘル物質文明ノ脅威ヲ受ケテ新天地ヲ滿蒙及西伯利亞ニ開拓セント志ス然レ彼等ノ目的トスル所ハ素ヨリ國籍離脱ニアラズ。其行ハ悲壯ノ極ト云フベキデアル。併シ乍ラ彼等ノ行動ハ箇々ニシテ彼等ノ背後ニハ國体的基礎ナク從ツテ彼等ノカハ微弱デアル。加フルニ新住ノ天地ハ異域ニシテ言語通ゼズ風俗人情固ジカラズ。誤解ハ從ツテ生ジ悲況ハ日ニ日ニ加リ終ニハ自暴自棄ニ陥リ其極ハ母國ヲ呪ヒ曰韓兩國合意ノ併合ヲ怨ミ人生ヲ悲觀シ思想ノ惡化留ラズシ「ボルシユビスト」ハ此間ニ生ジテ策ヲ弄シ其禍ハ速ク吾日本國民ニ及ビ東洋ノ平和ヲ脅シ朝鮮人共ニ之レガ爲メニ不測ノ窮況ニ陥ラントシツ、アル。之レ重大ナル問題デアル。

我等ハ人類愛ノ爲メニ祖國愛ノ爲メニ又東洋平和ノ爲メニ此危機ニ落タル二百萬人ノ救済ノ急務ナルヲ痛感スル。日本國家ハ在外臣民保護ノ責任アルヤ云フ迄モナシ。

我等カ東亞保民會ヲ設立スルハ唯ダ之ガ爲メノミ、我等ノ目的トスル所ハ即チ平和ヲ主張シ人類愛ニ基クモノナリ願クバ我等ノ微志ヲ御賢察下サレ御垂援御指導アラントヲ希フ。

發起人

原籍地 京城府益善洞二一番地
現住所 東京市赤坂區青山南町五丁目七九番地

士 東亞保民會設立者 族

金

健

中

明治二十八年一月十三日生

原籍地 慶尚北道安東郡瑞興洞二〇七番地
現住所 東京府下碑袋町六七番地

士 著述 族

權

泰

用

明治二十八年三月二十日生

原籍地 朝鮮京城府竹森町二ノ一六〇番地
現住所 東京府下世田谷區三宿二四七番地

士 亞細亞學究 族

尹

性

求

明治二十二年十月五日生

賛助員

東京市小石川區水道町一〇八番地
東京市麻布區廣尾町二番地
東京市本郷區駒込上富士前町二三
東京市四谷區内藤町一番地
東京市麹町區五番町三番地
東京市牛込區南横町七三番地
東京市赤坂區表町三丁目二四番地
東京市芝區伊豆子町六三番地

内閣大臣 濱口雄幸
外務大臣 幣原喜重郎
陸軍大臣 宇垣一成
拓務大臣 松田源治
農林大臣 田中忠治
鐵道大臣 江本翼
逓信大臣 小泉又次郎

東京市牛込區王寺町三〇番地
東京市外戸塚町一〇六番地
東京市下谷谷金王一八番地
東京市下谷谷町北谷四九番地
東京市牛込區市ヶ谷内坂三二番地
東京市牛込區南町一二番地
東京市小石川區鶴籠町二一四番地
東京市千駄ヶ谷原宿二九番地
東京市神田區永田町
東京市下千駄ヶ谷町原宿一九八番地
東京市麻布區三河名町一四番地
東京市麹町區三番町七一番地
東京市下上谷谷一三五番地
東京市下代々木初台六〇六番地
東京市四谷區内藤町一番地

| | | | | | | | | | | | | | |
|--------------|--------------|---------------|-----------------|--------------|-----------------|---------------|-----------|------------------|----------------|---------------|--------------|----------------|--------------|
| 東京市外戸塚町一〇六番地 | 東京市下谷谷金王一八番地 | 東京市下谷谷町北谷四九番地 | 東京市牛込區市ヶ谷内坂三二番地 | 東京市牛込區南町一二番地 | 東京市小石川區鶴籠町二一四番地 | 東京市千駄ヶ谷原宿二九番地 | 東京市神田區永田町 | 東京市下千駄ヶ谷町原宿一九八番地 | 東京市麻布區三河名町一四番地 | 東京市麹町區三番町七一番地 | 東京市下上谷谷一三五番地 | 東京市下代々木初台六〇六番地 | 東京市四谷區内藤町一番地 |
| 東京市外戸塚町一〇六番地 | 東京市下谷谷金王一八番地 | 東京市下谷谷町北谷四九番地 | 東京市牛込區市ヶ谷内坂三二番地 | 東京市牛込區南町一二番地 | 東京市小石川區鶴籠町二一四番地 | 東京市千駄ヶ谷原宿二九番地 | 東京市神田區永田町 | 東京市下千駄ヶ谷町原宿一九八番地 | 東京市麻布區三河名町一四番地 | 東京市麹町區三番町七一番地 | 東京市下上谷谷一三五番地 | 東京市下代々木初台六〇六番地 | 東京市四谷區内藤町一番地 |
| 東京市外戸塚町一〇六番地 | 東京市下谷谷金王一八番地 | 東京市下谷谷町北谷四九番地 | 東京市牛込區市ヶ谷内坂三二番地 | 東京市牛込區南町一二番地 | 東京市小石川區鶴籠町二一四番地 | 東京市千駄ヶ谷原宿二九番地 | 東京市神田區永田町 | 東京市下千駄ヶ谷町原宿一九八番地 | 東京市麻布區三河名町一四番地 | 東京市麹町區三番町七一番地 | 東京市下上谷谷一三五番地 | 東京市下代々木初台六〇六番地 | 東京市四谷區内藤町一番地 |

東京市下南品川一〇四番地
東京市麹町區紀尾井町八番地
東京市外阿佐ヶ谷小山四八番地
東京市外新井宿三二一〇番地
東京市外北品川宿一本三三九番地
東京市芝區高輪北町一六番地
東京市下谷谷八幡通三ノ六
東京市下西大久保三九一
東京市下戸塚町諏訪一八二番地
東京市小石川區小石川町四番地
東京市麻布區霞町二三番地
東京市外下谷谷一八番地
東京市芝區白金町一八番地
東京市外谷谷町伊達五二番地
東京市千駄ヶ谷町原宿一七〇番地

| | | | | | | | | | | | | | | |
|--------------|---------------|----------------|---------------|-----------------|---------------|--------------|-------------|----------------|----------------|--------------|-------------|--------------|---------------|-----------------|
| 東京市下南品川一〇四番地 | 東京市麹町區紀尾井町八番地 | 東京市外阿佐ヶ谷小山四八番地 | 東京市外新井宿三二一〇番地 | 東京市外北品川宿一本三三九番地 | 東京市芝區高輪北町一六番地 | 東京市下谷谷八幡通三ノ六 | 東京市下西大久保三九一 | 東京市下戸塚町諏訪一八二番地 | 東京市小石川區小石川町四番地 | 東京市麻布區霞町二三番地 | 東京市外下谷谷一八番地 | 東京市芝區白金町一八番地 | 東京市外谷谷町伊達五二番地 | 東京市千駄ヶ谷町原宿一七〇番地 |
| 東京市下南品川一〇四番地 | 東京市麹町區紀尾井町八番地 | 東京市外阿佐ヶ谷小山四八番地 | 東京市外新井宿三二一〇番地 | 東京市外北品川宿一本三三九番地 | 東京市芝區高輪北町一六番地 | 東京市下谷谷八幡通三ノ六 | 東京市下西大久保三九一 | 東京市下戸塚町諏訪一八二番地 | 東京市小石川區小石川町四番地 | 東京市麻布區霞町二三番地 | 東京市外下谷谷一八番地 | 東京市芝區白金町一八番地 | 東京市外谷谷町伊達五二番地 | 東京市千駄ヶ谷町原宿一七〇番地 |
| 東京市下南品川一〇四番地 | 東京市麹町區紀尾井町八番地 | 東京市外阿佐ヶ谷小山四八番地 | 東京市外新井宿三二一〇番地 | 東京市外北品川宿一本三三九番地 | 東京市芝區高輪北町一六番地 | 東京市下谷谷八幡通三ノ六 | 東京市下西大久保三九一 | 東京市下戸塚町諏訪一八二番地 | 東京市小石川區小石川町四番地 | 東京市麻布區霞町二三番地 | 東京市外下谷谷一八番地 | 東京市芝區白金町一八番地 | 東京市外谷谷町伊達五二番地 | 東京市千駄ヶ谷町原宿一七〇番地 |

起業目論見書

(事業標準ノ一例)

一金壹百萬圓也

但シ朝鮮人四十人ヲ移住セシムル經費概算

内 譯

- 一金貳拾四萬圓也
- 一金貳萬四千圓也
- 一金貳拾萬圓也
- 一金四萬圓也
- 一金拾萬圓也
- 一金九萬參千五百九拾貳圓也
- 一金五萬貳千四百八拾圓也
- 一金壹萬貳千九百六拾圓也
- 一金參千八百八拾八圓也
- 一金壹千五百圓也

皖無地八町步十ヶ年面積費(一町步三十円)
農民住宅八百ヶ建費(一ヶ戸五坪当リ六円)
四年一ヶ年間ノ生活費附雜費金(五ヶ年)
農具農民一人ニ付金拾四也トス
事 務 所 費
水路工事費(堤防(兩側ノ土堤三尺高五五寸)排水路(排水路ハ二五寸)五ヶ年)
支那之メシ七、二、二〇 樽(樽ハ四箇)
八天貳萬參千六百八(一人日當六拾五圓)
水路用地賃料二萬五千九百貳拾肆(坪當十五圓)
兼草貳拾圓代(屯順七拾五圓替)

- 一金壹千八百圓也
- 一金壹千五百圓也
- 一金壹千貳百圓也
- 一金四千貳百六拾四圓也
- 一金壹萬四千圓也
- 一金八萬圓也
- 一金五萬圓也
- 一金貳萬圓也
- 一金貳千四百八圓也
- 一金五萬圓也
- 一金拾萬圓也

支那馬六拾頭(每頭拾格圓替)
スコップ 六百個(一個貳拾五格圓替)
支那鐵六百個(一個貳拾四圓替)
工事用大鉄釘所建費並材料費並雜費
水門用木石材料 及 工費
土地開墾並整理費
種子費(農民一人種子代金拾圓內五格圓)
調査費 及 交際費
諸般書類送達費
假事務所費用(但東京本部
天災地變其ノ他罹災救済準備金

土地豫定地

- 一東蒙古中國官有(朝鮮地)
- 一滿洲鞍山民有

五千町步
六千町步

一 滿洲 缺 徵 民 有 二 十 萬 町 步
 一 奉 省 外 中 國 官 有 (焉 來 嘉 子)

附 記 土 地 肥 沃 ノ 為 メ 五 年 間 肥 料 フ 要 セ ス 五 年 フ ヲ テ 一 期 ト シ 耕 地 フ 増 ト レ
 テ 施 ニ 移 轉 ス ル モ 可 ナリ

收 益 概 算

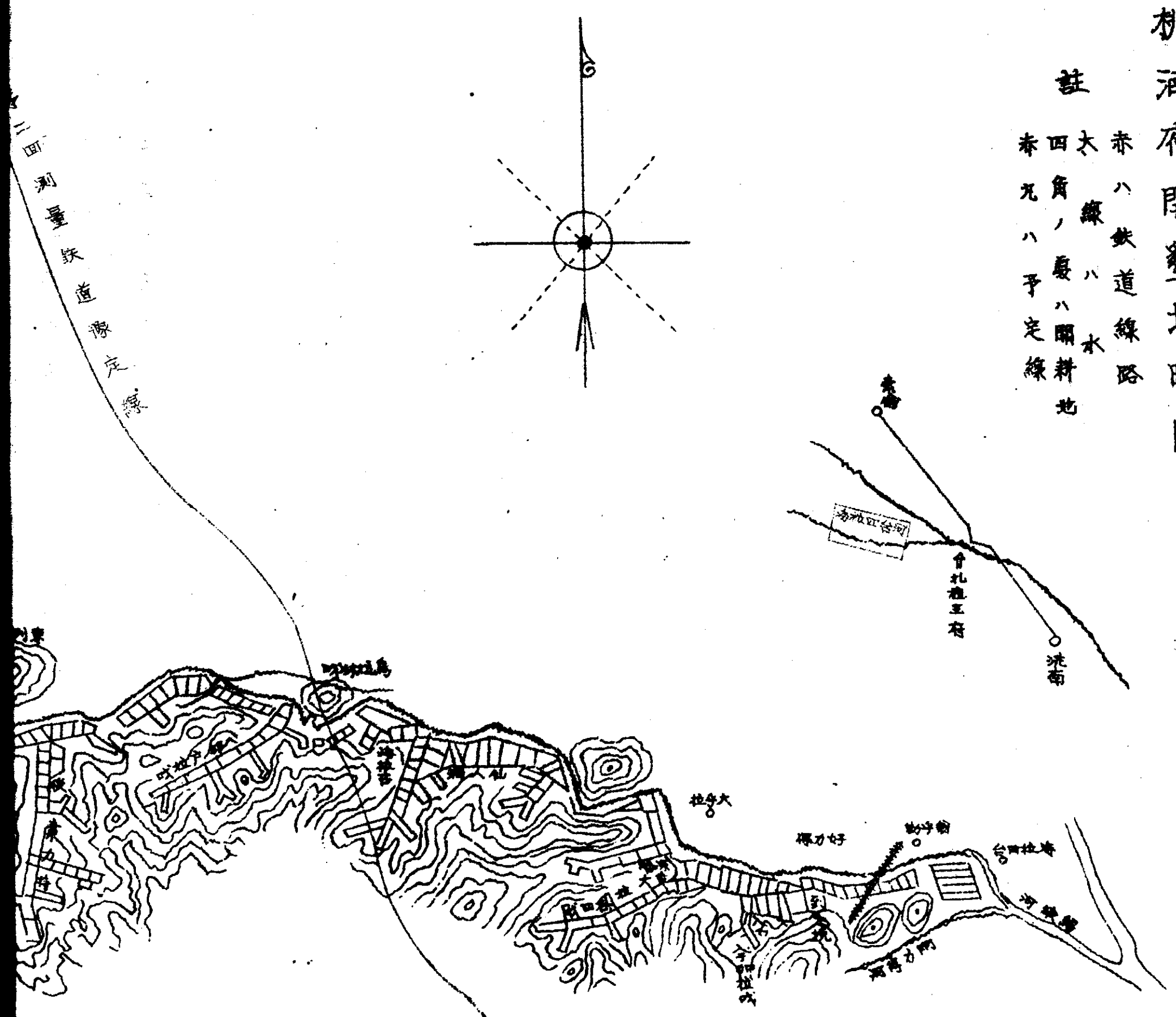
一 八 千 町 步 ノ 收 穫 米 (一 町 步 十 八 石) 九 萬 六 千 石
 一 九 萬 六 千 石 價 格 (一 石 二 十 五 日) 貳 百 四 拾 萬 圓 也

收 益 率 及 分 配 率

一 百 萬 圓 ニ 耕 シ 貳 百 四 拾 萬 圓 (約 三 倍)
 一 貳 百 四 拾 萬 圓 フ 半 分 シ テ 百 貳 拾 萬 圓 也
 一 費 費 一 人 收 益 資 二 參 百 圓 也

內 蒙 古 桃 滿 府 開 墾 地 略 圖

註 赤 ハ 鐵 道 線 路
 太 線 ハ 水
 四 角 ノ 處 ハ 開 墾 地
 赤 元 ハ 予 定 線



收益率及分配率

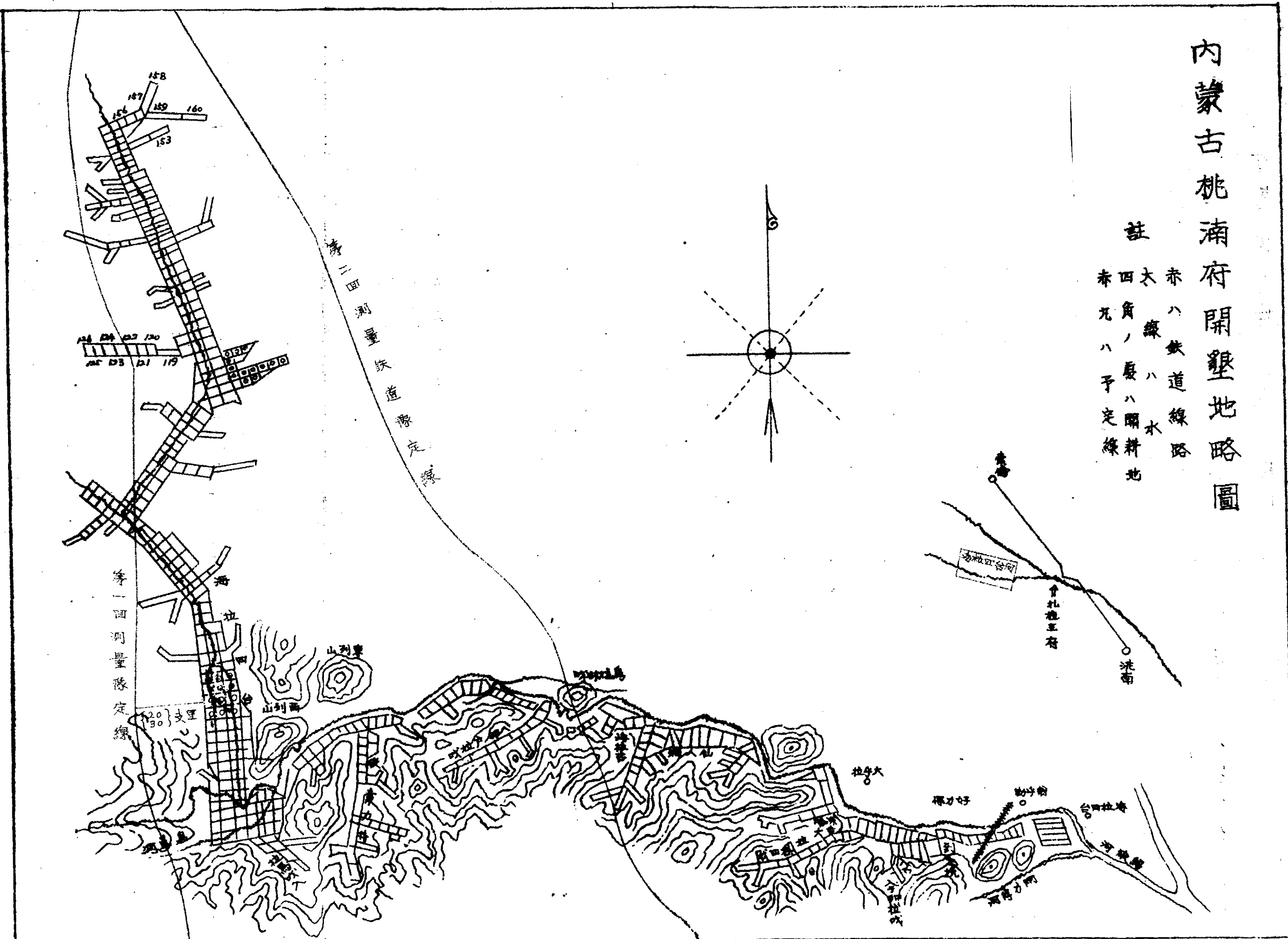
一百萬圓ニ對シ
就百四拾萬圓（約三倍）

一貳百四拾萬圓ヲ半分シテ 百貳拾萬圓也

一養民一人收益
實二冬百圖也

內蒙古桃滿府開墾地略圖

註
赤ハ鐵道線路
太線ハ水
四角ノ處ハ開耕地
赤瓦ハ予定線



事業

- 一、我日本ノ勢力又ハ權カノ行ハル、國內ニ發シテ順次ニ鮮人救済ノ事業ヲ開始シ滿蒙ノ其地ニ及ブ
- 一、先ツ滿鐵附近ニ於テ支那人ヨリ適當ナル土地ヲ買受又ハ借入レ之ニ鮮人ヲ移住セシメ一定ノ規約ノ下ニ開耕事業ヲ開始ス(滿鐵權ヲ得サルト雖モ此事ハ容易ニ爲シ得ルコトハス)
- 一、此處地ニ朝鮮人居住ノ支那家屋ヲ作り衛生設備ヲナシ分配ヲ公平ニシ日用品賣店ヲ設ケ理想的一模範村トナス
- 一、此事業ハ支那官憲ノ同意ヲ得ルヲ要シ支那ノ地主ヲシテ適當ノ賃賃金ヲ收益セシメ支那人ヲシテ利益ニ均霑セシム
- 一、朝鮮人ヲシテ二年目ヨリハ收益ヲ得タルモノヲ以テ適當土地ヲ買入レシメ地主タラシム斯クシテ彼等ノ生活ハ愈々安定スベシ
- 一、農資融通收買初ノ一年間ハ小作人ニ每人ノ生活費一年平均五十圓ヲ貸與ヘ其生活ヲ支ヘシメ翌年度ヨリ四年以内ニ之ヲ返入ス還還セシメル(食料事業ヲ爲サズ)

一 奉天ニ於テ朝鮮人ノ職業給付ヲ設置シ朝鮮人ノ爲メニ便宜ヲ図ル
 一 最初ノ一年ハ水利ヲ作ルニ於テ大規模ノ投資ヲナサズシテ出來得ル限り朝鮮人ヲシテ皆
 式簡便ナル水路ヲ作ラシメル（費用節約スル爲メナリ）
 一 二年目ヨリ法人ノ得ル收入ノ範圍内ニ於テ朝鮮人救濟事業ヲ漸次ニ擴張シテ行ヒ年々逐
 フテ朝鮮人救濟ノ事業ヲ擴大ニシ全滿朝鮮人ニ及ホサントスル初メハ小規模ヲ選ミニ千
 人以内ノ小村落ヲ一ニケ所作リテ漸進ス
 一 事業經營ノ爲メニ會ハ奉天ニ出張所ヲ設ケ若干ノ内朝鮮人ヲ使用シ成ルベク人件費ヲ省
 クニ努メル
 一 法人ノ本據ハ東京トシ天下ニ名望アル會長以下理事者ニ於テ事業ヲ指導ス
 一 日本赤十字社ニ謀リテ衛生事業ヲ不斷ニ行ハシメ健康増進ヲ計ルコト今日ノ赤十字社
 ハ平時ノ事業ヲ行フヲ共ニ義務トス之レ國際聯盟條約規則第二十五條ノ定メタル所ナ
 リ

（昭和四年三月二十一日官報附外貴族院議事速記第三十一號）

意見書案

東亞保民會設立ニ關スル件

東京市赤坂區青山町五ノ七九 士族 金健中外十四名 提出
 右ノ諸願ハ滿蒙ノ地ニ移住セル多數ノ朝鮮人ハ其ノ背後ニ團體的支拂ナキ爲メニ微力ナ
 ル故等ハ愈々經濟的壓迫ヲ受ケ今ヤ悲境ニ沈淪セリ、斯クテハ遂ニ自暴自棄ニ陥リ思想
 惡化ノ禍種タラシムトスルモノアルハ國家上甚遺憾ナルニ依リ速ニ生業ニ安ンセシムル
 爲諸願人等ニ於テ之カ保護機關トシテ東亞保民會ヲ設立スルヲ以テ適當ニ國家的援助ヲ
 與ヘラレタシトノ趣旨ニシテ貴族院ハ願意ノ大體ハ採擇スヘキモノト議決致候因テ議案
 法第六十五條ニ依リ別冊及送附候也

昭和四年 月 日 貴族院議長 公爵 德川 家 達

内閣總理大臣 男爵 田 中 義 一 殿

（昭和四年三月二十九日官報附外貴族院議事速記第四〇號）

請願特別報告第五號

意見書

請願文書表第八一號

東亞保民會設立ニ關シ國家的援助ノ請願
東京市赤坂區青山町五丁目七十九番地 全建中外十四名提出（紹以議員志渡安
（即居外四名）

右請願ノ要旨ハ在滿朝鮮人ハ其數既ニ二百萬ヲ越エ理想ノ樂園ヲ組織セントシテ新天地ヲ開拓シツ、アルモ彼等ニハ何等國家的大支柱ナク萬ニ微力ナル彼等ハ愈々經濟的壓迫ヲ受ケ加之異域ニ在リテ人情言語ノ相違ハ誤解ヲ生シ易ク今ヤ悲境ニ沈淪シツ、アリ而シテ之ガ救済策トシテハ産業開發ノ綜合的機關ヲ設置シ彼等ニ職業ヲ與ヘ生活ノ安定ヲ得セシムルヲ以テ最も適當ナリト信ス故テ前記ノ目的ノ爲メニ擬立スル「東亞保民會」ニ對シ相等ノ國家的援助ヲ與ヘラレタシト謂フニ在リ
衆議院ハ其ノ趣旨ヲ王當ナリト認メ之ヲ承認スヘヤモノト議決セリ依テ議院法第六十五條ニ依リ別冊及送附候也

會 則

第一章 名稱及位置

第一條 本會ハ之ヲ對國法人東亞保民會ト稱ス

第二條 本會ハ本部ヲ東京ニ支部ヲ奉天京城ニ置ク又必要ト認メタル地方ニ出張所ヲ設ケルコトヲ得

第二章 目的及事業

第三條 本會ハ左ノ各事ニ務ケタルコトヲ行フヲ以テ目的トス

一 日鮮支人ノ親善ヲ圖ルコト

二 朝鮮人ノ思想及生活ノ安定ヲ圖ルコト

三 朝鮮人ノ教化及救済ニ務ムルコト

第四條 前條ノ目的ヲ達成セシガ爲メ左ノ各事ニ務ケタル事業ヲ行フ

一 朝鮮ノ交通相互親睦ノ爲メ隨時各種ノ會合又ハ適當ノ施設ヲナスコト

二 會員及朝鮮人ノ爲メ保健衛生及生產業ニ關スル機關ヲ設立スルコト

三 會員及人等相識ニ應ジ得ニ在外朝鮮人ヲ保護スルコト

第三章 會 員

第五條

本會ニ入會セムトスル者ハ入金申込書ヲ會長ニ提出シ其ノ許可ヲ受クベシ
脱會セムトスル者亦同シ

會員ニハ會費課ヲ交付ス

第六條

本會員ハ通常名譽特別贊助ノ四種トス

通常會員ハ日鮮支人ノ男女名譽會員特別會員及贊助會員ハ何國人タルヲ問ハ

ズ左ノ各第ニ順次該當スル者トス

一 本會ヲ精神的に庇護スル者

ニ 本會ニ功勞アリタル者

三 贊助金等附金ヲ提供スル者

第四章 役 員

第七條

本會々務執行ノ爲本部及支部ニ左ノ役員ヲ置ク

會 長

一 名

副 會 長

二 名

理 事

若 干 名

部 長

若 干 名

第八條

本會ハ本部及支部ニ庶務部及會計部ヲ置ク

第九條

本會ノ役員ハ名譽及有給ノ二種トス

名譽役員ハ無給トシ本會ヲ精神的に愛護スル者ヲ以テ之ニ任ス

有給役員ハ本會ニ於テ專門ニ事務ニ從事スルモノトス

第十條

役員及組織ハ必要ニ應ジテ役員會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得

第十一條

本會役員ノ選舉及任期ハ左ノ如シ

本部會長及副會長ハ役員會ニ於テ之ヲ選舉ス

各支部會長ハ其ノ支部役員會ニ於テ之ヲ選舉ス

理事及監事ハ免起人ノ中ヨリ互選ス其ノ外役員ハ會長之ヲ選任ス

役員ノ任期ハ滿三ヶ年トシ補缺當選者ハ前任者ノ満期ヲ以テ任期トス

但シ満期ノ再選ハ之レヲ妨ケス

第五章 顧問及相談役

第十二條

本會ハ左ノ名譽職ヲ置ク

| | |
|-----|-----|
| 顧問 | 若干名 |
| 相模役 | 若干名 |
| 書記 | 若干名 |

第十五條 第六條ニ項各簿ニ記載シ且ツ掌帳名簿アル者ハ本會ノ顧問相模役ニ推薦スル事ヲ得

第十四條 顧問相模役ハ役員會ノ詮議ニ依リ本部會長之レヲ推薦ス

第十五條 顧問及相模役ハ會長理事ノ諮問ニ應シスハ會務ニ付キ意見ヲ述フルコトヲ得

第六章 議決機関

第十六條 本會ノ議決機関ハ役員會トス

第十七條 役員會ハ會長又ハ他重要役員ニ於テ必要ト認メタル場合隨時之ヲ開催ス

第十八條 役員ニ於テ議決スハ決定スベキ事項ハ左ノ如シ

一 豫算及決算ニ關スル事項

二 第四條各項ノ事業遂行ニ關スル事項

三 各部細則ノ規定及改廃ニ關スル事項

四 會長又ハ支那會長ノ必要ト認ムル事項

第十九條 議案ノ決議ハ出席會員過半数ノ同意ヲ以テ可決ス

第七章 會計

第二十條 本會ノ資金ハ左ノ如シ

一 篤志家ノ寄附金及贊助金當局補助金

第二十一條 本會ノ資金管理ハ左ノ方法ニ依ル

一 本會々長ノ名義ヲ以テ之ヲ銀行ニ預金スルコト

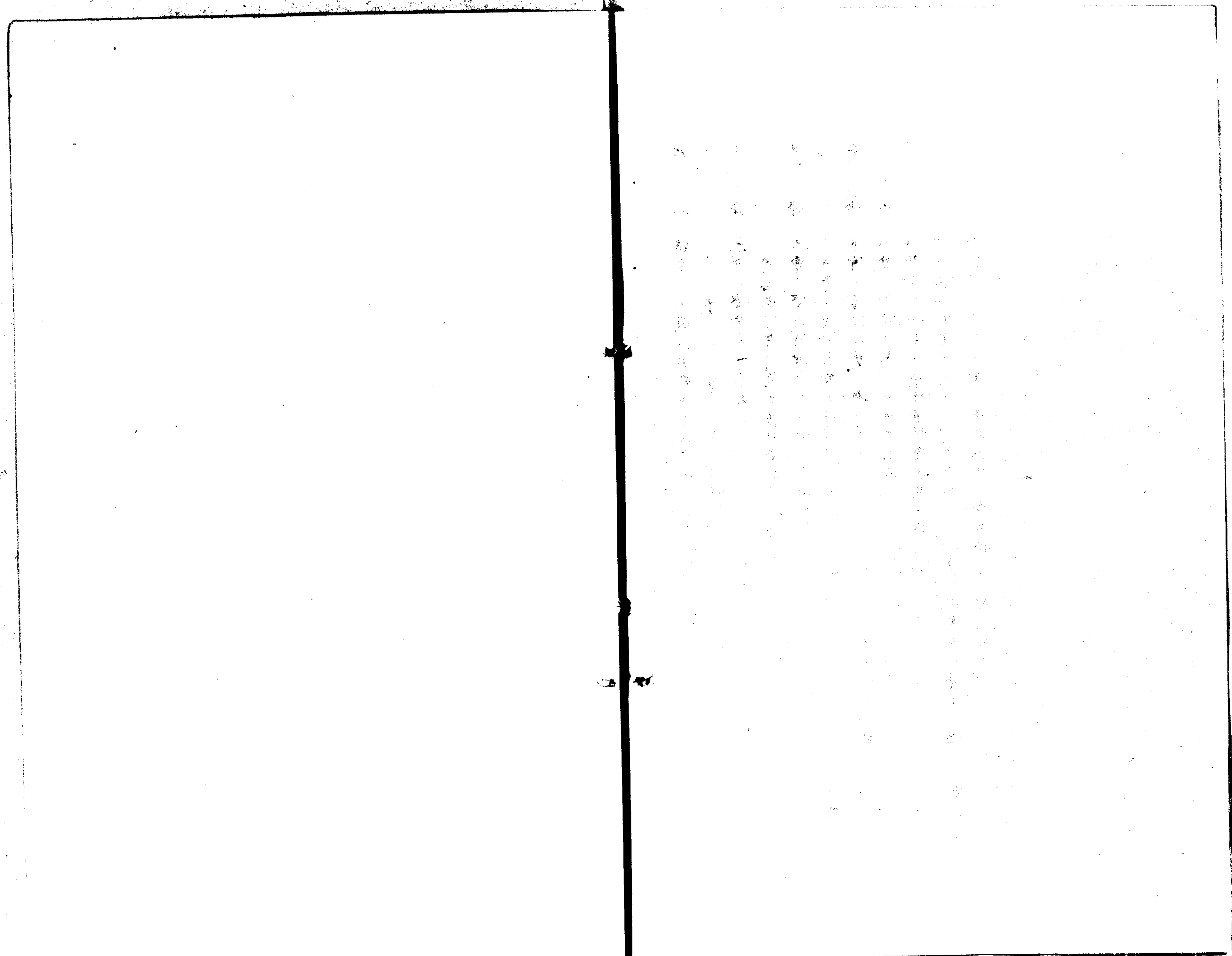
第二十二條 本會ノ會計年度ハ滿一ヶ年トシ一月ニ始マリ同年十二月ニ終ル

第二十三條 本會ノ會計ハ左ノ方法ニ依ル

一 現金ノ保管ハ會計事務擔當者ニ於テ之ヲナスヘシ

二 金銀出納簿ニ依リ其ノ收支ヲ明ニシ隨時理事及ヒ會長ノ檢印ヲ受クヘシ

三 支出ハ會長理事ノ承認收入ハ會長理事ニ報告スヘシ



東亞保民會設立ニ關シ國家的援助ノ請願

東亞保民會創立發起人

金

健

外

中

東亞保民會設立三關之國家的援助ノ請願

東亞保民會創立發起人

金健

外

名中

東亞保民會設立ニ関スル請願書

主 旨

故國ヲ背ニシテ滿蒙ヲ指シ流轉セル全朝鮮十三道ノ鮮人ハ其數既ニ二百萬人ヲ越ヘ彼等ハ尙ホ相次イデ北進シツ、アル。彼等ハ世界的ニ其暴威ヲ振ヘル物質文明ノ發威ヲ受ケテ新天地ヲ滿蒙及西伯利ニ開拓セント志ス然シ彼等ノ目的トスル所ハ素ヨリ國籍離脱ニアラズ。其行ハ悲壯ノ極ト云フベキデアル。併シ乍ラ彼等ノ行動ハ尙タニシテ彼等ノ背後ニハ團體的基礎ナク從ツテ彼等ノカハ微弱デアル。加フルニ新住ノ天地ハ異域ニシテ言語通セズ風俗人情同ジカラズ、誤解ハ從ツテ生ジ悲況ハ日ニ日ニ加リ終ニハ自暴自棄ニ陥リ其極ハ母國ヲ呪ヒ曰韓兩國合意ノ併合ヲ怨ミ人生ヲ悲觀シ思想ノ惡化自ラ曠シ「ボルシユビスト」ハ此間ニ生ジテ策ヲ弄シ其禍ハ遠ク吾日本國民ニ及ビ東洋ノ平和ヲ脅シ内鮮人共ニ之レガ爲メニ不測ノ窮況ニ陥ラントシツ、アル之レ重大ナル問題デアル。

我等ハ人類愛ノ爲メニ祖國愛ノ爲メニ又東洋平和ノ爲メニ此危機ニ迄タル二百萬人救済ノ急務ナルヲ痛感スル。日本國家ハ在外臣民保護ノ責任アルヤ云フ迄モナシ。

我等カ東亞保民會ヲ設立スルハ唯ダ之ガ爲メノミ、我等ノ目的トスル所ハ即チ平和ヲ主張シ人類愛ニ基クモノナリ願クバ我等ノ微志ヲ御賢察下サレ御垂援御指導アラントヲ希フ。

理 由

日韓併合ハ、「日韓人相互ノ幸福ヲ増進スル」ニ在ル（韓國併合條約前文参照）、國家ハ此ノ目的ヲ到達スルノ責任アリ、國務大臣ハ此ノ事業ヲ完フスベキ輔弼的責任ヲ有シ、帝國議會ノ議員ハ此事ノ完成ニ努カスルノ國民的責任ガアル。

今日韓人ニシテ其故郷ヲ去リ日本内地ニ出稼シ滿蒙西伯利ニ移住スルモノ日ニ日ニ多キヲ加フ、之レ、彼等ガ其故郷ニ安居シ能ハザルノ結果デアル、國

家ハ彼等ニ安住ノ地ヲ與ヘ其生活ヲシテ幸福ナラシムベキ責任ガアル。

韓人ノ北進ハ韓人ノ幸福ノタメニ最モ擇バルベキノ途ナルベク、北方一帯ノ未開地ガ、勤勉ナル韓人ノ移住ニ由リテ、一大富源ト化スルコトハ、日韓人ノ爲メニ幸福ナルノミナラズ、世界ノ文化ノ爲メニ慶祝スベキ事ナルコト、何人ト雖異議ナカルベシ。

既ニ北方地帯ニ住スル韓人ノ數ハ、二百万人ニ達シツ、アル、保護シ指導シ獎勵シタナラバ豈ニ唯單ニ數百萬ト云ハンヤ數千万人ニモ達シ得ベシ。

此等二百萬ノ韓人ニシテ各人一町歩ノ農地ヲ耕シ、一町十五石ノ米ヲ收穫ストスルモ、三千万石ノ米ヲ收穫シ得可ク、日本國民ノ「人口食料及社會問題」ノ爲メニ、一大解決案トナルベキコト、何人ト雖明白ニ看取シ得ル所デア

ル、此ノ重大ノ理由アリ、茲ヲ以テ、日本國家ハ、財團法人トシテノ「東亞保民會」ノ設立ヲ承認補助セラレ、人件物件並ニ政治上ノ保護ヲ與ヘテ、其ノ

目的ヲ達成セシメラレシコトヲ希フ。

本請願ハ、第五十六昨年ノ帝國議會ニ於テ貴衆兩院ヲ通過シタルコト、昭和四年四月廿日ノ官報ニ依リテ、國民ニ明表セラレタ、唯遺憾ナルコトハ、請願通過シタルノミニシテ、其ノ實現ニ至ラサルコトデアル、蓋シ財政上ニ關スル問題ナルヲ以テ、昨年度ニ於テハ、此ノ餘裕ナカリシモノナルベシ、然レドモ本年度ニ於テハ、軍縮ノ結果トシテ年ニ四十餘萬圓ノ剩餘金ヲ生スルガ故ニ、財源ハ確カニアリ、此機會ニ於テ、國家國民ノ爲メノ重大案件タル本請願ノ實行セラレシ事ヲ切ニ希フ右ノ理由ニヨリテ請願ス。

昭和五年四月 日

東亞保民會創立發起人

原籍地 京城府益善洞二一番地

現住所 東京市赤坂區青山南町四丁目二十二番地

東亞保民會設立者

士 族

金 健 中

明治廿八年一月十三日生

原籍地 東京市赤坂區福吉町二番地

現住所 東京市牛込區市ヶ谷鷹匠町一番地

貴族院議員

公 爵

一條 實 孝

明治十三年三月十五日生

原籍地 東京市世田ヶ谷町池尻三六番地

現住所 全 上

豫備陸軍中將
士 族

伊丹松雄
明治八年九月二十二日生

原籍地 神奈川縣大磯町四一〇番地
現住所 東京府下澁谷町櫻丘一五番地

法學博士
士 族

蜷川新
明治六年五月十五日生

原籍地

現住所 東京府下中野町中野一〇一三番地

元陸軍省主計總監

三井清一郎

貴族院議員

原籍地 東京府下世田ヶ谷町若林九四番地

現住所 全 上

豫備陸軍中將

士 族

白井二郎
慶應三年六月十一日生

原籍地 廣島市大平町七丁目二五番地

現住所 東京市牛込區藥王寺町四六番地

法學博士
士 族

秋山雅之介
慶應二年一月廿三日生

原籍地 山口縣大島郡久賀町八四〇番地

現住所 東京府下野方町新井四九四番地

貴族院議員

青木周三

明治八年八月廿六日生

原籍地 東京市麻布區飯倉片町一番地

現住所 全 上

子 爵 藤 波 茂 時

原籍地 東京市京橋區元數寄屋町二丁目九番地

現住所 東京市赤坂區青山北町一丁目一番地

實業家 龜 岡 豊 二
士 族

原籍地 東京府下澁谷町下澁谷大官山七九九番地

現住所 全 上

實業家 早 川 鐵 冶

原籍地 岩手縣二戸郡金田一村二五番地

現住所 東京市麹町區下六番町十番地

辯 護 士

柏 田 忠 一

明治十九年十一月五日生

平 民

原籍地 東京府下澁谷町字宇田川一四番地

現住所 全 上

豫備陸軍少將

津 野 田 是 重

明治六年十一月廿五日生

平 民

原籍地 東京市本郷區駒込坂下町四八番地

現住所 東京市小石川區音羽町三丁目一九番地

雜誌出版業

野 間 清 治

明治十二年一月十七日生

士 族

原籍地 宮崎縣都城市姫路町四〇〇番地

現住所 東京府下千駄ヶ谷町原宿二〇九番地

大日本体育會長

士族

肥田景之

嘉永三年二月八日生

原籍地 岩手縣稗賣郡花巻町三十三番地

現住所 全上

貴族院議員

平民

瀨川彌右衛門

明治廿六年十一月四日生

原籍地 東京府大久保百人町三五〇番地

現住所 全上

社會社員

梅屋庄吉

明治元年十一月廿八日生

東亞保民會創立贊助員

東京市小石川區水道町一〇八番地 内閣總理大臣 濱口雄幸

東京市麻布區廣尾町二番地 内務大臣 安達謙藏

東京市本郷區駒込上富士前町二三 外務大臣 幣原喜重郎

東京市四谷區内藤町一番地 陸軍大臣 宇垣一成

東京市麹町區五番町三番地 拓務大臣 松田源吉

東京市牛込區南橫町七三番地 農林大臣 町田忠治

東京市赤坂區表町三丁目二四番地 鐵道大臣 江本翼

東京市芝區伊血子町六三番地 逓信大臣 小泉又次郎

東京市牛込區藥王寺町三〇番地 政務總監 兒玉秀雄

東京市外戶塚町一〇六五番地 外務政務次官 永井柳太郎

東京府下澁谷金王一八番地 拓務政務次官 小坂順造

東京府下澁谷町九谷四九番地 内閣書記官長 鈴木富士彌

東京市牛込區市ヶ谷佐内坂三番地 拓務次官 小村欣一

東京市牛込區南町一二番地 關東廳長官 太田政弘

東京市小石川區籠籠町二四番地 法制局長官 川崎卓吉

東京市外千駄ヶ谷原宿二九番地
東京市麹町區永田町

參謀次長 岡本連一郎
參謀本部 第二部長 建川美次

東京府下千駄ヶ谷町原宿一九八番地

總務次官 中野正剛

東京市麻布區三河荳町一四番地

政友會顧問 赤次竹次郎

東京市麹町三番町七一番地

政友會顧問 鈴木喜三郎

東京府下上澁谷一三五番地

陸軍大將 一戸兵衛

東京府下代々木初臺六〇六番地

陸軍大將 鈴木莊六

東京市四谷內藤町一番地

陸軍大將 白川義則

東京府下南品川一〇四番地

政友會顧問 望月圭介

東京市麹町區紀尾井町八番地

元通信大臣 元田肇

東京市外阿佐ヶ谷小山四八番地

陸軍大將 南次郎

東京市外新井宿二二一番地

伯爵 清浦奎吾

東京市外北品川宿一本本三三九番地

陸軍大將 町田經字

東京市芝區高輪北町一六番地

政友會顧問 岡崎邦輔

東京府下澁谷八幡通三ノ六

參謀本部 第一部長 畑俊六

東京府下西大久保三九一

參謀本部 總務部長 二宮治重

東京府下戸塚町諏訪一八二番地

文學博士 服部宇之吉

東京市小石川區小日向荳町

法學博士 新渡戸稻造

東京市麻布區霞町二三番地

賦部長 館林權助

東京市外下澁谷一二番地

頭山滿

東京市芝區白金今里町一八番地

衆議院議員 久原房之助

東京市外澁谷町伊達五二番地

司法省 刑事局長 泉二新熊

東京市千駄ヶ谷町原宿一七〇番地

貴族院議員 倉地鐵吉

東京市赤坂區永川町三八番地

衆議院議員 栗原彦三郎

東京市本郷區天神町一ノ一〇番地

司法省參事官 井本常作

東京市麻布區富士見町一七番地

商業會議所 井坂孝

大阪市南區塩町一丁目八番地

衆議院議員 井坂豊光

東京市本郷區追分町一九番地

全 西村圓次郎

東京市外和田堀町羽根本三五八號

豫備陸軍中將 築紫熊七

東京市牛込區南町四六番地

元民政黨顧問 片岡直温

東京市下谷區金杉上町八五番地

元衆議院議員 大野敬吉

東京市牛込區若松町七二番地

衆議院議員 粕谷義三

東京市麻布區富士見町四三番地

全 河上哲太

東京府下西大久保町四四六番地

元横濱地方裁判所長 横山鑛太郎

東京市外中野町西三六一番地

衆議院議員 田中萬逸

東京市麻布區井町一七六番地

全 武内作平

東京府下戸塚町上台七四七番地

陸軍少將 多賀宗之

東京市赤坂區青山北四丁目六六番地

子爵 竹屋春光

東京市小石川區日向台町一六三番地

日本書道会幹事長 田中弘之

濱松市千歲町

衆議院議員 井上剛一

神奈川縣横濱市

檢事正 竹内左太郎

札幌市北區一丁目

衆議院議員 中西六三郎

東京市赤坂區新町五丁目七番地

黑龍會長 内田良平

東京市赤坂區青山高樹町一二五號

衆議院議員 植原悦二郎

東京市浅草區永住町九六番地

權大僧正 野口日主

和歌山市四番町

衆議院議員 山崎傳之助

東京府下大森町入新井町

第十師團長 松井石根

大阪市港區九條通り三番地

衆議院議員 榊谷寅吉

東京市麻布區富士見町四三番地

全 松村恒一郎

東京市芝區田町七丁目八番地

日露實業會社社長 増田正雄

東京市四谷區内藤町一番地

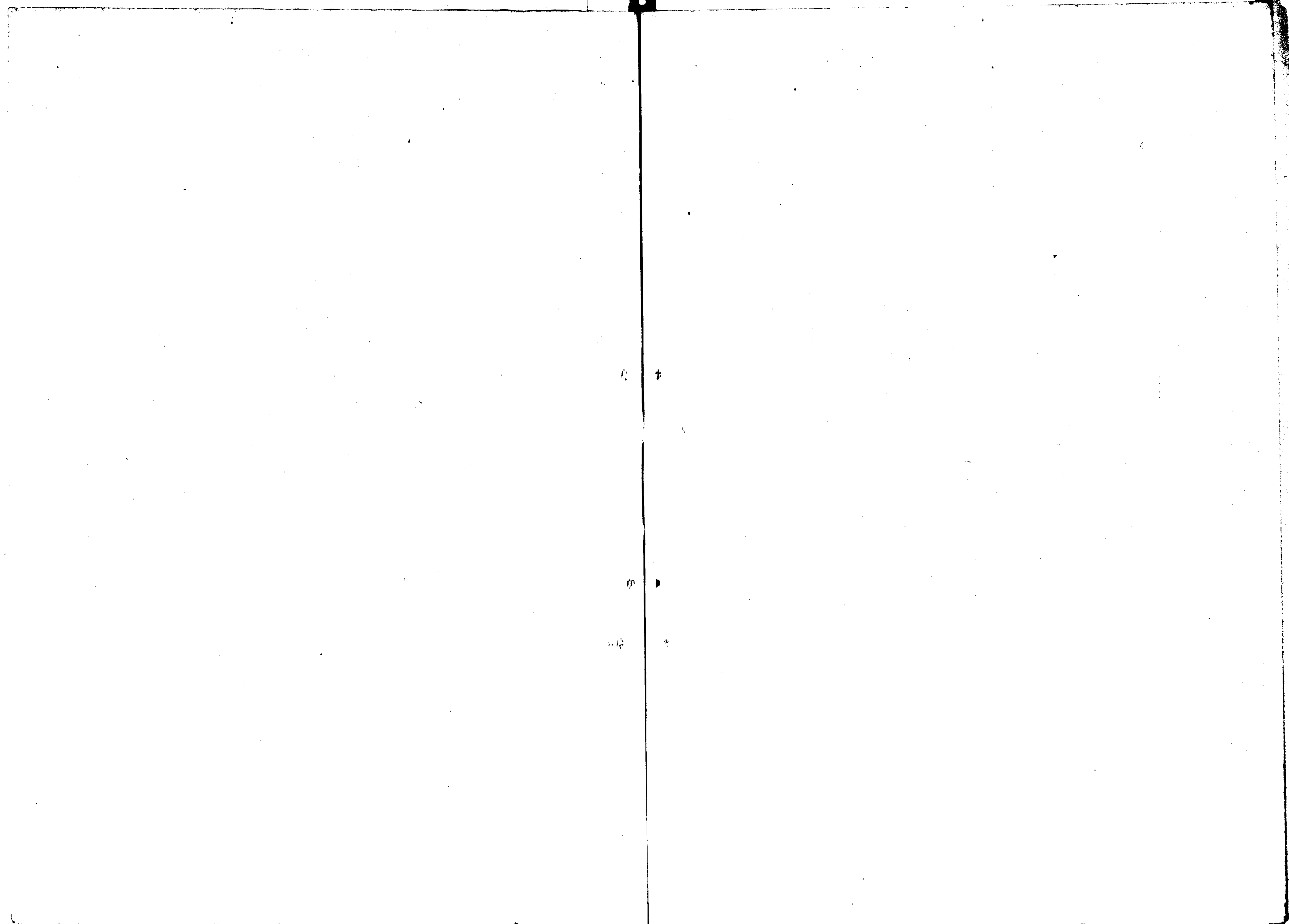
貴族院議員 榑原俊九

東京市牛込區神天町八七番地

法學博士 古賀廉造

| | | |
|-----------------|---------------|-------|
| 東京市本所區横川町五〇番地 | 衆議院議員 | 小俣政一 |
| 東京市芝區芝口二丁目七番地 | 全 | 秋田清 |
| 東京府下幡ヶ谷町六三番地 | 第六師團長 陸軍中將 | 荒木貞夫 |
| 東京市四谷區東信濃町二八番地 | 總領事 | 天羽英之 |
| 東京市四谷區愛住町八番地 | 貴族院議員 | 坂西利八郎 |
| 東京市芝區松坂町三四番地 | 衆議院議員 | 櫻内幸雄 |
| 東京市牛込區加賀町一丁目九番地 | 元代議士 | 佐藤安之助 |
| 東京市麻布區筆筈町 | 全 | 木下謙次郎 |
| 東京市牛込區若松町一四番地 | 衆議院議員 | 三木武吉 |
| 神奈川縣平塚町 | 全 | 三浦虎雄 |
| 京都市加古川町 | 全 | 三宅利平 |
| 神奈川縣鷗見町一五一二番地 | 外務省要領 第二課長 | 三浦武美 |

貴族院議長德川家達殿



五修

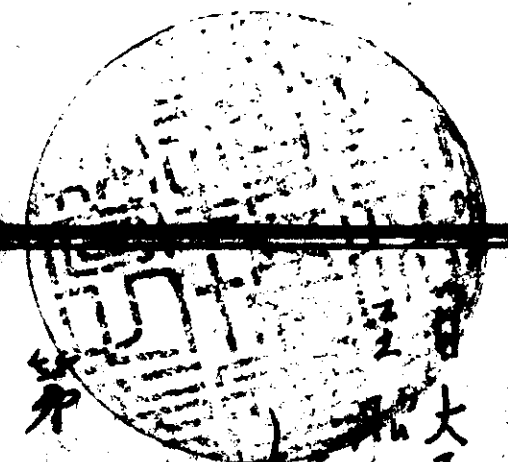
M4-12-4

朝鮮問題雜纂

卷四

221.66

75°



大正八年五月
昭和十二年四月
朝鮮問題三問之書類

總目録

- 第一 朝鮮問題雜纂 卷一 (自大正八年五月至昭和八年七月)
- 第二 朝鮮問題雜纂 卷二 (自大正八年七月至昭和八年七月)
- 第三 朝鮮問題雜纂 卷三 (自大正八年七月至昭和八年七月)
- 第四 朝鮮問題雜纂 卷四 (自大正八年七月至昭和八年七月)

自續會同採書類

以上

故阪谷子爵記念事業會

221.06
75°

朝鮮問題雜誌

卷四

自彙會關係書類

| | | | | |
|-----|------------------------------|-----|---------|-------------------------|
| 一三二 | 自彙會日記 (昭和三年筆記) | | 大正三三〇一〇 | 昭和三年十一月一日 (四社商) |
| 一三三 | 自彙會設立趣旨書 (總務部自編見書) | | 大正三三五 | 五月三十一日 總務部次 十月七日 關東館 |
| 一三四 | 自彙會設立趣旨書 會則 | | 〃 | |
| 一三五 | 自彙會 事業豫算 決算 經常費報告 | | 〃 | |
| 一三六 | 自彙會 財政報告 | 關東館 | 〃 | |
| 一三七 | 自彙會 事業報告 財政報告 會合通知件 | 自彙會 | 〃 | 二部アリ |
| 一三八 | 自彙會 事業報告 第一年度 大正三年十月 會計報告 | 〃 | 〃 | |
| 一三九 | 自彙會 會所行原草案 (第一案) | 〃 | 〃 | |
| 一四〇 | 自彙會 財政概算 | 〃 | 〃 | |

故阪谷子爵記念事業會

| | | | | | | |
|-----|---------------------|------------------|------|----|-----|---|
| 一四一 | 取人設立許可願書、審判行府案(元二五) | 自増会 | 大正一五 | 三 | | |
| 一四二 | 取人自増会許可書、決定款(審判行府) | " | 昭和二三 | 四 | 二部了 | |
| 一四三 | 取人自増会決定疑(時報支書) | " | " | 四 | 二部了 | |
| 一四五 | 初年度役員選挙、件 | " | " | 五 | | |
| 一四六 | 七月十一日常議員會決議録 | " | " | 六 | 四部了 | |
| 一四七 | 自増会結構、口數(合計四十二口) | " | " | 七 | 三一 | |
| 一四八 | 自増会日暮中御見舞状 | 他聞 = 或 名 録 | " | 七 | | |
| 一四九 | 取人自増会経過収祝報告書 | 自増会 | " | 一二 | 二六 | |
| 一五〇 | 各ラッシュ、甲乙各五、總本係三名 | " | " | 五 | 二四 | |
| 一五一 | 自増会組織委員氏名 | " | " | 四 | 二〇 | |
| 一五二 | 本多克重氏報告、件 | 在 山 産 麟 | " | " | 一一 | 七 |
| 一五三 | 自増会年賀状 | 他聞 三 録 | " | 四 | 一一 | 元 |

| | | | | | |
|----------------|--|--|--|--|--|
| 1. 谷子爵記念事業の経緯 | | | | | |
| 2. 谷子爵の生涯 | | | | | |
| 3. 谷子爵の功績 | | | | | |
| 4. 谷子爵の私生活 | | | | | |
| 5. 谷子爵の家族 | | | | | |
| 6. 谷子爵の交友関係 | | | | | |
| 7. 谷子爵の政治活動 | | | | | |
| 8. 谷子爵の経済活動 | | | | | |
| 9. 谷子爵の文化活動 | | | | | |
| 10. 谷子爵の遺産 | | | | | |
| 11. 谷子爵の追善事業 | | | | | |
| 12. 谷子爵の功績のまとめ | | | | | |

故阪谷子爵記念事業所

故阪谷子爵記念事業所

| 項目 | 内容 | 備考 | 金額 | 単位 |
|----------------|----|----|----|----|
| 1. 谷子爵記念事業の経緯 | | | | |
| 2. 谷子爵の生涯 | | | | |
| 3. 谷子爵の功績 | | | | |
| 4. 谷子爵の私生活 | | | | |
| 5. 谷子爵の家族 | | | | |
| 6. 谷子爵の交友関係 | | | | |
| 7. 谷子爵の政治活動 | | | | |
| 8. 谷子爵の経済活動 | | | | |
| 9. 谷子爵の文化活動 | | | | |
| 10. 谷子爵の遺産 | | | | |
| 11. 谷子爵の追善事業 | | | | |
| 12. 谷子爵の功績のまとめ | | | | |

白雲會口記

崇禎己未年
二月二十五日
白雲會口記

22/06

75°

金田重太郎
 代六郎
 増田義一
 永井亨
 清水一林
 徳永為次
 在十三日十月十日 國書三三三
 〇十三日十月十日 新聞

自彊會會則

〇十三日十月十日 新聞
 金二五十四日 〇十三日十月十日
 〇十三日十月十日 新聞

- 第一條 本會ハ自彊會ト稱ス
- 第二條 本會ハ朝鮮同胞ノ自助的精神ヲ涵養シ精神上、經濟上及社會上ニ於ケル地位ノ向上ヲ期スルコトヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ本部ヲ東京市小石川區内ニ置ク
- 第四條 但シ都合ニ依リ支部ヲ他地方ニ設クルヲ得
- 第五條 本會員ハ會ノ目的達成ノ爲メニ誠心努力スル朝鮮同胞ヲ以テ組織ス
- 第六條 本會員ハ役人ノ被選權又ハ建議及議決權ヲ有ス
- 第七條 本會員ハ本會ノ維持及發展ニ對スル義務ヲ有シ本會一切ノ規則ヲ遵守スルヲ要ス
- 第八條 本會ハ會員ノ義務及一般社會ノ寄附金ヲ以テ之レヲ維持ス
- 第九條 本會ハ第二條ノ目的ヲ達成センカ爲メニ庶務部、教育部、勞働部ヲ設置ス
- 第十條 本會ハ委員若干ヲ置キ設立者會ニ於テ議決シタルコトヲ執行ス
- 第十一條 本會ハ顧問及賛助員若干ヲ推選シテ會ノ維持發展ニ對スル指導及賛助ヲ受ク
- 第十二條 本會ノ委員選舉ハ設立者會ニテ之レヲ選舉ス
- 第十三條 本會ノ集會ハ設立者會、定期總會、臨時總會、委員會ノ四種トス
- 第十四條 本會ノ會員ハ入會金五十錢、年捐金參圓トス
- 第十五條 本會ノ規定ナキ事項ハ設立者會ノ決議ニ依リ之レヲ執行ス

自彊會細則

朝鮮同胞會自彊會細則
一九三二年四月

- 第一條 本會ハ自彊會ト稱ス
- 第二條 本會ハ朝鮮同胞ノ自助的精神ヲ涵養シ精神上、經濟上及社會上ニ於ケル地位ノ向上ヲ期スルヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ本部ヲ東京市小石川區内ニ置ク
但シ都合ニ依リ支部ヲ他地方ニ設クルヲ得
- 第四條 本會員ハ會ノ目的達成ノ爲メニ誠心努力スル朝鮮同胞ヲ以テ組織ス
- 第五條 本會員ハ役人ノ被選權又ハ建議及議決權ヲ有ス
- 第六條 本會員ハ本會ノ維持及發展ニ對スル義務ヲ有シ本會一切ノ規則ヲ遵守スルヲ要ス
- 第七條 本會ハ會員ノ義務及一般社會ノ寄附金ヲ以テ之レヲ維持ス
- 第八條 本會ハ第二條ノ目的ヲ達成センカ爲メニ庶務部、教育部、勞働部ヲ設置ス
- 第九條 本會ハ委員若干ヲ置キ設立者會ニ於テ議決シタルコトヲ執行ス
- 第十條 本會ハ顧問及贊助員若干ヲ推選シテ會ノ維持發展ニ對スル指導及贊助ヲ受ク
- 第十一條 本會ノ委員選舉ハ設立者會ニテ之レヲ選舉ス
- 第十二條 本會ノ集會ハ設立者會、定期總會、臨時總會、委員會ノ四種トス
- 第十三條 本會ノ會員ハ入會金五十錢、年捐金參圓トス
- 第十四條 本則ニ規定ナキ事項ハ設立者會ノ決議ニ依リ之レヲ執行ス

自彊會細則

- 第一條 本會ハ主任委員ノ聯署ヲ以テ之レヲ代表ス
- 第二條 總則第八條ニヨリ庶務部ヲ置キ左ノ事務ヲ執行ス
- 一、庶務會計ニ關スル事項
- 一、社交、慰安、娛樂ニ關スル事項
- 一、朝鮮文化及物産紹介ニ關スル事項
- 一、他部ニ屬セサル事項
- 第三條 庶務部ハ委員若干ヲ置キ一人ハ主任委員トシテ事務ヲ統轄ス
- 第四條 庶務部ノ一般委員ハ主任委員ノ指揮ニ依リ事務ヲ分擔掌理ス必要アル場合ハ事務員若干ヲ雇フ事ヲ得
- 第五條 總則第八條ニヨリ教育部ヲ置キ左ノ事務ヲ執行ス
- 一、德育ヲ實現センカ爲メ講演會ヲ開催スルコト(宗教及精神講話)
- 一、智識ヲ向上センカ爲メ講演會、講習會ヲ設クルコト
- 一、會報、他種雜誌ヲ刊行
- 第六條 教育部ニハ委員若干ヲ置キ一人ハ主任委員トシテ之レヲ統轄ス
- 第七條 教育部ノ一般委員ハ主任委員ノ指揮ニヨリ事務ヲ分擔掌理ス必要アル場合ハ事務員若干ヲ雇フ事ヲ得
- 第八條 總則第八條ニ依リ勞働部ヲ置キ左ノ事務ヲ執行ス
- 一、勞働者就職ニ關スル事項
- 一、勞働者宿舍ニ關スル事項
- 一、勞働者教化及隣保事業ニ關スル事項
- 第九條 勞働部ニハ委員若干ヲ置キ一人ハ主任委員トシテ之レヲ統轄ス
- 第十條 勞働部ノ一般委員ハ主任委員ノ指揮ニヨリ事務ヲ分擔掌理ス必要アル場合ハ事務員若干ヲ雇フ事ヲ得
- 第十一條 總則第十二條ニヨリ定期總會ハ毎年三月ニ之レヲ開催ス
- 第十二條 臨時總會ハ必要事項アル時之レヲ開ク
- 第十三條 定期總會又ハ臨時總會ハ設立者ノ承諾ヲ得テ主任委員ノ聯署ヲ以テ之レヲ開ク
- 第十四條 委員會ハ庶務部主任委員カ之レヲ召集ス
- 第十五條 總則第十三條ニ依リ入會金ハ必ス入會當時ニ之レヲ納入ス
- 第十六條 總則第十三條ニ依リ年捐金毎年六月、十二月二期ニ分納ス
- 第十七條 年捐金ヲ一時ニ納入スル場合ハ二圓五十錢トス
- 第十八條 規定ナキ事項ハ設立者會ノ決議ニ依リ之レヲ執行ス

自彊會設立趣旨書

大正十三年十月廿九日
岡村芳孝

從來自ら助くる力の乏しかった吾人には深刻なる悲みが餘り多かつた。萎靡衰頹の長い歴史を背負つて而も新しい世界に幸福に生きたいと望む吾々は自ら修めるに、飽くまで強くなければならぬ爲し能ふべきを爲さず徒らに同胞相嫉み近隣相争つて人間の進歩發達に大なる障害を與へ却て自ら多くの禍を招いたことは自業自得もあつて更に吾人の最大恥辱である、勤勞して耕す者は幸福なる收獲を得、怠りて爲さざる者は苦みと悲みとを受けは理の當然である

吾人は古い殻より新しく萌え出て自ら覺り、自ら修め自ら強くなつて理解と親善と團結とによりて自他共に榮ひなければならぬ、兄弟牆に閲ぐの愚はいふ迄もなく國際の紛争乃至人種の鬭争等皆唾棄すべきである

吾人の前途には限りなき障害が横はつて居る

吾人は此の東洋の難局に處し先づ起つて高樓に警鐘を打ち鳴らすべき責任を痛感する乃ち茲に「自彊會」を創設し同胞に叫びて「社會人として幸福なる實生活を爲し遂ぐるには如何にすべきか」を提議するのである

嗚呼人は疲れ日は方に暮れんとする、吾人は正しく緊禪一番空論を避け眞實につき人間生存の大義を明かにし自他共榮の大道を踏み、よつて以て悲むべき同胞の環境を改善し大勢の機運に順應する覺悟を爲さねばならぬ

我等同胞は須らく虚心坦懷自ら修め人を助け相助相讓眞に融和し深く結び人類共榮の理想郷に到達せんことを期せねばならぬ、來れ同胞よ、自彊會は同胞共榮の安宅である

大正十三年十月 日

自彊會設立發起者 (順不同)

朴 思 稷
閔 爽 鉉
李 根 茂

設立賛成者 (順不同)

| | | |
|--------|-------|-------|
| ○嘉納治五郎 | 山内繼喜 | 白上佑吉 |
| ○阪谷芳郎 | 木村雄次 | 幣原坦 |
| ○八代六郎 | 齋藤吉十郎 | 松浦鎮次郎 |
| ○増田義一 | 遊澤元治 | 吳羽新五郎 |
| ○永井亨 | 五代龍作 | 平山成信 |
| ○清水一雄 | 山崎覺次郎 | 桐島像一 |
| ○徳永爲次 | 加藤壯太郎 | 笠井信一 |
| ○牧野英一 | 片山次雄 | 近藤千賀三 |
| ○三輪政一 | 大橋光吉 | 酒井忠正 |
| ○上杉慎吉 | 菅原通敬 | 志村源太郎 |
| ○嘉納徳三郎 | 松井錦橘 | 守屋榮夫 |
| ○森本勝己 | 花岡敏夫 | |

○印 龍 岡 佐 神

總 力 支 援 者

法人部三

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○十二月十日 西倉嘉三、下、修了
改作、西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了
○三月十五日 西倉嘉三、下、修了
○三月十五日 西倉嘉三、下、修了



法人部三

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

○三月十五日 西倉嘉三、下、修了

三月廿四日
淺瀬奉書
于江上

金ノ町
二(五)由

二月廿四日
浅瀬奉書
于江上

依頼より左の事(但成其の都合にて)

○五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

○五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

○六月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、

○七月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

○八月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

○九月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

、中、五月十日の文書に、善後澤の件に、工部省の

福田子、維持費増進ハナルハ、代官、推

進シテモ、

○^{二年}十月十号、同来致

維持費未々増進セシ

永井、柳太郎、等、之ヲ北々致シ、**推公**

ノ事トモ致シ

新教會、一、二年、一、二年、等、之、

、柳白、土山、新、政、市、等、引、入、之、

○^{二年}十月十号、清水、一、雄、等、致、書、之、

、新、政、市、長、一、等、之、

○^{二年}十月十号、同来致、書、之、

、同来、之、書、之、

同来

年、中、之、事、之、

、同来、之、書、之、

、同来、之、書、之、

、同来、之、書、之、

○三月二十号、同来致

、同来、之、書、之、

、同来、之、書、之、

、同来、之、書、之、

、同来、之、書、之、

、同来、之、書、之、

、同来、之、書、之、

、同来、之、書、之、

白ゆき
権左衛門
宗正基

一自難言者其人なり、云云、其後、
其多中、故、將來、い、大、た、結、果、ヲ、見、セ、ト、
ノ、ト、権、左、衛、門、ト、事、今、ト、同、様、ト、也、
云、云、ト、ト、ト、ト

○同日、下、関、東、を、越、え、江、越、に、移、リ、命、に、違、ふ、事、を、不、可、
知、ス、ル、に、成、リ、武、田、中、ノ、密、令、を、全、く、後、に、マ、リ
○同日、二、日、後、藤、原、日、リ、京、師、狩、着、ノ、電、報、ヲ、
○同日、下、関、東、を、越、え、江、越、に、移、リ、命、に、違、ふ、事、を、不、可、
知、ス、ル、に、成、リ、武、田、中、ノ、密、令、を、全、く、後、に、マ、リ

○四月、十、日、王、室、ヲ、シ、テ、我、軍、乃、洋、儀、を、合、合、
嘉、納、清、以、徳、永、傳、曰、永、年、武、田、外、辭、人、三、
番、再、次、年、十、日、為、元、元、子、資、ハ、清、以、
子、資、ハ、田、中、ト、云、



何、ト、カ、考、へ、置、ス、云、云、佐、藤、氏、ノ、後、継、
氏、ノ、事、也、ト、云、云、記、事、ヲ、
○同日、下、関、東、を、越、え、江、越、に、移、リ、命、に、違、ふ、事、を、不、可、
知、ス、ル、に、成、リ、武、田、中、ノ、密、令、を、全、く、後、に、マ、リ

○同日、下、関、東、を、越、え、江、越、に、移、リ、命、に、違、ふ、事、を、不、可、
知、ス、ル、に、成、リ、武、田、中、ノ、密、令、を、全、く、後、に、マ、リ

一、若、儀、者、福、田、ト、信、任、ト、事、ト、又、ハ、細、石、
ト、云、云、

一、段、々、而、日、修、曰、ト、云、云、修、持、方、々、字、ノ、有、力、
者、也、ト、云、云、

一、権、左、衛、門、考、ハ、江、越、前、ト、事、ト、又、ハ、細、石、
ト、云、云、ト、云、云、其、他、ト、有、力、者、也、ト、云、云、
こ、ハ、江、越、前、ト、云、云、修、持、方、々、字、ノ、有、力、
者、也、ト、云、云、

一行政長官たる以藤終生は制断人なりとて任する様
 敷しとす
 一藤原ノ多數ヲ制断人ニシテ自決的治政ヲ与ふる様御
 断敷しとす
 一各ニ代官社ノ所有ニ任せしむる様御断敷しとす
 一廣シ制断人ノ自任罷ヲ禁断人ニ様御断申しとす
 一制断人ノ高等ノ者ノ入學事ヲ制断人ニ多く与ふる
 様御断申しとす
 一國々ヲ主テ中ニ政國トシテ決し而テ海州及雲仙利
 重ヲ日海軍駐ノ植吏ニ任ぜしむる様御断申しと
 す

以上



壬午五月廿二日

南宮重成
子安

財團 自 彊 會
法人

常務 崔 光 龍
委員

集鴨宮下一六五三

○壬午七月九日財團事務報告書

- 一、全月ノ業務
- 一、事務所ノ中興新築協會ニ於テ會合ニ任ん余ノ
 様御断敷しとす
 一、財團事務方ニ於テ協會ト任ん余ノ業務ニ任ん余ノ
 從就中務人入るる様御断敷しとす

向野トナル云

一産婦と云ふ傳あり（同くハ人知事云々）

氣力用盡といふ何れニテモ上事ナ

海、舞、ミマ、ヤ、田、手、折、尊、下、ミ、聯、坐、考

う有る 極品に最々無類あり

白耳義之於心弱國會の修睦を公席

看、初より片山港へ、魚沢より、陸揚へ、

佛国ニテハ、信カ早ク、要ルコトニ至クハ、其ノ

トモ多宝らせうん

爲解後臺より表せし沈黙を去る

一清以維，子及精氣ヲ存ニ全國山ニ遊フ

張原長

○三月九日壬子 閏癸卯未定又四ノ

一、ハナハナニテ
青藤子訂ニ要スル子勇ニ要スル

議會、決議權ありと認め、時刻に奉り、中絶、

方々を去るに云い
又、御事候とも書付の事有と

シテ
抑ク
トシ
讀ム

一、產經：今指導下，柳吉，磯國ヲ佐々考

同人等而，後復之，遂令余力振其何

嘉納治郎、政洲行達

次重會ス因テ帰リモ重會スヤリ

一関之居而後舊の藩より、竹年、二四位朝

露、窮り、事、情、ヲ、憐、れ、る、力、之、ミ、云、

一年ハ刺爲例、公平ニシテ察心ナク人ヲ欺害ス

て布教に努めるのみであつて、第三期に入りてよりは朝の充實を圖ると共に、人乃を海外に宣傳するに至つ日本の東京、支那の上海並東、厦門浦口等にも追々弓が張々たるに至り、更に進西伯利亞を経て、露都莫斯科。機關が新に設置され、巴教からも誠米が來るに至つてであるが、今春は平素から金待してをった米領布哇最萬の朝鮮同胞が居住しを——にも遂に天道教宗理院をすするに至つた。……今や第の初期に當つて世界の樞要我が宗理院を置きたる以上奮闘して布德に努めねばな

李光前

秦原製

金萬所、銀万、必利三枚、并崔府、交名一枚、
曰月、三箇、賣錢、此入、回人、平ん、七、錢、解、奉、下
句、上、字、ノ、答

[illegible]

三妻家より武田家へ金中云々

金中云々 武田家へ金中云々 就中云々

○二日 武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

主税神云々 武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

○四日 武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

○四日 武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

武田家

武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

○五日 武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

○六日 武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

○七日 武田家へ金中云々 武田家へ金中云々

崔、吾應之、然方望之、反于無人之、不遇之事、
ヲ終〜

一月二十四日、京城、明、月、館、に、於、て、小、崔、麟、氏、一、晩、餐、
招待、に、出席、シ、タ、氏、名、左、ノ、如、ク、

教育家

鄭朴勝林

宋鎮禹
李相煥

新闻记者

李 閔 泰 璠

官吏

高元勳

李子充

長朴
榮
誌

金乳团

張村
平
鍾

外十二人 合二十七人

和田一良
河部充家

量脈初、然花子後、
 子國、六、五、族、の、十、り、云、い、

$\frac{1}{2} + \frac{1}{2} = 1$

Handwritten notes at the bottom right:

at 17
1000
1000
1000

○五月二十七日、内王、三井、年表、古、四、
三、年、承、既、又、
自、法、東、在、立、解、人、在、中、三、年、之、三、何、ら、ト
と、テ、る、對、入、亡、し

入日天道教青年同盟にては緊急
常務委員會を開催し、如左決議
をした

一、本月四日に崔麟一派の天道教一部に於て所謂朝鮮自治運動を爲すべく決議したといふことは、天道教の精神に反するを以て我等は之を絶對に反對す。

これに就いて崔麟氏は語る。決議に参席した自分でも始めて聞く話で、それは政治常識のない者の臆測か或は中傷的の宣傳でせう。曩の天日紀念日に式が終つて信仰、教理、教徒訓練問題等に関しで指示したとがあり、又破壊の途程にある朝鮮人として漠然たる思想問題及び高遠なる經濟理論よりも、一歩なりとも當面の現實苦の緩和を謀らねばならぬといふたとはあつた。それに又其席は政治問題を討

馬賊された天童散人等のみの集つて朝鮮自治運動について決議するなぞといふところあるべき筈もないし、兎に角これには全然訛傳に過ぎない【中外】

[illegible]

○壬午九月可曰權之龍、李要至、未修入

一、重要改正（附事主署名及心得）
中經文部省保

可々 李王の理事新 (四十一日) 李王の理事新

一、一、 庚辰七月、二、 向陽、三、 陽氣ノ起リ、四、 父母病氣主ニカク

遷延不直致儒書了

人皆善也。方寸法意不

三士内必破綻常立事多
此世場(幸)不

陳

書亦歸矣

天正九年、合間、故ア、
朴玄法、(セトヤ) ヲ
玄主トシ

崔駰一辭向來不

權平鎮(丁丑) 新羅(丁丑) 三世上(丁丑)

天行書

[illegible]

李玄子

○五月二十日、午後二時、東京市立第一高等學校にて、
講演會あり。出席者、下村、佐々木、山田、佐藤、
佐々木、山田、佐藤、佐々木、山田、佐藤、
佐々木、山田、佐藤、佐々木、山田、佐藤、

[illegible]

○十月丁未、在田（田重多）、南、西、北、東、

○本年一月十五日、余病臥、未之。一日、白眉翁、二月下旬、
 往。四月、十五日、乙未、上主、意、思、
 (七十、五、新、新、會、長)、吳、世、昌、(七十、五、
 老、者、函、云) 毛

食同く 不道教一教と 西天の塔と云ふや云ふべし

〇一月亦云、外、東、後、東、之、（此、後、民、衆、其、地、之、）推、薦、了、相、役、
 力、）余、ハ、事、人、ノ、決、心、カ、第、一、ニ、ヨリ、消、滅、ス、ル、所、ヲ、盡、心、以、テ、回、答、ス、
 之、ニ、相、答、ス、ル、ニ、余、ハ、世、ノ、物、々、々、知、ル、ハ、自、強、金、ノ、仁、事、之、物、々、
 知、ル、ヲ、善、ク、相、答、ス、ル、之、に、信、仰、シ、因、取、リ、力、ニ、ハ、様、々、有、リ、
 理、々、々、ノ、度、也、

四月 崔麟 上 亨 胃 腸 病 由 之 事 大 正 陸 一
 漢 原 亨 受 之 由 余 一 日 月 下 日 一 漢 病 夫 力 為 人
 而 云 亨 知 之 延 期 一

九月五午刻十時在廣柔佛之麻甲三石短山莊初
不金經人參政確付与了備人自怡備之其後
二石以下平頭頭若狀首相老面金了勸人又經

側ハ準備知候ヲ傳ス。

○本年上田甲山田三畝ハ、事終不日京城番大
組よりして赴任、由 朝解終法、亦多取權
其代根本ヲ輪ニ半位結習、ハ、親由ニ之ナ
カレセシメ、後、由リ傳ス。

○十月廿九日、上條藩、先利ニ奉ん、今夕、先條藩解、由
以上、名利ヲ此ニ見、是也。

○十二月十日、上田藩、先利ニ奉ん、今夕、先條藩解、由
以上、名利ヲ此ニ見、是也。

○七年一月、上田藩、先利ニ奉ん、今夕、先條藩解、由
以上、名利ヲ此ニ見、是也。

○七年四月、上田藩、先利ニ奉ん、今夕、先條藩解、由
以上、名利ヲ此ニ見、是也。

○七年四月、上田藩、先利ニ奉ん、今夕、先條藩解、由
以上、名利ヲ此ニ見、是也。

○七年四月、上田藩、先利ニ奉ん、今夕、先條藩解、由
以上、名利ヲ此ニ見、是也。

○七年四月、上田藩、先利ニ奉ん、今夕、先條藩解、由
以上、名利ヲ此ニ見、是也。

上條藩、先利ニ奉ん、今夕、先條藩解、由
以上、名利ヲ此ニ見、是也。

○四月十日、上田藩、先利ニ奉ん、今夕、先條藩解、由
以上、名利ヲ此ニ見、是也。

○五月十日、上田藩、先利ニ奉ん、今夕、先條藩解、由
以上、名利ヲ此ニ見、是也。

○五月十日、上田藩、先利ニ奉ん、今夕、先條藩解、由
以上、名利ヲ此ニ見、是也。

この南極トフ名ノ故書アリ 聖賢ヲ得ル

12認可 第二〇一四號

朝鮮通信(七) 李正白(七)

二四

は今年よりも大に増加するものと見られてをる。現在の朝鮮の警察は全部が一萬九千三百九十名で其内朝鮮人は八千一百八十九名である(東亞)

天道教正體景 露批判會決議

天道教正體暴露批判會にては三日第二會總會を開いたが左の六個條の決議を發表した(朝日)

決議文

一、天道教は儒佛仙三教と鄭堪錄を混合した觀念論に其起源を置き當時大衆の自然發生的反抗性に投機迎合せる反階級的集團にて近年更に唯物論的思想の加味を試み一種の折衷主義的傾向の理論的根柢を造つてをる

二、天道教は階級協調と民族改良主義に其の政治基調を置く所謂「當面實際利益」なる標語を以て無産階級運動を阻碍

し大衆を自×運動の陥穽に誘引轉落せしめてをる目下彼等の農民社、勞働社、京城青年社、共生組合等は悉く其の陰謀の所産である

三、天道教は民族ブルジョアの直接的代理人たる上層小ブルジョアを上部×群とし、農民及勞働者、青年、學生等一般勤勞大衆を其の下部の被×群とする構成體である然れば彼等×群の罪惡を大衆の面前に暴露し其の影響下に勤勞大衆を覺醒解放せしむること吾人の任務である

四、天道教が階級協調に結附ける實際利益の旗幟をかかげ朝鮮運動の領導把握を主張することは朝鮮運動を改良と妥協に轉落せしめるものである故に今般新階段誌に天道教領導權反駁は階級的理論闘争であり此に對する天道教の暴行は無産階級に對するファッショ行動と認定す

五、青友黨の決議と同じく新階

段誌の天道教領導權反駁文中「貞女の假面を被れる賣春婦」といふ文句を反駁文全體と分離し無條件の「侮辱」と揚言することは領導權主張の妄想を大衆の耳目の前に掩蔽し自己教徒をして該批評の盲目的宗教感情を煽動するものである

六、天道教の首領輩が其の手足たる青友黨(新派)を使嗾し彼等に暴行を加へたる團體及本會を中傷又は抗拒しつつ「民衆運動團體と眞摯なる友誼を尊重する」と阿附的言辭を以て今回事新しく秋波を送れることは、彼等の暴行に因る階級大衆の憤怒に恐縮し大衆的攻撃の鋭鋒を逃避すると同時に彼等の正體を自稱民衆運動團體なる假裝内に隱匿せむとする奸狡なる手段と認定するものである(朝日)

合に参加せむことを共謀し同被
告人をして談合行為を擔任せし
めたる後、其の結果を承け被告
人多賀保は情を知れる被告、中
島逸郎を、被告入井上三治郎は
情を知らざる所外鈴木英二を各
使用し、被告入梁川小市及び他
の各被告人は各本人が、代行者
に在りては入札期日たる昭和七
年五月廿八日指定の入札場所た
る平壤工務事務所に出頭し定刻
に至るや、真正の競争入札を爲
すが如き態度を装ひ各右談合に
て決定せる金額の入札を爲し、
係員及契約擔任者たる平壤工務
事務所長古賀一を誤信せしめ
以て豫定の如く談合に依りて得
たる最低入札高五十一萬九千八
百圓の入札者たる大林組を落札

權利を得し財産上不法の利益
を得せしめたり
被告入森井文司は前示の如く
荒井組が前示工事に対する競争
入札の指名を受けるや昭和七年
五月二十六日前示荒井組事務所
に於て前示談合に参加すること
及び談合の方法、談合金の程度
等に對し、被告入丸山忠作と協
議共謀し同被告入をして其の實
行に當らしめ以て前示談合入札
に依る犯罪に加擔せり
(三八) 被告人妹尾幸寛、同海野
斐雄、同坂井清治、同梁川小市
同高志宗十郎、同千田修二、同
下畑秀藏、同阿部新太郎は昭和
七年五月廿五日頃、三木合資、
鹿島組、京城土木、大倉土木、
柴田組、西本組、中央土木、阿

同小野三と共謀し大倉土木
高志宗十郎は柴田組、同千田修
二は西本組、同下畑秀藏は中央
土木、同阿部新太郎は阿川組を
各代表し、京城旭町一丁目鹿島
組事務所に出頭し前示談合に
於て前示談合に参加すること
及び談合の方法、談合金の程度
等に對し、被告入丸山忠作と協
議共謀し同被告入をして其の實
行に當らしめ以て前示談合入札
に依る犯罪に加擔せり
(三八) 被告人妹尾幸寛、同海野
斐雄、同坂井清治、同梁川小市
同高志宗十郎、同千田修二、同
下畑秀藏、同阿部新太郎は昭和
七年五月廿五日頃、三木合資、
鹿島組、京城土木、大倉土木、
柴田組、西本組、中央土木、阿

○昭和七年五月廿八日指定の入札場所たる平壤工務事務所に出頭し定刻に至るや、真正の競争入札を爲すが如き態度を装ひ各右談合にて決定せる金額の入札を爲し、係員及契約擔任者たる平壤工務事務所長古賀一を誤信せしめ以て豫定の如く談合に依りて得たる最低入札高五十一萬九千八百圓の入札者たる大林組を落札

○昭和七年五月廿八日指定の入札場所たる平壤工務事務所に出頭し定刻に至るや、真正の競争入札を爲すが如き態度を装ひ各右談合にて決定せる金額の入札を爲し、係員及契約擔任者たる平壤工務事務所長古賀一を誤信せしめ以て豫定の如く談合に依りて得たる最低入札高五十一萬九千八百圓の入札者たる大林組を落札

右高志宗十郎は柴田組、同千田修二は西本組、同下畑秀藏は中央土木、同阿部新太郎は阿川組を各代表し、京城旭町一丁目鹿島組事務所に出頭し前示談合に参加すること及び談合の方法、談合金の程度等に對し、被告入丸山忠作と協議共謀し同被告入をして其の實行に當らしめ以て前示談合入札に依る犯罪に加擔せり

○昭和七年五月廿八日指定の入札場所たる平壤工務事務所に出頭し定刻に至るや、真正の競争入札を爲すが如き態度を装ひ各右談合にて決定せる金額の入札を爲し、係員及契約擔任者たる平壤工務事務所長古賀一を誤信せしめ以て豫定の如く談合に依りて得たる最低入札高五十一萬九千八百圓の入札者たる大林組を落札

山崎組

○九年七月十九日、刻下、
○九年正月廿七日、
行書、
○九年正月廿七日、
宣文元、
崔中、
一、
合、
其、
○二月二十七日、
此云、
人、

○五月廿七日、本學主事に、今般本私本社より龍井の勸勤を
不仕出覺知の理事後任に、茶送澤へんせり云々（改訂）
○四月十日、崔文龍、金熙徳の傳へる人、同人今年、大以新事業
（壬辰年神功）朝拜する、就轉由、總領事館之印之紙あり
○四月十日、總會、余腹痛なるが爲ならず
○四月十日、日蓮山佐藤、中祀院参り候なり
○五月五日、崔文龍来る、何と不意に即ち、恩謝状を送る（維摩
會より二日後より取り得也）（多分、一尋常なり）
○六月四日、清川一雄、滿洲より朝鮮より經て、瑞雲山佐藤に而会
ふ、同人より中祀院入りたる物、車馬（崔文龍の助力あり）傳きたり
山後、去月甲午の上京し、釜山にて電より、南成院へ金山にて從事し、由
○六月廿七日、山佐藤、善喜來ぬと云ひ、是より先、中島司より山後ノ中祀院

十年

へい地ト親日ハ勢アリ非難アリ云々重教アリ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

新風一文ヲ書ク 吉田ハスガフ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

○九年四月二十日山佳^{山佳} 事務 神妙所書結アリ

（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（九）（十）（十一）（十二）（十三）（十四）（十五）（十六）（十七）（十八）（十九）（二十）（二十一）（二十二）（二十三）（二十四）（二十五）（二十六）（二十七）（二十八）（二十九）（三十）（三十一）（三十二）（三十三）（三十四）（三十五）（三十六）（三十七）（三十八）（三十九）（四十）（四十一）（四十二）（四十三）（四十四）（四十五）（四十六）（四十七）（四十八）（四十九）（五十）（五十一）（五十二）（五十三）（五十四）（五十五）（五十六）（五十七）（五十八）（五十九）（六十）（六十一）（六十二）（六十三）（六十四）（六十五）（六十六）（六十七）（六十八）（六十九）（七十）（七十一）（七十二）（七十三）（七十四）（七十五）（七十六）（七十七）（七十八）（七十九）（八十）（八十一）（八十二）（八十三）（八十四）（八十五）（八十六）（八十七）（八十八）（八十九）（九十）（九十一）（九十二）（九十三）（九十四）（九十五）（九十六）（九十七）（九十八）（九十九）（一百）

○二月十五日、宛、張錦羽書ヲ得、甚々金心銘ヲ謝ス、張ッ年
頃、總督、金徳阿ヲ平壤、甘肅、義邦、諸處、收メ、押印ス、

[illegible]

○五月十日、清水組七八人、于當儀公存儀所、會、宣讀云、余、東條、
修也、永有、佐永、清水之友、因來、能為、十周年、之、誓、
公、并、伯、母、中、聽、了、了、

○首て剣を抜まん 田中芳雄不。金巻着いけ強合針糸見えた。
 江戸草一 登川ノ大万とシシノ葉朝ヲ余とせんとわノ下。

早寄九月五日。崔吏部承老（玄白）
從弟家慶

杉 壽 清 水 氏 承 讓 築 鴨 二 句 五 二 二 秘 居 八 九 句 佳 四 十

五、田八、餘事分、四下り、去收儀分、所有、由上り

○十月五日 遊芝龍寺
金王國 檀溪亭內 主席 永年 三月 辛

業此學業就職佐領行乞

十

○四月廿三日 張北縣 王三 書 侯公評 侯安會 余 吳 肅 人

二首字體之變遷
金蔣樞（貞大年書）
字，似觀之嘆金（

推廣件 3760 万

七月十五日
 念經
 甲子
 筆
 入
 三
 卷

○九月十日 同人來之（一、雨前上京、二、晴後云々）

○十月朔日，喪終，母夫人南陽侯氏，死之日，葬儀。

報り午電ヲ読ス

青
蔡恒錫
李德新
敬

○十二年三月十日、崔文龍奉之善國彬寄狀、此古銅表紙、
お佛像（武田瑞春より）呉の白強金出身所山谷の世強より
考西昌書堂書とて成印る家、誠と美術鏡より開く經歴を
○四月廿五日、岡廣能奉之（上書きの控留）白強金、印成、成印
自後自ら考甚全二万石、旧朝歷之作り度ありてん、
改より

○四月廿七日、湯水組の人々、餘儀及至儀を會、余が席に
○青竹苦玉龍、玉井高公男并初尾萬之助、古交品判つた
等、將來経起の信を、以事業効果より少延三千年絶
絶對長久し

○十月廿五日、陸軍省に於て、本會を役する者として、
 一、田中、十月七日、二十七日、二十五日、又、陸軍省

昭和十五年

初八日五鼓去朝舞全至鉉後為憂國之心所激躍云
○步月出公崔芝龍事走今年下平期合神功去十四伏拜

○丁丑年三月十日 精正元（重定學堂書院）今年升學歸國名士

胃氣 勿爽 鉉 仁愛 通老

○四目五山修光龍 金秘郎 (四目方字平聲) 推修之義 (玄倫)

○胃之 主筋通於心 以心 主筋通於心 以心

啓曰：永升、同乘錄、崔芝龍、外人、同、張山、劉玄、以、

王升一錄詩金絕筆之依頓

心曾言佳之龍事走王并家四〇月客居礼昨收得一千三百元

生養を教ふに満つるより力外能く、方何うなるか云々

今より故郷に
 永住したいが
 子供達もまだ
 小さいので
 今より電報が

金昌輝
呂氏家藏

大觀書院

竹園吟

○十月五日、崔芝鑑、金昌模、朱定（玄洞、子正也）金氏、中興、子

○丁酉年 大野録(一) (行政總務(直) 奉安施設、收斂事務) 全
其後平定、治華乃親在子後也

○十五日 崔芝龍 下刺家付金六〇圓ヲ償乙
（改正）

○十二月三日、小雀之籠、事老、歳吉、延擗、上海、之、不、送、解、人、之、亦、需、法、之、
二、死、人、一、作、之、元、修、善、同、友、會、事、老、金、部、推、其、之、之、其、由、之、白

鎌倉ノ異域（一）（南洋大ニ出ル）アリ
 名ハ漢ノ必アリカニ力ヲ有ス
 紐祿マニ一寸中エリ云々
 （是ノ金ナリ）
 金ナリ（南洋大ニ出ル）
 金ナリ（南洋大ニ出ル）

〇十四年三月五日 權之龍 奉老 李炳河 (日本方子 姜文子 新 齊 孝) 金

國書にハズルヲ至リテ出五十四トハ後五十四ウセニテ

ト云ふ所何ぞ云々(三葉の古の田舎の)

○五月十日、國領、松本、馬場、細川、三浦、G、秋吉、片、評議、定、速江、
松本、G、の、評議、定、定、速江、G、の、評議、定、速江、

○五月 十青山崔麟（崔之龍同降）斗之極之朝露產土產物殆盡。

年所志中書事之。中書相所署居後舍。曰。公直而忠。帝

中興二年
 四月十日
 山王山
 七宝殿
 八瓶
 山形
 山形

○七月廿一日 今年工年期 初納米銀六十四 崔玄龍送 (以上同)

○九月十一日 丙午 奉元 一丁工字公 獲指 係曰義一公 詳傳
長安次郎三公 詳傳 負 刑 係 三 公 係 人

又花解心、傳言之通、今、花解心多、之、思想上
一、爲火解、心、解、一作、歷史上有、今、作、已、事、情、



白華



大正十三年五月

十三年五月
三十一日
德和五火

自強會設立趣旨書

趣旨
會則
目論見書

自強會
十三年五月
德和五火

関 夾 鉉

自強會設立趣旨書

從來より自ら助くる力少なき吾人には深刻なる悲みが餘りに多かつた、萎靡衰亡に陥つた長い歴史の生活の殻を幸福なる新しい世界に處せんとする吾人は自ら修めるに強くなければならん

爲し能ふべきを爲さずして徒らに同胞嫉し近隣相争つて人間の進歩發達に大なる傷害を受け多くの禍ひを招いた事は吾人の最大恥辱であり自業自得であつた。勤勞して耕す者は喜悅なる收穫を得、怠りて爲さざる者は苦みと悲みこを受けるは理の當然である吾人は古い殻より萌え出で自ら覺り。自ら修め、そして自ら強くなりて理解と親善と團結を以て人と共に進まなければならん。世界中の凡ての人は我等に斯く要求するのである世界の趨勢が狭い範圍の競争より輪廓が漸く擴大して誤つて人種的争闘に走らんとする吾人の平

和と團結と親善も之れと并行して小より大へ、近きより遠きへ及ばなければならん。

前途爲すべき多事を有する吾人は此の東洋の難局に際し起つて高樓に向つて鐘を撞くべきは切迫した吾人は感ずる所より茲に「自強會」を創設し同胞に叫びて「社會人として幸福なる實生活を爲し遂ぐるには如何にすべきか」を謀議したのである。

嗚呼——人は疲れ、日は方に暮らんとする、吾人は正しく緊繃一番、空論を避けて實際を辿り一步より一步へ進みて悲しむべき同胞の環境を改善し眞實なる人間相愛の大義を明かにして大勢の機運に順應する覺悟を爲さねばならん。

「人と人々が眞實に結び付くには心の底から鎖が湧いて來ねばならん」とケーテは云つた離ればなれ生きさんが爲めに悶えて淋しく悲しむ我等同胞は虚心擔

懷眞實に結び付いて光輝ある人間愛の天職を發揚せねばならん。

來たれ同胞よ、吾人と志を同ふし力を合はせて共に強くなるべき事に處せんことを切望して止まないのである。

自強會總則

- 第一條 本會ハ自強會ト稱ス
- 第二條 本會ハ同胞ノ自助的精神ヲ涵養シ併セテ吾人天賦ノ勞働力ヲ助長セシムルヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ東京ニ置ク
- 但シ支會ハ都合ニ依リ各地方ニ設クルヲ得
- 第四條 本會員ハ會ノ目的達成ノ爲メニ誠心努力スルモノニシテ設立者會ニ於テ認メタルモノニ限ル
- 第五條 本會員ハ役員ノ被選權又ハ建議及議決權ヲ有ス
- 第六條 本會員ハ本會ノ維持及發展ニ對スル義務ヲ有シ本會一切ノ規則ヲ遵守スルヲ要ス
- 第七條 本會ハ會員ノ義務金及一般社會ノ寄附金ヲ以テ之レヲ維持ス
- 第八條 本會ハ第二條ノ目的ヲ達セシカ爲メニ庶務部、教育部、勞働部ヲ設置ス
- 第九條 本會ハ委員若干ヲ置キ設立者會ニ於テ議決シタル事項ヲ執行ス

自強會細則

- 第十條 本會ハ賛助員若干ヲ推選シテ會ノ維持發展ニ對スル賛助ヲ受ク
- 第十一條 本會ノ委員選舉ハ設立者會ニテ之レヲ選定ス
- 第十二條 本會ノ集會ハ設立者會、定期總會、臨時總會、委員會ノ四種トス
- 第十三條 本會ノ會員ハ入會金一圓、年捐金六圓トス
- 第十四條 本則ニ規定ナキ事項ハ設立者會ノ決議ニ依リ之レヲ執行ス

- 第一條 本會ハ各支會ヲ統轄ス
- 第二條 本會ノ一切ノ會務ハ設立者協議ニ依リ之レヲ執行ス
- 第三條 本會ハ主任委員ノ聯署ヲ以テ之レヲ代表ス
- 第四條 總則第八條ニ依リテ庶務部ヲ置キ左ノ事務ヲ執行ス
- 一、物品賣買保管ニ關スル事項
- 一、會計ニ關スル事項
- 一、社交ニ關スル事項

一、通信ニ關スル事項

一、他部ニ屬セサル事項

第五條 庶務部ニ委員若干ヲ置キ一人ハ主任委員トシテ事務ヲ統轄ス

第六條 庶務部ノ一般委員ハ主任委員ノ指揮ニ依リ事務ヲ分擔掌理ス必要アル場合ハ事務員若干ヲ雇フ事ヲ得

第七條 總則第八條ニ依リ教育部ヲ置キ左ノ事務ヲ執行ス

- 一、德育ヲ實現センカ爲メ講道會ヲ開催ス（宗教講話、衛生講話、經濟講話等）
- 一、科學的智識ヲ向上セシメンカ爲メ勞働夜學ヲ設クル事（修身、國語、地理、歴史、漢文、朝鮮文等）

一、會報刊行

第八條 教育部ニハ委員若干ヲ置キ一人ハ主任トシテ之レヲ統轄ス

第九條 教育部ノ一般委員ハ主任委員ノ指揮ニ依リ事務ヲ分擔掌理ス

必要アル場合ハ事務員若干ヲ雇フ事ヲ得

第十條 總則第八條ニ依リ勞働部ヲ置キ左ノ事務ヲ執行ス

一、勞働者合宿ニ關スル事項

一、勞働者就職ニ關スル事項

一、勞働者送迎ニ關スル事項

一、勞働者名簿備置ニ關スル事項

第十一條 勞働部ニハ委員若干ヲ置キ一人ハ主任委員トシテ之レヲ統轄ス

第十二條 勞働部ノ一般委員ハ主任委員ノ指揮ニ事務ヲ分擔掌理ス

必要アル場合ハ事務員若干ヲ雇フ事ヲ得

第十三條 總則第十二條ニ依リ定期總會ハ毎年三月ニ之レヲ開催ス

第十四條 臨時總會ハ必要事項アル時之レヲ開ク

第十五條 定期總會又ハ臨時總會ハ設立者ノ承諾ヲ得テ主任委員ノ聯署ヲ以テ之レヲ開ク

第十六條 設立者會又ハ委員會ハ會務執行上必要アル場合ハ何時ニテモ之レヲ開ク

第十七條 委員會ハ庶務部主任委員之レヲ召集ス

第十八條 總則第十三條ニ依リ入會金ハ必ス入會當時ニ之レヲ納入ス

第十九條 總則第十三條ニ依リ年捐金毎年六月、十二月二期ニ分納ス

第二十條 年捐金ヲ一時ニ納入スル場合ハ五圓トス
第二十一條 規定ナキ事項ハ設立者會ノ議決ニ依テ之レヲ執行ス

目論見書

一、事業ノ第一歩トシテ先ツ自強會第一寄宿寮ヲ府下大塚町庚申塚附近ノ地ヲトシテコレヲ建設シ以テ同胞苦學生及勞働者ヲ收容シ彼等ニ安住ノ慰安ヲ與ヘ思想ノ善導ヲナシ其自助的精神ヲ涵養セシムルコトヲ期セントス

二、經費ノ都合ニヨリ先ツ苦學生五拾名勞働者貳百名ノ收容ニ止メ漸次他日ノ擴張ヲ圖ラントスルモノナリ

三、コレニ要スル創立諸費及事業遂行ノ收支豫算ハ下記ノ如シ

創業豫算

一金四萬八千〇六拾圓也 創業費總額

内 詳

金貳萬貳千五百圓也

但勞働者寄宿舍

百五拾坪

苦學生寄宿舎 五拾坪
炊事場、浴場、便所等附屬建物 五拾坪
事務所及講堂 五拾坪
以上合計參百坪建築ノ處木材ハ或ル筋ヨリ給與アル筈ナルヲ以テ此建築費坪當金七拾五圓トス

金貳千圓也 疊 四 百 枚
金貳千圓也 建 一 具 類 一 切
金五千圓也 附 屬 諸 道 具 雜 品
金五百圓也 食 卓 及 腰 掛
金七百圓也 炊 事 具 及 食 器
金百五十拾圓也 荷 車 參 臺
金壹千圓也 炊 事 場 及 浴 室 ノ 諸 設 備
金五百圓也 水 道 引 込 布 設
金五百圓也 電 燈 設 施

金貳千五百圓也 電 話 買 入
金五百圓也 事 務 所 及 講 堂 設 備
金貳百拾圓也 自 轉 車 參 臺
金四千五百圓也 敷 地 參 百 坪 借 入 權 利 金
金壹萬圓也 食 料 立 替 金 及 準 備 金
以 上

事業遂行收支豫算

(收入)

一金九千參百圓也 收支總額

但

金八千壹百圓也 (勞働者一人ニ付一日金拾五錢ヅ、維持費徵收
金壹千貳百圓也 (ニ付壹ヶ年寄宿舎勞働者延人員五萬四千人分
以 上 正會員及贊助會員會費收入

(支出)

一金九千參百圓也

支出總額

但

金壹千八百圓也

金九百六拾圓也

金壹千四百四拾圓也

金壹千圓也

金六百圓也

金參百圓也

金壹千貳百圓也

金參百六拾圓也

金七百貳拾圓也

金五百六拾圓也

以上

事務員給料參人分

小使及雜役二人分給料

敷地借料

家屋修繕費

出張旅費

薪炭費

囑托醫手當及衛生費

水道料

講師參人分手當金

雜費

自強會

132
133

first 2
+ 2nd

自強會日談立趣と日書

従来自ら助くるもの多し。かたき人には深刻なる
悲みか餘り多かつた。妻離れ、親戚の長い歴史を消
員して而も新しい世界に幸福に生きたいと望む。吾々は自
ら修めるに能く、また強くなければならぬ。

為し得るべきことを、徒らに同胞相嫉、近隣相争つ
て人間の進歩飛躍に大なる障害を興へ却て自ら
多くの禍を招いたことは、自業自得であつて更に吾
人の最大恥辱である。勤勞して耕す者は幸福な
る收穫を得、怠つて為さざる者は苦みと悲みを受
けるは理の當然である。

吾人は古い殻より新しく萌え出て自ら覺り、自ら強
くなり、自ら強くなつて理解と親善と團結によりて自己

共に栄えなければならぬ、兄弟情に關する愚は、いふ
迄もなく國際の紛争乃至人種的闘争等皆唾棄
すべきである

吾人の前途には限りなき障害が横はつて居る

吾人は此の東洋の難局に處て先づ起つて高樓に警
鐘を打ち鳴らすべき責任を痛感する乃ち茲に

「自強會」を創設し同胞に叫びて社會人として奮
たる實生活を為し遂くるには如何にすべきかを提議する
嗚呼人は疲れ日は暮れしとする、吾人は正しく緊
湊一番空論を避け真實につき人間生存の大義を明
かにし自他共栄の大道を踏み、よつて以て應むべき同
胞の環境を改善し大勢の機運に順應する覚悟
を為さねばならぬ

我輩同胞は優柔し慮心恒懷自ら修め人を助け相助相
譲真に融和し深く結ぶ人類共栄の理想郷に到
達せんことを期せねばならぬ、來れ同胞よ、自強會は
同胞共栄の拠点である

大正十三年五月

日

自彊會總則

第一條 本會ハ自彊會ト稱ス

第二條 本會ハ朝鮮同胞ノ自助的精神ヲ涵養シ
精神上、經濟上及社會上ニ於ケル地位ノ向上ヲ期
スルコトヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ本部ヲ東京市小石川區内ニ置リ
但シ都合ニ依リ支部ヲ他地方ニ設クルヲ得

第四條 本會員ハ會ノ目的達成ノ爲メ誠心努力スル朝
鮮同胞ヲ以テ組織ス

第五條 本會員ハ他人ノ被選舉權又ハ建議及議決權
ヲ有ス

第六條 本會員ハ本會ノ維持及發展ニ對スル義務ヲ
有シ本會一切ノ規則ヲ遵守スルヲ要ス

第七條 本會ハ會費ノ義務金及一般社會ノ寄附金ヲ以テ之レヲ維持ス

第八條 本會ハ第三條ノ目的ヲ達成セシメカ爲メニ庶務部教育部獎勵部ヲ設ク且又

第九條 本會ハ委員若シテ置キ又設立者會ニ於テ決議スルコトヲ執行ス

第十條 本會ハ賛助員若シテ推選シテ會ヲ維持スル爲メニ對スル補助ヲ受ク

第十一條 本會ハ委員選舉ハ設立者會ニ之レヲ選舉ス

第十二條 本會ハ集會ヲ設立者會ハ定期總會臨時總會ハ委員會ハ四種トス

第十三條 本會ハ會費ハ八圓金五十錢 年捐金ハ五

円トス

第十四條 本則ニ規定ナキ事項ハ設立者會ハ決議ニ依リ之レヲ執行ス

自彊會細則

第一條 本會ハ主任委員一聯署ヲ以テ之レヲ代表ス

第二條 總則第八條ヨリ庶務部ヲ置キ又左ノ事務ヲ執行ス

一 庶務會計ニ關スル事項

一 社交慰勞ノ娛樂ニ關スル事項

一 朝鮮文化及物産紹介ニ關スル事項

一 他部ニ屬セザル事項

第三條 庶務部ハ委員若干ヲ置キ一人ハ主任委員トシテ事務ヲ統轄ス

第四條 庶務部ノ一般委員ノ主任委員ノ指揮ニ依リ事務ヲ担当掌理スル必要アル場合ハ事務員若干人ヲ雇フ事ヲ得

第五條 協則第八條ヨリ教育部ヲ置キ左ノ事務ヲ執行ス

- 一、德育ヲ實現セシムル為メ講道會ヲ開催スルコト
- 一、宗教及精神講話
- 一、智識向上セシムル為メ講演會 講習會ヲ設ケルコト

一、會報刊行

第六條 教育部ニ委員若干人ヲ置キ一人ノ主任トシテ之レヲ統轄ス

第七條 教育部ノ一般委員ノ主任委員ノ指揮ニヨリ事務ヲ分擔掌理スル必要アル場合ハ事務員若干人ヲ雇フ事ヲ得

第八條 協則第八條ヨリ労働部ヲ置キ事務ヲ執行ス

- 一、労働者就職ニ関スル事項
 - 一、労働者宿舍ニ関スル事項
 - 一、労働者教化及隣保事業ニ関スル事項
- 第九條 労働部ニ委員若干人ヲ置キ一人ノ主任委員トシテ之レヲ統轄ス

第十條 労働部ノ一般委員ノ主任委員ノ指揮ニヨリ事務ヲ分擔掌理スル必要アル場合ハ事務員若干人ヲ雇フ事ヲ得

第十一條 協則第十一條ヨリ定期總會ハ毎年三月ニ

之レヲ開修ス

第十一條 臨時總會ハ必要事項アルハ之レヲ開ク

第十二條 定期總會又ハ臨時總會ハ議定者ノ承諾

ヲ得テ主任委員ノ職權ヲ以テ之レヲ開ク

第十三條 委員中ハ庶務部主任委員之レヲ召集ス

第十四條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第十五條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第十六條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第十七條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第十八條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第十九條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第二十條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第二十一條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第二十二條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第二十三條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第二十四條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第二十五條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第二十六條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第二十七條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第二十八條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第二十九條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第三十條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第三十一條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第三十二條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第三十三條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第三十四條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第三十五條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第三十六條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第三十七條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第三十八條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第三十九條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第四十條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第四十一條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第四十二條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第四十三條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第四十四條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第四十五條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

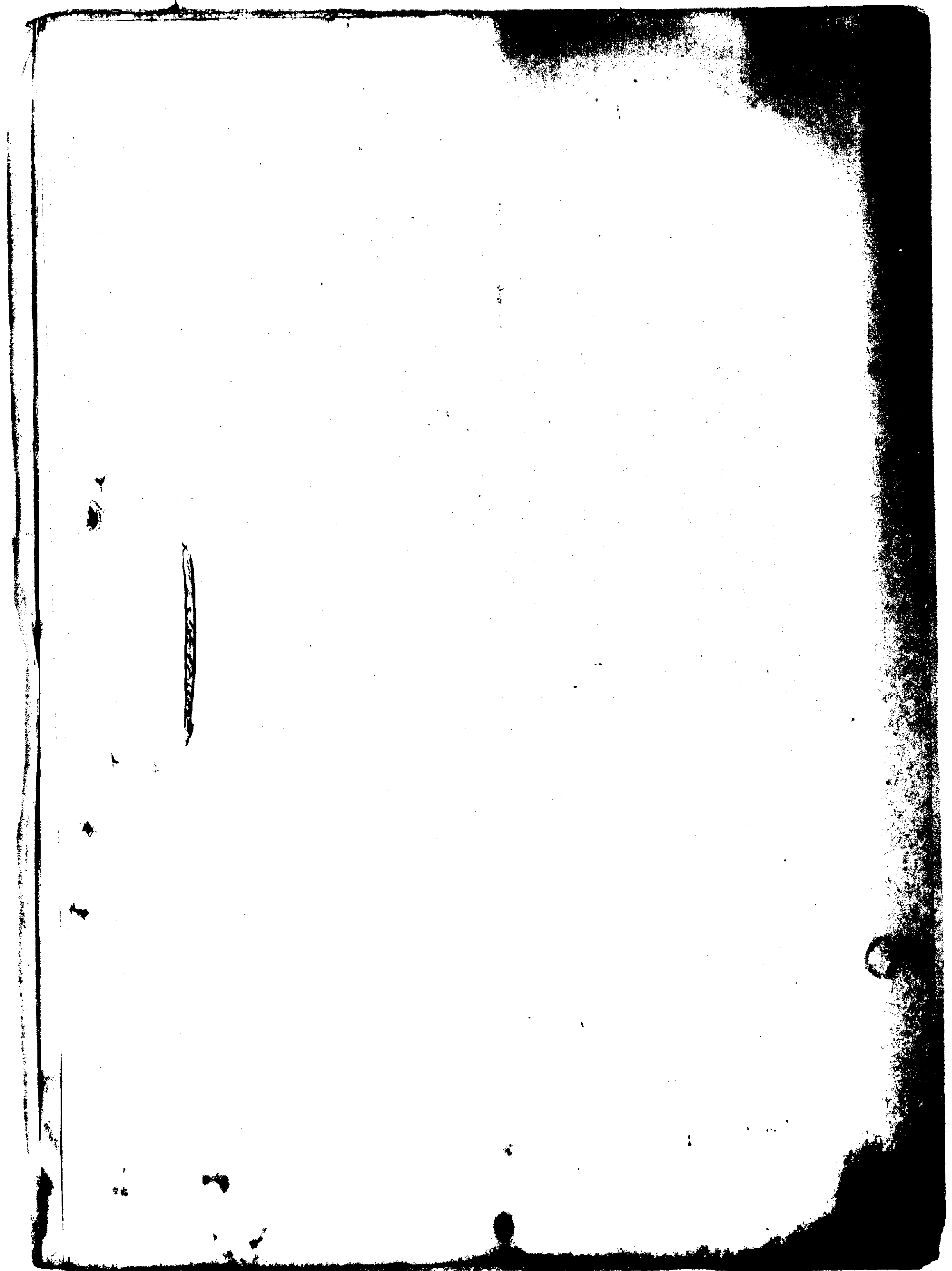
第四十六條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第四十七條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第四十八條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第四十九條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入

第五十條 臨時總會ハ之レヲ開ク時ニ之レヲ納入



自強會第一年度事業豫算(自大正十三年十一月至大正十四年十一月)

大正十三年十一月
自強會

一、收入之部(現狀ヲ以テ計算ス)

| 一ヶ月 | 一ケ年 |
|-------------------------|--------|
| 一金二、五〇(會員五十名ニシテ一人二十五錢宛) | 一五〇、〇〇 |
| 一金三六、〇〇(舍生十二人ノ宿料、一人三圓宛) | 四三二、〇〇 |
| 合計四八、五〇 | 五八二、〇〇 |

二、支出之部(現狀ヲ以テ計算ス)

| 一ヶ月 | 一ケ年 |
|----------------------|---------|
| 一金八五、〇〇(學生宿舍屋賃) | 一〇二〇、〇〇 |
| 一金一五、〇〇(宿舍留守番手當) | 一八〇、〇〇 |
| 一金四〇、〇〇(宿舍電燈薪炭代及事務費) | 四八〇、〇〇 |
| 一金八〇、〇〇(常務一人手當) | 九六〇、〇〇 |
| 一金五〇、〇〇(舍生監督及就職紹介) | 六〇〇、〇〇 |
| 合計二七〇、〇〇 | 三二四〇、〇〇 |

支出ヨリ收入ヲ差引一ケ年二千六百五十八圓ヲ要ス即一ケ月二百二十一圓五十錢ノ補助ヲ要スルモノニシテ此ノ補助額ノ充當ハ將來物産紹介ニ依リ得タル利益ノ一部分ヲ以テ補充スル見込也ト雖モ未ダ其ノ業ニ着手セザルヲ以テ當分ノ内寄附金ヲ以テ充當スル外ナシ

大正十三年十一月迄ニ寄附申込額及其ノ内ヨリ拂込ヲ受ケタル金額左ノ通りニ御座候間茲ニ報告仕候

一、寄附申込金額四千七百五十圓也ノ内、二千七百五十圓也 現金受入済
大正十三年十一月現在 以上

十二月
九月五日

本會役員選定ニ關スル件及經常費報告

本會ハ各部ニ於ケル委員、賛助員及顧問ハ左ノ如ク囑託シ經常費ハ別紙ノ通り相定メ候條此段御報告仕候

大正十三年十一月 日

北豊島郡巢鴨町宮下一六五三

白 彊 會

賛・助 員 (順不同)

男爵 阪谷芳郎 山内繼喜 白上佑吉

男爵 八代六郎 木村雄次 幣原 坦

嘉納治五郎 齋藤吉十郎 松浦鎮次郎

増田義一 澁澤元治 吳羽新五郎

永井 亨 五代龍作 男爵 平山成信

清水一雄 山崎覺次郎 桐島 像一

德永爲次 加藤壯太郎 笠井信一

牧野英一 片山次雄 近藤千賀三

三輪政一 大橋光吉 伯爵 酒井忠正

上杉慎吉 菅原通敬 志村源太郎

嘉納德三郎 松井錦橘 守屋榮夫

森本勝已 花岡敏夫 佐野利器

矢野亮一 片山正夫 小野塚喜平次

阿部喜市郎 下竹安右衛門 岡田良平

鈴木雄輔 和田嘉衡 三宅米吉

荒井賢太郎 吉武榮之進 本吉豊次郎

菅野盛次郎 鳩山一 郎 三樹退三

山崎龜吉 石渡敏一 十河信二

顧 問 (順不同)

男爵 阪谷芳郎

男爵 八代六郎

嘉納治五郎

増田義一 (事業監督)

永井 亨 (事業監督)

清水一雄 (會計監督)

德永爲次 (會計監督)

賛助員 (順不同)

| | | |
|----------|---------|----------|
| 男爵 阪谷 芳郎 | 山内 繼喜 | 白上 佑吉 |
| 男爵 八代 六郎 | 木村 雄次 | 幣原 坦 |
| 嘉納治五郎 | 齋藤 吉十郎 | 松浦 鎮次郎 |
| 増田 義一 | 澁澤 元治 | 吳羽 新五郎 |
| 永井 亨 | 五代 龍作 | 男爵 平山 成信 |
| 清水 一雄 | 山崎 覺次郎 | 桐島 像一 |
| 徳永 爲次 | 加藤 壯太郎 | 笠井 信一 |
| 牧野 英一 | 片山 次雄 | 近藤 千賀三 |
| 三輪 政二 | 大橋 光吉 | 伯爵 酒井 忠正 |
| 上杉 愼吉 | 菅原 通敬 | 志村 源太郎 |
| 嘉納 徳三郎 | 松井 錦橘 | 守屋 榮夫 |
| 森本 勝已 | 花岡 敏夫 | 佐野 利器 |
| 矢野 亮一 | 片山 正夫 | 小野塚 喜平次 |
| 阿部 喜市郎 | 下竹 安右衛門 | 岡田 良平 |
| 鈴木 雄輔 | 和田 嘉衡 | 三宅 米吉 |
| 荒井 賢太郎 | 吉武 榮之進 | 本吉 豊次郎 |
| 菅野 盛次郎 | 鳩山 一郎 | 三樹 退三 |
| 山崎 龜吉 | 石渡 敏一 | 十河 信二 |

顧問 (順不同)

男爵 阪谷 芳郎
男爵 八代 六郎

嘉納治五郎

増田 義一 (事業監督)

永井 亨 (事業監督)

清水 一雄 (會計監督)

徳永 爲次 (會計監督)

庶務部委員(常務) 関 爽 鉉

教育部委員 朴 思 稷

労働部委員 李 根 茂

以上

拜啓自強會の趣旨御賛成下被金貳百圓
同會の事業遂行の爲御寄附被下奉深謝候拙
者等同會顧問として又監督として同會の爲
微力を盡し居候に付御厚志に對し御挨拶申
述度如斯に候 敬具

大正十四年二月二十日

顧問

男爵 阪谷芳郎

男爵 八代六郎

嘉納治五郎

増田義一(事業監督)

永井亨(事業監督)

清水一雄(會計監督)

徳永爲治(會計監督)

135
阪谷芳郎 殿

自強會

自強會

自彊會の状況報告

自彊會の状況報告

本会は小石川区の特志家の御寄附を仰ぎ昨大正十三年十一月より設き
 に至り爾來朝鮮人苦學生に對し寄附料及食費の一部を補助し
 とも紹介し來り今や其数は四十名に達し居候付之取敢て特志家
 其寄附金額と會費とを以て學校に寄附し先を御報告仕候

大正十四年三月 日

北豐島郡栗崎町宮下 一五五三

自彊會庶務部長

教育部長

関東 科 長

附

附

附

附 附

八代 附

嘉納治五郎

顧問 幸不違

全

增田義一

永井亨

會計監書

清水一雄

全

德永為次

殿

借家部記各并支費附金額

順序不同

男爵 阪谷芳郎殿

男爵 嘉納治五郎殿

男爵 八代六郎殿

男爵 增田義一殿

男爵 永井亨殿

男爵 清水一雄殿

男爵 德永為次殿

男爵 平山誠信殿

男爵 青澤清門殿

男爵 三井高隆殿

金貳百五拾圓也

金貳百五拾圓也

金壹百圓也

金壹百圓也

金壹百圓也

金壹百圓也

金貳百五拾圓也

金壹百圓也

金壹百圓也

金壹百圓也

伯耆 德川達道殿
男爵 藤田平太殿
公爵 德川慶光殿
和田嘉衛殿
山崎龜吉殿
菅原圓竹殿
志村源太郎殿
相島像一殿
齋藤幸一郎殿
淡澤元治殿
伯爵 酒井忠心殿
石渡敏一殿

合計金七千八百八拾圓也

三樹三殿
鈴木雄輔殿
牧野英一殿
大橋光吉殿
片山次雄殿
花岡敏夫殿
山崎蘭晃次郎殿
加藤恭平殿
松浦鎮次郎殿
佐野利光殿
五代龍作殿

但現在拼山金額六十四百大格內也

以上

| 氏名 | 學校名及種類 | 獎勵先 |
|-----|----------|---------|
| 梁承洙 | 實業學校 | 德永自轉車工廠 |
| 李廣柱 | 自習中 | 榮進社 |
| 李秉松 | 正則英語學校 | 全 |
| 姜子浩 | 自習中 | 全 |
| 金炳淳 | 正則英語學校 | 全 |
| 李達汝 | 自習 | 全 |
| 姜鎮東 | 全 | 全 |
| 朴庸淮 | 日本學校 | 全 |
| 金奉祚 | 自習 | 榮進社 |
| 吳鳳彬 | 東大倫理教育科 | |
| 吳中會 | 早大高師部英法科 | |
| 徐貞淳 | 自習 | 榮進社 |

日本銀行清水組現函

五

4

榮進社

榮進社

榮
進
社

榮
進
社

5

4

5

4

正則英語學校 出版

德永自動車工務

氏名
 湯炳朝
 金鎮奎
 卞光石
 李性允
 李氏允
 葉東明
 金顯吉
 李昌用
 延載鏞
 林義雄

自習
 日本大學社會科
 全
 全
 全
 全
 全
 全
 全
 全
 全

育剛元
 榮進社
 榮對工場
 榮進社
 全
 全
 全
 全
 全
 全
 榮進社
 日本銀行清水組現所

以上自彙合員の現況を把握す

拜啓自強會の趣旨御賛成下被金 圓
同會の事業遂行の爲御寄附被下奉深謝候拙
者等同會顧問として又監督として同會の爲
微力を盡し居候に付御厚志に對し御挨拶申
述度如斯に候 敬具

大正 年 月 日

顧 問

男爵 阪谷 芳 郎

男爵 八代 六 郎

嘉納治五郎

増田 義 一 (事業監督)

永 井 亨 (事業監督)

清 水 一 雄 (會計監督)

德 永 爲 治 (會計監督)

殿

自彊會員の狀況

氏名

齡年

原籍及住所

入會年月日

在藉學校名及學科

勞
勤
先

備考

拜訪本會の事業は若任の深慮なるが同情の
下に報酬の如く成績界の後の様相は便就いては没立
爾来の状況報告及事業擴張の旨承認を仰ぎ度
く来る七月一日午前九時大塚坂下河護國寺内豊山
宗務所に於て賛助員會を相開候間何卒出席
被下度願上候也
敬具

大正十四年六月二十二日

自選會委員 関廣金

金 朴思履

出席 奥村

阪本嘉助、信田福四郎

顧問

河津、中山、加藤等

男爵 阪谷芳郎

男爵 八代六郎

嘉納治五郎

方針可也

増田義二(事業監理)

永井 亨(事業監理)

清水一雄(會計監理)

徳永為次(會計監理)

殿

自彊會設立趣旨書

從來自ら助くる力の乏しかつた吾人には深刻なる悲みが餘り多かつた。萎靡衰頹の長い歴史を背負つて而も新しい世界に幸福に生きたいと望む吾々は自ら修めるに、飽くまで強くなければならぬ、爲し能ふべきを爲さず徒らに同胞相嫉み近隣相争つて人間の進歩發達に大なる障害を與へ却て自ら多くの禍を招いたことは自業自得もあつて更に吾人の最大恥辱である。勤勞して耕す者は幸福なる收穫を得、怠りて爲さざる者は苦みと悲みとを受けるは理の當然である。

吾人は古い殻より新しく萌え出て自ら覺り、自ら修め自ら強くなつて理解と親善と團結とによりて自他共に榮えなければならぬ、兄弟隣に鬩ぐの愚はいふまでもなく國際の紛争乃至人種的鬭争等皆唾棄すべきである。

吾人の前途には限りなき障害が横はつて居る。

吾人は此の東洋の難局に處し先づ起つて高樓に警鐘を打ち鳴らすべき責任を痛感する乃ち茲に「自彊會」を創設し同胞に叫びて「社會人として幸福なる實生活を爲し遂ぐるには如何にすべきか」を提議するのである。

嗚呼人は疲れ日は方に暮れんとする、吾人は正しく緊揮一番空論を避け眞實につき人間生存の大義を明かにし自他共榮の大道を踏み、よつて以て悲むべき同胞の環境を改善し大勢の機運に順應する覺悟を爲さねばならぬ我等同胞は須らく虚心坦懷自ら修め人を助け相助相讓眞に融和し深く結び人類共榮の理想郷に到達せんことを期せねばならぬ、來れ同胞よ、自彊會は同胞共榮の安宅である。

自彊會の事業

本會は前掲の趣旨目的の下に其の設立を急ぎまして先づ小數特志家(小石川區内)の御寄附を仰ぎ昨大正十三年設立の運びに到り爾來朝鮮人苦學生に對し寄宿料及び食費の一部を補助し職業をも紹介し來り今や其の數五十

特志家の御氏名並に其寄附金額

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 公 | 男 | 伯 | 男 | 男 | 男 |
| 爵 | 爵 | 爵 | 爵 | 爵 | 爵 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|-------|---------|-------|-------|------|-------|-------|-------|--------|-------|
| 山崎龜吉殿 | 武田秀雄殿 | 桐島像一殿 | 和田嘉衡殿 | 志村源太郎殿 | 德川慶光殿 | 藤田平太郎殿 | 德川達道殿 | 三井高修殿 | 三井源右衛門殿 | 平山成信殿 | 德永爲次殿 | 永井亨殿 | 清水一雄殿 | 増田義一殿 | 八代六郎殿 | 嘉納治五郎殿 | 阪谷芳郎殿 |
|-------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|-------|---------|-------|-------|------|-------|-------|-------|--------|-------|

11

伯爵

[illegible]

三

合計金八千三百八拾圓也
但現在拂込金額七千貳百拾圓也

會の事業擴張計劃

本會の事業は豫期の如く成績舉り居る様相信じ候間現在補助事業の外に今後朝鮮人苦學生に對する給費制度を設け將來有望の者に對し其食料學費の全部を支給するの事をなさんとするものであります

基本金設定の必要

現在の事業のみを以てしても現在の寄附金の利子のみでは其經費全部を支辨する能はず其元金の中一ヶ月二百五十拾圓宛を消費するの現状であります況や前掲の如く事業擴張の計劃あるに於ては到底永く此の事業を繼續することが出来ませぬ依て此際廣く特志家の御寄附を仰ぎ相當の基本金を作り將來家賃事務費等一部の費用は月々の寄附金を以て支辨することとし基本金の利子を以て本會の事業を經營することとせしむれば前途甚だ心配に堪へぬ次第であります

自彊會第一年度(現在)事業豫表算

| 収入之部 一ヶ月 | | 一ヶ月 |
|----------|------------------------|----------|
| 一、金 | 一二、五〇(會員五十名ニシテ一人二十五錢宛) | 一五〇、〇〇 |
| 一、金 | 三六、〇〇(舍生十二人の宿料) | 四三二、〇〇 |
| 合計 | 四八、五〇 | 五八二、〇〇 |
| 支出之部 一ヶ月 | | 一ヶ月 |
| 一、金 | 八五、〇〇(學生宿舍家賃) | 一、〇二〇、〇〇 |
| 一、金 | 一五、〇〇(宿舍留守番手當) | 一八〇、〇〇 |
| 一、金 | 四〇、〇〇(宿舍電灯代及事務費) | 四八〇、〇〇 |

| | | |
|-----|------------------------|---------|
| 一、金 | 八〇、〇〇(常務委員一人手當) | 九六〇、〇〇 |
| 一、金 | 五〇、〇〇(舍生監督及就職紹介ニ干スル費用) | 六〇〇、〇〇 |
| 合計 | 二七〇、〇〇 | 三二四〇、〇〇 |

事業擴張案

本會の基礎を鞏固にし相當の發展を爲すには少くとも基本金五萬圓は必要であります基本金の利子を以て本會の事業を爲し家賃事務費等一部の經費は特志家の月々の御寄附を以てせんとする次第であります

一、收入之部

| 一ヶ月 | |
|------|------------------------|
| イ、一金 | 三、〇〇〇、〇〇(五萬圓の利息年六歩) |
| ロ、一金 | 三〇〇、〇〇(會員百名より徴收する會費) |
| ハ、一金 | 一、〇〇〇、〇〇(特志家の毎月寄附金) |
| ニ、一金 | 三、〇〇〇、〇〇(スコラシップ(獎學資金)) |
| 合計 | 七、三〇〇、〇〇 |

一、支出之部

| 一ヶ月 | |
|------|--------------------------|
| イ、一金 | 一、〇二〇、〇〇(事務室及宿舍家賃) |
| ロ、一金 | 三、〇〇〇、〇〇(スコラシップ(獎學資金五人)) |
| ハ、一金 | 一八〇、〇〇(宿舍留守番手當) |
| ニ、一金 | 四八〇、〇〇(電灯料及事務費) |

八〇、〇〇
 五〇、〇〇
 一〇、〇〇
 六
 九六〇、〇〇（常務委員一人手當）
 六〇〇、〇〇（舍生監督及就職紹介委員の手當）
 一〇〇、〇〇（講演會及講習會の費用）
 九四〇、〇〇（準備金）
 合計七、三〇〇、〇〇
 大正十四年八月 日

自彊會委員 関 爽 鉉 稷
 同 朴 思
 顧問 問
 男爵 阪 谷 芳 郎
 男爵 八 代 六 郎
 嘉納 治 五 郎
 増田 義 一（事業監督）
 永井 亨（事業監督）
 清水 一 雄（會計監督）
 徳永 爲 次（會計監督）

會員の動靜（現在）

| 氏名 | 學校名及學科別 | 勞働先 |
|-----|----------|-------|
| 梁承誅 | 實業學校 | 徳永精網社 |
| 李廣承 | 日本大學社會科 | 榮進社 |
| 李象子 | 巢鴨中學校 | 同 |
| 姜炳達 | 巢鴨甲種商業學校 | 同 |
| 金淳活 | 巢鴨中學校 | 同 |
| 李汝淳 | 自習 | 同 |
| 姜東 | 自習 | 同 |
| 朴准 | 研究數學館 | 同 |
| 金奉 | 東大倫理教育科 | 同 |
| 吳鳳 | 早大高師部英語科 | 同 |
| 具中 | 自習 | 同 |
| 徐哲 | 同 | 同 |
| 朴根 | 正則英語學校 | 同 |
| 崔星 | 自習 | 同 |
| 卞光 | 同 | 同 |
| 李性 | 同 | 同 |
| 李允 | 同 | 同 |

伝説全集 (存続集 第五十二卷)

自
疆
會
事
業

報
告
及
擴
張
案

十
一
月
十
日

題 録 港

東京府下墨田町宮下一六五三

崔光龍

李 基

朝鮮平安北道龜城郡

崔光龍

崔 光 龍

朝鮮平安北道龜城郡

自 彊 會 設 立 趣 旨 書

從來自ら助くる力の乏しかつた吾人には深刻なる悲みが餘り多かつた。萎靡衰頹の長い歴史を背負つて而も新しい世界に幸福に生きたいと望む吾々は自ら修めるに、飽くまで強くなければならぬ、爲し能ふべきを爲さず徒らに同胞相嫉み近隣相争つて人間の進歩發達に大なる障害を與へ却て自ら多くの禍を招いたことは自業自得もあつて更に吾人の最大恥辱である、勤勞して耕す者は幸福なる收穫を得、怠りて爲さざる者は苦みと悲みとを受けるは理の當然である

吾人は古い殻より新しく萌え出て自ら覺り、自ら修め自ら強くなつて理解と親善と團結とによりて自他共に榮えなければならぬ、兄弟隣に閭閻の愚はいふまでもなく國際の紛争乃至人種的鬭争等皆唾棄すべきである

吾人の前途には限りなき障害が横はつて居る

吾人は此の東洋の難局に處し先づ起つて高樓に警鐘を打ち鳴らすべき責任を痛感する乃ち茲に「自彊會」を創設し同胞に叫びて「社會人として幸福なる實生活を爲し遂ぐるには如何にすべきか」を提議するのである

嗚呼人は疲れ日は方に暮れんとする、吾人は正しく緊揮一番空論を避け眞實につき人間生存の大義を明かにし自他共榮の大道を踏み、よつて以て悲むべき同胞の環境を改善し大勢の機運に順應する覺悟を爲さねばならぬ我等同胞は須らく虚心坦懷自ら修め人を助け相助相讓眞に融和し深く結び人類共榮の理想郷に到達せんことを期せねばならぬ、來れ同胞よ、自彊會は同胞共榮の安宅である

自 彊 會 の 事 業

本會は前掲の趣旨目的の下に其の設立を急ぎまして先づ小數特志家(小石川區内)の御寄附を仰ぎ昨大正十三年設立の運びに到り爾來朝鮮人苦學生に對し寄宿料及び食費の一部を補助し職業をも紹介し來り今や其の數五十

特志家の御氏名並に其寄附金額

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 公 | 男 | 伯 | 男 | 男 | 男 |
| 爵 | 爵 | 爵 | 爵 | 爵 | 爵 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|-------|---------|-------|-------|------|-------|-------|-------|--------|-------|
| 山崎龜吉殿 | 武田秀雄殿 | 桐島像一殿 | 和田嘉衛殿 | 志村源太郎殿 | 德川慶光殿 | 藤田平太郎殿 | 德川達道殿 | 三井高修殿 | 三井源右衛門殿 | 平山成信殿 | 德永爲次殿 | 永井享殿 | 清水一雄殿 | 増田義一殿 | 八代六郎殿 | 嘉納治五郎殿 | 阪谷芳郎殿 |
|-------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|-------|---------|-------|-------|------|-------|-------|-------|--------|-------|

11

伯爵

[illegible]

合計金八千三百八拾圓也

但現在拂込金額七千貳百拾圓也

[illegible]

三

會の事業擴張計劃

本會の事業は豫期の如く成績舉り居る様相信じ候間現在補助事業の外に今後朝鮮人苦學生に對する給費制度を設け將來有望の者に對し其食料學費の全部を支給するの事をなさんとするものであります

基本金設定の必要

現在の事業のみを以てしても現在の寄附金の利子のみでは其經費全部を支辨する能はず其元金の中一ヶ月二百五拾圓宛を消費するの現状であります況や前掲の如く事業擴張の計劃あるに於ては到底永く此の事業を繼續することが出来ませぬ依て此際廣く特志家の御寄附を仰ぎ相當の基本金を作り將來家賃事務費等一部の費用は月々の寄附金を以て支辨することとし基本金の利子を以て本會の事業を經營することにせずんば前途甚だ心配に堪へぬ次第であります

自籌會第一年度(現在)事業豫算表

| 収入之部 一ヶ月 | | 一ヶ月 |
|----------|------------------------|----------|
| 一、金 | 一二、五〇(會員五十名ニシテ一人二十五錢宛) | 一五〇、〇〇 |
| 二、金 | 三六、〇〇(舍生十二人の宿料) | 四三二、〇〇 |
| 合計 | 四八、五〇 | 五八二、〇〇 |
| 支出之部 一ヶ月 | | 一ヶ月 |
| 一、金 | 八五、〇〇(學生宿舍家賃) | 一、〇二〇、〇〇 |
| 二、金 | 一五、〇〇(宿舍留守番手當) | 一八〇、〇〇 |
| 三、金 | 四〇、〇〇(宿舍電灯代及事務費) | 四八〇、〇〇 |

| | | |
|-----|------------------------|---------|
| 一、金 | 八〇、〇〇(常務委員一人手當) | 九六〇、〇〇 |
| 二、金 | 五〇、〇〇(舍生監督及就職紹介ニ干スル費用) | 六〇〇、〇〇 |
| 合計 | 二七〇、〇〇 | 三二四〇、〇〇 |

事業擴張案

本會の基礎を鞏固にし相當の發展を爲すには少くとも基本金五萬圓は必要であります基本金の利子を以て本會の事業を爲し家賃事務費等一部の經費は特志家の月々の御寄附を以てせんとする次第であります

| 一、収入之部 一ヶ月 | | 一ヶ月 |
|------------|---------------------------|-------|
| 一、金 | 三、〇〇〇、〇〇(五萬圓の利息年六歩) | 八五、〇〇 |
| 二、金 | 三〇〇、〇〇(會員百名より徴収する會費) | 二五、〇〇 |
| 三、金 | 一、〇〇〇、〇〇(特志家の毎月寄附金) | 一五、〇〇 |
| 四、金 | 三、〇〇〇、〇〇(スコーラシップ(奨學資金)) | 四〇、〇〇 |
| 合計 | 七、三〇〇、〇〇 | 五 |
| 二、支出之部 一ヶ月 | | 一ヶ月 |
| 一、金 | 一、〇二〇、〇〇(事務室及宿舍家賃) | 八五、〇〇 |
| 二、金 | 三、〇〇〇、〇〇(スコーラシップ(奨學資金五人)) | 二五、〇〇 |
| 三、金 | 一八〇、〇〇(宿舍留守番手當) | 一五、〇〇 |
| 四、金 | 四八〇、〇〇(電灯料及事務費) | 四〇、〇〇 |

九六〇、〇〇〇（常務委員一人手當）
 六〇〇、〇〇〇（含生監督及就職紹介委員の手當）
 一二〇、〇〇〇（講演會講習會の費用）
 九四〇、〇〇〇（準備金）
 合計七、三〇〇、〇〇〇

八〇、〇〇〇
五〇、〇〇〇
一〇、〇〇〇

大正十四年六月 日

自體會委員 閔 爽 鉉
 同 朴 思 稷

顧問
 男 爵 阪 谷 芳 郎
 男 爵 八 代 六 郎
 嘉 納 治 五 郎
 增 田 義 一（事業監督）
 永 井 亨（事業監督）
 清 水 一 雄（會計監督）
 德 永 爲 次（會計監督）

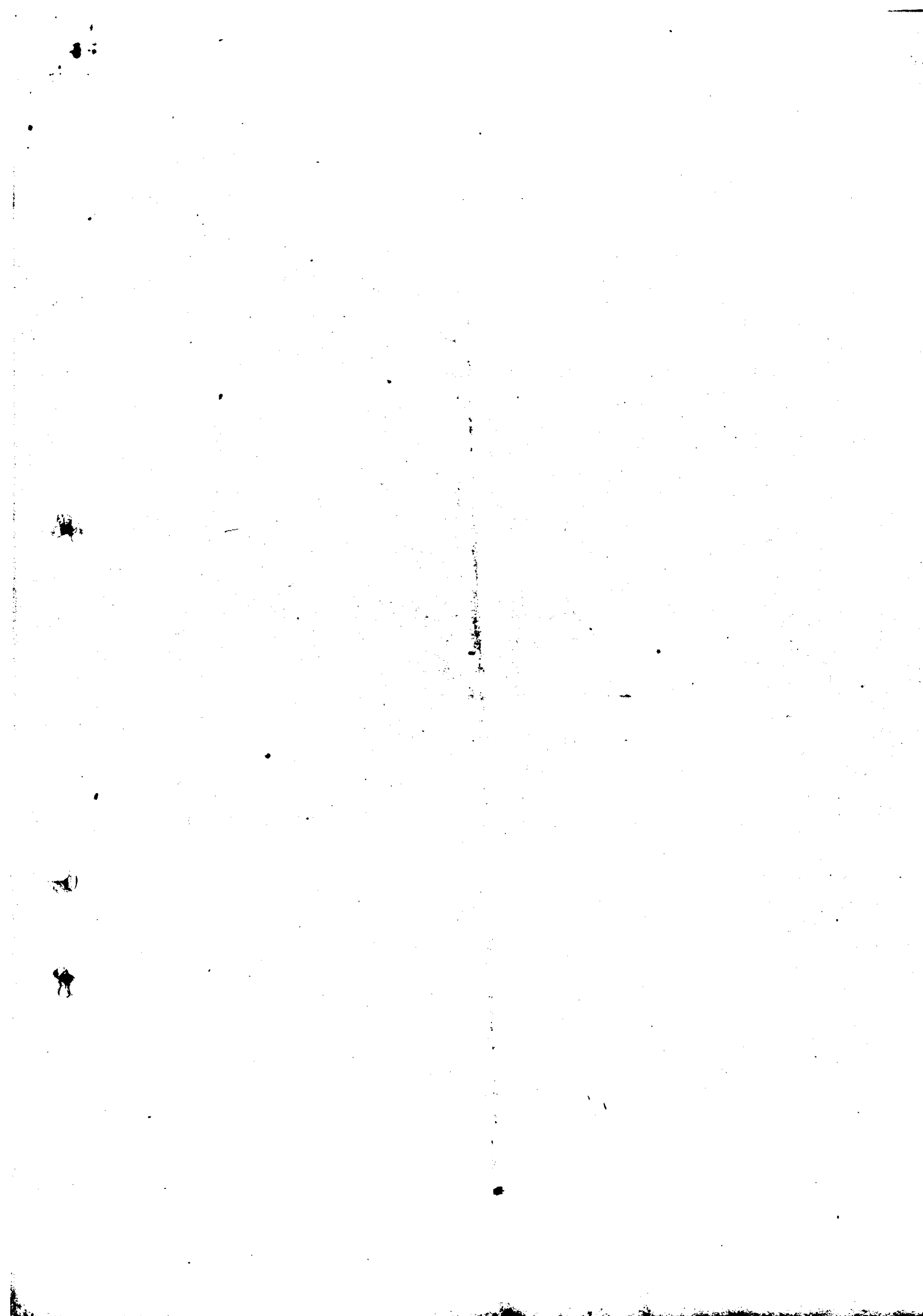
會員の動靜（現在）

| 氏 名 | 學校名及學科別 | 勞 働 先 |
|-------|----------|-------|
| 梁 承 誅 | 實業學校 | 德永精鋼社 |
| 李 廣 承 | 日本大學社會科 | 榮進社 |
| 李 子 松 | 巢鴨中學校 | 同 |
| 姜 活 松 | 巢鴨甲種商業學校 | 同 |
| 金 淳 活 | 巢鴨中學校 | 同 |
| 李 汝 淳 | 自習 | 同 |
| 姜 東 汝 | 自習 | 同 |
| 朴 達 東 | 自習 | 同 |
| 金 鎮 庸 | 研究數學館 | 同 |
| 朴 奉 祚 | 東大倫理教育科 | 同 |
| 吳 鳳 彬 | 早大高師部英語科 | 同 |
| 具 中 會 | 自習 | 同 |
| 徐 哲 淳 | 同 | 同 |
| 朴 根 哲 | 正則英語學校 | 同 |
| 朴 星 來 | 自習 | 同 |
| 卞 光 石 | 同 | 同 |
| 李 允 允 | 同 | 同 |

龍郁福世秀秀奎涉得默文瀟珪三章徑鎬用吉

[illegible]

| | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----------|---|---|---|---|---|---|---|----------|---|-----|------|-------|-------|----|
| 八 | 榮進社 | 同 | 日本銀行清水組現場 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 同 | 阪谷邸清水組現場 | 同 | 榮進社 | 製針工場 | 自轉車工場 | 德永精鋼社 | 以上 |
|---|-----|---|-----------|---|---|---|---|---|---|---|----------|---|-----|------|-------|-------|----|



自彙會事錄第一年度 自大正十三年十一月 會計報告
到大正十四年十一月

十卷

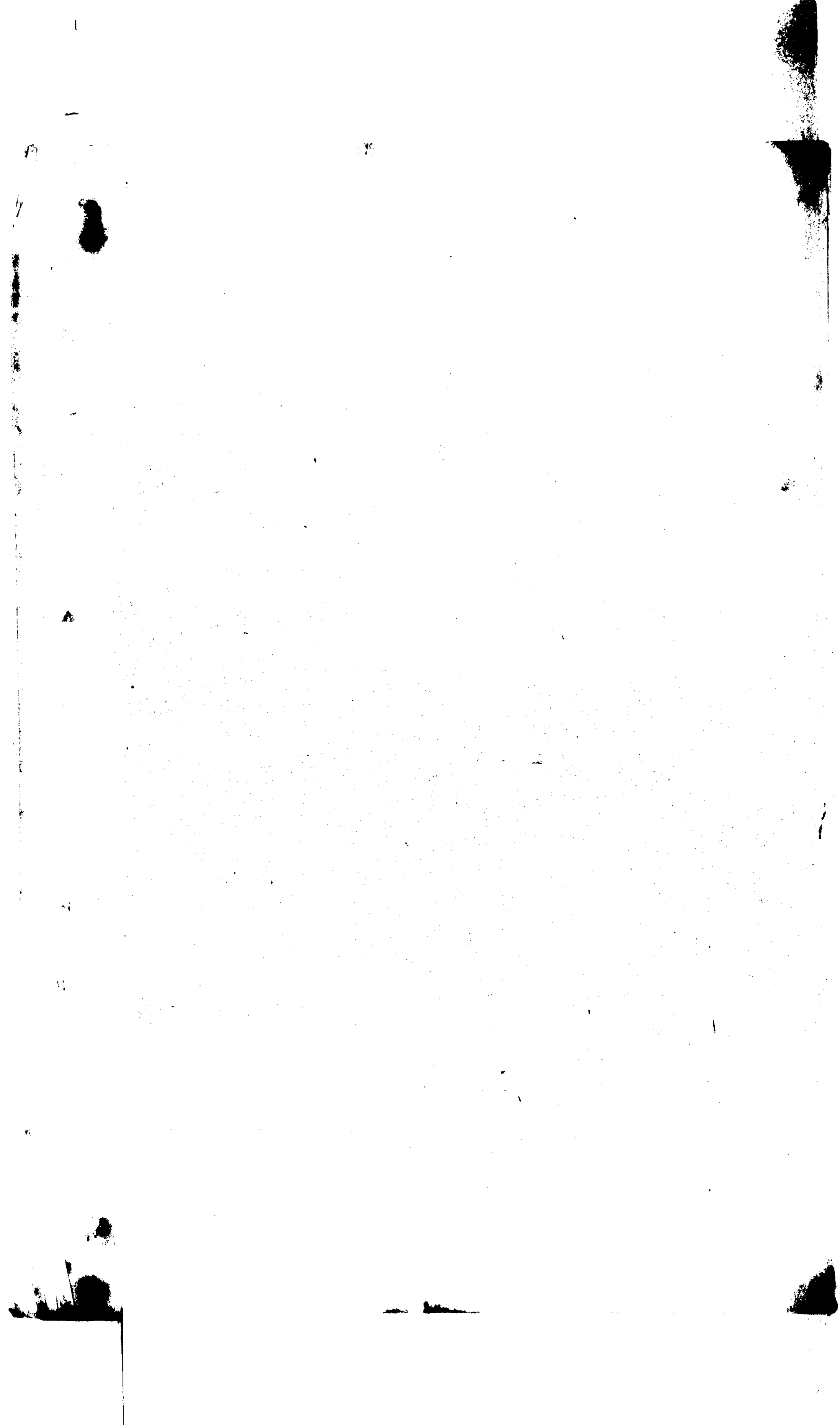
| | | | | |
|-------|--------|--------|--------|---|
| 實 | 方 | | 實 | 方 |
| 贊助金 | 八四〇〇〇 | 永勝贊助金 | 八六〇〇〇 | |
| 維持贊助金 | 一五〇〇〇 | 借款金 | 六〇〇〇 | |
| 會員會費 | 六五〇〇 | 儲蓄品 | 一一〇〇 | |
| 會員自給費 | 二七〇〇〇 | 銀行當座預金 | 二六五六一〇 | |
| 雜收入 | 六六四〇 | 銀行定期預金 | 四〇五五五五 | |
| 合計 | 八八八一四〇 | 合計 | 八八八一四〇 | |
| | | 內詳 | | |
| | | 應付貨 | 九五五〇〇 | |
| | | 事務所費 | 五三六〇〇 | |
| | | 當下 | 五六馬〇〇〇 | |
| | | 合計 | 八八八一四〇 | |

第一年度收支計算表

| 收入 | | 支出 | |
|-------|----------|-----|---------|
| 贊助金 | 八八八〇〇〇〇〇 | 經費 | 五〇五五五五〇 |
| 維持費 | 一五〇〇〇〇〇 | 內 | |
| 會員會費 | 六五五〇〇〇〇 | 事務所 | 九五五〇〇〇〇 |
| 會員留給費 | 二七〇〇〇〇〇 | 常務費 | 五五五〇〇〇〇 |
| 雜收入 | 六六六六六六六 | 下 | 五五五〇〇〇〇 |
| 合計 | 八八八八八八八 | 合計 | 八八八八八八八 |

第一年度決算殘高表

| 實方 | | 借方 | |
|-------|---------|--------|---------|
| 贊助金 | 八八八八八八八 | 未結算金 | 八八八八八八八 |
| 維持費 | 一五〇〇〇〇〇 | 存款 | 六〇〇〇〇〇〇 |
| 會員會費 | 六五五〇〇〇〇 | 信託 | 一一〇〇〇〇〇 |
| 會員留給費 | 二七〇〇〇〇〇 | 銀行當座預金 | 二六六六六六六 |
| 雜收入 | 六六六六六六六 | 銀行定期預金 | 四〇〇〇〇〇〇 |
| 合計 | 八八八八八八八 | 合計 | 八八八八八八八 |



自強會附行為

三

自強會附行為
附錄

自強會附行為

第一章 名稱及事務所

第一條 本會ハ自強會ト稱ス

第二條 本會ハ事務所ヲ東京ニ置ク

第二章 目的及事業

第三條 本會ハ朝鮮同胞ノ自助的精神ヲ涵養シ精

神上經濟上及社會上ニ於ケル人格地位ヲ

向上スルヲ以テ目的トス

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ左ノ事業

ヲ行フ

一、學術優秀志操堅固ナル有望ノ青年ニシテ

現ニ高等教育ヲ受ケツ、アル者又ハ之ヲ

受ケントスル者ヲ會員中ヨリ選拔シテ學

費ノ補給又ハ貸與ヲナス事

二、日々労働ニ従事シツル學業ニ勉ムル學生

ヲ會員中ヨリ選拔シテ補助又ハ便宜ヲ與フ

フル事

三、講演會及研究會ヲ開ク事

四、寄宿舎ヲ設ケル事

五、評議員會ニ於テ本會ノ目的ヲ達スルニ必

要アリト認メタル事項

第三章 資産及會計

第五系

本會設立ニ於ケル資産ハ別紙財産目

録ノ通りトス

資産ノ管理及運用ハ評議員會ノ議決ヲ以

テ之ヲ定ム

第六系

本會ノ經費ハ左ニ掲グル諸收入ヲ以テ支

辨ス

一、資産ヨリ生スル收入金

二、會費

三、寄附金

四、其他ノ收入金

第七系

第八系

本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌

年三月三十一日ニ終ル

本會ノ豫算ハ毎會計年度開始前評議員會

ノ議決ヲ經テ之ヲ定ム決算ハ其終了後評

議員會ノ承認ヲ經テ會員總會ニ報告スル

又ハ之ヲトス

第四章 會員

第九條

本會ノ會員ヲ分テ左ノ三種トス

一 通常會員

一 維持會員

一 賛助會員

第十條

通常會員ハ朝鮮人ニシテ年額参月ノ額出スルモノトス

維持會員ハ毎月五元以上ヲ出資スルモノトス

賛助會員ハ一時金参拾円以上ヲ寄附シタルモノトス

第十一條

通常會員ヲラントスルモノハ會員ニシテ上ノ紹介ナルコトヲ要シ其諾否ハ理事會ニ決テ之ヲ決ス

第十二條

通常會員脱會セントスル時ハ本會ニ申出ルヘシ

第十三條

通常會員ニシテ本會ノ目的ニ違背シ又ハ体面ヲ汚損スルノ行為アルト認メラルル者ハ評議員會ノ議決ヲ經テ之ヲ除名スルコトアルヘシ

第五章 役員

第十四條

本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一 理事 五名

一 監事 一名

一 評議員若干名

第十五條

理事ハ通常會員中ヨリ監事ハ維持會員及賛助會員中ヨリ評議員會之ヲ選出ス

第十六系理事ハ互選シ以テ理事長一名并ニ常務理

事二名ヲ定ム

第十七系評議員ハ維持會員及賛助會員ヨリ互選ス

但シ維持會員ハ全部評議員タルモノトス

第十八系評議員ハ互選シ以テ評議會長一名ヲ定

ム

第十九系役員ノ任期ハ四年トス但シ再選ヲ妨ケ

ス

補缺ニヨリ就任シタル前項役員ノ任期ハ

前任者ノ残任期同トス

第二十系役員ハ任期満了タルニ後任者ノ選任ニ至

ル迄其職ニアルモノトス

第二十一系理事長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統轄ス

第二十二系理事長事故アル時ハ常務理事其職ヲ代

理ス

第二十三系常務理事ハ評議會及理事會ノ決議ニ基

キ會務ヲ處理ス

第二十四系理事長ハ必要ニ應ジ理事會ノ議決ヲ經

テ委員ヲ置クモノト得

第六章 役員會及會員協會

第二十五系評議員會ハ評議會長 理事會ハ理事長

ニ就テ必要ト認メタル時之ヲ召集ス

評議員三名以上又ハ監事ヨリ請求アリ

タル時ハ評議會長ハ評議會ヲ召集スル

コトヲ要ス

第二十六系評議員會ハ評議會長ヲ以テ議長トシ理

第二十七條 評議員會及理事會ノ決議ハ過半数ヲ以テ之ヲ決ス

第二十八條 理事及監事ハ評議員會ニ出席シテ意見ヲ述フル事ヲ得

第二十九條 會費抽當ハ毎年一回以上之ヲ開ク

第三十條 本會附行為ハ評議員及理事ノ四分ノ三以上ノ同意ヲ得且ツ主務官廳ノ認可ヲ受ク

第三十一條 本會附行為ノ施行ニ關シ必要ナル細則ハ評議員會議決ヲ以テ別ニ之ヲ定ム

第三十二條 本會ハ第三條ノ目的ヲ達スルコト能ハ

ナルニ至リタル時ハ評議員及理事ノ四分ノ三以上ノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ經テ解散スルコトヲ得

第三十三條 前條ノ場合ニ於テハ本會所屬ノ財産ハ本會ト類似ノ目的ヲ有スル公益事業ニ寄附スルモノトス

第八章 附則

第三十四條 本會設立ノ際ニ於テ元自強會費タルモノハ寄附行為ニ從ハサル手續ヲ要セズ

第三十五條 本會設立ノ當時ニ於ケル理事ノ職務ハ設立者總代ニ於テ之ヲ行フ

自疆會審附行爲施行細則

第一條

第一章 總則
第一條 增進及會計
買入ノ増殖ヲ圖ル爲メ
買入ノ増殖ニ要スル場合ニハ不動産ヲ

第二條

有價証券及現金ハ確實ナル銀行ニ預ケ入
ルルコトヲ要ス但シ小拂ノ爲メ小許ノ現

第三條

金ヲ保有スルハ妨ケ不
實ノ監督管理ハ評議會長ノ指名ニヨル評議

第四條

豫算ハ毎年三月上旬
決算ハ四月上旬之

第五條

會計ニ關スル帳簿ハ完備ナ期シ常ニ資産

一 現状及現金の出納の明力ニスルコトヲ要ス

第二章 會費

第六條 會費ハ毎年七月及翌年一月之ヲ徴収ス

第七條 會費住所變更ノ場合ハ之ヲ届ケ出ツルコトヲ要ス

第八條 會費人名簿ヲ備ヘテ之ヲ移動ヲ明力ニス

第九條 會費總會ノ開催ノ場合ニハ全會費ニ對シ

其他ノ會令ニ場合ニハ適宜通知ヲ發スヘシ

第三章 役員

第十條 評議員理事監事及委員ノ名簿ヲ備ヘテ在職ノ明力ニス

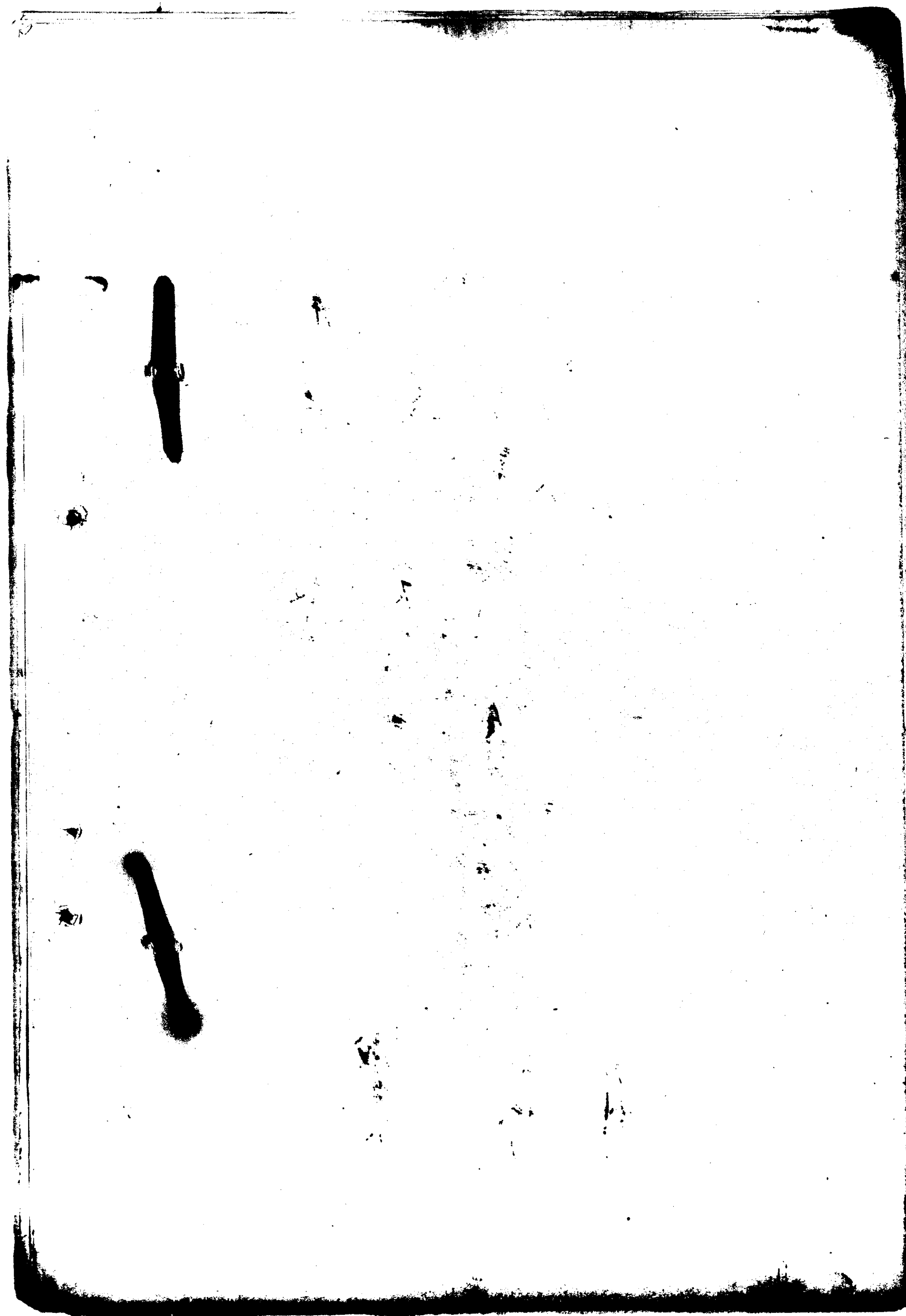
第十一條 評議員會ニ提出スル議案ハ先ツ理事會ノ決議ヲ經ルコトヲ要ス

但シ評議員又ハ監事ヨリ提出スル議案ハ此限リニアラス

第四章 役員會及會費總會

第十二條 評議員會及理事會ノ決議事項ハ議事録ヲ作リテ之ヲ保存ス

第十三條 會費總會ハ毎年四月ニ開催スルヲ常例トス但シ必要アル場合ニハ臨時總會ヲ開催ス



財團
法人
自
彊
會
定
欸
(附報告書)

二十五年

自彊會經過狀況報告書

自彊會經過狀況報告書

本會は各位の多大なる御後援の下に順調に進捗いたし去る三月二十八日附文部省より財團法人許可の指令に接した次第であります此際大正十四年六月以降別紙本會の財政收支状況、會員の動靜及財團法人定款相添へ御報告申上併せて今後一層の御援助を賜り度願上ます

昭和二年四月 日

自彊會設立者

- | | |
|-----------|------------|
| 男爵 阪谷 芳 郎 | 男爵 八 代 六 郎 |
| 嘉納治五郎 | 武 田 秀 雄 |
| 増田 義 一 | 永 井 亨 |
| 清 水 一 雄 | 德 永 爲 次 |
| 関 爽 鉉 | 朴 思 稷 |

殿

大正十四年十一月顧問會議に於て決定せられました維持會員の申込は左の通りであります

(順不同)

| | | | |
|--------|------------|------|------------|
| 一、壹口 | 男爵 阪谷 芳 郎殿 | 一、壹口 | 男爵 八代 六 郎殿 |
| 一、壹口 | 嘉納治五郎殿 | 一、貳口 | 武田 秀 雄殿 |
| 一、貳口 | 増田 義 一殿 | 一、壹口 | 永井 亨殿 |
| 一、貳口 | 清水 一 雄殿 | 一、壹口 | 男爵 平山 成 信殿 |
| 一、壹口 | 子爵 福岡 秀 猪殿 | 一、貳口 | 三好 重 道殿 |
| 一、壹口 | 清水 釘 吉殿 | 一、壹口 | 佐々木 勇之助殿 |
| 一、壹口 | 鹽田 泰 介殿 | 一、貳口 | 松田貞治 郎殿 |
| 一、壹口 | 莊田 達 彌殿 | 一、壹口 | 青木 菊 佑殿 |
| 一、壹口 | 清水 揚之助殿 | 一、壹口 | 清水 毅殿 |
| 一、壹口 | 清水 康 雄殿 | 一、壹口 | 加藤 恭 平殿 |
| 一、壹口 | 三輪 善兵衛殿 | 一、壹口 | 矢島 康 次殿 |
| 計二十七口也 | | | |

大正十五年十月十三日顧問會議に於て本會を以て財團法人に設定せんことを決定し其基金として先づ一萬圓を以て當局に申請することに致し一萬圓の内六千圓は阪谷男爵殿、武田秀雄殿、増田義一殿より金二千圓宛引受け下されました。特志家の御氏名及寄附金額は左の通りであります

| | |
|----------------|-------------|
| 一金 七 百 圓也(基本金) | 子爵 澁澤 榮 一殿 |
| 一金 貳千 圓也(基本金) | 合資會社 清 水 組殿 |
| 一金 貳千 圓也(基本金) | 増田 義 一殿 |
| 一金 壹千 圓也(基本金) | 三菱合資會社殿 |
| 一金 七 百 圓也(基本金) | 男爵 古河 虎之助殿 |
| 一金 七 百 圓也(基本金) | 男爵 森村 開 作殿 |
| 一金 五 百 圓也(基本金) | 三好 重 道殿 |
| 一金 五 百 圓也(基本金) | 坂本 正 治殿 |

計八千百圓也

賛助金として御寄附下されました御氏名及金額は左の通りであります

| | |
|------------|---------|
| 一金 五 百 圓也 | 服部 金太郎殿 |
| 一金 貳百 五拾圓也 | 小野 英二郎殿 |

一金壹百五拾圓也
一金壹百圓也

石井健吾殿
渡邊治右衛門殿

計壹千圓也

屢計九千百圓也

但現在拂込金額七千圓也

收入之部

一金五、五參九、參六

大正十四年六月以前繰越金

一金壹〇、壹八九、六九

大正十四年七月ヨリ昭和二年三月迄

内 譯

イ、一金壹、六八五、〇〇

維持會費

ロ、一金 參八五、六〇

通常會員ノ會費及宿舍料

ハ、一金、壹九參、〇〇

贊助金

ニ、一金六、壹〇〇、〇〇

基金

ホ、一金 參九四、五二

利息

支出之部

一金五、貳六〇、〇〇

大正十四年七月ヨリ昭和二年三月迄

内 譯

イ、一金五、壹四五、〇〇

經常費

ロ、一金 九五、〇〇

臨時費

ハ、一金 貳〇、〇〇

事務用汁器買入

差引殘高五、貳七九、六六

大正十四年 六月以前繰越金五、五參九、參六

累計壹〇、八壹九、〇貳

會員の動靜

其中會君及洪淳福君は昨年早稻田大學の高等師範部を卒業し兩君共歸國し高等普通學校の先生になつて居りますし吳鳳彬君は東大にて史學を研究し又今年東洋大學倫理教育科を卒業し京城女子高等普通學校先生に金尙斌君は早稻田工手學校を卒業し清水組の社員に任命されました
昨年四月より李軒求、曹台元兩君を本會員中より選拔し曹君は阪谷男爵御指導の下に李君は増田義一殿の御指導の下に具男會君、趙鐘吾君、李允三君は清水一雄殿の御指導の下に何れも皆學費の御補助を戴いて居ります

姜 鉉 澤

第一高等學校

李 宗 日

第二高等學校

五

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 廉 | 朴 | 李 | 李 | 姜 | 金 | 中 | 姜 | 具 | 崔 | 金 | 金 | 趙 | 李 | 崔 | 劉 | 金 | 金 | 趙 | 金 |
| 安 | 日 | 學 | 鐘 | 武 | 榮 | 富 | 虎 | 桓 | 景 | 有 | 偶 | 舜 | 正 | 光 | 奎 | 守 | 起 | 鐘 | 庚 |
| 國 | 俊 | 仁 | 榮 | 龍 | 世 | 敬 | 元 | 祖 | 三 | 敬 | 得 | 珪 | 基 | 龍 | 烈 | 文 | 瑾 | 吾 | 熙 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|--------|--------|---------|-------|--------|--------|--------|---------|---------|--------|------|----------|---------|----------|---------|--------|-----------|--------|
| 日本大學法科 | 日本大學法科 | 正則英語學校 | 早稻田實業學校 | 大成中學校 | 正則英語學校 | 正則英語學校 | 巢鴨高等學校 | 日本大學經濟科 | 明治大學研究科 | 岩倉鐵道學校 | 電氣學校 | 日本獸醫專門學校 | 日本大學社會科 | 日本獸醫專門學校 | 專修大學計理科 | 日本大學法科 | 日本大學倫理教育科 | 第三高等學校 |
|--------|--------|--------|---------|-------|--------|--------|--------|---------|---------|--------|------|----------|---------|----------|---------|--------|-----------|--------|

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 任 | 李 | 文 | 鄭 | 閔 | 李 | 朴 | 李 | 閔 | 文 | 洪 | 吳 | 吉 | 崔 | 曹 | 李 | 金 | 具 | 李 |
| 賢 | 俊 | 東 | 在 | 丙 | 萬 | 弘 | 鷹 | 殷 | 淳 | 鳳 | 允 | 道 | 台 | 允 | 炳 | 三 | 男 | 軒 |
| 在 | 一 | 連 | 弼 | 坤 | 植 | 默 | 善 | 基 | 微 | 恪 | 一 | 箕 | 源 | 元 | 三 | 淳 | 會 | 求 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|---------|--------|--------|-------|---------|------|--------|--------|---------|----------|--------|---------|---------|-----|---------|----------|----------|---------|
| 電氣學校 | 早稻田工手學校 | 東京音樂學校 | 正則英語學校 | 巢鴨中學校 | 早稻田工手學校 | 實業學校 | 專修商業學校 | 日本大學法科 | 日本大學社會科 | 東京市立商業學校 | 東京鐵道學校 | 日本大學宗教科 | 日本大學經濟科 | 準備中 | 日本大學宗教科 | 早稻田大學政經科 | 東洋大學文化學科 | 早稻田高等學院 |
|------|---------|--------|--------|-------|---------|------|--------|--------|---------|----------|--------|---------|---------|-----|---------|----------|----------|---------|

財團法人設立許可願

本自強會ハ朝鮮同胞ノ精福上經濟上並一般社會上ニ於ケル人格及地位ヲ向上スルコトヲ目的トスルモ
ノニシテ民法第三十四條ニ該當スル財團ニ有之候條御許可被成下度寄附行爲相添此段奉願候也

大正十五年十二月二十三日

設立者

| | |
|-------------------|---------|
| 東京市小石川區原町百貳拾六番地 | 男爵 阪谷芳郎 |
| 東京市小石川區原町百參拾壹番地 | 男爵 八代六郎 |
| 東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地 | 嘉納治五郎 |
| 東京市小石川區深田町貳百五拾四番地 | 武田秀雄 |

東京市小石川區原町百貳拾五番地

增田義一

東京市小石川區原町百貳拾六番地

永井亨

東京市小石川區大塚坂下町四拾四番地

清水一雄

東京市小石川區大塚坂下町百九拾八番地

德永爲次

東京府北豐島郡巢鴨町字巢鴨千六百五拾參番地

関爽鉉

東京府北豐島郡巢鴨町字巢鴨千五百八拾壹番地

朴思稷

文部大臣 岡田良平殿

自彊會寄附行爲

第一章 名稱及事務所

第一條 本會ハ自彊會ト稱ス

第二條 本會ハ事務所ヲ東京府北豐島郡巢鴨町字巢鴨千六百五拾參番地ニ置ク

第二章 目的及事業

第三條 本會ハ朝鮮同胞ノ自助的精神ヲ涵養シ精神上經濟上並一般社會上ニ於ケル人格及地位ヲ向上スルコトヲ以テ目的トス

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ左ノ事業ヲ行フ

一、學術優秀志操堅固ナル有望ノ青年ニシテ現ニ高等教育ヲ受ケツ、アル者又ハ之ヲ受ケントスルモノヲ會員中ヨリ選抜シテ學費ノ補給又ハ貸與ヲナス事

二、日々勞働ニ從事シツ、學業ニ勉ムル學生ヲ會員中ヨリ選抜シテ補助又ハ便宜ヲ與フル事

三、講演會及研究會ヲ開ク事

四、寄宿舍ヲ設クル事

五、評議員會又ハ常議員會ニ於テ本會ノ目的ヲ達スルニ必要アリト認メタル事項

第三章 資産及會計

第五條 本會設立ノ日ニ於ケル資産ハ別紙財産目録ノ通リトス

前項ノ資産ハ之ヲ基本財産トス基本財産タルヘキコトヲ指定セル寄附金、補助金及剩餘金等ハ之ヲ基本財産ニ編入ス

資産ノ管理及運用ハ常議員會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 本會ノ經費ハ左ニ掲クル諸收入ヲ以テ支辨ス

一、資産ヨリ生スル收入金

二、會 費

三、寄 附 金

四、其他ノ收入金

第七條 本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ヨリ始メ翌年三月三十一日ニ終ル

第八條 本會ノ豫算ハ毎會計年度開始前評議員會ノ議決ヲ經テ之ヲ定メ決算ハ其終了後評議員會ノ承認ヲ經テ會員總會ニ報告スヘキモノトス

第四章 會 員

第九條 本會ノ會員ヲ分チテ左ノ三種トス

一、通常會員

一、維持會員

一、贊助會員

第十條 通常會員ハ朝鮮人ニシテ年額參圓ヲ齎出スルモノトス

維持會員ハ毎月五圓以上ヲ出資スルモノトス

贊助會員ハ一時金五拾圓以上ヲ寄附シタルモノトス

第十一條 通常會員タラントスルモノハ會員二名以上ノ紹介アルコトヲ要シ其諾否ハ理事會ニ於テ之ヲ決ス

第十二條 通常會員脫會セントスル時ハ本會ニ申出ツヘシ

第十三條 通常會員ニシテ本會ノ目的ニ違背シ又ハ體面ヲ汚損スルノ行爲アルト認メラル、者ハ常議員會ノ議決ヲ經テ之ヲ除名スルコトアルヘシ

第五章 役 員

第十四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一、理事 三名

一、監事 二名

一、評議員 若干名

一、常議員 若干名

第十五條 理事ハ通常會員中ヨリ監事ハ維持會員及賛助會員中ヨリ評議員會之ヲ選出ス

第十六條 理事ハ互選ヲ以テ理事長一名並常務理事二名ヲ定ム

第十七條 評議員ハ維持會員及賛助會員中ヨリ本會之ヲ囑託ス評議員ハ互選ヲ以テ評議員會長一名ヲ定ム

第十八條 常議員ハ維持會員中ヨリ本會之ヲ囑託ス

常議員ハ互選ヲ以テ常議員會長一名ヲ定ム

第十九條 役員ノ任期ハ四個年トス但シ再選ヲ妨ケス

補缺ニヨリ就任シタル役員ハ任期ヲ前任者ノ殘任期間トス

第二十條 役員ハ任期滿了スルモ後任者ノ選任ニ至ル迄其職ニアルモノトス

第二十一條 理事長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統轄ス

第二十二條 理事長事故アル時ハ豫メ定メタル順序ニ從ヒ常務理事其職ヲ代理ス

第二十三條 理事長及常務理事ハ評議員會及常議員會ノ決議ニ基キ會務ヲ處理ス

第二十四條 理事長ハ必要ニ應シ理事會ノ議決ヲ經テ委員ヲ置クコトヲ得

第六章 役員會及會員總會

第二十五條 評議員會ハ評議員會長、常議員會ハ常議員會長、理事會ハ理事長ニ於テ必要ト認メタル時之ヲ招集ス評議員三名以上又ハ監事ヨリ請求アリタル時ハ評議員會長ハ評議員會ヲ招集スルコトヲ要ス

第二十六條 評議員會ハ評議員會長、常議員會ハ常議員會長、理事會ハ理事長ヲ以テ議長トス

第二十七條 評議員會常議員會及理事會ノ決議ハ出席者ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナル時ハ議長之ヲ決ス

評議員會及常議員會ハ會員數ノ四分ノ一、理事會ハ三分ノ二ヲ以テ其開會定足數トス

第二十八條 理事及監事ハ評議員會及常議員會ニ出席シテ意見ヲ述フル事ヲ得

第二十九條 會員總會ハ毎年一回以上之ヲ開ク

第七章 補 則

第三十條 本寄附行爲ハ評議員及理事ノ四分ノ三以上ノ同意ヲ得且ツ主務官廳ノ認可ヲ受クルニアラサレハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

第三十一條 本寄附行爲ノ施行ニ關シ必要ナル細則ハ常議員會ノ議決ヲ以テ別ニ之ヲ定ム

第三十二條 本會ハ第三條ノ目的ヲ達スルコト能ハサルニ至リタル時ハ評議員及理事ノ四分ノ三以上ノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ經テ解散スルコトヲ得

第三十三條 前條ノ場合ニ於テハ本會所屬ノ財産ハ本會ト類似ノ目的ヲ有スル公益事業ニ寄附スルモノトス

第八章 附 則

第三十四條 本會設立ノ際ニ於テ元自彊會員タルモノハ寄附行爲ニ定メタル手續ヲ要セスシテ本會ノ會員タルモノトス

第三十五條 本會設立ノ當時ニ於ケル理事ノ職務ハ設立者岡寅鉉朴思稷之ヲ行フ

自彊會寄附行爲施行細則

第一章 財産及會計

第一條 資産ノ増殖ヲ圖ル爲メ確實ナル有價證券ヲ買入レ又特ニ必要ノ場合ニハ不動産ノ買入ル、コトヲ得

第二條 有價證券及現金ハ確實ナル銀行ニ預ケ入ル、コトヲ要ス但シ小拂ノ爲メ小許ノ現金ヲ保有スルコトヲ妨ケス

第三條 資産ノ管理ハ評議員會長ノ指名ニ依ル評議員ノ監督ノ下ニ理事長ノ責任トス

第四條 豫算ハ毎年三月上旬、決算ハ四月上旬之ヲ作成ス

第五條 會計ニ關スル帳簿ハ完備ヲ期シ常ニ資産ノ現状及現金ノ出納ヲ明カニスルコトヲ要ス

第二章 會 員

第六條 會費ハ毎月之ヲ徴收ス

第七條 會員住所變更ノ場合ハ之ヲ届ケ出ツルコトヲ要ス

第八條 會員ノ名簿ヲ備ヘ常ニ其移動ヲ明カニス

第九條 會員總會ノ開催ノ場合ニハ全會員ニ對シ其他ノ會合ノ場合ニハ適宜通知狀ヲ發スヘシ

第三章 役員

第十條 評議員、常議員、理事、監事及委員ノ名簿ヲ備ヘ其在職ヲ明カニス

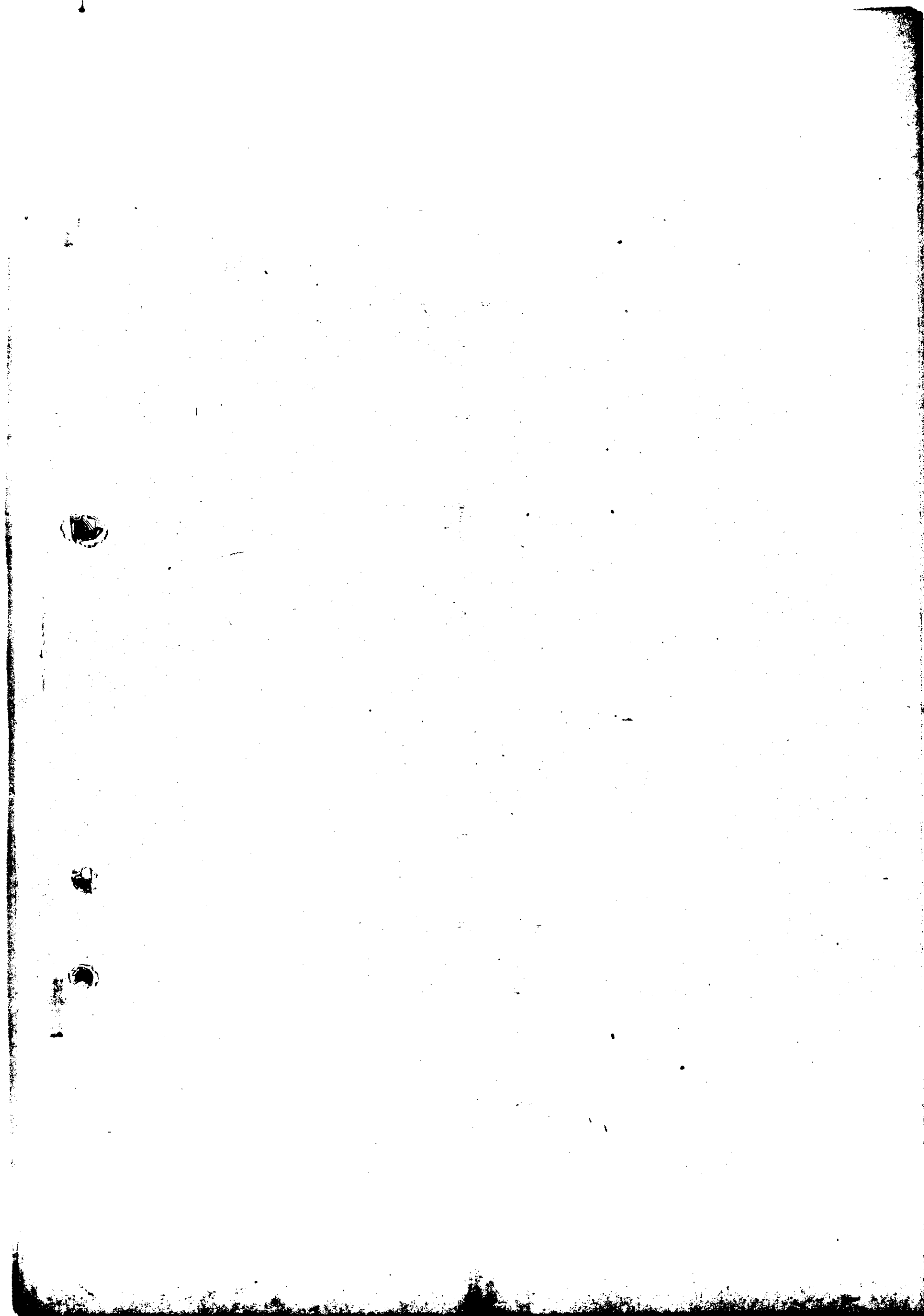
第十一條 評議員會及常議員會ニ提出スル議案ハ先ツ理事會ノ決議ヲ經ルコトヲ要ス但シ評議員常議員又ハ監事ヨリ提出スル議案ハ此限ニアラス

第四章 役員會及會員總會

第十二條 評議員會、常議員會、及理事會ノ決議事項ハ議事録ヲ作り之ヲ保存ス

第十三條 會員總會ハ毎年四月ニ開催スルヲ常例トス

但シ必要アル場合ハ臨時總會ヲ開催ス



十五年四月
ナリ

自選會、概況報告

基本金、方ハ清水組ヨリ二千円、申込ガ、コトヲ以テ、他ニ方々、所請ヲ
シタ、處ハカルケレドモ、未ダ、確定シタ、處ハ、所請イマセシ
維持會員、申込ハ、未ダ、ハ、コトヲ以テ、所請イマセシ、今、所請イマセシ
三十口以上、申込ヲ、勸誘致サケレバ、ランダラウト存スル、次、所請イマセシ
本會員中ヨリ、名ノ三名ガ、卒業、法就職シテ、帰國致シマシタ
具中會及、洪淳福ハ、早稲田、高等師範部ヲ、卒業シ、具君ハ、鹿
尚南道馬山高等普通學校ノ、先生ニシテ、帰國シ、洪君ハ、金羅
北道高敬郡高等普通學校ノ、先生ニシテ、帰國致シマシタ
朴庸准ハ、日本大學ノ、法科ヲ、卒業シ、總務府ノ、官吏ニ、任命サレテ
帰國致シマシタ
具中會君ハ、本會ノ、維持費トシテ、一ヶ年ニ、檢式、内宛、附スル、申込
ガ、アリマシタシ、洪淳福ハ、一ヶ年、檢式、内宛、附スル、申込ガ、アリマシタ

昨年八月ヨリ、今年三月マデ、本會員ニ、積業ノ、便、與ヘタ者ガ
一万四千八位ニ、ナリマシタ
清水様ノ、特志ニヨリ、本會員、積業ノ、便、與ヘタ者ガ、毎月、三十円
宛、學費ノ、補助ヲ、戴イテ、居リマス。

第二章 (附註)

財團法人設立許可

中世と近世
手の図に於て

本會ハ朝鮮同胞ノ精神上經濟上並
一般社會上ニ於ケル人格及地位ヲ向上スル
コトヲ目的トスルモノニシテ民法第五十四條ニ
該當スル財團ニ有之候條御許可被成下
度寄附行為相添此致奉願候也
大正十五年

東京市

文部大臣 岡田 良平 殿
内務大臣 若槻 禮次郎 殿

自強會寄附行為

第一章 名稱及事務所

第一條 本會ハ自強會ト稱ス

第二條 本會ハ事務所ヲ東京ニ置ク

第二章 目的及事業

第三條 本會ハ朝鮮同胞ノ自助的精神ヲ涵養シ精神上經濟上統一級社會上ニ於ケル人格及地位ヲ向上スルコトヲ以テ目的トス

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ左ノ事業ヲ行フ

一、學術優秀志操堅固ナル有望ノ青年ニレテ現ニ高等教育ヲ受ケツアル者又ハ之ヲ

受ケントスル者ヲ會員中ヨリ選拔シテ學費ノ補給又ハ賞與ヲナス事

二、日々勞働ニ従事シテ學業ニ勉ムル學生ヲ會員中ヨリ選拔シテ補助又ハ便宜ヲ與フル事

三、講演會及研究會ヲ開ク事

四、寄宿舍ヲ設ケル事

五、評議員會又ハ常議員會ニ於テ本會ノ目的ヲ達スルニ必要アリト認メタル事項

第三章 資産及會計

第五條 本會設立ノ日ニ於ケル資産ハ別紙附産目錄ノ通りトス

資產、管理及運用ハ常議員會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 本會ノ經費ハ左ノ端ナル諸收入ヲ以テ支辨ス

一 資產より生スル收入金
二 會費

三 寄附金

四 其他ノ收入金

第七條 本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル

第八條 本會ノ豫算ハ每會計年度開始前評議員會ノ議決ヲ經テ之ヲ定メ決算ハ其終

了後評議員會ノ承認ヲ經テ會員總會ニ報告スヘキモノトス

第四章 會員

第九條 本會ノ會員ヲ分チテ左ノ五種トス

- 一 通常會員
- 一 維持會員
- 一 贊助會員

第十條 通常會員ハ朝鮮人ニシテ年額參圓ヲ納ムルモノトス

維持會員ハ每月五圓以上ヲ出資スルモノトス
贊助會員ハ一時金五拾圓以上ヲ寄附シタルモノトス

第十一條 通常會員タルラントスルモノハ會員ニ在
以上ノ經有アルコトヲ要シ其諾否ハ理事會ニ
於テ之ヲ決ス

第十二條 通常會員總會セントスル時ハ本會ニ
申出ツヘシ

第十三條 通常會員ニシテ本會ノ目的ニ違背シ
又ハ体面ヲ汚損スルノ行爲アルト認めラルン
者ハ常議員會ノ議決ヲ經テ之ヲ除名スルコ
トアルヘシ

第五章 役員

第十四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
一、理事 五名

一、監事 二名

一、評議員 若干名

一、常議員 若干名

第十五條 理事ハ通常會員中ヨリ監事ハ維持
會員及贊助會員中ヨリ評議員會之ヲ
選出ス

第十六條 理事ハ五選ヲ以テ理事長一名並常務
理事二名ヲ定ム

第十七條 評議員ハ維持會員及贊助會員中
ヨリ之ヲ五選ス但シ維持會員ハ全部評議
員タルモノトス

第十八條 常議員ハ評議員中ヨリ之ヲ五選ス常

議員ハ互選ヲ以テ常議員會長一名ヲ定ム
第十九條 役員ノ任期ハ四年トス但シ再選ヲ妨ケ

又
補缺ニヨリ就任シタル役員ノ任期ハ前任者ノ
残任期間トス

第二十條 役員ハ任期満了スルモ後任者ノ選任ニ
至シ迄其職ニアルモノトス

第二十一條 理事長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統轄ス
第二十二條 理事長事故アル時ハ常務理事其職ヲ
代理ス

第二十三條 理事長及常務理事ハ評議員會及常
議員會ノ決議ニ基テ會務ヲ處理ス

第二十四條 理事長ハ必要ニ應レ理事會ノ議決
ヲ經テ委員ヲ置クコトヲ得

第六章 役員會及會員總會
第二十五條 評議員會ハ評議員會長、常議員
會ハ常議員會長、理事會ハ理事長ニ於テ
必要ト認メタル時之ヲ召集ス

評議員三名以上又ハ監事ヨリ請求アリタル
時ハ評議員會長ハ評議會ヲ召集スルコト
ヲ要ス

第二十六條 評議員會ハ評議員會長、常議員會
ハ常議員會長、理事會ハ理事長ヲ以テ議
長トス

第二十七條 評議員會、常議員會及理事會、決議ハ出席者、過半数ヲ以テ之ヲ決ス

第二十八條 理事及監事ハ評議員會及常議員會ニ出席シテ意見ヲ述ブル事ヲ得

第二十九條 會員總會ハ毎年一回以上之ヲ開ク

第七章 附則

第三十條 本會附行為ハ評議員及理事ノ四分ノ五以上ノ同意ヲ得且ツ主務官廳ノ認可ヲ受クニテ之ヲ行フ事ヲ得

第三十一條 本會附行為ノ施行ニ關シ必要ナル細則ハ常議員會ノ議決ヲ以テ別ニ之ヲ定ム

第三十二條 本會ハ第三條ノ目的ヲ達スルコト能ハシ

ルニ至リタル時ハ評議員及理事ノ四分ノ五以上ノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ經テ解散スルコトヲ得

第三十三條 前條ノ場合ニ於テハ本會所屬ノ財產ハ本會ト類似ノ目的ヲ有スル公益事業ニ寄附スルモノトス

第八章 附則

第三十四條 本會設立ノ際ニ於テ元自體會員タルモノハ附行爲ニ定ムル手續ヲ要セスレバ本會ノ會員タルモノトス

第三十五條 本會設立ノ當時ニ於ケル理事ノ職務ハ設立者總代ニ於テ之ヲ行フ

第一章 資產及會計

4

第二條 有價證券及現金ハ確實ナル銀行ニ預ケ入ル
ルコトヲ要ス但シ小計ノ為メ小計ノ現金ヲ保有スル
コトヲ妨ケス

第三條 資產、管理ハ評議會ニ指屬スル評議員、監督ノ下ニ理事長ノ責任トス

第四條 豫算ハ毎年三月上旬
決算ハ四月上旬之ヲ
作成ス

第五條 會計ニ関スル帳簿ハ完備ヲ期シ常ニ資産ノ現
狀及現金ノ出納ヲ明カニスルコトヲ要ス

第二章 會員

第六條 會費ハ毎年七月及翌年一月之ヲ徴收ス
第七條 會員位所喪失ノ場合ハ之ヲ屬ク出クルコトヲ
要ス

第八條 會員ノ名簿ヲ編ヘ常ニ其移動ヲ明カニス
第九條 會員總會ノ開議ノ場合ニハ全會員ニ對シ
其議ノ會合ノ場合ニハ適宜通知セラルベシ

第三章 校費

第十條 評議員理事監事及委員、名簿ヲ備ヘ
其在職ノ間力ニ入

壹千八百

第十三條 評議員會提出スル議案ハ先ツ理事會
ノ決議ヲ經ルコトヲ要ス但レ評議員又ハ監事
ヨリ提出スル議案ハ此限リニアラス

第四章 役員會及會員總會

第十三條 評議員會及理事會ノ決議事項ハ議事
録ヲ作りテ之ヲ保存ス

第十三條 會員總會ハ毎年四月ニ開會スルヲ常例
トス但シ必要アル場合ニハ臨時總會ヲ開會
ス

142.

財團
法人
自彊會許可書及定款

父部大臣

陳

長

本 部
團 人

東普四三八號

男爵 阪谷 芳郎

大正十五年十二月二十三日申請財團法人自彊會設立ノ件民法第二十四條ニ依リ許可ス

文部大臣 岡田良平 印

文滄大司 岡田貞平 印

昭和二年三月四日

東京市小石川區大塚町百拾四番地

谷 茂 順

自勵會創立者

谷 茂 順

昭和二年三月八日

財團法人設立許可願

本自勵會ハ朝鮮同胞ノ精神上經濟上並一般社會上ニ於ケル人格及地位ヲ向上スルコトヲ目的トスルモ
ノニシテ民法第三十四條ニ該當スル財團ニ有之候條御許可被成下度寄附行爲相添此段奉願候也

大正十五年十二月二十三日

東京市小石川區大塚町百拾四番地

東京市小石川區大塚町百拾四番地

東京市小石川區大塚町百拾四番地

東京市小石川區大塚町百拾四番地

東京市小石川區大塚町百拾四番地

東京市小石川區大塚町百拾四番地

東京市小石川區大塚町百拾四番地

東京市小石川區大塚町百拾四番地

東京市小石川區大塚町百拾四番地

文部大臣 岡田良平殿

東京市小石川區原町百貳拾五番地
增田義一
東京市小石川區原町百貳拾六番地
永井
東京市小石川區大塚坂下町四拾四番地
清水一雄
東京市小石川區大塚坂下町百九拾八番地
德永爲次
東京府北豐島郡巢鴨町字巢鴨千六百五拾番地
関爽鉉
東京府北豐島郡巢鴨町字巢鴨千五百八拾番地
朴思稷

自彊會寄附行爲

第一章 名稱及事務所

第一條 本會ハ自彊會ト稱ス

第二條 本會ハ事務所ヲ東京府北豐島郡巢鴨町字巢鴨千六百五拾番地ニ置ク

第二章 目的及事業

第三條 本會ハ朝鮮同胞ノ自助的精神ヲ涵養シ精神ヲ振興シ經濟上並一般社會上ニ於ケル人格及地位ヲ向上スルコトヲ以テ目的トス

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ左ノ事業ヲ行フ

- 一、學術優秀志操堅固ナル有望ノ青年ヲ發見シ高等教育ヲ受ケ資力ヲ養ヒ學業ニ勉ムル學生ヲ會員中ヨリ選拔シテ補助又ハ便宜ヲ與フル事
- 二、日々勞働ニ従事シツ、學業ニ勉ムル學生ヲ會員中ヨリ選拔シテ補助又ハ便宜ヲ與フル事
- 三、講演會及研究會ヲ開ク事
- 四、寄宿舎ヲ設クル事

五 評議員會又ハ常議員會ニ於テ本會ノ目的ヲ達スルニ必要アリト認メタル事項

第三章 資産及會計

第五條

本會設立ノ目ニ於ケル資産ハ別紙財産目錄ノ通表及ス其附屬ノ事項
前項ノ資産ハ之ヲ基本財産トシ基本財産タルハキコトヲ指定セル寄附金、補助金及剩餘金等
ハ之ヲ基本財産ニ編入スルモノトシ、其ノ他ノ資産ハ別紙ニ記載スルモノトス
資産ノ管理及運用ハ常議員會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第六條

本會ノ經費ハ左ニ掲クル諸收入ヲ以テ支拂ハルモノトシ、並ニ該會士ニ對シテハ、其ノ他ノ收入
一、資産ヨリ生スル收入金
二、會費
三、寄附金
四、其他ノ收入金

第七條 本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ヨリ始メ翌年三月三十一日ニ終ル

第八條

本會ノ豫算ハ毎會計年度開始前評議員會ノ議決ヲ經テ之ヲ定メ、決算ハ其終了後評議員會ノ承認ヲ經テ會員總會ニ報告スルモノトス

第九條

本會ノ會員ヲ分チテ左ノ三種トシ、其ノ權利義務ハ別紙ニ記載スルモノトス
一、通常會員
二、維持會員
三、贊助會員

第十條 通常會員ハ朝鮮人ニシテ年額參圓ヲ納出スルモノトス

第十一條

維持會員ハ毎月五圓以上ヲ出資スルモノトシ、其ノ他ノ事項ハ別紙ニ記載スルモノトス
贊助會員ハ一時金五拾圓以上ヲ寄附シタルモノトス

第十二條

通常會員タラントスルモノハ會員二名以上ノ紹介アルコトヲ要シ、其諾否ハ理事會ニ於テ之ヲ決ス

第十三條

通常會員脫會セントスル時ハ本會ニ申出ツヘシ
通常會員ニシテ本會ノ目的ニ違背シ又ハ體面ヲ汚損スルノ行爲アルト認メラルハ者ハ常議員會ノ議決ヲ經テ之ヲ除名スルコトアルヘシ

第五章 役員

第十四條

第十四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

- 一、理事 三名
- 一、監事 二名
- 一、評議員 若干名
- 一、常議員 若干名

第十五條 理事ハ通常會員中ヨリ監事ハ維持會員及賛助會員中ヨリ評議員會之ヲ選出ス

第十六條 理事ハ互選ヲ以テ理事長一名並常務理事二名ヲ定ム

第十七條 評議員ハ維持會員及賛助會員中ヨリ本會之ヲ囑託ス評議員ハ互選ヲ以テ評議員會長一名ヲ定ム

第十八條 常議員ハ維持會員中ヨリ本會之ヲ囑託ス

常議員ハ互選ヲ以テ常議員會長一名ヲ定ム

第十九條 役員ノ任期ハ四個年トス但シ再選ヲ妨ケス

補缺ニヨリ就任シタル役員ハ任期ヲ前任者ノ殘任期間トス

第二十條 役員ハ任期満了スルモ後任者ノ選任ニ至ル迄其職ニアルモノトス

第二十一條 理事長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統轄ス

第二十二條 理事長事故アル時ハ豫メ定メタル順序ニ從ヒ常務理事其職ヲ代理ス

第二十三條 理事長及常務理事ハ評議員會及常議員會ノ決議ヲ得テ罷免ス

第二十四條 理事長ハ必要ニ應ジ理事會ノ議決ヲ經テ委員ヲ置クコトヲ得

第六章 役員會及會員總會

第二十五條 評議員會ハ評議員會長、常議員會ハ常議員會長、理事會ハ理事長ニ於テ必要ト認メタル

時之ヲ招集ス評議員三名以上又ハ監事ヨリ請求アリタル時ハ評議員會長ハ評議員會ヲ招集スルコトヲ要ス

第二十六條 評議員會ハ評議員會長、常議員會ハ常議員會長、理事會ハ理事長ヲ以テ議長トス

第二十七條 評議員會常議員會及理事會ノ決議ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可也同數ナル時ハ議長之ヲ決ス

評議員會及常議員會ハ會員數ノ四分ノ一、理事會ハ三分ノ二ヲ以テ其開會定足數トス

第二十八條 理事及監事ハ評議員會及常議員會ニ出席シ其意見ヲ發表スルヲ得

第二十九條 會員總會ハ毎年一回以上之ヲ開ク

第七章 補則

正六

第三十條 本寄附行為ハ評議員及理事ハ四分の三以上ノ同意ヲ得且主務官廳ノ認可ヲ受クルニアラサレハ之ヲ變更スルコトヲ得

第三十一條 本寄附行為ノ施行ニ關シ必要ナル細則ハ常議員會ノ議決ヲ以テ別ニ之ヲ定ム

第三十二條 本會ハ第三條ノ目的ヲ達スルニ必要ナル事業ヲ行フ時ハ評議員及理事ハ四分の三以上ノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得且主務官廳ノ監督ニ服ス

第三十三條 前條ノ場合ニ於テハ本會所屬ノ財産ハ本會ト類似ノ目的ヲ有スル公益事業ニ寄附スルモノトス

第八章 附則

會員總會

第三十四條 本會設立ノ際ニ於テ元自彊會員タルモノハ寄附行為ニ定メタル手續ヲ要セスシテ本會ノ會員タルモノトス

第三十五條 本會設立ノ當時ニ於テ主務官廳ノ認可ヲ得且主務官廳ノ監督ニ服ス

自彊會寄附行為施行細則

第一章 財産及會計

第一條 資産ノ増殖ヲ圖ル爲メ確實ナル有價證券ヲ買入レ又特ニ必要ノ場合ニハ不動産ノ買入ル、コトヲ得

第二條 有價證券及現金ハ確實ナル銀行ニ預ケ入ルコトヲ要ス但シ小拂ノ爲メ小許ノ現金ヲ保有スルコトヲ妨ケス

第三條 資産ノ管理ハ評議員會ニ屬ス且主務官廳ノ監督ノ下ニ理事長ノ責任トス

第四條 豫算ハ毎年三月上旬、決算ハ四月上旬之ヲ作成ス

第五條 會計ニ關スル帳簿ハ完備ヲ要ス且現狀及現金ノ出納ヲ明カニスルコトヲ要ス

第六條 第二條ノ會計ニ關スル帳簿ハ主務官廳ノ監督ニ服ス

第六條 會費ハ毎月之ヲ徴收ス

第七條 會員住所變更ノ場合ハ之ヲ届ケ出ツルコトヲ要ス

第八條 會員ノ名簿ヲ備ヘ常ニ更新スルコトヲ要ス且其冊ハ會合ノ際ニハ厳重ニ取扱フ事ヲ要ス

第九條 會員總會ノ開催ノ場合ニハ全會員ニ對シ其他ノ會合ノ場合ニハ適宜通知ヲ發スヘシ

第三章 役員

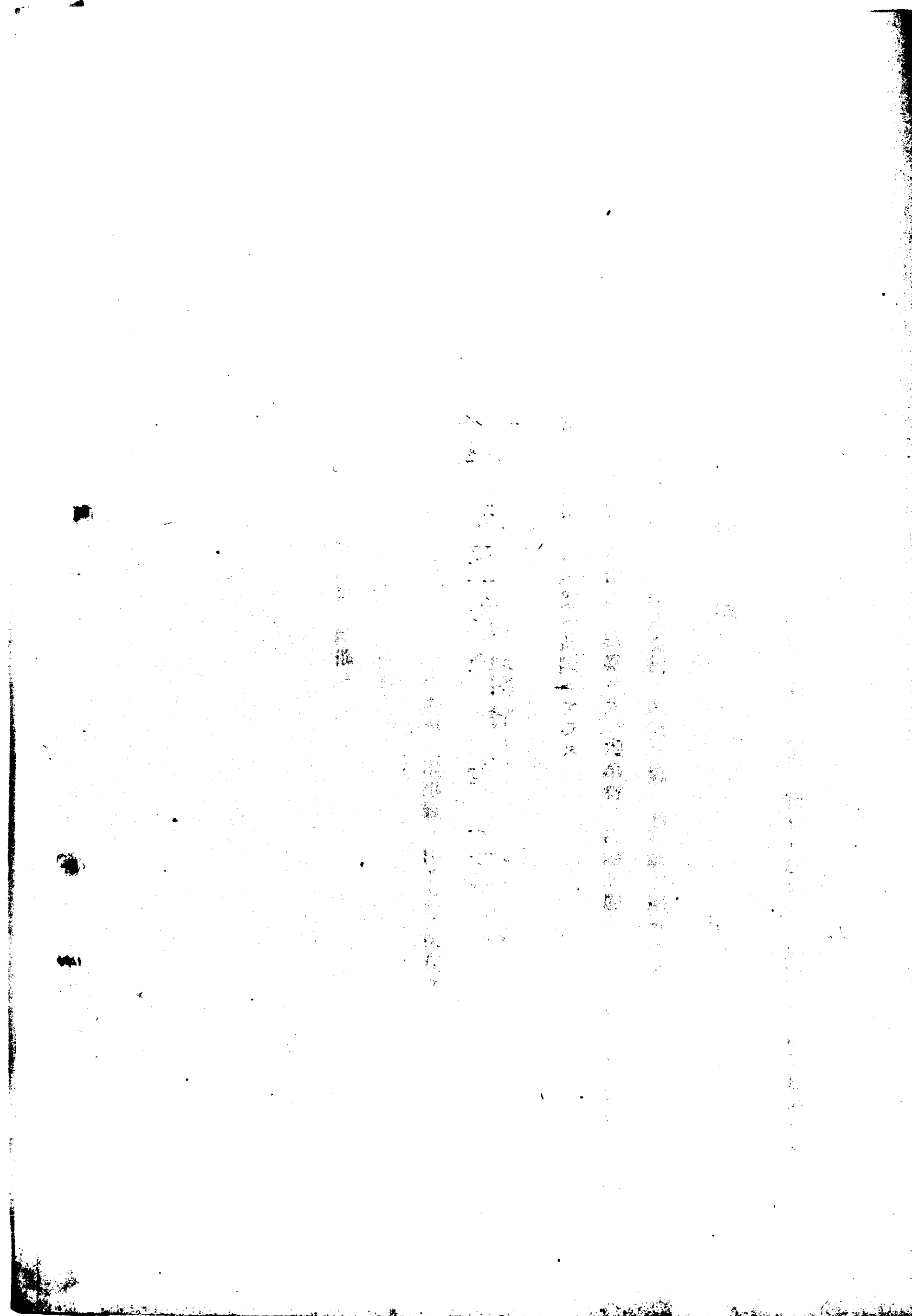
第十條 評議員、常議員、理事、監事及委員ノ名簿ヲ備ヘ其在職ヲ曉カニス

第十一條 評議員會及常議員會ニ提出スル議案ハ先ツ理事會ノ決議ヲ經ルコトヲ要ス但シ評議員常議員又ハ監事ヨリ提出スル議案ハ此限ニアラス

第四章 役員會及會員總會ノ監督ノ事

第十二條 評議員會、常議員會、及理事會ノ決議事項ハ議事録ヲ作リ之ヲ保存ス

第十三條 會員總會ハ毎年四月ニ開催スルヲ常例トス
但シ必要アル場合ハ臨時總會ヲ開催ス



財團
法人
自彊會許可書及定款

自強會設立者

東普四三八號

自強會設立者

男爵 阪谷芳郎

外 九 名

大正十五年十二月二十三日申請財團法人自強會設立ノ件民法第二十四條ニ依リ許可ス

昭和二年三月四日

文部大臣 岡田良平 印

文昭大司 岡田貞平

昭和二年三月四日

大正十五年十二月二十三日

谷 茂 淵

自置會獨立者

東普四三八號

財團法人設立許可願

本自置會ハ朝鮮同胞ノ精神上經濟上並一般社會上ニ於ケル人格及地位ヲ向上スルコトヲ目的トスルモ
ノニシテ民法第三十四條ニ該當スル財團ニ有之候條御許可被成下度寄附行爲相添此段奉願候也

大正十五年十二月二十三日

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地

東京市小石川區原町百貳拾五番地
 増田義一
 東京市小石川區原町百貳拾六番地
 永井郭
 東京市小石川區大塚坂下町四拾四番地
 清水雄
 東京市小石川區大塚坂下町百九拾八番地
 民権徳永爲光
 東京府北豊島郡巢鴨町字巢鴨千六百五拾參番地
 端立曙爽鉉
 東京府北豊島郡巢鴨町字巢鴨千五百八拾壹番地
 朴思稷

文部大臣 岡田良平殿
 閣下 立信何願

自來會寄附行爲

第一章 名稱及事務所
 第一條 本會ハ自來會ト稱ス
 第二條 本會ハ事務所ヲ東京府北豊島郡巢鴨町字巢鴨千六百五拾參番地ニ置ク

第二章 目的及事業
 第一條 本會ハ自來會ト稱ス
 第二條 本會ハ自來會ト稱ス

第三條 本會ハ自來會ト稱ス
 第四條 本會ハ自來會ト稱ス

第五條 本會ハ自來會ト稱ス
 第六條 本會ハ自來會ト稱ス

第七條 本會ハ自來會ト稱ス
 第八條 本會ハ自來會ト稱ス

二 評議員會及常務員會ニ於テ本會ノ目的ヲ達スルニ必要アリト認メタル事項

第三章 資産及會計

第五條 本會設立ノ日ニ於テ以テ資産ハ興業財產及興業財產ノ利益ニ與ルモノトシ

前項ノ資産ハ之ヲ基本財産トシ基本財産ハ興業財產及興業財產ノ利益ニ與ルモノトシ

ハ之ヲ基本財産ニ編入スルモノハ其ノ事業ニ於テ

資産ノ管理及運用ハ常務員會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 本會ノ經費ハ左ニ掲ゲタル諸收入所收ノ金ニ對シテ興業財產及興業財產ノ利益ニ與ルモノトシ

一、資産ヨリ生スル收入金

二、會費

三、寄附金 東京市立豊島區豊島町六丁目五番地番地ニ置ク

四、其他ノ收入金

第七條 本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ヨリ翌年三月三十一日ニ終ル

第八條 本會ノ豫算ハ毎會計年度開始前評議員會ノ議決ヲ經テ之ヲ定メ決算ハ其終了後評議員會ノ承認ヲ經テ會員總會ニ報告スルモノトシ

附則

第二十一條 監事第四條ノ規定ニ依リテ

第二十二條 本會ノ會員ハ左ノ三種類ニ分ケル

一、普通會員

二、維持會員

三、贊助會員

第二十條 通常會員ハ朝鮮人ニシテ年額會費ヲ納出スルモノトシ

維持會員ハ毎月五圓以上ヲ納出スルモノトシ

贊助會員ハ一時金五拾圓以上ヲ寄附シテ本會ニ對シテ

第十一條 通常會員タルストスルモノハ會員二名以上ノ推薦ヲ受テ

第十二條 通常會員會セントスル時ハ本會ニ申出ツヘシ

第十三條 通常會員ニシテ本會ノ目的ヲ達スルニ必要アリト認メタル事項

員會ノ議決ヲ經テ之ヲ除名スルモノトアルヘシ

第十四條 本會ニ對シテ必要アリト認メタル事項

第七條 附則

第三十條 本寄附行為ハ評議員及理事ハ除キ外三以上ノ賛成ヲ得且本主務官廳ノ認可ヲ受タルニテラサレハ之ヲ變更スルコトヲスルモノハ、一、理事會ハ三任ノ二ニ以テ其開會ヲ召集スルニテ

第三十一條 本寄附行為ノ施行ニ關シ必要ナル細則ハ常議員會ノ議決ヲ以テ別ニ之ヲ定ム

第三十二條 本會ハ第三條ノ目的ヲ達スルニ必要ナル財產ヲ取得スルハ、一、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得テ之ヲ解散スルモノヲ得、二、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得テ之ヲ解散スルモノヲ得

第三十三條 前條ノ場合ニ於テハ本會所屬ノ財產ハ本會ト類似ノ目的ヲ有スル公益事業ニ寄附スルモノトスルモノハ、一、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得、二、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得

第八章 附則

第三十四條 本會設立ノ際ニ於テ元自強會員タルモノハ寄附行為ニ定メタル手續ヲ要セスシテ本會ノ會員タルモノトス

第三十五條 本會設立ノ當時ニ於ケル理事ハ理事會ノ議決ヲ得テ之ヲ解散スルモノヲ得、一、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得、二、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得

第三十六條 本會設立ノ當時ニ於ケル理事ハ理事會ノ議決ヲ得テ之ヲ解散スルモノヲ得、一、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得、二、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得

自強會寄附行為施行細則

第一章 財産及會計

第一條 資産ノ増殖ヲ圖ル爲メ確實ナル有價證券ヲ買入レ又特ニ必要ノ場合ニハ不動産ノ買入ル、

第二條 有價證券及現金ハ確實ナル銀行ニ預ケ入ルコトヲ要ス但シ小拂ノ爲メ小許ノ現金ヲ保有スルコトヲ妨ケス

第三條 資産ノ管理ハ理事會ノ議決ヲ得テ之ヲ解散スルモノヲ得、一、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得、二、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得

第四條 豫算ハ毎年三月上旬、決算ハ四月上旬之ヲ作成ス

第五條 會計ニ關スル帳簿ハ完備ヲ期シ、一、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得、二、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得

第六條 會計ニ關スル帳簿ハ完備ヲ期シ、一、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得、二、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得

第七條 會計ニ關スル帳簿ハ完備ヲ期シ、一、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得、二、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得

第八條 會計ニ關スル帳簿ハ完備ヲ期シ、一、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得、二、其時ノ必要ナル財産ヲ取得スルノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ得

第九條 會員總會ハ總會ノ事務ヲ執行シ其ノ他ノ會合ノ事務ニハ關係ヲ有スヘシ

第三章 役員

第六條

第十條 評議員、常議員、理事、監事及委員ノ名簿ヲ備ヘ其在職ヲ明カニス

第十一條 評議員會及常議員會ニ提出スル議案ハ先ツ理事會ノ決議ヲ經ルコトヲ要ス但シ理事會員又ハ監事ヨリ提出スル議案ハ此限ニアラス

第四章 役員會及會員總會ノ監督、イニ監事員ノ責務トス

第十二條

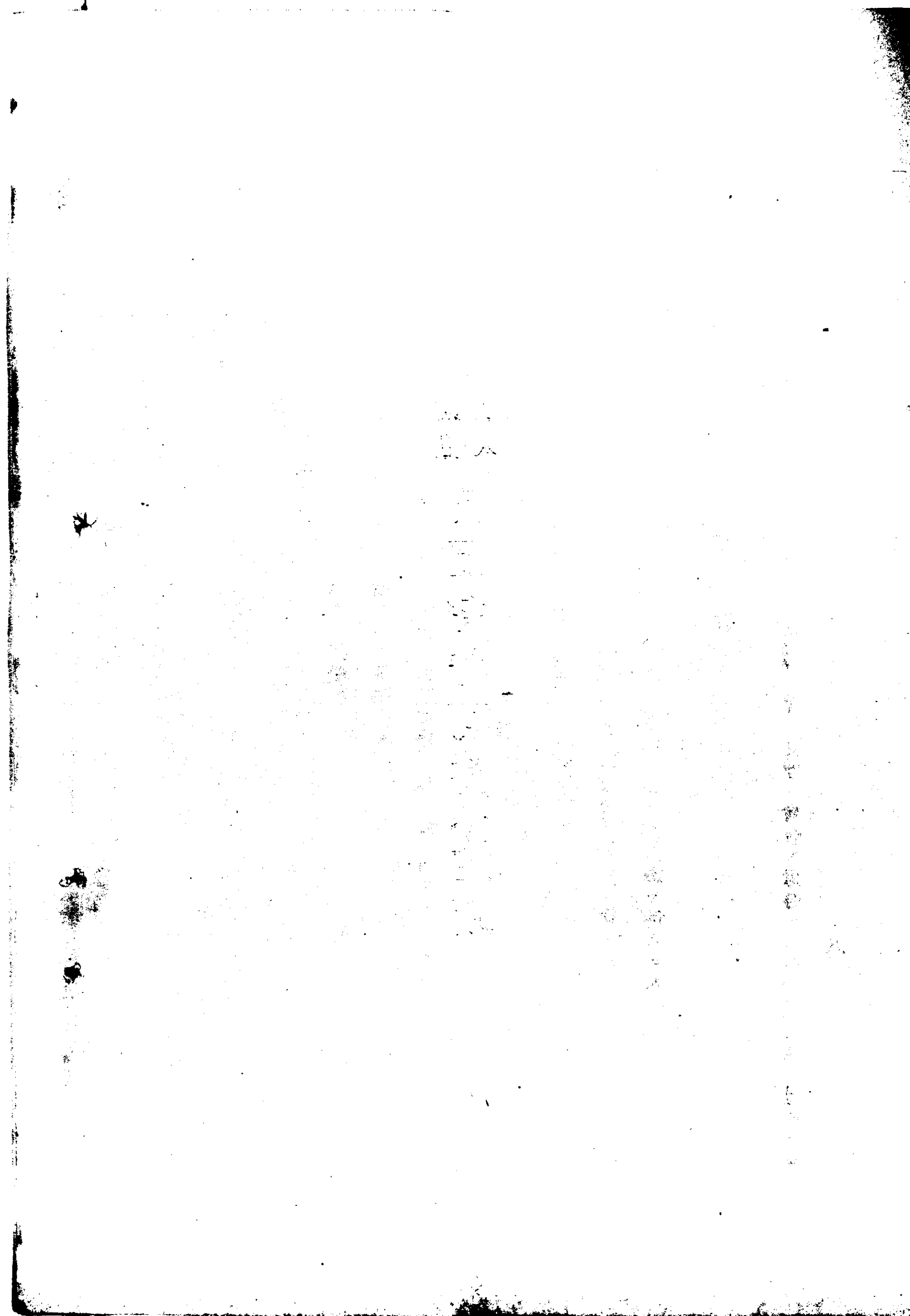
評議員會、常議員會、及理事會ノ決議事項ハ議事録ヲ作リ之ヲ保存ス

第十三條 會員總會ハ毎年四月ニ開催スルヲ常例トス

但シ必要アル場合ハ臨時總會ヲ開催ス

第一章 總則及會信

目録會務細則及會計帳限



財團
法人
自
彊
會
定
欸
(附報告書)

二年四月

自彊會經過狀況報告書

本會は各位の多大なる御後援の下に順調に進捗いたし去る三月二十八日附文部省より財團法人許可の指令に接した次第であります此際大正十四年六月以降別紙本會の財政收支狀況、會員の動靜及財團法人定款相添へ御報告申上併せて今後一層の御援助を賜り度願上ます

昭和二年四月 日

自彊會設立者

| | |
|-----------|------------|
| 男爵 阪谷 芳 郎 | 男爵 八 代 六 郎 |
| 嘉納治五郎 | 武田 秀 雄 |
| 増田 義 一 | 永 井 亨 |
| 清水 一 雄 | 徳 永 爲 次 |
| 関 爽 鉉 | 朴 思 稷 |

殿

大正十四年十一月顧問會議に於て決定せられました維持會員の申込は左の通りであります

二

(順不同)

| | | | |
|--------|----------|------|----------|
| 一、壹口 | 男爵 阪谷芳郎殿 | 一、壹口 | 男爵 八代六郎殿 |
| 一、壹口 | 嘉納治五郎殿 | 一、貳口 | 武田秀雄殿 |
| 一、貳口 | 増田義一殿 | 一、壹口 | 永井亨殿 |
| 一、貳口 | 清水一雄殿 | 一、壹口 | 男爵 平山成信殿 |
| 一、壹口 | 子爵 福岡秀猪殿 | 一、貳口 | 三好重道殿 |
| 一、壹口 | 清水釘吉殿 | 一、壹口 | 佐々木勇之助殿 |
| 一、壹口 | 鹽田泰介殿 | 一、貳口 | 松田貞治郎殿 |
| 一、壹口 | 莊田達彌殿 | 一、壹口 | 青木菊佑殿 |
| 一、壹口 | 清水揚之助殿 | 一、壹口 | 清水毅殿 |
| 一、壹口 | 清水康雄殿 | 一、壹口 | 加藤恭平殿 |
| 一、壹口 | 三輪善兵衛殿 | 一、壹口 | 矢島康次殿 |
| 計二十七口也 | | | |

大正十五年十月十三日顧問會議に於て本會を以て財團法人に設定せんことを決定し其基金として先づ一萬圓を以て當局に申請すること致し一萬圓の内六千圓は阪谷男爵殿、武田秀雄殿、増田義一殿より金二千圓宛引受け下されました。特志家の御氏名及寄附金額は左の通りであります

| | |
|-------------|-----------|
| 一金七百圓也(基本金) | 子爵 澁澤榮一殿 |
| 一金貳千圓也(基本金) | 合資會社 清水組殿 |
| 一金貳千圓也(基本金) | 増田義一殿 |
| 一金壹千圓也(基本金) | 三菱合資會社殿 |
| 一金七百圓也(基本金) | 男爵 古河虎之助殿 |
| 一金七百圓也(基本金) | 男爵 森村開作殿 |
| 一金五百圓也(基本金) | 三好重道殿 |
| 一金五百圓也(基本金) | 坂本正治殿 |

計八千百圓也

賛助金として御寄附下されました御氏名及金額は左の通りであります

| | |
|----------|--------|
| 一金五百圓也 | 服部金太郎殿 |
| 一金貳百五十圓也 | 小野英二郎殿 |

三

一金壹百五拾圓也
石井健吾殿
一金壹百圓也
渡邊治右衛門殿

計壹千圓也

屢計九千百圓也

但現在拂込金額七千圓也

收入之部

一金五、五參九、參六
大正十四年六月以前繰越金
一金壹〇、壹八九、六九
大正十四年七月ヨリ昭和二年三月迄

内 譯

イ、一金壹、六八五、〇〇
維持會費
ロ、一金 參八五、六〇
通常會員ノ會費及宿舍料
ハ、一金、壹九參、〇〇
賛助金
ニ、一金六、壹〇〇、〇〇
基金
ホ、一金 參九四、五二
利息

支出之部

一金五、貳六〇、〇〇
大正十四年七月ヨリ昭和二年三月迄

内 譯

イ、一金五、壹四五、〇〇
經常費
ロ、一金 九五、〇〇
臨時費
ハ、一金 貳〇、〇〇
事務用汁器買入

差引殘高五、貳七九、六六

大正十四年 六月以前繰越金五、五參九、參六

累計壹〇、八壹九、〇貳

會員の動靜

其中會君及洪淳福君は昨年早稻田大學の高等師範部を卒業し兩君共歸國し高等普通學校の先生になつて居りますし吳鳳彬君は東大にて史學を研究し又今年東洋大學倫理教育科を卒業し京城女子高等普通學校先生に金尙斌君は早稻田工手學校を卒業し清水組の社員に任命されました
昨年四月より李軒求、曹台元兩君を本會員中より選拔し曹君は阪谷男爵御指導の下に李君は増田義一殿の御指導の下に具男會君、趙鐘吾君、李允三君は清水一雄殿の御指導の下に何れも皆學費の御補助を戴いて居ります

姜 鉉 澤 第一高等學校 李 宗 日 第二高等學校

金 趙 金 金 劉 崔 李 趙 金 金 崔 姜 金 中 姜 具 崔 金 金 趙 廉 朴 李 李 姜 金 中 姜 具 崔 金 金 趙
庚 鐘 起 守 奎 光 正 舜 偶 有 景 桓 虎 富 榮 武 鐘 學 日 安
熙 吾 瑾 文 烈 龍 基 珪 得 敬 三 祖 元 敬 世 龍 榮 仁 俊 國

第三高等學校
日本大學倫理教育科
日本大學法科
專修大學計理科
日本獸醫專門學校
日本大學社會科
日本獸醫專門學校
電氣學校
岩倉鐵道學校
明治大學研究科
日本大學經濟科
巢鴨高等學校
正則英語學校
正則英語學校
大成中學校
早稻田實業學校
電氣學校
正則英語學校
日本大學法科
日本大學法科

李 具 金 李 曹 崔 吉 吳 洪 文 閔 李 朴 李 閔 文 洪 任 李 文 鄭 閔 李 朴 李 閔 文 洪
軒 男 炳 允 台 道 允 鳳 淳 殷 鷹 弘 萬 丙 在 東 俊 賢
求 會 淳 三 元 源 箕 一 恪 徹 基 善 默 植 坤 弼 蓮 一 在

早稻田高等學院
東洋大學文化學科
早稻田大學政經科
日本大學宗教科
準備中
日本大學經濟科
日本大學宗教科
東京鐵道學校
東京市立商業學校
日本大學社會科
日本大學法科
專修商業學校
實業學校
早稻田工手學校
巢鴨中學校
正則英語學校
東京音樂學校
早稻田工手學校
電氣學校

財團法人設立許可願

本自強會ハ朝鮮同胞ノ精福上經濟上並一般社會上ニ於ケル人格及地位ヲ向上スルコトヲ目的トスルモ
ノニシテ民法第三十四條ニ該當スル財團ニ有之候條御許可被成下度寄附行爲相添此段奉願候也
大正十五年十二月二十三日

設立者

男 爵 阪 谷 芳 郎
東京市小石川區原町百貳拾六番地
男 爵 八 代 六 郎
東京市小石川區原町百參拾壹番地
男 爵 嘉 納 治 五 郎
東京市小石川區大塚坂下町百拾四番地
武 田 秀 雄
東京市小石川區龍岡町貳百五拾四番地

東京市小石川區原町百貳拾五番地

增田義一

東京市小石川區原町百貳拾六番地

永井亨

東京市小石川區大塚坂下町四拾四番地

清水一雄

東京市小石川區大塚坂下町百九拾八番地

徳永爲次

東京府北豐島郡巢鴨町字巢鴨千六百五拾叁番地

関爽鉉

東京府北豐島郡巢鴨町字巢鴨千五百八拾壹番地

朴思稷

文部大臣 岡田良平殿

自彊會寄附行爲

第一章 名稱及事務所

第一條 本會ハ自彊會ト稱ス

第二條 本會ハ事務所ヲ東京府北豐島郡巢鴨町字巢鴨千六百五拾叁番地ニ置ク

第二章 目的及事業

第三條 本會ハ朝鮮同胞ノ自助的精神ヲ涵養シ精神上經濟上並一般社會上ニ於ケル人格及地位ヲ向上スルコトヲ以テ目的トス

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲メ左ノ事業ヲ行フ

- 一、學術優秀志操堅固ナル有望ノ青年ニシテ現ニ高等教育ヲ受ケツ、アル者又ハ之ヲ受ケントスルモノヲ會員中ヨリ選抜シテ學費ノ補給又ハ貸與ヲナス事
- 二、日々勞働ニ従事シツ、學業ニ勉ムル學生ヲ會員中ヨリ選抜シテ補助又ハ便宜ヲ與フル事
- 三、講演會及研究會ヲ開ク事
- 四、寄宿舍ヲ設クル事

五、評議員會又ハ常議員會ニ於テ本會ノ目的ヲ達スルニ必要アリト認メタル事項

第三章 資産及會計

第五條 本會設立ノ日ニ於ケル資産ハ別紙財産目錄ノ通リトス

前項ノ資産ハ之ヲ基本財産トス基本財産タルヘキコトヲ指定セル寄附金、補助金及剩餘金等ハ之ヲ基本財産ニ編入ス

資産ノ管理及運用ハ常議員會ノ議決ヲ以テ之ヲ定ム

第六條 本會ノ經費ハ左ニ掲クル諸收入ヲ以テ支辨ス

一、資産ヨリ生スル收入金

二、會 費

三、寄 附 金

四、其他ノ收入金

第七條 本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ヨリ始メ翌年三月三十一日ニ終ル

第八條 本會ノ豫算ハ每會計年度開始前評議員會ノ議決ヲ經テ之ヲ定メ決算ハ其終了後評議員會ノ承認ヲ經テ會員總會ニ報告スヘキモノトス

第四章 會 員

第九條 本會ノ會員ヲ分チテ左ノ三種トス

一、通常會員

一、維持會員

一、贊助會員

第十條 通常會員ハ朝鮮人ニシテ年額參圓ヲ齎出スルモノトス

維持會員ハ毎月五圓以上ヲ出資スルモノトス

贊助會員ハ一時金五拾圓以上ヲ寄附シタルモノトス

第十一條 通常會員タラントスルモノハ會員二名以上ノ紹介アルコトヲ要シ其諾否ハ理事會ニ於テ之ヲ決ス

第十二條 通常會員脫會セントスル時ハ本會ニ申出ツヘシ

第十三條 通常會員ニシテ本會ノ目的ニ違背シ又ハ體面ヲ汚損スルノ行爲アルト認メラル、者ハ常議員會ノ議決ヲ經テ之ヲ除名スルコトアルヘシ

第五章 役 員

第十四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一、理事 三名

二、監事 二名

三、評議員 若干名

四、常議員 若干名

第十五條 理事ハ通常會員中ヨリ監事ハ維持會員及贊助會員中ヨリ評議員會之ヲ選出ス

第十六條 理事ハ互選ヲ以テ理事長一名並常務理事二名ヲ定ム

第十七條 評議員ハ維持會員及贊助會員中ヨリ本會之ヲ囑託ス評議員ハ互選ヲ以テ評議員會長一名ヲ定ム

第十八條 常議員ハ維持會員中ヨリ本會之ヲ囑託ス

常議員ハ互選ヲ以テ常議員會長一名ヲ定ム

第十九條 役員ノ任期ハ四個年トス但シ再選ヲ妨ケス

補缺ニヨリ就任シタル役員ハ任期ヲ前任者ノ殘任期間トス

第二十條 役員ハ任期滿了スルモ後任者ノ選任ニ至ル迄其職ニアルモノトス

第二十一條 理事長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統轄ス

第二十二條 理事長事故アル時ハ豫メ定メタル順序ニ從ヒ常務理事其職ヲ代理ス

第二十三條 理事長及常務理事ハ評議員會及常議員會ノ決議ニ基キ會務ヲ處理ス

第二十四條 理事長ハ必要ニ應シ理事會ノ議決ヲ經テ委員ヲ置クコトヲ得

第六章 役員會及會員總會

第二十五條 評議員會ハ評議員會長、常議員會ハ常議員會長、理事會ハ理事長ニ於テ必要ト認メタル時之ヲ招集ス評議員三名以上又ハ監事ヨリ請求アリタル時ハ評議員會長ハ評議員會ヲ招集スルコトヲ要ス

第二十六條 評議員會ハ評議員會長、常議員會ハ常議員會長、理事會ハ理事長ヲ以テ議長トス

第二十七條 評議員會常議員會及理事會ノ決議ハ出席者ノ過半数ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナル時ハ議長之ヲ決ス

評議員會及常議員會ハ會員數ノ四分ノ一、理事會ハ三分ノ二ヲ以テ其開會定足數トス

第二十八條 理事及監事ハ評議員會及常議員會ニ出席シテ意見ヲ述フル事ヲ得

第二十九條 會員總會ハ毎年一回以上之ヲ開ク

第七章 補 則

第三十條 本寄附行為ハ評議員及理事ノ四分ノ三以上ノ同意ヲ得且ツ主務官廳ノ認可ヲ受クルニアラサレハ之ヲ變更スルコトヲ得ス

第三十一條 本寄附行為ノ施行ニ關シ必要ナル細則ハ常議員會ノ議決ヲ以テ別ニ之ヲ定ム

第三十二條 本會ハ第三條ノ目的ヲ達スルコト能ハサルニ至リタル時ハ評議員及理事ノ四分ノ三以上ノ決議ニ依リ主務官廳ノ認可ヲ經テ解散スルコトヲ得

第三十三條 前條ノ場合ニ於テハ本會所屬ノ財産ハ本會ト類似ノ目的ヲ有スル公益事業ニ寄附スルモノトス

第八章 附 則

第三十四條 本會設立ノ際ニ於テ元自彊會員タルモノハ寄附行為ニ定メタル手續ヲ要セスシテ本會ノ會員タルモノトス

第三十五條 本會設立ノ當時ニ於ケル理事ノ職務ハ設立者岡夷鉉朴思稷之ヲ行フ

自彊會寄附行為施行細則

第一章 財産及會計

第一條 資産ノ増殖ヲ圖ル爲メ確實ナル有價證券ヲ買入レ又特ニ必要ノ場合ニハ不動産ノ買入ル、コトヲ得

第二條 有價證券及現金ハ確實ナル銀行ニ預ケ入ル、コトヲ要ス但シ小拂ノ爲メ小許ノ現金ヲ保有スルコトヲ妨ケス

第三條 資産ノ管理ハ評議員會長ノ指名ニ依ル評議員ノ監督ノ下ニ理事長ノ責任トス

第四條 豫算ハ毎年三月上旬、決算ハ四月上旬之ヲ作成ス

第五條 會計ニ關スル帳簿ハ完備ヲ期シ常ニ資産ノ現状及現金ノ出納ヲ明カニスルコトヲ要ス

第二章 會 員

第六條 會費ハ毎月之ヲ徴收ス

第七條 會員住所變更ノ場合ハ之ヲ届ケ出ツルコトヲ要ス

第八條 會員ノ名簿ヲ備ヘ常ニ其移動ヲ明カニス

第九條 會員總會ノ開催ノ場合ニハ全會員ニ對シ其他ノ會合ノ場合ニハ適宜通知狀ヲ發スヘシ

第三章 役員

第十條 評議員、常議員、理事、監事及委員ノ名簿ヲ備ヘ其在職ヲ明カニス

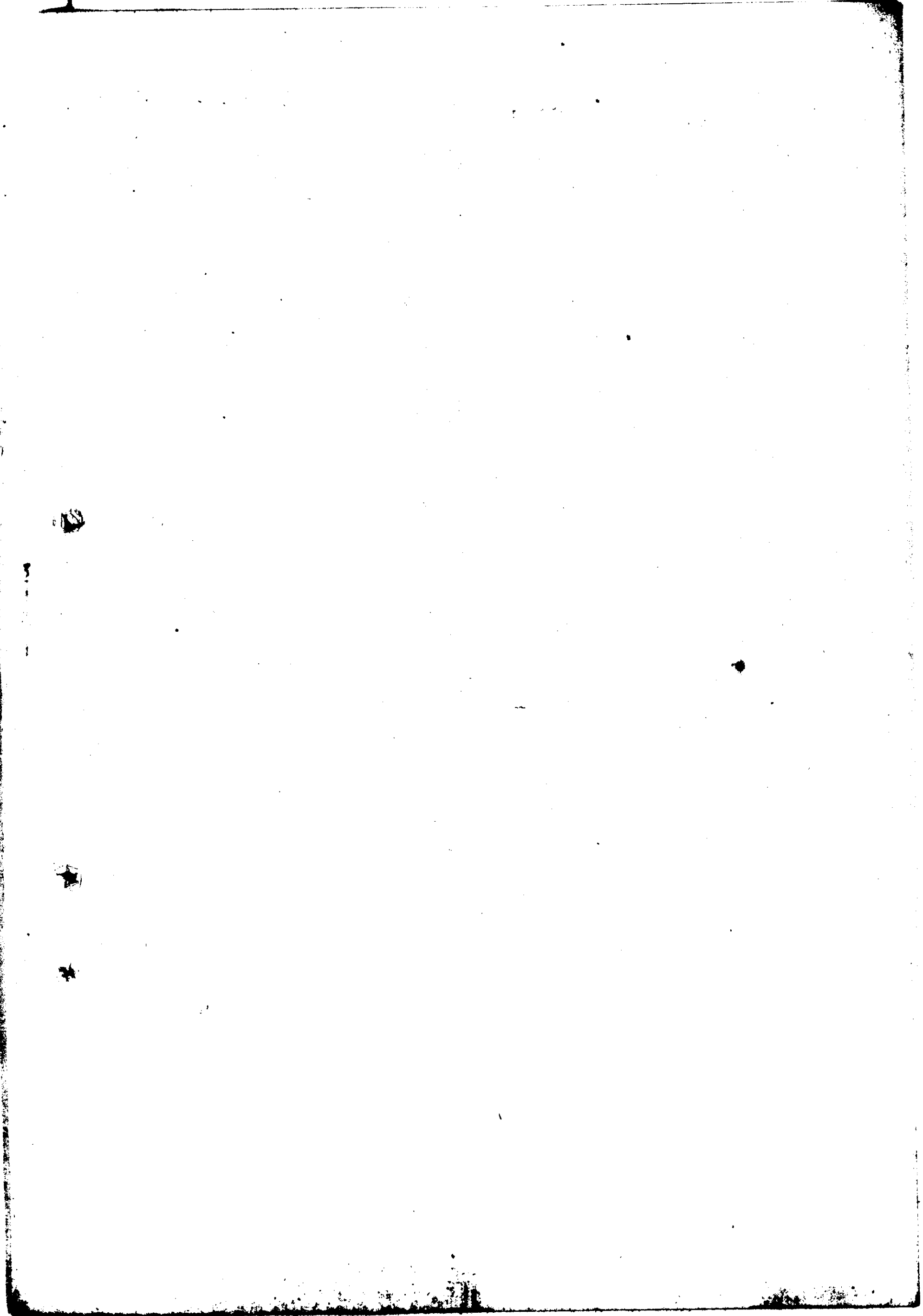
第十一條 評議員會及常議員會ニ提出スル議案ハ先ツ理事會ノ決議ヲ經ルコトヲ要ス但シ評議員常議員又ハ監事ヨリ提出スル議案ハ此限ニアラス

第四章 役員會及會員總會

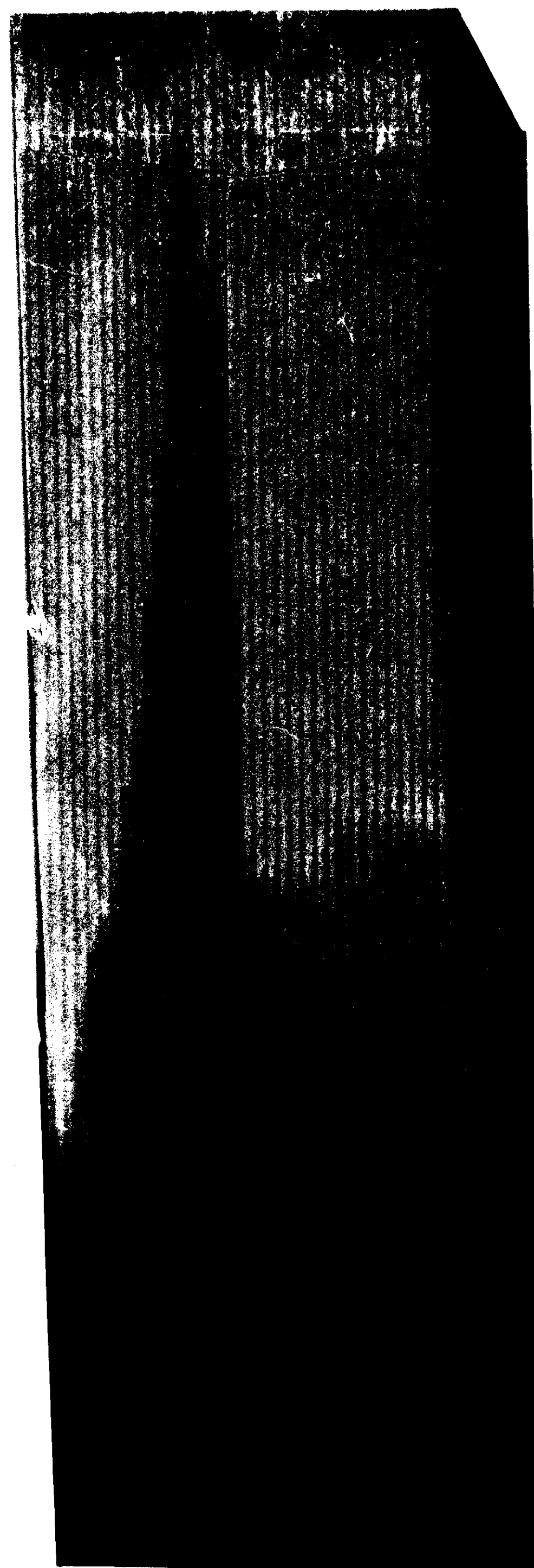
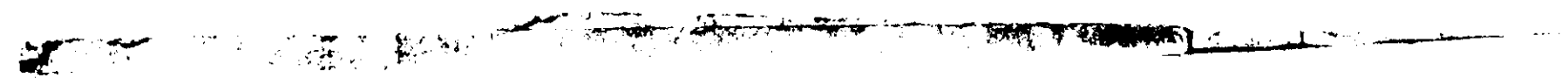
第十二條 評議員會、常議員會、及理事會ノ決議事項ハ議事録ヲ作り之ヲ保存ス

第十三條 會員總會ハ毎年四月ニ開催スルヲ常例トス

但シ必要アル場合ハ臨時總會ヲ開催ス







拜啓愈渚清穆奉賀候陳者今月六日下午午四
時より護國寺内ニ於テ本會ノ評議員ニ貴殿ヲ
渚推薦有之候能シハ渚繁務中恐縮ニ存候ハ
共何卒渚詠承被下遊石渚依頼ノ為メ得貴
意候敬具

昭和二年九月十日

財團 自彊會
評議員會長 嘉納治五郎
張章

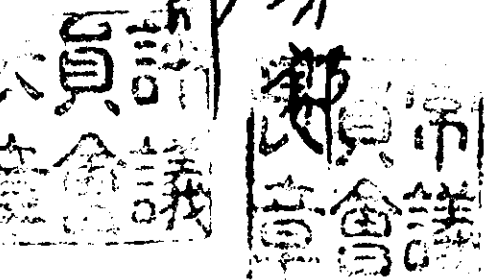
男爵阪谷芳郎殿

拜啟益郡清穆奉賀候陳者今月六日下午四時
日護國寺內ニ於テ本會、設立者及資助貧諸
氏、御出席ヲ仰ギ常議貧會及評議貧會ヲ組
織シ左、如ク役貧ヲ選舉致候ニ付左様御承知
被下度御通知申上候

昭和二年五月十日

財團自彊會

常議貧會長男爵阪谷芳郎
評議貧會長嘉納治五郎



左記

殿

理事長 関 頭 鉉
理事 朴 恩 稷
理事 趙 鍾 浩
監事 永 井 亨
監事 清 水 一 雄
常議貧會長男爵阪谷芳郎
評議貧會長嘉納治五郎

拜啓愈部清穆奉賀候陳者今月六日下午四
時ヨリ護國寺内ニ於テ本會ノ會議ス貴殿
御推薦有之候能テハ御祭務中恐縮ニ存候ハ
共何卒御詠承被下是右御依頼ノ為ノ得貴
意候散具

昭和二年五月十日

謝人自強會

常議室會長男爵阪谷芳郎

殿

修木、石井、田中、山本、鈴木、以上七月四日

自強會常務員會決議錄

本會定款第二十七條に依り昭和二年六月十二日午前九時より阪谷男爵邸に本會常務員會を開會し會長阪谷男爵 武田秀雄 鹽田泰介 増田義一 永井亨 清水一雄 大氏及理事長関勉 理事朴思縷 兩氏出席 阪谷會長開會を宣し議事に入り左記事項の報告及決議をなす

一 第一高等學校在學美經澤君 志澤敏三氏援助學生 第二高等學校在學李宗日君 武田秀雄氏援助學生を本會スコーラシツ加への件

以上 永井亨 理事報告承認

二 基本財産擴張案及維持會費増募の件

理事長関勉 鉦君より提案 基本財産擴張は後日に據り維持會費増募を急案行の件可決

尚ほ席上阪谷男爵從來加入の外に一口、鹽田泰介氏一口、清水一雄氏三口宛追加加入、武田秀雄氏も又四口引受けらる

以上

昭和二年六月十二日

財團 自強會常務員會長 岩谷芳郎 法人

自彊會常議員會決議錄

本會定款第二十條に依り昭和二年六月十二日午前九時より阪谷男爵邸に本會常議員會を開會し會長阪谷男爵 武田秀雄 鹽田泰介 増田義一 永井亨 清水一雄 六氏及理事長関勉鉉理事朴思履兩氏出席阪谷會長開會を宣し議事に入り左記事項の報告及決議をなす

一 第一高等學校在學養子齋澤三氏援助學生 第二高等學校在學養子日君武田秀雄氏援助學生を本會スコラシップ加入の件

以上 永井亨 齋澤三 報告承認

二 基本財産擴張案及維持會費増募の件
理事長関勉鉉君より提案 基本財産擴張は後日に議

り維持會費増募至急実行の件可決

尚ほ席上阪谷男爵從來加入の外に一口、鹽田泰介氏一口、清水一雄氏三口宛宛加入、武田秀雄氏も又四口引受けらる

以上

昭和二年六月十二日

財團 自彊會常議員會長男爵阪谷男爵
法人

自強會常議員會決議錄

本會定款第二十七條に依り昭和二年六月十二日午前九時より阪谷男爵邸に本會常議員會を開會し會長阪谷男爵 武田秀雄 鹽田泰介 増田義一 永井亨 清水一雄 六氏及理事長関虎鉉理事朴思縷兩氏出席阪谷會長開會を宣し議事に入り左記事項の報告及決議をなす

一 第一高等學校在學養蠶澤居志澤敬三氏援助學生 第二高等學校在學李宗日君武田秀雄氏援助學生を本會スコーラシップ加入の件

以上 永井亨博士報告承認

二 基本財産擴張案及維持會費増募の件

理事長関虎鉉君より提案 基本財産擴張は後日に據り維持會費増募至急実行の件可決

出席上阪谷男爵從來加入の外に一口、鹽田泰介氏一口、清水一雄氏三口宛追加加入、武田秀雄氏も又四口引受けらる

昭和二年六月十二日 以上

財團 自強會常議員會長男爵阪谷男爵
法人

自強會常議員會決議錄

本會定款第二十七條に依り昭和二年六月十二日午前九時より阪谷男爵邸に本會常議員會を開會し會長阪谷男爵 武田秀雄 鹽田泰介 増田義一 永井亨 清水一雄 大氏及理事長関勉鉉理事村思縷而氏出席阪谷會長開會を宣し議事に入り左記事項の報告及決議をなす

一 第一高等學校在學姜鍾澤君志澤敏三氏援助學生(第一高等學校在學李宗日君武田秀雄氏援助學生)を本會スコーラシツに加入の件

以上 永井亨博士報告承認

二 基本財産擴張案及維持會負増募の件

理事長関勉鉉君より提案 基本財産擴張は後日に據り維持會負増募至急実行の件可決

尚ほ席上阪谷男爵從來加入の外に一口、鹽田泰介氏一口、清水一雄氏三口宛追加加入、武田秀雄氏も又四口引受けらる

昭和二年六月十二日 以上

財團 自強會常議員會長男爵阪谷男爵
法人 田人

一、亭
一、亭
一、亭
一、亭
一、亭
一、亭
一、亭
一、亭
一、亭
一、亭

追加
追加
追加
追加
追加
追加
追加
追加
追加
追加

阪谷男爵
嘉納氏五郎
鹽田希介
清水釘吉
清水操之助
清水榮雄
佐々木勇之助
福澤敬三
明石照男
坂本正信
相澤像一
久半良之助

殿
殿
殿
殿
殿
殿
殿
殿
殿
殿

福園子爵は九月より維持会を脱退の
由係りて常任委員一人補缺の件とあり
あり

自強會

維持會之口板

二年七月三十一日

六月十一日會議以前之口板は元拾七口 毫日五口

追加口板

佐々木勇之助氏

毫口

明石照男氏

毫口

沼澤敏三氏

毫口

塩田孝介氏

毫口

清水氏

毫口

坂本治氏

毫口

相澤像一氏

毫口

嘉納氏

毫口

小沢拾四口也

閣下から進力進ふれなる毫口合七合計四拾口也

暑中御見舞申上候

昭和二年七月 日

法財團 自 強 會

理事長 関 爽
理事 朴 稷
理事 趙 鐘
殿 活 稷 鉉

故阪谷子爵記念事業會

戊戌

王能澤一萬二千五百元

三月十日

李宗仁二萬二千五百元

昭和六年十二月 日

財團法人 自彊會經過狀況報告書

白鹽會經通狀況報告書

謹啓時下愈々海靖勝之改奉實候陳者本會は各位の多大なる海
援助の年々に順調に進展致し居り候此際本年四月以降別紙中會の
役員推選維持會員の申込及通常會員の動靜を海報告申上げ候
令右一層の海援助を賜り度願上候

昭和二年十二月 日

法人 白鹽會

常議員會長 男爵 阪谷芳郎

評議員會長 嘉納治五郎

監事 永井 亨

全 清水一雄

理事長 関 英 敏

理事

全

朴思稷
趙鍾若

殿

本年五月六日下午四時小石川区大塚坂下所護國寺内に於て設
立者阪谷男爵、嘉納治五郎氏、永井亨博士、清水一雄氏、
鹽田恭介氏、徳永為次氏、関英敏氏、朴思稷氏、趙鍾若氏等
諸氏出席し、本會の校章を左の如く選定し、常議員及評議員
各位に夫々推選状を發送致しました。

常議員會長 男爵 阪谷 芳郎 殿

評議員會長 嘉納 治五郎 殿

監事 永井 亨 殿

全 清水 一雄 殿

理事長 関 英敏 殿

理事 朴 思稷 殿

全 趙 鍾若 殿

以上

常設員は左の通りでありませう

| | |
|---------|----------|
| 嘉納治五郎 殿 | 永井 亨 殿 |
| 武田 秀雄 殿 | 清水 一雄 殿 |
| 増田 義一 殿 | 子爵福岡秀雄 殿 |

以上

評議員は左の通りでありませう (順不同)

| | |
|----------|----------|
| 男爵阪谷芳郎 殿 | 男爵平山成信 殿 |
| 男爵八代六郎 殿 | 清水 釘吉 殿 |
| 武田 秀雄 殿 | 益田 恭介 殿 |
| 増田 義一 殿 | 莊田 達彌 殿 |
| 永井 亨 殿 | 滝永 為次 殿 |
| 清水 一雄 殿 | 三好 重道 殿 |
| 子爵福岡秀雄 殿 | 松田 貞治郎 殿 |

| | |
|----------|---------|
| 清水 楊之助 殿 | 清水 康雄 殿 |
| 三輪 善共衛 殿 | 清水 毅 殿 |
| 青木 菊雄 殿 | 石渡 敏一 殿 |
| 花岡 敏夫 殿 | 山崎 龜吉 殿 |
| 加藤 恭平 殿 | 矢島 康次 殿 |
| 石井 健吾 殿 | 明石 照男 殿 |
| 澁澤 元治 殿 | 菅原 通敬 殿 |
| 和田 嘉衛 殿 | 牧野 英一 殿 |
| 山崎 覺次郎 殿 | 山本 留次 殿 |

以上

本年六月十二日午前九時より阪谷男爵邸に於て本會常設員會
を開き會長阪谷男爵 武田秀雄 益田恭介 増田義一 永
井亨 清水一雄六氏及理事長関英鉉理事朴思稷兩氏出

席に左記事項報告及決議をいたしました

- 一、本會のスコラシップに加入したる第一高等學校並學徒選澤君の學費は選澤敬三氏が援助致し第二高等學校並學徒宗日君の學費は武田秀雄氏が援助致し事を報告す
- 二、維持會費増募實行の件を決定致しました

以上

- 本年十月十八日午前十時より武田秀雄氏邸に於て本會常議員會を開き會長阪谷男爵 嘉納治五郎 武田秀雄 鹽田恭介 永井亨 清水一雄六氏及理事長関夤鉉 理事朴思稷 趙鍾浩三氏出席したの通り報告及意見の交換がありました、
- 一、理事長関夤鉉より在米の維持會員より追加の申込及此に維持會員の申込たるもの合せて十六口増加したる事を報告せり
 - 一、永井博士より基金擴張に對する提議があり意見交換の上時期

尚早論は擧し、福岡子爵が本會維持會費を濟達したるに對し海再考を促す事は決議されました。

以上

本年六月以後維持會費の追加及申込は左の通り一口五月五円である

| | | |
|----------|---------|---|
| 一、老口(追加) | 男爵 阪谷男爵 | 殿 |
| 一、老口(追加) | 嘉納治五郎 | 殿 |
| 一、老口(追加) | 鹽田恭介 | 殿 |
| 一、老口(追加) | 佐々木男之助 | 殿 |
| 一、老口(追加) | 清水新吉 | 殿 |
| 一、老口(追加) | 清水揚之助 | 殿 |
| 一、老口(追加) | 清水康雄 | 殿 |
| 一、老口(追加) | 選澤敬三 | 殿 |
| 一、老口 | 坂本正治 | 殿 |

一武口

明石照男 殿

一老口

桐島像一 殿

一老口

久米民之助 殿

計拾大口也

通常會更動辭

典中會、吳鳳彬、金尚斌、三君は各々卒業後、且君は京城、普成高等普通學校講師に、吳君は京城、同德女子高等普通學校教務主任に、金君は清水組事務員に夫々勤めて居ります。

李新武君（早稲田高等學院）は増田義一氏の滞援助の下に、姜毅煥

君（第一高等學校）は滋澤敬三氏の滞援助の下に、李崇玉君

（第二高等學校）は武田秀雄氏の滞援助の下に、李崇玉君

（日本大學經濟學部）李允三君（日本大學宗教科）趙鍾浩

君（日本大學倫理教養科）吳男會君（東洋大學文化學科）

四人は清水一雄氏の滞援助の下に、何れも通學し成績頗る優秀であり、其の他會員中三十八名は一定の職業を世話し夫々専門學校及中等學校に通學して居ります。其の氏名及畢業校別は左の通りであります。

崔光龍 日大社會科

崔道源 日大經濟科

金煥澤 早大政經科

吳鳳一 日大法科

吉允英 日大宗教科

江貫在 日大社會科

劉奎烈 東京獸醫專門學校

鄭根明 日大法科

金起璣 日大高師法制經濟科

文東蓮 東洋音樂學校

崔英植 日大社會科

朴君實 日大政治科

金守文 專修大學計理科

文徹 日大社會科

李正基 東京獸醫專門學校

閔殷基 日大法科

崔景三 日大政治科

崔根 日大豫科

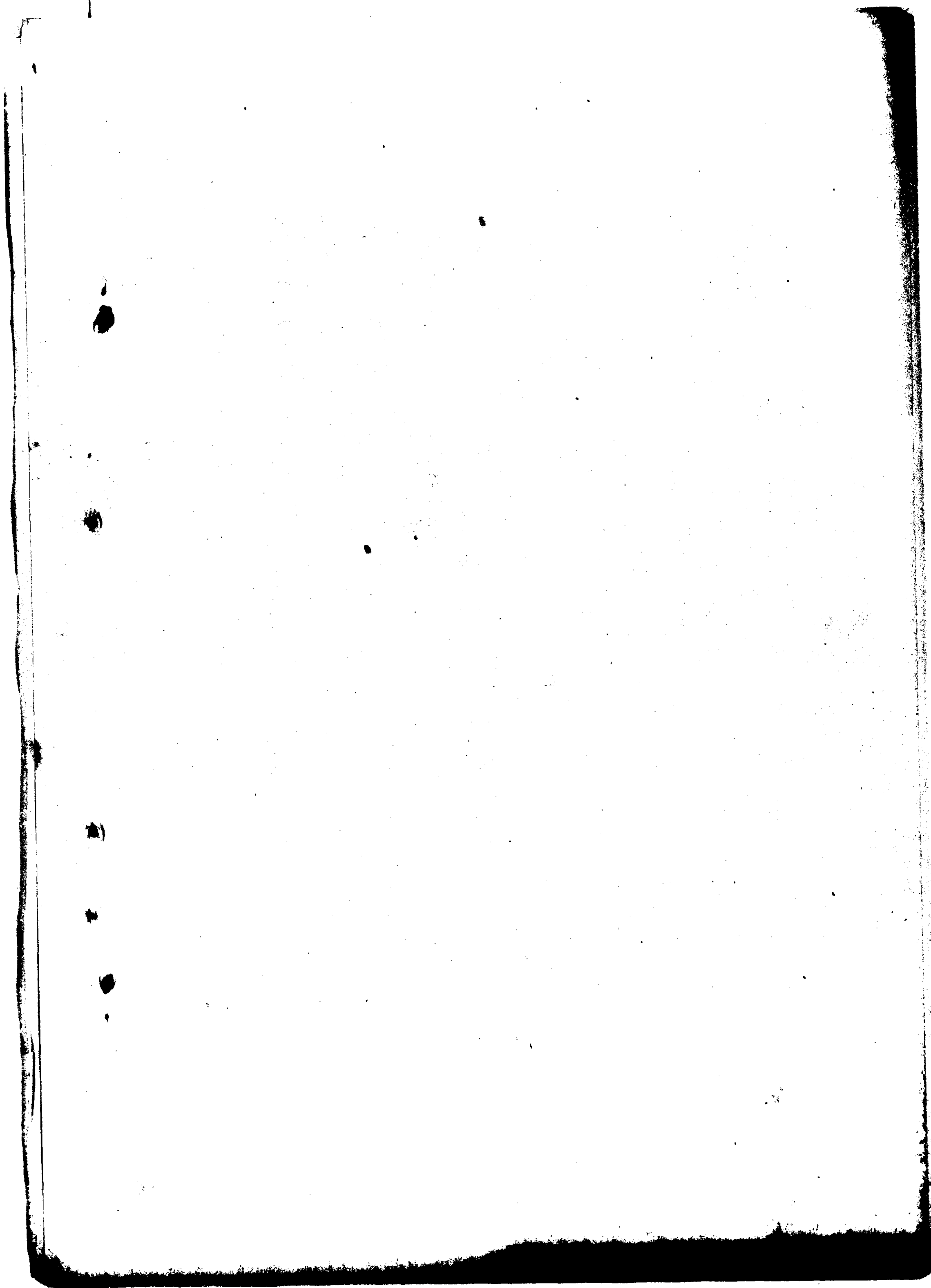
| | | | |
|-----|---------|-----|---------|
| 姜虎元 | 正則英語科 | 洪鴻煥 | 商業學校 |
| 李學仁 | 正則英語科 | 姜武龍 | 商業學校 |
| 李鍾潔 | 電機學校 | 閔丙坤 | 大成中學 |
| 金偶得 | 鐵道學校 | 李萬植 | 早稻田工手學校 |
| 李機一 | 早稻田工手學校 | 金榮世 | 日大商工學校 |
| 徐鍾柱 | 早稻田工手學校 | 張鳳瑞 | 東陽中學 |
| 蔡二龍 | 大成中學 | 崔義淳 | 正則英語科 |
| 金世默 | 研教學館數學部 | 申富敬 | 正則英語科 |
| 李賢善 | 商業學校 | 承寬河 | 日大商工學校 |
| 崔鎮極 | 早稻田商業學校 | 閔順基 | 鐵道學校 |

以上

| | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| 曹台元 | 金廷柱 | 金明昊 | 韓正浩 |
| 張漢慶 | 林昌起 | 崔石山 | 董致厚 |

| | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| 劉東慶 | 洪鴻吉 | 尹光鉉 | 李根弘 |
| 柳浩錫 | 趙泰錫 | 吉昌得 | 崔天坤 |
| 李昌麟 | | | |

以上十七名已考滿中



(三十三号)

自增会昭和三年一月十四

スエーデンに於ける中込者

李鎮天 東京帝大政理科二年生 一年間五月乃至

四十日

金南洙 山口高等学校三年生 三十日

白世哲 高専師範一年生 二十日(三年間)

李周泳 東京醫學專門學校一年生 二十日(三年間)

以上

No.

| | |
|------------------------|------------|
| 自彊會維持會員氏名(昭和四年四月二十日現在) | |
| 清水一雄氏 | 山形縣上郷郡下町四四 |
| 清水敏氏 | 佐賀 |
| 永井直氏 | 山形縣上郷郡下町三三 |
| 塩田泰介氏 | 山形縣上郷郡下町三三 |
| 清水釘吉氏 | 山形縣上郷郡下町三三 |
| 清水康雄氏 | 山形縣上郷郡下町三三 |
| 嘉納治三郎氏 | 山形縣上郷郡下町三三 |
| 平山成徳氏 | 山形縣上郷郡下町三三 |
| 清水操助氏 | 山形縣上郷郡下町三三 |
| 大島康次氏 | 山形縣上郷郡下町三三 |

東京小石川区厚町二之

阪谷男爵閣下

三ノ上目せ

日暮夕果坊

FIRST AVENUE HOTEL,
LONDON W.C.1.

故阪谷子爵記念事業會

在倫敦。小石川區。厚町二之。紹介。
又。此。社。紹介。去。李。克。魚。治。
氏。在。新。其。氏。
(封筒内あり)

李克愚博士ヲ紹介致シマス
増六伯林ニ於テ多年經濟ヲ專
攻シタ人格 麟
高柳アタル Chao
學者ナカハマス Chen
一九百二十七年九月二十五日
倫敦ニ於テ

李 克
DR. KOLU LI
魯

財團自彊會
法人
理事長 関 鉉
東京府下巢鴨町宮下一六五三

謹賀新年

癸卯
一月元旦

財團法人
自強會

理事長 閔 朴
理事 趙 崔
常務 鍾 光

光 鍾 思 爽

龍 浯 稷 鉉

故阪谷子爵記念事業會

奨學部報

第三號

昭和四年
一月三日

昭和四年二月廿七日印刷
昭和四年三月一日發行
發行所 東京府下湊橋町
角管九四
朝鮮教育會奨學部
の奨學部報は朝鮮の文字を集めたもの(品賣非)

朝鮮と澁澤子爵

白 淵 生

とし朝鮮四年の春を迎へて、恰かも
は取つて忘るべからざる人である。
史たりし澁澤さんも、今では殆んど前半
生の歴史を忘れられて了つたほど、經濟
界の人であり、事業界の人であることは
今さら申述べる迄もない。

従つて澁澤さんと朝鮮との關係も、全
く事業を通じての關係である。

澁澤さんは日本に於る銀行業の元祖で
あると同時に、朝鮮に銀行業を輸入した
第一人者である。今の第一銀行が始めて
釜山に店を出したのが明治十一年といふ
から、實に五十一年前に相當する。當時

の朝鮮に素より銀行などのあらう筈はな
く、日本人居留地にさへ、殆んど全く金
融機關の設備を缺いて居つた。此に始
り大に賞揚に値する。然し十八銀行はも
とく一地方の銀行で、其後朝鮮に於て
も段々確實の基礎を築き上げたといへ、
今も一箇の商業銀行に止まるが、第一銀
行は其後鮮内各地に多數の支店出張所を
開設して、商業的金融機關たるの任務を
盡す外に、爲替銀行ともなり、國庫銀行
ともなり、發行銀行ともなり、日本朝鮮

双方の爲めに、極めて顯著なる功績を舉
げた點から觀察して、朝鮮に於ける銀行
業の開山、即ち本當の創設者は、何んと
しても我澁澤さんを推さねばならぬ。
日賀田顧問の改革と表裏して、韓國財
政の整理に與つたこと、特に混亂紛糾
を爲したること、朝鮮國の經濟財政に
對する第一銀行の貢獻は、今爰に略する
として、私は此等表面上の功績の外に、
尙幾多の隠れたる業績を賞揚せざるを得
ぬ。

今の若い人達には想像もつかぬことで
あらうが、當時の韓國は庶政紊亂し、紀
綱地を掃ひ、就中財政の紊亂は全く頂點
に達して居つた。夫れには素よりいろい
ろの原因もあらうが、中に就て、宮中府
中の混同といふやつが一番恐しかつた。
宮中にさへ取入ればドンな事でも出来る

一切の金儲けは官中とグルになつて、利権を流る、國財を掠める、人民の權利などにはチンで無頓着に、專賣獨占の權を取る、甚しきは白銅貨幣の無茶な密造を發さへも、公々然行はれる状態であつた日本側にも朝鮮側にも唯一の銀行であつた第一銀行が、假に日露戦役前の露清銀行の様な、利權に眼のない、金で釣つて腕でメめ上げるといふ主義の金融機關であつたならば、朝鮮の經濟財政はドンナドン底に落ちたであらう。寒心の極である。幸にして朝鮮に於ける銀行の開山は露清銀行でなくて、第一銀行であつた。一切の誘惑を却けて、一步も銀行業本來の境域外に出でなかつたからこそ、當時の人民はもとより、後の財政經濟にも餘殃を及ぼさなかつた譯である。これはもとより事業上の當然の用意ではあるが、事業は即ち人なりで、第一銀行の事業の裏に、滙澤さんの人格の光を認めねばならぬ。

時局は急轉して、いよいよ統監政治の時代となつた。當時の第一銀行は殆んど完全に韓國の中央銀行であつたが、伊藤統監治世の末季に至りて、朝鮮には朝鮮だけの金融機關を特設したいといふ希望から、韓國銀行を創立することになつた。先決問題は素より第一銀行の引上(中央銀行としての)である。元來朝鮮に於ける第一銀行は、法令や條約の力ではあつたものの地位に達したものではない。謂はば國家の方から求めて第一銀行を利用したのだから、それを引込ませるといふことには、可なり無理を含んでゐる。それにも拘らず、滙澤さんは一言の難題を云はず、三十年努力の結晶をそのまゝ國家に捧げて了つた。實に立派な大國主義である。鶴の目鷹の目の財界には誠に稀有の事で、當の相手が滙澤さんなればこそ、當時の韓國銀行、即ち今の朝鮮銀行は、彼の通り安々と世の中に現はれたのである。

朝鮮に對する滙澤さんの事業上の關係は銀行に止まらぬ。米人モールの手から京仁鐵道を回收したときも、京釜鐵道の創立に當つても、滙澤さんは相當重要な役目を勤められたが、それらは凡て省略するとして、要するに、滙澤さんの如き穩當な、無理のない、經濟の爲めに道徳を無視せざる、どこまでも紳士的の實業家が朝鮮財界の草分けをされたことは日本の爲めでもあり、朝鮮の爲めにも仕合せであつた。滙澤さんは日本の滙澤さんであると同時に、朝鮮の滙澤さんでもあることを覚えて置くべきであらう。

朝鮮圖書解題(二)

六、小華外史

吳慶元著 朝鮮本六冊

高麗及朝鮮に亘り、明との交渉事實を記せり。純祖三十年始めて上木し、李太王五年再版に付す。著者吳慶元字は善餘、首陽逸民と稱す。海州の人。

朝鮮文庫の藏本は昭和二年京城に於て購入したるもの、外に朝鮮研究會の複製版二冊あり。

七、大東紀年

著者不詳 活版本一帙五冊

李太王乙巳の年(明治三十八年)英人へルベツトが朝鮮人に囑し、太祖壬申より李太王乙未に至る史實の要略を收攬し、編年體を以て纂輯せしめ、上海に於て活印したるものなり。

朝鮮文庫の藏本は昭和三年東京に於て

購入せり。

八、東國輿地勝覽

成宗命撰 活版本三冊

成宗のとき、宣城君盧思愼等をして大明一統志に倣ひて之を撰せしめ、中宗の二十五年更に李荇等に命じ増補訂正せしめたり。卷首に略圖を掲げ、京畿以下各道の沿革、風俗、廟社、陵寢、宮闕、官府、學校、土産の類、城郭、山川、樓亭驛院、橋梁の位置、名賢の事跡、詩人の題詠に至るまで編載せざるはなし。

朝鮮文庫の藏本は昭和二年東京に於て購入したるものにして、明治三十七年在京城の邦人淵上貞助氏等が覆刻したるものなり。蓋し邦人の朝鮮古書覆刻は之を以て嚆矢となす。

九、東京雜記

閔周冕補編 朝鮮本三冊

新羅千年の古都慶州の地誌なり。もと東京誌と稱したるを、顯宗己酉閔周冕之を増修刊行し、憲宗乙巳成原殿更に増補を加へ、雜記と改名して刊行せり。

第一卷は辰韓記、新羅記、慶州地界、建置沿革、風俗、山川、勝地、城郭、宮室、學校、驛院、祠廟、土産等、第二卷

朝鮮文庫增加書目

其後増加した書目の内、やゝ目ぼしい物を挙げる。

陸奥宗光遺稿(寒々錄其他) 一冊
シエークスピア研究案(遺稿) 一冊
日本經濟史二(竹越與三郎) 一冊
勞働問題講話(朝日講座) 一冊
日露戦役財政始末報告書(大藏省) 一冊

李學務局長辭任

學務局長李珍鎬氏は一月十九日付を以て依願免官となつた。李氏は始めての朝鮮人局長として總督府の樞機に參し、齋藤山梨兩總督、下岡湯淺池上三總監の下に、朝鮮の學政上、多大の貢獻をされたことは、今さら申す迄もない。

別して在内地學生に對する施設に付て李氏の盡力は永久に忘るべからざるものがある。英學部の創立も氏の時代である計畫の途中に在つて未だ實現せられざる然し結局は實現すべき諸種の案件に對して基礎工事的の苦心を盡されたことの數々、それらは他日の公表をまつとして、歴代の學務當局者の中で、氏くらゐ在内地

西郷南洲先生(徳富蘇峰) 一冊
木戸松菊先生(同上) 一冊
半峰書ばなし(薄田貞敬) 一冊
名將言行錄(岡谷繁實) 七冊
人間學(白仁武) 一冊
朝鮮書畫徵(吳世昌) 一冊
平壤全誌(同商工會議所) 一冊
殖銀十年志(同銀行) 一冊

卒業生送別會 (一月十三日美) (學部門内にて)



前列向つて右より
東京高工出身東京市建
築課員李龍在君、東大
理學士理化學研究所員
金良現君、早稻田工學
士鐵道省員李栢圭君、
服部夫人、服部部長、
麻布歌聲出身李英介君
東大農藝學部、商大張
在鳳、京大法朱祥植、
慶大理財朴章煥諸君
後列右より
高麗權奇東、李濟邦、
高工朴台錫、帝大農實
金鳳翹、商大李相基、
高工林日植、高師金鳳
錦諸君、中願幹事

地學生の事を考へてくれた人はあるまいと思ふ。
多年の懸案たる朝鮮の普通教育問題がいよいよ解決せんとするに當つて、朝鮮の學政から此人を失ふことは、洵に遺憾である。然し野に下つた李氏が、相變らず朝鮮青年の同情者たり、援助者たるべきは、吾々の堅く信じ且つ期待するところである。

女子談話會

卒業歸鮮者の送別を兼ね、一月二十七日の午後、當部假會館に開いた。東京女子高師、東京高麗、帝國女子醫專、共立女子職業、女子美術、高等音樂院などの専門學校生と二三の高女生を加へて出席者四十餘名、外に來賓楊在河氏、丸山鶴吉氏、平井三男氏、丸山傳太郎氏と、恰かも其の前日東京の京城女子高普校長高本氏も、特に繰合せて出席せられたことを感謝する。

會は服部部長の挨拶に始まつて、丸山鶴吉氏から温情を籠めた御話があり、特に内鮮關係に付て、朝鮮の人心が今何と

なく焦燥、不安の状況に在るのは、決して双方の爲めでない、御互は今少しくユツタリとおだやかな氣持を以て交りたい卒業歸鮮の人は始めて朝鮮の社會に立つに當つて、右の様な心得を以て對せられなく、又續いて在學の人も其點に相當の注意を拂はれたいと御話は、大なる感動を與へた様であつた。

次に楊在河氏は多年の在外勤務の實験から、支那、アメリカ、日本の女性を比較し、生れるなら支那の婦人に生れたいが、學ぶべきところは寧ろ日本の婦人に在りはしないか、とて留學時代の實験を詳細に語り、朝鮮學生の多數が今も寄宿舎或は下宿住をして居る關係上、日本の相當なる婦人及家庭と接近の機會を有せぬところから、學ぶべき點を適當に理解乃至發見せぬではないか、と極めて適切のお話があつた。續いて高本氏からも、久々で内地に來られた感想に付て、種々有益の御話があり、向平井氏、丸山傳太郎氏にも御話を御願ひする積りであつたが、冬の日足の短かい爲め、遺憾ながら其れから紀念の寫眞をとつて、お菓子やおすしの簡單なるもてなしの間に、

東京高等音樂院在學の安氏と、安氏の友人岡氏とのセロ・ヴァイオリン合奏、鄭氏の獨唱、續いて朝鮮レコードの蓄音機など、數時の清興を以て、めでたく打出しとなつた。女子のみの會合としては第二回であるが、今後何時々此種の集まりを催ほしたいと思つて居る。

齋藤子爵より

前總督齋藤子爵は、此頃スツカリ健康を回復せられて、極めて元氣に、悠々自適の日ごとを送つて居られる。左は老子爵からの來簡の一節。

週日は御訪ね下され候處 不在にて失禮申上候其節學部報御遣し被下拜見仕候結構の御企と奉存候坐して概況を知るを得候次第にて難有奉存候

南國通信

七高 金 容 俊

種々の方面の事を書きたいですが、受験準備の爲め、あまり暇がありませんから、極く簡単に御免蒙ります。私は北國から南へと一直線に來てから早や九ヶ年にもなります。随分長いですが、今から考へて見ると、左程長いとは感じません。それ程南國は美しい所であり

山寺の斷食修業

廣島高師 李 揆 東

十二月二十六日 兼ねての願であつた冬籠を執行すべく安藝の國温品村岩谷寺に向つて宿を出發したのは午後三時頃であつた。山の途は、麓から一時間半もかゝるので可成りエラかつた。それに寒い日とは云へ、夕陽が背中を氣持よく照らして呉れたので、寺に辿り着くまでに一汗かいた。

さて落ち着いた所は本堂から鳥渡上つた荒板造りの方丈の別廬、障子は何時張り替へたかバラバラになり、床の下、天井の邊り、板壁の隙間、四方八方から風が遠慮なく見舞つて呉れる。珍來の客とも思つたらしい。とても之ではやりきれない――汗を流した後だから尙寒かつた。寺から紙と糊を求めて障子と大きな隙間だけは太抵張つてしまつたが、相變らず風は入つて来る。それに又手が冷かつた。机一脚と蒲團を三枚もらつて来た。日が沈み、燈が點くと、風も稍々止み、氣分も落着いて来た。

九時頃外に出て深呼吸。岩上に繋ゆる松林を越えて照して来る十五夜の月は美しかつた。九時半就床、下が冷たくて何度も覺めた。とても之ではやりきれないと思つた。

十二月二十七日曇り、寒し 朝、寺方の御婆

様が火爐を持つて来て呉れた。それから又松葉を一籠運んで来て、たいて暖るやうにと親切を盡して呉れたので、全く有難かつた。之でもう助かつたと思つた。昨晚凍えた身體も漸く元氣付き、鳥肌も青い唇もスツカリ取れた。

昨日張りかけた板壁の隙を張り終へた。後暫くの散歩と讀書とで短い冬の日暮れた。夜は炬燵を御願ひした。火爐と炬燵とで寒さは少しも感じない。愉快で平和な心持になつた。然し四方をコテ／＼張つた糊がカビの生えた糊だつたので、風の吹く毎にクサイ臭ひがプーンと来るには少々弱らされた。

十二月二十九日、曇り、風烈し 目が覺める身體が冷たく、非常に寒かつた。障子を明けると地上は一夜の間に銀世界に變り、麗かな太陽がその上をキラキラと照してゐた。

十二月三十日(日) 今日で、もう四日目になる。朝晝晩三度の食事の時に鹽水を三杯づゝ飲んだ。身體は稍々衰弱を覺えて來てゐるが何でもない。元氣は少しも變りがない。自己暗示法は頗る益があることを認めた。成程之をウマクやつて熱練すると、かのクレーヤボードインやコフマンあたりが奇蹟的效果を擧げること容易に推察し得られる。こんな方面の研究は未だ全く處女地であるから、そこに鐵を入れて見ることは、難し代りに面白くものだらうと思はれる。第一現代の科

學では説明の出來兼ねる事實が眼の前に實際せられるからである。

身體自動運動法は身體の疲勞を回復し心氣を晴らすこと實に妙である。綿のやうに疲れた時分でも之によつて疲勞が癒るだけでも有難い。大人に於ける遊戲の効果も、比べものにならぬが、之に類してゐるやうに思はれる。十時頃から獨りで朝の禮拜の時間を守つた。

十二月三十一日曇り、午後雨 朝八時に目が覺めるや全身の振動を起し、又胃腸部の自己治療を一時間餘りやつた。

今日は清水を三度三杯づゝ飲むことにした水の味の佳いことと云つたら何とも云はれん程であつた。之が本當の水の味かも知れない。そして人間が餘りに贅澤な事をから、神はその眞の味を人間に知らしめぬかも知れない。午後寺に下りて暫らく話して遊んだ。本堂には客やら、信者やら、御詣りに來た人やら澤山集つて、飲んだり喰つたりしてゐる。部屋の間には御餅とか果物とかその他食物が置いてある。然しチツトも喰ひたい氣にはならなかつた。努めて喰ひたい氣持になつて見やうと試みたけれども、腹の中に何の感應も起らないのは、自分乍ら不思議であつた。一人が「あなた焼いた旨味い餅を上げやうか」と皮肉つたので一週間後には何程でも減りますと揚言した。(未完)

在内地朝鮮學生名錄

(三)

| | | | |
|-----------|-----|---------|----|
| ○高等學校(つき) | | | |
| △弘前 | 同 | 羅英兆・慶南 | 文三 |
| 文一 吳德淳・平北 | 同 | 嚴文鉉・慶南 | 理三 |
| △高知 | 同 | 閔泳南・全南 | 同 |
| 文三 金麟伊・平北 | △松江 | 玄南・慶・全南 | 文二 |
| 同 李景源・平南 | 理二 | 玄南・慶・全南 | 同 |
| 理一 李起仁・忠南 | 文一 | 朴永仁・慶南 | 同 |
| △山口 | 同 | 吳鉉文・平北 | 理二 |
| 文三 金相泳・全南 | △大阪 | 趙重九・京畿 | 同 |
| 同 李允載・京畿 | 理三 | 蔡丙錫・忠北 | 同 |
| 同 李東華・平南 | 同 | 崔炯鍊・咸南 | 文一 |
| 同 玄基永・咸北 | 同 | 安鎬烈・咸南 | 理二 |
| 同 羅英伯・慶南 | 文一 | △第六 | 同 |
| 理三 金精洙・全南 | △第六 | 趙廣河・京畿 | 同 |
| 同 李周熙・江原 | 理一 | △第五 | 同 |
| 同 金南洙・平南 | △第五 | 李忠榮・慶北 | 文三 |
| 同 陳洋根・咸南 | 文三 | 李承綱・慶北 | 理二 |
| 文三 金大煥・京畿 | 理二 | 孫亨述・慶北 | 同 |
| 理二 林克濟・平北 | 同 | △浦和 | 理三 |
| 同 朴英出・慶南 | △浦和 | 李弘植・京畿 | 理二 |
| 同 朴勝萬・京畿 | 文一 | △第四 | 同 |
| 同 洪龍植・京畿 | △第四 | 李相賢・全南 | 理一 |
| 同 姜聖宰・慶南 | 理一 | | |

| | | | |
|-----------|-----|--------|----|
| △廣島 | 文二 | 宋柱水・全北 | 文三 |
| 文三 李永植・慶北 | 同 | 李應洙・咸南 | 文二 |
| 理三 金東燮・平南 | 同 | 柳鼎圭・全北 | 同 |
| 同 田采基・全南 | 同 | 尹鍾華・忠南 | 同 |
| 文二 鄭四燮・全北 | 同 | 郭鳳麟・平南 | 理二 |
| 同 南相勲・京畿 | 同 | 康載承・平北 | 同 |
| 同 申鉉昊・黃海 | 同 | 吳泰龍・慶南 | 文一 |
| 理二 金義燮・慶北 | 理一 | 李昇求・全北 | 同 |
| 同 高在珣・全南 | 同 | 金志政・平南 | 同 |
| 同 金東燮・平南 | △第七 | 金容俊・京畿 | 理一 |
| 理三 池東浣・咸北 | 同 | 韓巖回・慶北 | 文三 |
| 同 韓雄吉・咸北 | 理二 | 趙文奎・全南 | 文三 |
| 理二 李明熙・平南 | 同 | 朴健欽・平北 | 理二 |
| 文一 下沃柱・全南 | 同 | 孫永煥・全南 | 理二 |
| 同 申炯圭・慶南 | 文一 | △富山 | 同 |
| 理一 韓熙穆・平南 | △富山 | 文東彪・京畿 | 理三 |
| 同 文一 | △第一 | 姜乾夏・咸南 | 理三 |
| △佐賀 | 理二 | 姜鉉澤・慶南 | 理二 |
| 文三 金時明・平南 | △第一 | △山形 | 同 |
| 同 吳孝根・平南 | △第一 | 林誠鎬・忠南 | 文三 |
| 文三 金東一・平南 | △第一 | 呂昌傑・咸北 | 同 |
| 理三 姜信恒・全南 | △第一 | 桂勳峻・平北 | 同 |
| 同 姜顯益・忠南 | △第一 | 白東燮・平南 | 理三 |
| 同 姜信泰・全南 | △第一 | | |

昭和五年五月廿二日 刻 南人 作

スコリーツゴ人々

拜啓 時下愈々御清勝之段奉賀候
陳者自疆會は設立以來スコラシク設ケ本會員中ヨリ最モ有望ナル者
ヲ撰拔シ學費ノ補給ヲ爲シ居リ候ニ就テハ此ノ學費ノ補給ハ本會ガ直接爲
スベキコトナルモ本會ノ基金未ダ少額ニ過ギザルヲ以テ今迄ハ本會ヲ爲ニ
御援助セラル、方々ニ學費ノ補給方御依頼申居候其ノ補給ヲ受ケツ、アル
學生氏名學校別及補給金額ハ別紙スコラシク状況報告通リニ付御一覽
被下度候
敬 具

昭和四年五月 日

財團法人自彊會

常議員會長 男爵

阪 谷 芳 郎

評議員會長

嘉 納 治 五 郎

監 事

永 井 亨

同

清 水 一

理事 長

関 爽 鉉

同 事

朴 思 稷

同

趙 鐘 語

殿

暑中御見舞申上候

昭和 卅 年 七 月 日

財團 法人 自 強 會

理事長 関 啓
理事 朴 趙
理事 趙 龍
常務委員 崔 光

殿

光 鐘 思 爽

龍 活 稷 鉉

故阪谷子爵記念事業會

157

157

小石川區原町一三六
阪谷芳郎様

昭和五年四月三日付

山崎廣太郎君在中

朴錫胤氏紹介ノ件

故阪谷子爵記念事業會

157

昭和五年四月三日

東京市麴町區有樂町一丁目一番地

(丸の内仲通三菱三號館)



京城日報社東京支局

電話丸ノ内(23)一八〇九番

阪谷 先生 宅 下

京城

崔麟

飛龍を以て守る
けしにふくむも
きしに失却に市
かしに木鋸亂
君を以て守る
日ありはまた
法科及び其
銅橋を以て
に今復日府

新橋の巻

に今復お府

内閣新内

多り中報到社

長の在任に

官民の中間に

いふ理解増進

に力の中

とい将来有

ありきこと

の最上

なるは何半

有る事なりとて

最上にて利する人

なるは何半ゆり

兄上抑指さす

の事なりとて

此後禮を先

新具

甲子

崔氏

坂下

玉下

毎日申報副社長

朴 錫 胤

甲は二十のミニハチ
諒之ニ有る
京城府太平通一丁目

毎日申報副社長

朴 錫 胤

京城府太平通一丁目

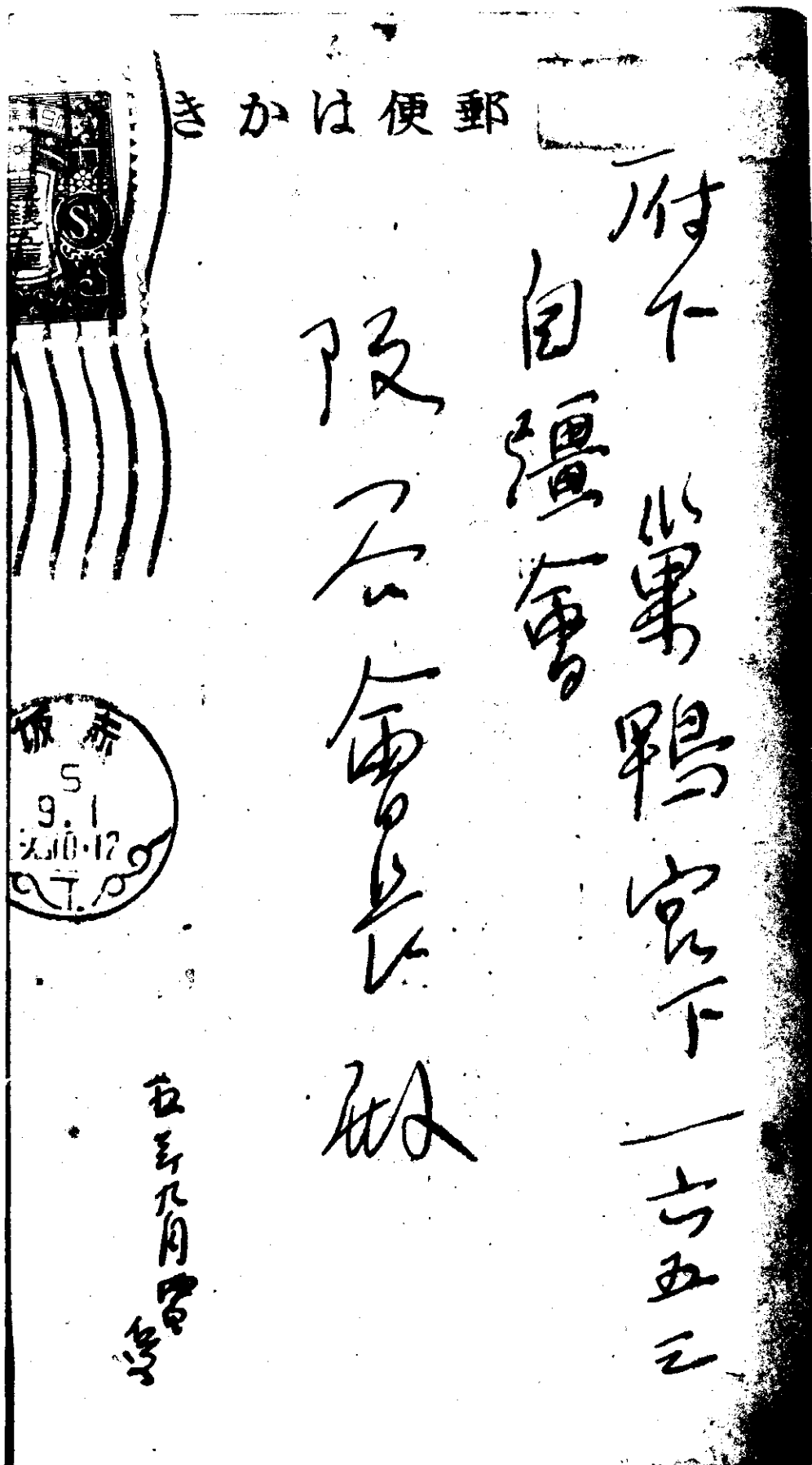
謹呈 殘暑の昨今愈々御清祥爲邦家幸賀候。陳者豫て御厚配を蒙り居り候
「昭和朝鮮協會」は御蔭様にて事業進展し其の機關誌たる「昭和之朝鮮」
十月號をば「内地在住朝鮮人間問題」として普く内地在住朝鮮人の問題を考究
する事と相成候。御承知の如く近來の社會相は愈々險惡となり殊に失業問題思想
問題等今にして内地在住朝鮮人の諸點に關して確固たる對策を樹立するに非ずんば
内鮮の將來憂心すべきものと存ぜられ候。而して此の四十萬同胞の實際狀態
を調査研究するは國策樹立の前提として緊要事と存じ敢へて此の舉を計畫致した
るにて候。就いては是等萬般の事項に關して御氣付きの點あらば何卒御示教を賜
はり度右御願申上度如斯御座候。追て本社員拜趨するやも計り難く候間其の際は
萬事御厚配願上候

昭和五年八月二十日

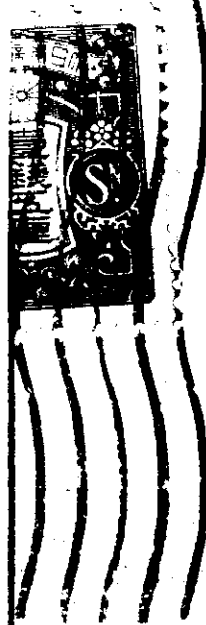
赤坂區青山南町五ノ四五

昭和之朝鮮社 小笠原省三

158.



きかは便郵



五三九四

東京市小石川区原町一三六

阪谷芳郎様

侍史



東京市小石川区原町一三六

阪谷芳郎様

東京市小石川区原町一三六

七言五言各一首

京城府黃金町三九。村山

通信為電氣保壽鐵 李宗日

中張金名

2000

お天目下其暖の候々々

市清世の候々々小生

お蔭様にて途中無事

に帰國なり近候局々

気候に在職改居り今下憚

り忠心賜けり此なり

陳者在此中は一方向ならぬ

此世改様にて相中り此に

有難く存り此なり

随分遠かりし此子窓生活

も自強金の此蔭に依

随分遠かりし學窓生活

も自彊会の清蔭に依

り無事を終了出来申し

清鴻恩に何れも感泣致

す。

今後也十分奮勵せし

自彊会の爲め微力を盡

し此様の清恩の万分之

一なりとも清報を述べ

し平極折角清自愛を遊は

さる様祈と。

先は右清孔旁清挨拶申

上た如斯清なり

敬具

冒失。

自強金の爲め徳力を盡

し皆様の偉恩の万分之

一なりとも偉報を述べ

けり極折角偉自愛遊ば

さる様祈と

先は右偉孔旁偉挨拶申

上た如斯偉なり

敬具

冒失

李宗日

阪谷芳郎様

侍史

昭和七年五月

拜啓 益々御清祥奉慶賀候陳者本會日我
毎々不一方御援助ヲ蒙リ居候 御蔭ヲ以テ益々堅
實發達致候段洵ニ有難ク奉感謝候初去五月
十日評議員會ニ於テ別紙ノ通り決議事項ニ付
大御承認御決議ヲ蒙リ候間此段御報告仕候

昭和七年五月二十日

敬具

殿

| | | | | |
|-----|-----|-----|-----|------|
| 理事 | 理事 | 理事 | 理事 | 財團法人 |
| 崔光龍 | 金道賢 | 李榮三 | 岡頭鉉 | 白根會 |

評議員會議事録

本會定例第八條に依り昭和七年五月廿四日午前十一時、橋本館に於て本會評議員會議を開き、會長嘉納治五郎、評議員永井亨、増田義一、清水一雄、鹽田兼吉、三民、理事森本兼吉、佐々木龍、西田出席、上坂金方郎、武田秀雄、清水新吉、明石照男、加藤泰平、寺重道、松田重治郎、和田嘉治、青木菊雄、清水原雄、矢島康次、山崎龜吉、石渡敏一、牧野英一、諸氏、各位狀を以て開會定章に達せられ、以て嘉納會長開會宣言、議事に入り、左記事項を討論可なり

一、本會昭和六年四月日算、今七年五月日迄、決算報告書、理事森本兼吉氏より、理事長関勉、鉦氏、森本氏、付々、提出せし、理事清水一雄氏より、右年度決算、錯謬多き事を説明し、満場異議、議決、承認

一、理事清水一雄氏より、昨年度剰余金中より、金貳千五百四十八圓三錢七、才其、本金に編入スルコトヲ提議し、満場異議、議決、承認

一、理事永井亨氏より、本年度に於て新々、金南洲君、東京市大農学部

二年、張甲特君、東京市大農学部二年、崔三南君、東京市大農学部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

三年、金南洲君、白本大学法律部三年、崔應錫君、白本大学法律部

新日本建設を努む

日韓併合の

御聖旨を奉戴して

吾人は大局に處じて同種族

の相互親睦する雅量のない行

ひと個別的觀念を恒に非に

國家的思想を排撃して國家

社會の健全なる隆昌を各個人

の生活の安固を確保せんが爲

に幾十年間時勢の要求に

従ひ内鮮協力の徹底

に盡す現今に至りてその業

蹟を顧みるにその間特筆すべ

きもの多くも唯赤練々に申せ

ば朝鮮人の特殊事情より鑑み

て甚だ潜微なるも内地人が一

般的にも少し優越感を制

し雅量を以て進まん事を切

望する顧て朝鮮同胞も日韓併

合の大精神に基いて共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

の眞實より決して共存共榮

べきものなきにあらざるも何

且つ當面の緊急問題として朝

鮮同胞の經濟的窮乏は全く果

その餘も再運動の氣運が尙濃

厚である云ふ之の事實より

祭して行刑の意義と實効が

の福樂と安逸を貪り異民族の

與へられたる生存權までを奪

しひいては地上より淘汰せ

しめて歡聲に喝酔し或は是の

の無窮無限なる神祕と共に

の起伏を物語つてゐる猶太

人はローアの暴政

に虐げられイスマエル人

は埃及人に鞭たれ而して

とが原因としてその向上心を激

化せしめて非國家的に反映

しめたものと云ふべきものな

る故に又爲政者は此事象を認

實に究明して其缺陷を補ひ彼

等に生活の安固を得せしめ大

日本國民として世界に

を躍せしむる雅量

を持すべきである即ち是

が日韓合邦の聖旨に順ふ所以

であると同時に朝鮮統治の理

想も究竟此に存すべく新日本

建設の妙諦と信ずるものであ

る。

人類社會には常に強弱の對

象があつて洋の東西を問はず

張祥塔

大陸經營上蕭牆の禍

參政權を附與せよ

朝鮮民心の乖離は畢竟

新附朝鮮同胞に

參政權を附與せよ

朝鮮民心の乖離は畢竟

新附朝鮮同胞に

參政權を附與せよ

朝鮮民心の乖離は畢竟

新附朝鮮同胞に

參政權を附與せよ

者にその責を問はんと

合の糾紛は生活の基礎を

同じくするものは常固な

融和を以てその存在

を計りたりと其の存在

を計りたりと其の存在

を計りたりと其の存在

を計りたりと其の存在

を計りたりと其の存在

人類社會には常に強弱の對

象があつて洋の東西を問はず

張祥塔

大陸經營上蕭牆の禍

參政權を附與せよ

朝鮮民心の乖離は畢竟

新附朝鮮同胞に

參政權を附與せよ

朝鮮民心の乖離は畢竟

にあらざる

國民的國

家となり

對等結合して統治の基調を一

視同仁の大義におかれ

たる事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

難の事も明瞭である今や苦

故阪谷子爵記念事業會

拜啓益々御清祥奉賀候

陳者來ル 四月三日 午後一時 於テ

本會常議員會及評議員會ヲ相開候間御臨席被成下度此段

御案内申上候 敬具

昭和九年四月三日 東京市豊島區巢鴨七丁目六五三番地

東京府下巢鴨町第十一木五三番地

財團法人自彊會

常議員會長 男爵 阪谷芳郎

評議員會長 嘉納治五郎

殿

関 夷 鉉

曹 台 元

府下集鴨町宮下一六五三

(十五)

五月十五日

五月十五日

五月十五日

五月十五日

五月十五日

五月十五日

五月十五日

五月十五日

元

阪谷

帛書閣下

東台元叔勝書及年家書
五

将事に就任す。四月一日國に歸り、五月九日國來り、
 冬に二指無誤算又作人歟と傳解す云々。
 二十四日十月より翌年元午、不在年未定、河原法
 算より一兩四匁に傳中給うと云々。
 二十五年月初旬堂をえい武田公祐知、後々

二、三月間、十石、買金元金、不存年、再定、所懸法、
養方、一、四月半、備中、給うと云々云々
二月五月初旬、雲金元、武田、御補加、後、

二月五月初旬雲云
武田氏秘知、後々

重きモノヲメ毎月二十五圓金ノ手帳より借本
 金ニ補助スモハハは解融知ルメモヤト云
 金ノ減ミノ一ナリ 但向一ノ年トス 同人一為ミ
 ノ子ノ云ハ人ニテ五月ノ内ハ十八日金取高
 小遣一圓雜費ナリ

大正十年五月廿四日 初六

金十萬 五百萬 萬壽無疆 萬壽無疆

正清堂

[illegible]

卷之五

十月十六日(九月) 同

市立第一圖書館 (1927)

[illegible]

本籍 朝鮮慶尙道寧郡靈山面勢里四三番
現住 東京市外中野町中野三三九高橋方
戸主 曹漢琪ノ二男

户主曹漢琪二男

曹台元

明治三十九年九月九日生

學業

一大正六年四月 慶南靈山公立普通學校第一學年入學
同十年三月 同校卒業
一大正十年四月 大邱高等普通學校第一學年入學
同十五年三月 同校全科終了

業勢

一ナシ

賞 罰

一 大正九年三月模範生徒故ヲ以テ慶尚南道知事ヨリ
書籍一冊ヲ授ケラレ褒彰セラル

有之通達無之候也

大正十五年五月二日

右
曹 台 元

本館蔵書
朝鮮總督府
大正十五年五月二日

東京市小石川区原出二六
男爵阪谷芳郎閣下

芳名見 件
市寄史

故阪谷子爵記念事業會

北海道大學農學部
九月十七日
農林局長 渡邊 忍

朝鮮總督府農林局

渡邊 忍

九月十七日

164

164

種彦村六矢君の所
愈々清安に被為候
此れ奉慶賀候

陸奥豫向今井田総五

へ市依頼有主候北海道

帝大畜産學科卒業

の曹台元君身上に關し

は特に總通より申聞

けの次第も有之且特に

同より申す書義にも

了は特に總通より申上

けり次第にも有之且特に

閣下より申上書の儀にも

此へは極力実現方手

配載存続も時期相

各方面共思はしかりず

殊に因君は本年五月

慶為南道郡産業技手

に採用内定つところ本人

の都合により実現と見ざ

りしやうの事実も有之

彼是延引今日迄ひ

所々候やうの實情にして

彼は延期今日に迄

序の候やうの實情にして

其の後他方面に更上手

配中に有之目下のところ

確定的には申進め難い

然る共此處一二月中には

何れも貴意に副い得る

稀致の度と存し序

此間何年大事情中

合弁の上今暫く市獨

豫り下度中即中上程

先は延期なりし寸扶案

世間何年大事情中

官升上今暫中獨

豫下度中上我

先延利如寸按案

情中報告中上度

如斯市度在

敬具

七月

渡邊 忍

畠田芳郎閣下

故阪谷子爵記念事業會

拜啓益々御清祥奉賀候

陳者來ル五月十四日午前十時 永橋巨寶町二番地 二於テ

本會常議員會及評議員會ヲ相開候間御臨席被成下度此段

御案内申上候 敬具

昭和十一年五月八日

東京市豊島區東目黒六五三番地
財團法人自彊會

常議員會長 男爵 阪谷芳郎

評議員會長 嘉納治五郎

評議員會長 嘉納治五郎

殿

會議ノ目的、ル事項

第一、
第二、

昭和十年度(自昭和十一年一月一日起至昭和十一年三月三十一日)事業報告書、決算報告書
並ニ昭和十一年度(自昭和十一年四月一日起至昭和十一年六月三十日)豫算承認ノ件
給費學生選拔ノ件

通而當日御缺席ノ方ハ、乍御手數別紙委任狀ニ御
記名御調印ノ上當日迄ニ自體會ニ到達スル様御
通達被下成度候

常議員及評議員氏名 (順不同)

常議員

常議員會長

阪谷芳雄

青島員

嘉納治五郎

武田秀雄

增田善一

永井亨

清水一岐

評議員

評議員會長

嘉納治五郎

評議員

阪谷芳雄

武田秀雄

增田善一

永井亨

清水一岐

德永島次

清水釘吉

森田泰介

莊田連勝

清水橋之助

清水康雄

森田泰介

三好重遠

松田貞治郎

青木菊雄

清水康雄

五渡敏一

花岡敏夫

山崎重雄

大島康次

明石照男

菅原通敬

和田嘉衛

牧野英一

山崎重雄

石井健吾

岡百世

東京市力石川区原町三丁目
阿谷芳郎殿
自鑑會 現展



故阪谷子爵記念事業會

大邱公立高等普通學校長 小林 致 哲

為校長身者 檢印ニ付 感謝状

昭和十年五月廿九日



166

166

南唐印本快金

中法猶有金印

碑より印鑑字にみる

體令に體に解人子

向上る深き印鑑

に鑑するものあり

御印鑑の如く

解人反音に鑑する

より板多し印鑑

表裏にみるに

一、秋多、秋意

表、河内、河内、河内

本、秋、秋、秋、秋

河、河、河、河、河

多、大、市、市、市

今、日、六、新、本、年、が

市、市、市、市、市

上、市、市、市、市

市、市、市、市、市

上、市、市、市、市

市、市、市、市、市

市、市、市、市、市

上其百安甲指寺

賜以良師教之

念以書中牛此後

市孩移之寺上野

(十年)

書中

少林反獲

自羅會活識考

限谷芳郎閣下

拜啓愈々御清勝の段大賀此事に奉存候

陳者城南上目黒に去昭和五年秋以來小やか乍らも教場を設け朝鮮人労働者及其子弟の教化に努め居り候光明學園は不肖私共微力を不顧經營仕居候ものに有之私共は夫々定職を有し其の勤務の餘暇を以て此事に當り居り從て其の事業は素より微々たるものに御座候へ共眞摯着實を本旨として歩一步堅實の途を辿り度專念罷在候而して之が爲一般の御方々へ金錢的補助等の御迷惑は成るべく相掛けず私共生活の一部を犠牲にして困難を凌ぎ來りたるものに御座候就ては帝都の一隅に斯様の者等が斯様の仕事を致し居る事を御承知置願度と存じ本學園の概況及抱負の一端を印刷し御送り申上候間御高覽被下度尙幸に思召に叶ひ候はゞ向後御差支無き限り御指導賜り度奉願上候併し夫の爲に決して御無理を相願ふ等の事は不仕候へば御含置被下度候

敬 具

昭和十年 八月 廿日

光明學園

李 能 浩 (東京市公吏)

李 康 傳 (鐵道省官吏)

西村 謙 吾

具

具

$$\frac{14}{12}$$

下等、中、上

白雲(卷五)

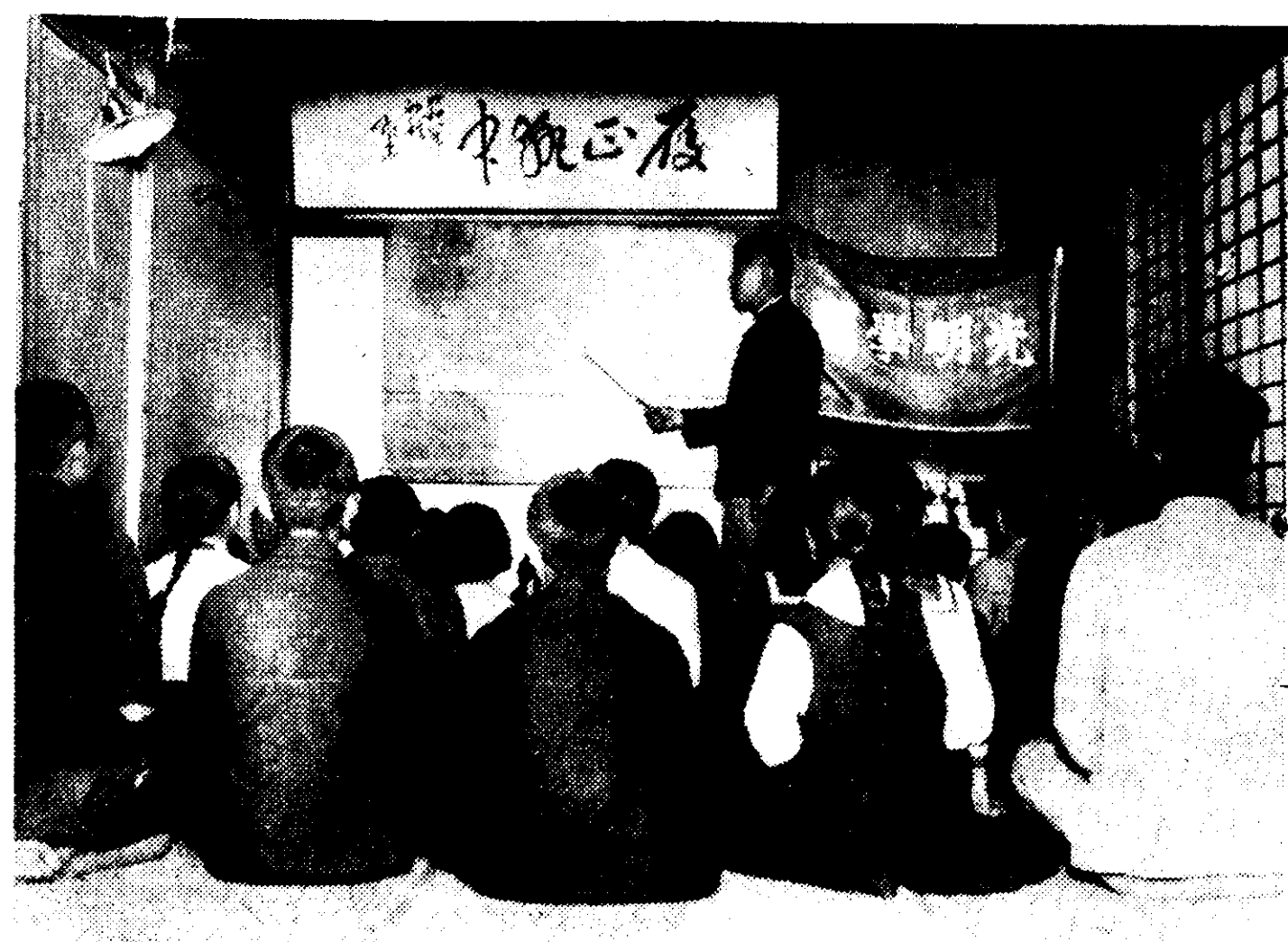
附現狀及將來ノ計畫

鮮人在京者中國館者叔濟又敘育事畢

昭和十一年八月十一日



入學式の記念写真



授 業 中

光明學園設立趣意書

日

韓併合後年ヲ閱スルコト既ニ二十五星霜古來本土ノ修交最モ緊密ナルモノアリシ兩民族ハ今ヤ全ク渾然一體トナリテ共存共榮ノ實ヲ舉ゲツ、アルハ之レ偏ヘニ聖代ノ惠澤ニ依ルトコロト言ハザルベカラズ、而シテ彼我ノ交通益々頻繁ヲ加フルニ從ヒ兩者間ニ存スル思想的乃至經濟的溝渠ハ漸次除去セラレテ相互理解融合親睦ノ度倍々濃厚ヲ加フルニ至レリ然ルニ教育程度比較的低キ鮮人勞働者ノ中ニハ往々ニシテ未ダ民族的偏見ニ捉ハレ、或ハ爲ニスル外部ノ煽動ニ乗ゼラルル如キ者ヲ見聞スルハ邦家ノ爲メ甚ダ遺憾ニ堪ヘザル所ナリトス茲ニ我等有志相計リ光明學園ヲ設立シ在京朝鮮人勞働者並未就學兒童ニ普通教育ヲ施シ心身ノ修養ト常識ノ啓發ヲ圖リ以テ善導薰育ノ機關タラシメントス

庶クハ本事業ノ趣旨ニ賛同セラレ何分ノ御援助ヲ賜ハラシコトヲ

昭和五年九月

發起人

西村謙吾
李能浩
李康僖

光明學園概況

(至昭和五年十月一日)
(自同十年三月三十一日現在)

二

- 一、名 稱 光明學園
- 一、所 在 地 東京市目黒區上目黒八丁目三八八
- 一、創 立 昭和五年十月一日
- 一、沿革ノ概要

昭和五年九月目黒町立職業紹介所ノ創設サルヤ時ノ所長西村謙吾氏ノ後援ノ下ニ朝鮮人登錄労働者ト其ノ家庭ニアル子弟ノ爲ニ同町居住ノ李能浩氏ガ卒先發企人トナリ下目黒一丁目七七番地ノ自宅階下ノ二室ヲ割キ夜間及休日ヲ利用シテ専ラ個人の教化指導ノ任ニ膺リ星霜五ケ年有ニル困難ニ堪ヘ者力行之努メ著々トシテ實績ヲ擧ゲ以テ今日ニ至レリ

- 一、代表者氏名 李能浩
- 一、創立以來ノ後援者 鎌田榮吉 宮尾舜治 中島司 安井誠一郎 李謙聖
- 一、講 師 神山銳五郎 西村謙吾 磯村英一 緒方惟一郎 狩野擴三
- 一、講 師 李康僖 千葉胤次 李康僖 李能浩 李馬致

一、事業成績

(昭和十年三月三十一日現在)

一、開園以來ノ就學者年次表

| 年次 | 就學者別 | 未就學兒童 | 國語ニ通ゼサル労働者 | 計 |
|--------|------|-------|------------|-----|
| 昭和五、六年 | | 一九 | 二〇 | 三九 |
| 同 七 年 | | 二二 | 一九 | 四〇 |
| 同 八 年 | | 一九 | 二二 | 四〇 |
| 同 九 年 | | 二六 | 一七 | 四三 |
| 同 十 年 | | 三〇 | 一六 | 四六 |
| 計 | | 一一五 | 九三 | 二〇八 |

備考、就學者ハ凡テ男子ニシテ女子ハ當分入園ヲ許サズ

開園以來ノ諸經費年次算概算

| 年次 | 費目 | 室 代 | 電燈料 | 炭 代 | 備品 | 教 具 | 白黒、鉛筆、紙、筆記帳 | 計 |
|--------|----|-------|------|--------|-------|-------|-------------|---|
| 昭和五、六年 | | 一五〇〇〇 | 一五〇〇 | 一一、〇〇〇 | 五、八〇〇 | 九、〇〇〇 | 一九一、八〇〇 | |
| 同 七 年 | | 二二〇〇〇 | 一五〇〇 | 一一、〇〇〇 | 三、〇〇〇 | 七、二〇〇 | 一五七、二〇〇 | |
| 同 八 年 | | 二二〇〇〇 | 一五〇〇 | 一一、〇〇〇 | 三、〇〇〇 | 七、二〇〇 | 一五七、二〇〇 | |

三

| | | | | | | | |
|---|----|--------|-------|-------|-------|-------|--------|
| 同 | 九年 | 二二〇、〇〇 | 一八、〇〇 | 二二、〇〇 | 四〇〇 | 七、二〇 | 一六一、二〇 |
| 同 | 十年 | 三〇、〇〇 | 四、五〇 | 六、〇〇 | 五、〇〇 | 一、八〇 | 四七、三〇 |
| 計 | | 五四〇、〇〇 | 六七、五〇 | 五四、〇〇 | 二〇、八〇 | 三三、四〇 | 七一四、七〇 |

備考、昭和五、六年ハ十五ヶ月、昭和十年ハ三ヶ月ノ經費ヲ計上シタリ
 尚々以上ノ諸經費ハ毎年凡テ創立者及後援者ノ義金ニテ支辨シ講師ノ謝儀、交通費共一切講師ノ特志
 ニ俟テ就學者ヨリハ開園以來所定ノ月謝ヲ免除シ來レリ

二、學園ノ現況

「開園以來ノ就學者年次表」ニ於テ其ノ概況ヲ記述シタル如ク未就學兒童ノ入園希望者ハ逐年増加ノ實狀ニアリ
 且ツ未就學兒童ト何等異ラザル無知ノ労働者ニシテ向學心ニ燃ユル篤志ノ入園希望者アルモ之亦先入者ノ退園ヲ
 好マザル實狀ヨリ當分新入交代制ヲ採ラズ從來ノ儘トナシ居レリ
 次ニ一日平均ノ出席數ヲ見ルニ昨年以來平均三十二名ノ多キニ達シ就學者及父兄ノ學園ニ對スル信頼ノ度ハ年
 ト共ニ倍加シツツアル現況ナリ
 設備ノ點ニ於テハ遺憾ナガラ依然トシテ開園當時ト異ナル所ナク一枚ノ黑板、一兩ノテヨーク、一個ノ黑板拭
 トイフ誠ニ簡素ナル設備ナルモ昨年六月二十日現在ノ場所ニ移轉後ハ六疊、三疊、二疊ノ三室ヲ通シテ從來ヨリ
 ハ三疊ダケ多クノ廣サヲ探リ電燈一個ヲ増シテ照明ニ便シタリ
 就學者ノ生活狀態ハ之亦依然トシテ慘苦ヲ極メ平素ニ於テ入浴等ハ勿論一日二食ノ食事ニサヘ差支フル者ヲ見
 受クル狀態ニテ月謝等ハ到底納入ヲ強ヒ得ザル現狀ニアリ開園以來今日ニ至リモ未ダ無月謝ノ儘ニナシ居ル實狀

ナリ

三、將來ノ計畫

(第一案)

- 1、入園希望者ノ増加ニ伴フ收容數ノ増加
 二部制トシ隔日教授ニ改メ收容數ヲ六十名迄トス
- 2、教室ヲ擴張スルコト
 八疊間二室トシ一室ニ付十五名迄ヲ容ルルコト
- 3、教具ノ備付
 生徒用長机十脚(座席用) 教師用卓、椅子、各二脚宛
 壁板二枚 教科書貸與ヲ必要トルス數ダケ
- 4、月謝、當分免除ノ方法ヲ講ズルコトトス
 1、園舎ノ新設 (別紙設計圖ノ通り)
 教室、二 作業室、一 物置、一 便所、一
 2、附設ヲ要スルモノ
 浴室、一 宿泊室、二 (八疊押入付) 食堂、一 炊事室、一
 3、學園基金及維持費ノ造成

(第二案)

四、參考書類

- 1、光明學園定款
- 2、學則
- 3、登録者労働者ノ生活（西村氏調査）朝鮮登録労働者ニ關スル分
- 4、旗章ノ設定、昭和十年四月六日滿洲國皇帝陛下ノ御來朝ヲ記念シ奉迎ノ誠意ヲ表彰シテ謹シテ國旗ヲ設定ス

光明學園學則

- 第一條 創立ノ趣旨及目的 本校ハ時代ノ進運ニ伴ヒ一定ノ普通教育ヲ受ケザル在京朝鮮人労働者ニ最モ必要ナル國語ノ教授ニ依リ兩民族ノ意思ノ疏通ヲ計ルト共ニ心身ノ修養常識ノ啓發ニ依リ健全ナル國民ヲ養成スルヲ目的トス
- 第二條 場所ハ之ヲ當分ノ間東京市目黒區下目黒一丁目七七番地ニ置ク
- 第三條 入學及退學 入學ハ何時ニテモ許可ス（入學願書ハ毎日受付ヲナス）退學ハ保證人ヨリ申出ヅベシ
- 第四條 期間ハ左ノ如シ 一、速成科三年 一、講習科一年
- 第五條 學科 國語、算術、作文、地理、國史、五科目ノ外ニ新タニ素質、常識ノ二科目ヲ設ク
- 第六條 教授 生徒各自ノ素質開發、性能ノ薰化育成常識ノ啓培ヲ緯トシテ國語、算術、讀方、綴方、國史、地理ノ諸學科ヲ經トシテ之ニ配シ學科考查ニ對スル實力養成ハ勿論各個ニ口頭試問ノ練習ヲ行フモノトス
- 第七條 授業 毎日午前六時ヨリ午後八時迄（但時宜ニヨリ變更スルコトアルベシ）
- 第八條 休業 本校ノ休業日ハ左ノ如シ
一、日曜日 祭日祝日 二、夏季休業ハ七月二十一日ヨリ九月十日マデ
三、冬季休業ハ十二月二十日ヨリ一月九日マデ
- 第九條 學校ノ維持費ヲ左ノ如ク定ム
一、月謝ニ依ルモノ月謝ハ月三十錢トス
一、篤志家ノ寄附金及賛助員ノ會費ニモノ（但シ賛助員會費ハ月二圓トシ月謝ハ月二十錢トス）
- 第十條 届出左ニ掲グル事故アルトキハ保證人連署ヲ以テ届出スベシ

- 一、生徒疾病又ハ事故ノ爲メ缺席七日以上ニ及ブトキ
二、生徒及保證人改名改印又ハ轉居ヲナシタルトキ
三、保證人死亡又ハ事故ノ爲メ其ノ責ヲ盡スコト能ハザルルニ至ルトキ

第十一條

除名 左ニ掲グルモノハ除名ス
一、誓約書ノ提出ヲ怠リタルモノ

二、正當ノ理由ヲクシテ無届缺席一ヶ月以上ニ及ブ者

第十二條

職制 本校職員ノ職制ヲ左ノ如ク定ム

八神原一之助の「一」

謹賀新年

一月元旦

法財團
自強會

理事長 閔
理事 朴
理事 趙
常務 崔

光鐘思爽

龍浯稷鉉

弘正寺

故阪谷子爵記念事業會

小石川区原町一二六

明治三十四年
十二月
二十日

阪谷芳郎 閣下

寺史

謹啓

時下嚴寒之候益々御清祥

の段奉大賀候 陳者先日

參上御報告申上候様に今般

御蔭様にて朝鮮殖産銀行

ニ就載の義明計の美

本郷区森川町一二四、龍全館
蔡恒錫

朝鮮殖産銀行就職につき感謝状

時下嚴寒之候益々御清祥

の段奉大賀候 陳者先日

參上御報告申上候様に令般

御蔭様にて朝鮮殖産銀行

に就職の儀相叶ひ申候

これ偏に閣下の厚き御心

添に依ることと唯々感謝に

謹啓

時下嚴寒之候益々御清祥

の慶奉大賀候 陳者先日

参上御報告申上候様に今般

御蔭様にて朝鮮殖産銀行

に就職の儀相叶ひ申候

これ偏に閣下の厚き御心

算に依ることと唯々感謝に

不堪候

この上は朝鮮殖産銀行の社

員として上役に従順 同僚と

和協以て忠實に服務致す

は勿論のこと苟も閣下の

御名を汚すか如き所業は

絶対に致さざる可く固く心

は勿論のこと苟も閣下

御名を汚すか如き所業は

絶対に赦さざる可く固く心

に誓ひ居申候 此段乍

憚御休神被下度候

就きましては甚だ厚願

なる御願に候得共小生一

身の門出に當り今後共何

卒一層の御指導と御鞭

撻に預り度伏して懇願申

上候

右御禮旁々御願迄如斯

御座候

敬具

十二月十一日

蔡恒錫

なる御願に候得共、小生一
身の門出に當り、今後共何
卒一層の御指導と御鞭
撻に預り度伏して懇願申
上候
右御禮旁々御願迄如斯
御座候
敬具

十二月十一日

蔡恒錫

阪谷閣下

侍史

訃告

淑夫人南陽洪氏以老患不幸於今月四日（陰十月二十一日）上午二時京城府昌信町九八番地自宅還元茲以告訃

一、永訣式 昭和十一年十二月八日 午前十一時自宅

一、葬禮 昭和十一年十二月八日正午

一、葬地 市外愛里家族墓

昭和十一年十二月四日

嗣子 閔 孫

友人代表 鄭 李 趙 護 喪

鐘 廣 泰 泰 泰 泰 泰 泰 爽

孫 鍾 廣 泰 泰 泰 泰 泰 泰 爽

故阪谷子爵記念事業會

東京市小石川区原町一六

反谷芳郎 男爵閣下

②

故阪谷子爵記念事業會

昭和十一年五月廿八日付山陰縣氏事狀
此係山陰縣氏事狀集第廿四冊。此。

封

京城府明倫町丁四五

崔麟

謹終年中御無音恐
縮に不堪候時下冬寒之候

閣下並御清安平和の爲

幸慶賀候小生は碌々清光

致居候以外には何にも御報

告可申上件無之甚多慚愧

に不勝羞

先般御寄贈の貴重なる

聖徳記念壁畫集を拜

受仕り感謝不知此措は忠

心より厚く御禮申上は歳

告可申上件無之甚為慚愧
に不勝友

先般御寄贈の貴重なる
聖徳記念碑土畫集を拝
受仕り感謝不知此措友忠
心より厚く御禮申上友歳
暮に當り謹んで閣下の御
健康を以祈申上候

敬具

昭和十一年十二月十八日

崔麟
頓首

阪谷先生 閣下

東京市小川区系町一三六

阪谷芳郎閣下



謹啓時下初春の候

尊堂愈々御清邁の段奉慶賀候陳者今般生等數人相議つて共生樂業株式會社を創設仕り本年二月十二日より營業開始仕候段は簡に荷様方平素御厚情の御蔭にて乍今更生等一同感銘不能措次第に御座候顧るに生等微力菲才を不顧其使命の重且大なる樂業界に進出仕候段は誠に自愧の念禁じ難く候も公衆衛生の向上を謀り以つて人類の福祉を増進せむとする念願の切なる点に於て人後に落ちざるを敢て自覺するの餘り厚がましくも玆に開業御案内に及中候間何卒生等の微衷御諒察被下將來共多々御鞭撻賜度御願申上候先づは右御案内旁々御挨拶まで如斯時節柄
御自愛專一の程御祈申上候

昭和十二年二月

日

172

昭和

12

年

3

月

日

營業科目

內外藥種貿易
藥品製造
藥材調劑
衛生方劑
工業藥品

판도크린【花鹿茸精】朝鮮一手販賣元

京城府鍾路一丁目七一番地



共生藥業株式會社

電話光化門⑧二五四七番
振替京城二二〇〇二番
電略キヨウセイ又ハキョウ

徳自愛專一の程御祈申上候
昭和十二年二月 日

謹啓時下初春の候
 尊堂愈々御清適の段奉慶賀候陳者今般生等數人相議つて共生藥
 業株式會社を創設仕り本年二月十二日より營業開始仕候段は偏
 に皆様方平素御厚情の御蔭にて乍今更生等一同感銘不能措次第に
 御座候顧るに生等微力菲才を不顧其使命の重且大なる藥業界に
 進出仕候段は誠に自愧の念禁じ難く候も公衆衛生の向上を謀り
 以つて人類の福祉を増進せむとする念願の切なる点に於て人後
 に落ちざるを敢て自覺するの餘り厚がましくも茲に開業御案内
 に及申候間何卒生等の微衷御諒察被下將來共多々御鞭撻賜度御
 願申上候先づは右御案内旁々御挨拶まで如斯時節柄
 御自愛專一の程御祈申上候
 昭和十二年二月 日

京城鐵路一丁目七一
 バントクリン 發賣元 共生藥業株式會社

| | | | |
|-------|---|---|---|
| 取締役社長 | 関 | 爽 | 鉉 |
| 常務取締役 | 崔 | 蘭 | 植 |
| 取締役 | 洪 | 鎮 | 赫 |
| 取締役 | 李 | 鍾 | 允 |
| 取締役 | 李 | 容 | 慎 |
| 監査役 | 方 | 義 | 勳 |
| 監査役 | 泰 | 宇 | 濂 |
| 相談役 | 吳 | 輔 | 振 |
| 相談役 | 全 | 潤 | 郁 |
| 責任藥劑師 | 尹 | 逸 | 炳 |
| | 趙 | 誠 | 虎 |

様

共生藥業株式會社定款

共生藥業株式會社定款

第一章 總 則

- 第一條 當會社ハ共生藥業株式會社ト稱ス
- 第二條 當會社ハ左ノ業務ヲ營ムヲ以テ目的トス
藥種商 藥品業其他之ニ附帶スル一切ノ業務
- 第三條 當會社ハ本店ヲ京城府内ニ置キ支店及出張所ハ必要ニ應シ取締役會ノ決議ニ依リ設置スルコトヲ得
- 第四條 當會社ノ公告ハ毎日申報ニ掲載シテ之ヲ爲ス
- 第五條 當會社ノ存續期間ハ設立ノ日より滿三十個年トス
但存續期間滿了後ハ株主總會ノ決議ヲ以テ延長スルコトヲ得

第二章 資本及株式

- 第六條 當會社ノ資本金ハ金參拾萬圓トシ之ヲ六千株ニ分チ一株ノ金額ヲ五拾圓トス

- 第七條 當會社ノ株券ハ記名式トシ十株券、五十株券、百株券ノ三種トス
- 第八條 當會社ノ第一回拂込金ハ一株ニ付金拾貳圓五拾錢トシ第二回以後ノ拂込ハ取締役會ノ決議ニ依リ之ヲ爲スモノトス
- 第九條 株主カ株金ノ拂込ヲ爲ササル時ハ拂込期日ノ翌日より拂込ヲ完了スル日迄此滯納金額壹百圓ニ付日歩金五錢ノ延滯利息及之ニ因リ生スル損害ヲ徴收スルモノトス
- 第十條 株主ハ住所及印鑑ヲ當會社ニ届ケ置クモノトス
- 第十一條 當會社ノ株式ハ當會社ノ承認ヲ得ルニアラサレハ株主以外ノモノニ賣買又ハ譲渡スルコトヲ得ス
- 但相續遺贈其他法律上ノ手續ニ依リ當會社ノ株式ヲ取得シ之カ名義書換ヲ要スル時ハ此事實ヲ証明スヘキ書面ニ株券ヲ添付シ書換ヲ請求シタル時ハ此限リニ在ス
- 第十二條 株券ノ毀損紛失又ハ滅失ニ因リ新株券ノ交付ヲ受ケムトスル時ハ當會社ノ適當ト認ムル保証人二名以上ノ連署ヲ以テ請求書ヲ提出スルモノトス
- 前項ノ請求アリタル時ハ當會社ハ請求者ノ費用ヲ以テ此ノ旨ヲ公告シ公告ノ日より一個月ヲ經過スルモ異議ヲ申立ツルモノ無キ時ハ新株券ヲ交付ス
- 第十三條 株式ノ名義書換ノ場合並ニ新株券ノ交付ニ付テハ左ノ手数料ヲ申受ケルモノトス

トス

一、名義書換ハ株券一枚ニ付金三十錢

一、新株券ノ交付ハ株券一枚ニ付金五十錢

- 第十四條 當會社ハ毎決算期ノ翌日より定時株主總會ノ終結ノ日迄株式ノ名義書換ヲ停止スルモノトス
- 臨時總會ノ場合ハ召集ノ通知ヲ發シタル日より此終結ノ日迄亦同シ

第三章 株主總會

- 第十五條 當會社ノ定時總會ハ毎年四月ニ 臨時總會ハ必要ニ應ジ取締役會ノ決議ニ依リ社長之ヲ召集ス
- 第十六條 株主總會ノ議長ハ社長之ニ當ル若シ社長事故アル時ハ社長ノ指揮スル取締役之ニ當ル
- 第十七條 總會ノ決議ハ出席株主ノ議決權ノ過半數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナル時ハ議長之ヲ裁決ス
- 第十八條 株主總會ノ決議事項ハ之ヲ決議録ニ記載シ議長及出席株主ノ内二名以上署名捺印ノ上當會社ニ保存スルモノトス

第四章 役員

第十九條 取締役ハ三名以上トシ 百株以上ヲ有スル株主中ヨリ選任シ 監査役ハ二名以上トシ 五十株以上ヲ有スル株主中ヨリ之ヲ選任ス

第二十條 取締役ノ任期ハ三箇年トシ 監査役ノ任期ハ二箇年トス

但任期カ其營業年度ニ關スル定時總會以前ニ終了スル時ハ其總會ノ終結ニ至ル迄任期ヲ伸長シ任期滿了後ハ再選ヲ妨ケス

第二十一條 取締役又ハ監査役ノ補缺ニ依リ選任セラレタル時ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

第二十二條 取締役ハ取締役會ヲ組織シ互選ヲ以テ社長一名常務取締役若干名ヲ選任ス

第二十三條 取締役會ハ當會社ノ業務ニ關スル主要事項ヲ決議ス 取締役會ハ決議ヲ以テ顧問及相談役若干名ヲ置クコトヲ得

第二十四條 社長ハ當會社ヲ代表シ會社ノ業務ヲ總轄シ取締役會議長トナル

第二十五條 常務取締役ハ社長ヲ補佐シ會社ノ日常業務ヲ處理シ社長事故アル時ハ之ヲ代理ス

第二十六條 取締役ハ在任中自己所有ノ當會社株式百株ヲ監査役ニ供托スルヲ要ス 前項ノ株券ハ本人ノ退職後ト雖トモ此ノ期ニ屬スル決算報告書カ定時株主總

會ノ承認ヲ經タル後ニアラサレハ取戻スコトヲ得ス 第二十七條 役員ノ報酬ハ取締役會ニ於テ之ヲ決定ス

第五章 計 算

第二十八條 營業年度ハ毎年四月一日ヨリ翌年三月三十一日トス

第二十九條 損益計算ハ總收入金ヨリ總損金ヲ控除シタルモノヲ純益金トシテ之ヨリ左ノ金額ヲ控除シタル殘額ヲ株主ニ配當ス

一、法定準備金ハ利益金ノ百分之五以上

一、任意準備金ハ利益金ノ百分之五以上

一、役員賞與金ハ利益金ノ百分之二十以下

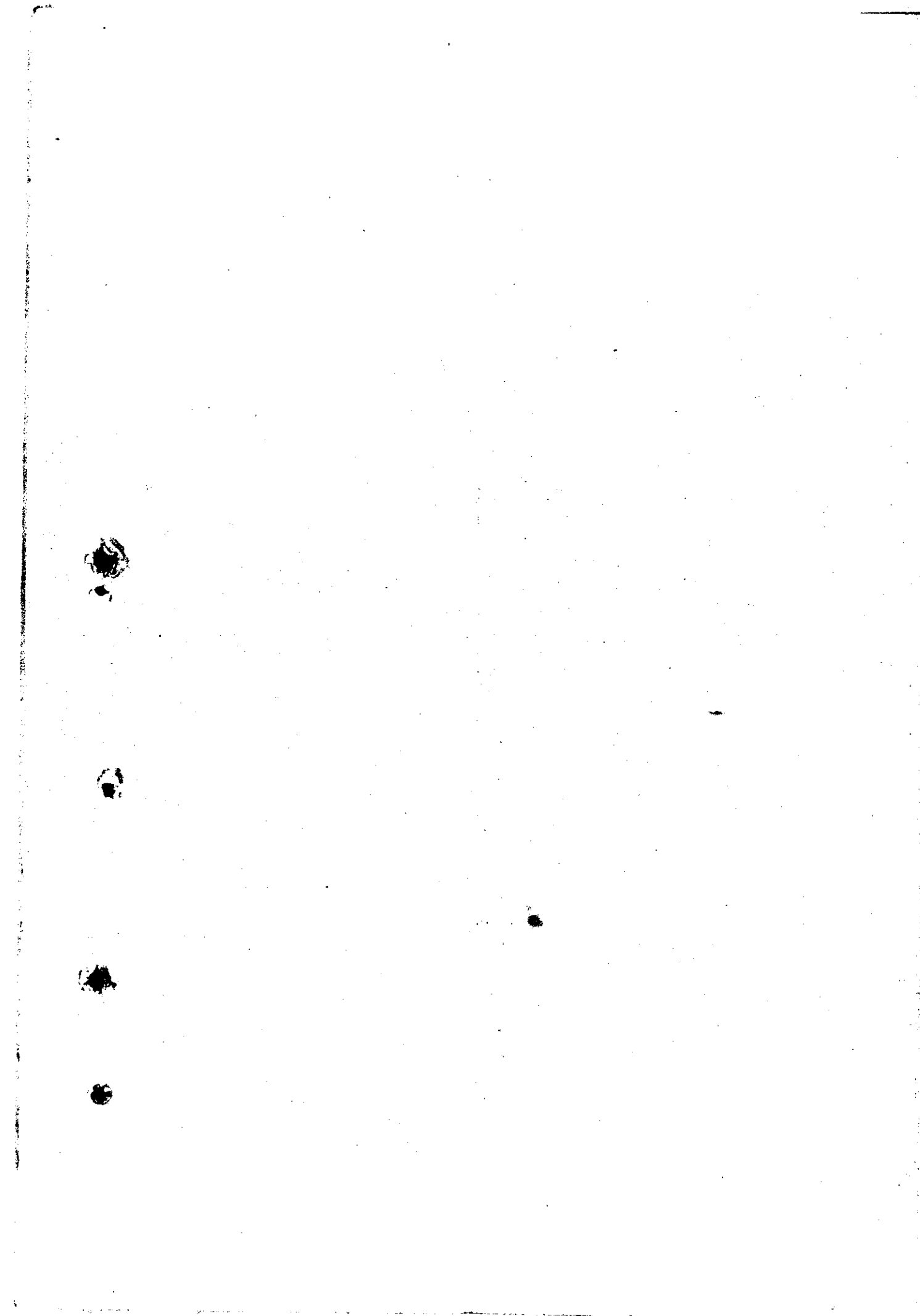
一、後期繰越金ハ利益金ノ百分之二十以下

第三十條 株主配當金ハ毎年三月三十一日現在株主名簿ニ依リ之ヲ支拂フモノトス

附 則

第三十一條 當會社ノ定款ハ株主總會ノ決議ヲ以テ之ヲ變更スルコトヲ得

第三十二條 會社ノ負擔スヘキ創立費ハ千圓以內トス



共生藥業株式會社趣旨書

生老病死의 人生四苦中 生老死는 先天的運命이라 人力으로 左右키 不能한것은 다시 말할바 없거니와 다만 病苦에 있어는 後天的의 所産임으로 人間의 能知能力으로써 그를 退治할만한理想을 充分히 가졌다 할수 있다 그래서 古來로 우리人間은 이 病苦에 退治를 人間唯一의 廣濟事業으로 알아왔고 또한 그에對한藥學의 原理와 藥理의 應用과 製藥의 研究에 專力을 다하여 今日科學的醫藥時代를 現出케 하였다 元來 濟人疾病의 目的이란 것은 다만 個人의 病苦를 없애는데에 있는것이 아니요 나아가는 國家民族에게 普遍的健康을 增進케 하고 大同的元氣를 扶養하여 全人類社會의 福利를 圖謀함에 專在한것임으로 事業을 經營하는者는 決코營利에 뿐 그 主眼을 두지 아니요 어디까지든 人道를 經으로 하고 慈善을 緯로 하여 神聖한 天良의 本心下에서 廣濟蒼生의 大理想을 가져야 할것이 아닐까 近來에는 世態人心이 唯危唯微하여 事業을營爲하는者 本來의 主眼目的을 忘置하고 純粹한營利만을 圖謀함으로 인하여 眞所謂 病不能殺人이라 藥能殺人이라는 惡弊를誘致하게 되었나니 最近當局에서傳하는바 賣藥誇大宣傳取締令立案等이 있거되것도 亦是這間의 消息을 裏書하는것이 아닐가 이일마나 斯界의 墮落을意味한것이며 斯界의 神聖한理想에 羞耻를받는것이냐 此際에 있어 人道的慈善心을 가진者로 크게 猛省奮起할때가 아니냐

嗟呼 吾等은 오래동안 이에 늦고만 있는지라 積歲의 所感과 多年의 經驗을 모아 一大藥業會社를創設한後에 斯界의 權威를依賴하여 名實相副한 特効名藥을製造하는同時에 內外既成藥品中으로 가장 有効한名藥만을 가장責任있고 嚴正한立場에서 選擇하여써 널리 民衆의 病苦를 退治코저하는 目的으로 이에 共生藥業株式會社라는 名義로 敢히 이會社를發起하는바이다

昭和十一年十一月 日

共生藥業株式會社發起人 (無順)

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 閔 | 李 | 李 | 方 | 朱 | 全 | 秦 | 吳 | 洪 | 崔 |
| 奭 | 容 | 鍾 | 義 | 鉦 | 潤 | 宇 | 輔 | 鎮 | 蘭 |
| 鉉 | 慎 | 九 | 錫 | 卿 | 郁 | 濂 | 根 | 赫 | 植 |

東京市小石川区原町一二六

阪谷芳郎

閣下

②

白雲寺

寺史



朝鮮全羅北道

群山殖産銀行支店

蔡恒錫

昭和十二年五月三十一日付

朝鮮殖産銀行全羅北道群山支店註記の持分、件

故阪谷子爵記念事業會

謹啓

時下新緑之候益御清

穆之段奉大賀候

陳者 私儀 東京帝國大

學在學中は一方ならざ

る御薰陶と御懇情を

辱ふし奉深謝候

以御蔭令般朝鮮殖産銀

行に入行致し全羅北道

群山支店に勤務仕ること

と相成候に就ては只管倍

舊の御厚情に繼り大過

群山支店に勤務仕ること

と相成候に就ては只管倍

舊の御厚情に繼り大過

なきを期し度く何卒尚

一層の御指導御鞭撻を

賜り度伏して奉懇願候

爾後は自強會の會員と

して忠實に職務に精勵し

苟も閣下の御名を汚すが

如き所業は致さざる可く

固く心に誓ひ居申候

此段乍憚御休神輿下

度候

先は御禮旁々御挨拶迄

如斯御座候

敬具

爾後は自強會の會員と

して忠實に職務に精勵し

苟も閣下の御名を汚すが

如き所業は致さざる可く

固く心に誓ひ居申候

此段乍憚御休神帳下

度候

先は御禮旁々御挨拶迄

如斯御座候 敬具

五月二十五日

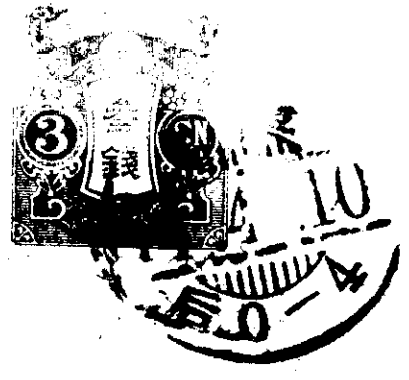
蔡恒錫

阪谷芳郎 閣下

侍史

小石川区原町一三六

男爵阪谷芳郎閣下



昭和十四年四月五日
15時
自經會
掌櫃員
新橋多全
主事

故阪谷子爵記念事業會

拜啓益々御清祥之殷奉賀候

陳者來々四月十五日午前十時京橋區寶町二丁目一番地
株式會社清水組會議室ニ於テ本會常議員會及評議員會ヲ
相開候間御臨席被成下度此段御案内申上候 敬具

昭和十四年四月九日

東京市豊島區巢鴨二丁目五十二番地

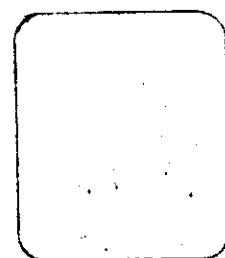
財團法人自彊會

常議員會長 男爵 阪谷芳郎

殿

株式會社清水組

常務取締役 福島政吉



きがは便郵

本社
東京市京橋區寶町二丁目一番地
電話 東京 (03) 六六二一〇一〇
東京市本郷區高井町三番地ノ三三
電話 小石川 (03) 五六四六番

故阪谷子爵記念事業會

拜啓益々御清祥之段奉賀候
陳者來ル四月十五日午前十時京橋區寶町二丁目一番地
株式會社清水組會議室ニ於テ本會常議員會及評議員會ヲ
相開候間御臨席被成下度此段御案内申上候 敬具
昭和十五年四月三日

東京市豊島區葛島二丁目五十二番地
財團法人自彊會
常議員會長 男爵 阪谷芳郎
評議員會長 增田義一

殿

常務委員會 總理 第一 常務委員 岡谷義一 永井 重 岡谷 義一

一 水一 飯

常務委員會 岡谷義一 常務委員 岡谷義一 永井 重 岡谷 義一

一 常務委員

常務委員 岡谷義一 常務委員 岡谷義一 永井 重 岡谷 義一

或二 岡谷義一 常務委員 岡谷義一 永井 重 岡谷 義一

「岡谷義一 常務委員 岡谷義一 永井 重 岡谷 義一」

一 岡谷義一 常務委員 岡谷義一 永井 重 岡谷 義一

一 岡谷義一 常務委員 岡谷義一 永井 重 岡谷 義一

一 岡谷義一 常務委員 岡谷義一 永井 重 岡谷 義一

故阪谷子爵記念事業會

拜啓益々御清祥之段奉賀候

陳者來々 四月三十一日午前十時京橋區寶町二丁目一番地

株式會社清水組會議室ニ於テ本會常務委員會及評議員會ヲ

相開候間御臨席被成下度此段御案内申上候 敬具

昭和十六年四月十八日

東京市豊島區巢鴨二丁目五十二番地

財團法人自強會

常務委員會長 男爵 阪谷 芳 郎

評議員會長 增田 義 一

欠席

手紙收送付入

殿

會議ノ目的タル事項

一、昭和拾五年度（自昭和拾五年四月壹日）事業報告及決算報告ノ件

一、昭和拾六年度（自昭和拾六年四月壹日）事業報告及決算報告ノ件

一、昭和拾六年度給費學生選拔ノ件

「追而當日御缺席ノ方ハ乍細手數別紙委任狀ニ御署名御捺印ノ上書目
起ニ自筆會ニ到達スル様御返送被成下度候」

常議員及評議員氏名（順不同、略敬稱）

一、常議員

常議員會長 阪倉芳郎 常議員 武田秀雄 增田義一 永井亨
清水一雄

一、評議員

評議員會長 增田義一 評議員 阪倉芳郎 永井亨 明石國男

池澤敬三 清水一雄 德永爲次 清水何吉 莊田達彌 清水揚之助
清水康雄 近野寛道 青木菊雄 清水敬 山崎龜吉 矢島康次
菅原通敬 岡百世 和國嘉衛 牧野英一 山崎覺次郎 石井健吾
武田秀雄
以上

M4-14

金銀又は白金の輸入禁止・制限に関する法規

昭和20年
21年

| |
|--------|
| 369.37 |
| 320.9 |
| 732.86 |

| |
|------|
| 山口文子 |
| 86 |

常務員會受 津田通一 常務員 坂谷義一 永井 幸四郎

一 常務員

一 水一敏

常務員會受 坂谷義一 常務員 金田義一 坂田通一 永井 幸四郎

一 常務員

常務員會受 坂田通一 常務員 坂田通一 坂田通一

送二日 坂田通一 坂田通一 坂田通一

一 坂田通一 坂田通一 坂田通一 坂田通一 坂田通一

一 坂田通一 坂田通一 坂田通一 坂田通一

一 坂田通一 坂田通一 坂田通一 坂田通一

一 坂田通一 坂田通一 坂田通一 坂田通一

故阪谷子爵記念事業會

拜啓益々御清祥之段幸賀候
陳者來々 四月三十一日午時京橋區寶町二丁目一番地
株式會社清水組會議室ニ於テ本會常議員會及評議員會ヲ
相開候間御臨席被成下度此段御案内申上候 敬具
昭和十六年四月十八日

東京市豊島區巢鴨二丁目五十二番地
財團法人自強會

常議員會長 男爵 阪谷 芳郎

評議員會長 増田 義一

手化收送付入

殿

會議ノ目的タル事項

一、昭和拾五年度（自昭和拾五年四月壹日）至全拾大年度（至全拾七年三月廿壹日）事業報告及決算報告ノ件

一、昭和拾六年度（自昭和拾六年四月壹日）至全拾七年三月廿壹日）決算承認ノ件

一、昭和拾六年度給費學生選拔ノ件

「追而當日御缺席ノ方ハ午御手紙別紙委任狀ニ御署名御捺印ノ上書目
迄ニ由報告ニ到達スル様御返送被成下度候」

常議員及評議員氏名（順不同、略敬稱）

一、常議員

常議員會長 阪谷芳郎 常議員 武田秀雄 增田義一 永井亨

清水一雄

二、評議員

評議員會長 增田義一 評議員 阪谷芳郎 永井亨 明石國男

| | | | | | |
|------|------|------|------|-------|-------|
| 池澤敬三 | 清水一雄 | 德永爲次 | 清水何吉 | 莊田達彌 | 清水揚之助 |
| 清水康雄 | 王好寬道 | 青木菊雄 | 清水敬 | 山崎龜吉 | 矢島康次 |
| 菅原通敬 | 岡百世 | 和田嘉衛 | 牧野英一 | 山崎覺次郎 | 石井健吾 |
| 武田秀雄 | | | | | |

以上

M4-14

金銀又は白金の輸入禁止・制限に因する法規

昭和
20
年
21
年

| |
|--------|
| 369.37 |
| 320.9 |
| 732.86 |

| |
|------|
| 山口文雄 |
| 86 |



國家管理理法第一條及昭和二十年勅令第五百二十八号
銀又ハ白金ノ地金又ハ合金ノ類ハ制限又ハ禁止
ニ付スル件ノ規定ニ依リ金銀、有価證券等ノ類ハ
等ニ付スル金融取引ノ取締ニ關シ左ノ通定リ

昭和二十年十月十五日

大藏省令第八十八号公布

昭和二十年十一月二十四日

大藏省令第九十八号改正

第一條 大藏大臣ノ許可ヲ受クルニ非サレハ左ノ掲

グルモノヲ輸出又ハ輸入スルコトヲ得ズ

一、金貨又ハ銀貨

二、金、銀若ハ白金ノ地金又ハ此等ノモノノ合金

三、通貨又ハ有価證券

外務省

369.37
320.9
732.8

共248

TER
E. 033
1957
PS 1

一、本房屋所有權直接關係全部及一部之所有
又管理之在外財產

[illegible]

若クハ輸入、一切ノ財産ノ商取引又ハ一切ノ財産ニ關スル權利、權限若クハ持權ノ行使
 牙田條 本令ニ於テ在外ノ財産トハ左ニ掲ケルモノヲ謂フ
 一、外國ニ在ル一切ノ財産
 二、外國居住者ノ負擔トナル一切ノ債權、誹謗求權
 銀行預金其他ノ預金又ハ信用取引
 三、外國ニ在ル事業ノ營業又ハ此等ノモノニ對スル出資
 四、一切ノ外國居住者ニ依リ發行セラレ又ハ其ノ者ノ債務トナルベキ一切ノ有価證券、小切手、諸手形
 受領證、保險證書其他所有權又ハ債務ノ證スル證書
 五、一切ノ外ノ著作權、特許權、商標權及此等ノモノニ關スル一切ノ契約書又ハ許可證

日本銀行券、貨票（金貨を除く）政府、銀行、
 小銀行、紙幣、臨時補助通貨及びB号圖表
 市補助通貨以外一切の通貨、
 其、他前各号に準ずるもの
 本令に於て外國通貨取引トハ一切の外國
 通貨を含むこと、取引ノ外國一切ハ、若ハ債務
 ノ清算、一切の外國通貨、賣買、譲渡若ハ其、他
 ノ商取引外貨表示に關スル否トハ本邦居住者
 ト、同、一切の金融上若ハ財産上、取引及本邦居
 住者ハ外國居住者ニ對シテ負擔セシ若ハ外國居住
 者ハ本邦居住者ニ對シテ負擔セシ一切の債務を含む
 こと、取引其、他之ニ準ずるものヲ謂フ
 第六條 第一條ノ輸出若ハ輸入ノ輸入又ハ輸出ノ取引又

六、日本銀行券、貨票（金貨を除く）政府、銀行、
 小銀行、紙幣、臨時補助通貨及びB号圖表
 市補助通貨以外一切の通貨、
 其、他前各号に準ずるもの
 本令に於て外國通貨取引トハ一切の外國
 通貨を含むこと、取引ノ外國一切ハ、若ハ債務
 ノ清算、一切の外國通貨、賣買、譲渡若ハ其、他
 ノ商取引外貨表示に關スル否トハ本邦居住者
 ト、同、一切の金融上若ハ財産上、取引及本邦居
 住者ハ外國居住者ニ對シテ負擔セシ若ハ外國居住
 者ハ本邦居住者ニ對シテ負擔セシ一切の債務を含む
 こと、取引其、他之ニ準ずるものヲ謂フ
 第六條 第一條ノ輸出若ハ輸入ノ輸入又ハ輸出ノ取引又

大蔵省は、前項の規定に依り、事項又は人ヲ指定シ、本令ニ
定ムル取引ノ制限ヲ免除シタル場合ニ於テ大蔵大
臣必要アリト認ムルトキハ之ヲ告示ス、其ノ廢止又ハ更
ニ爲スル場合亦同シ、
又ハ條、大蔵大臣ハ必要アリト認ムルトキハ事項又ハ人
人ヲ指定シテ報告ヲ徴スルコトヲ得、
前項ノ規定ニ依リ、事項又は人ヲ指定シテ報告
ハ、大蔵大臣ハ必要アリト認ムルトキハ事項又ハ人
人ヲ指定シテ報告ヲ徴スルコトヲ得、
前項ノ規定ニ依リ、事項又は人ヲ指定シテ報告

ハ、大蔵大臣ハ必要アリト認ムルトキハ事項又ハ人
人ヲ指定シテ報告ヲ徴スルコトヲ得、
前項ノ規定ニ依リ、事項又は人ヲ指定シテ報告
ハ、大蔵大臣ハ必要アリト認ムルトキハ事項又ハ人
人ヲ指定シテ報告ヲ徴スルコトヲ得、
前項ノ規定ニ依リ、事項又は人ヲ指定シテ報告

○大蔵省告示第三百八十五號（二、二、一七）

左ニ掲ケル場合ニ於テハ右該行為ノ当事者ニ對シ外國為替管理
法施行規則又ハ昭和二十年大蔵省令第八十八號ノ規定ニ依リ
制限並ニ報告ヲ更障ス

一、外國ニ本店ヲ有スル會社等ノ其ノ本邦所立ノ支店又ハ代理
店等ニ於テ左ニ掲ケル行為ヲ為ストキ但シ昭和二十年大蔵
省令第七十八號ノ特定國財産等ノ保全ニ關スル件ノ適用
ヲ受ケル者ニ依リ直接又ハ間接ニ全部又ハ一部ノ所有又ハ
管理セシメ又ハ政府ノ命令ニ依リ閉鎖セシメタル支店又ハ代理店
等ニ於テ為ス場合ヲ除ク

(1) 昭和二十年九月二十三日以前ニ當該支店又ハ代理店等ニ
於テ義務ヲ生ジタル正當ナル債務ノ給付、税金、税金其ノ他
ノ諸經營ノ支拂

2

(2)
昭和二十年九月二十三日以後ニ當該支店又ハ代理店等ノ財
産ノ維持又ハ保全ノ為ニ要スル費用ノ支拂

(3) 昭和二十年九月二十三日以前ノ取引ニ因リ生ジタル當該支
店又ハ代理店ノ債務ノ支拂又ハ債權ノ取立

(4) 前五號ノ支拂又ハ取立ノ為ニ要スル當該支店又ハ代理店
等ノ為ス本邦所立ノ金融機關ヨリノ預金ノ引出又ハ預入
ニ外國ニ本店ヲ有スル會社等ノ其ノ本邦所立支店若ハ代
理店等ニ於テ其ノ外國ニ於テ勤務スル職員ノ本邦以テ在
家族ニ對シ諸給付ノ支拂ヲ為ストキ又ハ本邦ニ本店ヲ有ス
ル會社等ノ其ノ外國ニ於テ勤務スル職員ノ本邦ニ在ル家族ニ
對シ諸給付ノ支拂ヲ為ストキ但シ左ノ條件ヲ具備スル場合
ニ限ル

(1) 諸給付ノ外國ト本邦トニ於ケル令割支拂ノ區分ハ昭和二

新三信金
二八〇〇〇〇

十年九月二十三日以前ニ取極メラレ居ルコト
(2) 当該職員ノ昭和二十年大蔵省令第七十八号特定国庫
財産等ノ保全ニ関スル件ノ適用ヲ受ル者及政府ノ令ニ
依リ閉鎖セラレタル會社等ノ職員ニ非サルコト
(3) 昭和二十年八月十五日以後本邦ニ送金セラルる資金ニ依リ
支拂ハルルモノヲサルト

(大蔵省発表)

尚大蔵省ニ於テ在リ關聯シテ外國ニ本店ヲ有スル事業會
社ノ内地ニ在リ工場カ使未食糧品等生活必需品ノ生産ヲ
為シ居ル場合ニ於テ將來ニシテ其ノ操業ヲ希望スルコトキ
又内地ニ在リ支店ノ有ル手持高品等ヲ處分セントスルコトキハ
本社等ノ名称、本支店ノ所在地、資本金額及事業概要
等ノ詳細ヲ外資局為替課迄申出ブルコトヲ希望シテサレ

3

○大蔵省告示第百九十九号 (二、一、二四)

左ニ掲グル場合ニ於テハ当該行為ノ当事者ニ對シ外國為替管
理法施行規則又ハ昭和二十年大蔵省令第八十八号ノ規定ニ
依リ制限並ニ報告ヲ免除ス

外國ヨリ仕向セラレタル送金為替ノ代リ金ノ支拂ヲ為ストキ又外國
ヘ仕向セラレ取立為替ノ取立代リ金ノ支拂ヲ為ストキ但シ左ノ條件
ヲ具備スル場合ニ限リ

一 当該送金為替又ハ取立為替ノ金額ガ本邦通貨ヲ以テ表
示セラルルモノナルコト

二 当該送金為替又ハ当該取立為替ノ取立済通知ハ昭和二十
年九月二十三日以前ニ本邦ニ到着シ居ルコト

三 当該送金又ハ取立為替ノ支拂金額ガ千円以下ナルコト

(大蔵省発表)

右掲各送金為替送金手形送金小切手郵便為替、
送金付替票其一切送金手段が含み又取立為替ハ
在外債権取立ノ為一切取立手段が含み

○大蔵省告示第十八号（二二、二七）

昭和二十年大蔵省令第十八号第六條ノ規定ニ依リ許可申請書
中外國ニ本店ヲ有スル會社等ノ本邦所在支店、代理店等ノ事
業ノ再開、轉換又ハ所有財産ノ處分ノ為ニ取リ又ハ契約ノ許
可申請書書式ニ同条ニ於テ準用スル外國為替管理法施行規則
第九十六條ノ規定ニ依リ左ノ通定ム

告示第十八号（二二、二七）

一、外國ニ本店を有する會社等ノ本邦所在支店代理店等に
シテ事業ノ再開、轉換又ハ所有財産ノ處分ノ要望ニ對シ
個々ノ申請書を審査した上之と許可せらるる事業及處分を
許可せらるる所有財産ノ範圍概ね左ノ通

（一）再開又ハ轉換セシムル事業ハ生活必需品及其ノ生産
に必要なる物資ノ製造又ハ販賣並ニ斯ノ生産に必要なる
サハスあること

（尚本邦所在支店又ハ代理店等ノ所有する資金、施設、
技術等を以テ新會社を創設し斯ノ事業を営む場
合モ左ニ準ジ取扱ハ見込）

（二）所有財産ノ處分ハ生活必需品又ハ其ノ生産に必要なる
モノノ處分あること

(3) 前二項に該當する場合に於ても左に掲ぐる取引又は契約を為す場合を除く

イ 在外者の請求又は損害に依る取引

ロ 在外財産に當する取引若しは契約又は全部若しは一部が

外國に於て履行せらるる契約

ハ 支店又は代理店等の資産を著しく減少若しは剝奪し又は

外國人株主の利益を害する取引

○ 告示第二百十号(二二、二六)

外國に本店を有する商社の本邦に在る支店又は代理店等が本邦に在る銀行に預入れある預貯金を本邦に在る他の銀行に預け換へを為すとき又は当該預貯金の種類の変更を為すとき但し左の條件を具備する場合に限る

5.

一 他の法令の規定に違反せざること

二 預貯金の名義人に変更あること

三 金額に支拂なきこと

○ 告示第三十七号(二二、二六)

一 本邦商社が其の本邦に於て掲げたる在外勤務職員等の給料及諸手当の支拂を為すとき但し左の條件を具備する場合に限る

ロ 当該支拂金が在外支店等に対する勘定に借記せらるること

ハ 当該本邦商社の資産が其の在外支店等に対する負債の總額を超過し居ること

大蔵省告示第六九二號

昭和二十一年大蔵省令第八十八號第八條第一項の規定に基いて外國居住者の本邦内に在る支店出張所等で同令に基く昭和二十一年二月大蔵省告示第十八號に基いて事業の再開又は轉換について大蔵大臣の許可を受けたものの報告に關する件を次のやうに定める

昭和二十一年 九月二十三日

大 蔵 大 臣

外國居住者の本邦内に在る支店、出張所、其の連の營業所等で昭和二十一年二月大蔵省令第八十八號に基いて事業の再開又は轉換について大蔵大臣に對して許可申請を爲し昭和二十一年大蔵省令第八十八號に依り許可を受けたものの代表者は左の書類を大蔵大臣に提出しなければならない。

一、事業の再開又は轉換の許可を受けた日から昭和二十一年九月三十日迄の期間に於ける損益計算書

二、昭和二十一年十月以降曆年に依る四半期毎に當該四半期に於ける總ての收入、事業に要したる經費、差引事業上の純收入金、前項の固定費及右を差引きたる結果の純益金又は純損金を示す計表

三、昭和二十一年十二月三十一日現在及び以後の曆年に依る四半期末現在に於ける貸借対照表前
項の損益計算書、諸計表及貸借対照表は各和文で一冊及び英文で三冊を作成し、第一號のも
のは昭和二十一年十月十五日迄に第二號及第三號のものは當該四半期又は當該期日の経過後
十五日以内に提出しなければならない。

大正省令第二十一年九月二十一日

外に本店を有する者
出所又は其の他の營業所の本部に在る支店
の報告に因て

今般大藏省に於ては外國に本店を有する者
の本部に在る支店出所又は其の他の營業所
に對し次のやうな報告を發することゝなつたから
該報告は二十三日附の官報を發所の上洩
れなく發するやうにされた

自報告を發した場合には昭和二十年勅令第五百七十八號に依つて處罰されるから注意された

昭和二十一年大藏省令第十八號に依り營業の再開又は轉讓の許可を受けた店舗の場合
の報告の再開又は轉讓の許可を受けた日から昭和二十一年九月三十日迄の期間における損
益計算書

考

報告書の提出に

（1）報告書の提出又は報告の許可を受けた日

（2）他の法律上許可を要するに付、それそれ許可を受けた日

ハ、前項上各款の再開又は継続をした日
を記載すること

ニ、昭和二十一年十月以降、昭和二十二年十月に於ける四半期における總ての収入、支出に要したる金、差引金、上の純収入金、差引金の特定及び右を差引きたる結果の純益金又は純損金を示す
計表

三、昭和二十一年十二月三十一日現在及び昭和二十二年三月三十一日現在における四半期末現在における貸借対照表

四、前項以外の各款の場合

一、昭和二十一年中の歳入、歳出、及び前年末日における貸借対照表

二、昭和二十二年以降、各半年度における歳入、歳出、及び前年末日における貸借

対照表

五、提出書類の額及び提出期日

一、報告書は、いつれの報告にも、更に一紙及び其文にて三項を添付し提出すること

二、報告書は、昭和二十一年は、昭和二十一年の歳入、歳出、及び前年末日の提出すること

人蔵目出告示第七百十號

昭和二十一年人蔵省令第八十八號第八條第二項の地に
に基いて外國居住者の本邦内に在る資産、大抵所
算の報告に關する件を次の如くに定める。
昭和二十一年一月一日

人蔵大臣 齋藤 隆夫

外國居住者の本邦内に在る資産、大抵所算の他の
營業所又は事業所の代表者（代表者がないときは、
責任者）は、左の事項を人蔵大臣に報告し、その
なるべし。

前項の報告書は和文にて一通及び英文にて一通
を作成し、昭和二十一年十月二十五日迄に提出し、その
ばなるべし。



M4-15

昭和四年十二月

終戦前後に於ける朝鮮事情概略

終戦時並終戦前後の朝鮮事情概略

昭和四年

| |
|---------|
| 312.4 |
| 369.37 |
| 7372.35 |

山口文書

35

昭和二十年十二月



圖書に於ける圖書管理の概りたる特徴！

書局

77p
77p

312.2
369
73



本書は、戦時下の日本経済の現状と将来の展望を、戦前との比較を通じて明らかにしようとするものである。

昭和二十二年十二月

977
文学部
15.11.15
20.11.15
20.11.15

目次

- 一 戦争の役人と其の戦に於ける北滿洲地方の進歩
- 二 大戦前後の一般動向と之に對し得るたる諸問題
- 三 戦時下の戦況に對する概観
- 四 米軍進駐、降伏文書調印後、戦況に對ける米軍の行政制
- 五 戦の大要
- 六 日本人の戦況に伴ふ諸問題に對する概観、財産に對する取扱
- 七 戦時下の日本経済の現状と将来の展望

下し日本人に對する公敵たる何種被虐最悪も行はれ無き事をも
見て朝鮮人の專行する處となり朝鮮軍令等も朝鮮國を以てせざ
れ被虐被殺せずとも朝鮮人從軍員の凶暴及暴虐並に極めて低價に
して給水給食は時價を失し列車の正當運賃は不届の狀態に陥り
たり、何故關係人夫の獲得及給中給給亦共產系分子の妨害もあ
りて被虐を極め對越陸軍の妨害充足にも事欠く程度にして金銀
を盡し朝鮮被虐の風潮漸次するに至り生産停止は各部門に波及
せられたり、日韓國交の前途の確保は當面より最も懸念され
たる處なりしが中央政府當局の勢力に依り大體中断することな
く數日百電以上の被虐の航行禁止の指令ありたる際にも日韓國
連絡船のみは除外せられたり

下し日本人に對する公敵たる何種被虐最悪も行はれ無き事をも
見て朝鮮人の專行する處となり朝鮮軍令等も朝鮮國を以てせざ
れ被虐被殺せずとも朝鮮人從軍員の凶暴及暴虐並に極めて低價に
して給水給食は時價を失し列車の正當運賃は不届の狀態に陥り
たり、何故關係人夫の獲得及給中給給亦共產系分子の妨害もあ
りて被虐を極め對越陸軍の妨害充足にも事欠く程度にして金銀
を盡し朝鮮被虐の風潮漸次するに至り生産停止は各部門に波及
せられたり、日韓國交の前途の確保は當面より最も懸念され
たる處なりしが中央政府當局の勢力に依り大體中断することな
く數日百電以上の被虐の航行禁止の指令ありたる際にも日韓國
連絡船のみは除外せられたり

（一）本邦の支出、即ち命令の發行等の措置を以て之が解決を圖る
たり、八月十五日以降九月二十八日迄の間に於ける總額發行
總額は五十六億に及ぶ九月二十八日現在の發行高は八十六億
五千八百萬圓を算したるが之は右期間内に於ける預金引当額
（大體二十五、六億圓程度）と相殺せられ内七億圓程度は日本に
總金せられたり（一）國庫支拂額、即ち命令に依る貸出及一般引
出、國庫内債に於ける發行總額に因るものと算料せらる、官金
庫の身分關係等終戦に依り問題となりたるが官吏の退職手續、
退職金の支給等は従前中央政府に於て普通せらるるものと推想
せらるる地方關係其の他の官吏の退職金、退職金等に付ては當
該關係の整理上可能なる場合は支給し置くを可とすべしと見解
し支出整理するもの極めて多数に及び従日本軍より之が不償也
請求を蒙り支出金の返還を要求せらるる關係を斷じたり
故上の如く整理整理する幾多の事案に對し夫々最も妥當とす

（一）本邦の支出、即ち命令の發行等の措置を以て之が解決を圖る
たり、八月十五日以降九月二十八日迄の間に於ける總額發行
總額は五十六億に及ぶ九月二十八日現在の發行高は八十六億
五千八百萬圓を算したるが之は右期間内に於ける預金引当額
（大體二十五、六億圓程度）と相殺せられ内七億圓程度は日本に
總金せられたり（一）國庫支拂額、即ち命令に依る貸出及一般引
出、國庫内債に於ける發行總額に因るものと算料せらる、官金
庫の身分關係等終戦に依り問題となりたるが官吏の退職手續、
退職金の支給等は従前中央政府に於て普通せらるるものと推想
せらるる地方關係其の他の官吏の退職金、退職金等に付ては當
該關係の整理上可能なる場合は支給し置くを可とすべしと見解
し支出整理するもの極めて多数に及び従日本軍より之が不償也
請求を蒙り支出金の返還を要求せらるる關係を斷じたり
故上の如く整理整理する幾多の事案に對し夫々最も妥當とす

の解決の途を拓き来りたるが風に經營は豫告を發し政府廳事亦
放進を以て國民に對し安撫を爲め教育の進歩を期すると共に日
籍人共に朝鮮沈黙事に處し來るべき教養階級に秩序ある準備を心
懸くるべく組織する處ありたり
然るに之等人心安定及秩序確保の爲の施策の前提として事
業の急下進管理自體の存續が問題とせらるる點をりしかば八月
二十一日附を以て朝鮮總督より内務大臣宛左記の電報を發した

「朝鮮總督府の統制行政一切は帝國政府直接の指揮乃至責任
に依り行はれる以上は今後朝鮮總督府が中央の命令に依る
か乃至は朝鮮の現地に於ける聯合軍閥の發遣等に依り其の機
關を停止する場合に於ては從來總督府の責任を以て處理せる
一切の結果は中央政府の責任に移るものと解し處理すべから
付爲念」

一、海陸交通の便を速くし、日本と南洋の貿易を振興す
一、南洋の資源を調査し、其の利便を享受す
一、南洋の文化を調査し、其の進歩を促進す
一、南洋の政治を調査し、其の安定を維持す
一、南洋の経済を調査し、其の発展を促進す
一、南洋の社会を調査し、其の改良を促進す
一、南洋の教育を調査し、其の進歩を促進す
一、南洋の衛生を調査し、其の改良を促進す
一、南洋の交通を調査し、其の便を促進す
一、南洋の治安を調査し、其の安定を維持す
一、南洋の文化を調査し、其の進歩を促進す
一、南洋の政治を調査し、其の安定を維持す
一、南洋の経済を調査し、其の発展を促進す
一、南洋の社会を調査し、其の改良を促進す
一、南洋の教育を調査し、其の進歩を促進す
一、南洋の衛生を調査し、其の改良を促進す
一、南洋の交通を調査し、其の便を促進す
一、南洋の治安を調査し、其の安定を維持す

も、最近に於て（警察官吏の任用）其の實に任ず、若し右
實力職員を認められざる場合は一切先方の責任に於て之
を撤去せしむる機を設す

＊、此間南洋留學の處理及調査希望日本人の進退は今後の
前途に依る

へ、内地留學希望者の取扱も今後の進退其の他の前途に依
るべし、南洋留學に不安をからしむる機を設す、若し
南洋留學を要求せらるれば之に所望の行政機構の存在と
進退に付便宜供與を要す

ト、進退の何に依りてかは日本人の進退に付ては殆んど關
らるる處を考慮するを以て當方としても先方に對する
要求は要求として別に何等か此の進退を考慮せしむる
機を設すべからず、京城、釜山、大邱、本館等へ可及的
多量の食糧、衣料の進出に努力すべし、農商交通兩局の此

[illegible]

尙監督よりの指示中に在る終戦事務処理委員会機構として八月二十七日朝鮮監督府終戦事務処理本部を設置し（各地方廳にも同様設置せしむ）總務、新舊、整理、保護の四部制（後に至り給養部を加ふ）にて所要職員の發令を見たり

中央政府よりは前述の監督監査よりする中央政府の意向服会に対する回答として、まゝんか八月二十六日終戦処理金庫の決定事項として左の新聞報を受領せり、即ち

「朝鮮に於ける我が主權の轉移時期は獨立問題を決定する機軸條約批准の日迄法律上我が方に存するも外國軍隊に依り占領せられ事實上は主權休止の狀態に陥るべきことあるべし」と即ち

朝鮮に於ける行政執行を阻止するは進駐軍の進駐状態の如何に懸ること明となりたり。

八月二十七日政務急變より進駐軍との折衝事項に付左の諸点を研究準備すべく下命せられたり

軍政を以て之を執行する事

八月二十日、日本軍政當局より朝鮮軍政の組織を以て之の組織を決定する事とす

朝鮮軍政の組織は、朝鮮半島の南北を以て之の組織を決定する事とす

朝鮮の日本軍政當局より朝鮮軍政の組織を以て之の組織を決定する事とす

「朝鮮軍政の組織は、朝鮮半島の南北を以て之の組織を決定する事とす

の組織を以て之の組織を決定する事とす

朝鮮軍政の組織は、朝鮮半島の南北を以て之の組織を決定する事とす

朝鮮軍政の組織は、朝鮮半島の南北を以て之の組織を決定する事とす

朝鮮軍政の組織は、朝鮮半島の南北を以て之の組織を決定する事とす

朝鮮軍政の組織は、朝鮮半島の南北を以て之の組織を決定する事とす

朝鮮軍政の組織は、朝鮮半島の南北を以て之の組織を決定する事とす

一、米海軍は軍政施行の要因ある由なるが此の場合左の二つの状況
を豫想せらる

イ、親露督府機構を存置し戒嚴下の場合の如く軍政長官の隷下に
置く

ロ、親露督府の行政機構を他の機関に引継がしむ

二、露軍は西北鮮地帯に於てロの方式を採り又朝鮮人の希望もあり米
軍も亦南鮮に於て同様の処置に出づるを想像せらる

然る時は親露督府の機構は全く停止し延て統治權も停止す

親露督府に中央政府として此の場合抗議し得べき余地あらば其の
手段方法等

焉右不慮とならば親露督府は法令上残存するのみにして職員は待機の
姿勢となるべし、然るときの俸給、手給等の措置

六、米軍政當局より軍政施行へ協力を要せられたるときは其の範圍
及人員

六、本報編輯部專設翻譯人，將各省新聞，均須翻譯及之。如有重要新聞，

「素直な心で、素直な言葉で、素直な行動で、素直な人生を送りたい。」

五、陳學士等因前據該督撫等稱今已將該等處各屬災區勘明，實屬災區，應請開缺，以資賑恤等因。奉旨：該部知道。欽此。

中華書局發行

此後曾以廣東學政題名于夢雲為廣東候補知府有司南陽府知府等職

[illegible]

唐・布南雜列爲子同縣○改置又出乙丙玄照縣令乙丙

二、續單內所註增減情形如下：

[illegible][illegible][illegible]

出學無聊
年二品
也
是
罪
之
實
據
也
余
嘗
思
士
不
公
則
長

東坡先生全集卷之四

出身者を責任者とするの可否

対し徹底的に折衝の要あり

知あり又朝鮮軍とも緊密なる連絡を保持したるが通関監督總監より

海に疎遠を爲す注重せられたり

幣に九月七日進駐すべしとの決定的電報を受理するが既に設置を了

九
大

35

官山口鐵海警備府司令官、阿部總督の國に正式降伏文書に署名を了し

九月六日豫備交渉委員アーサー大佐（故に警務局長となる）より總務課長に対し京仁地区の夜間通行禁止令の発布準備に付要請あり先方より擬案されたる法案を補正の上発令者を京畿道知事とすることこの了解を得て日本國及朝鮮國の法文連記を以て翌日中に十萬枚を印刷提出せり

40

自前年以來、朝鮮の行政、警察、教育、衛生、交通、産業、金融、貿易、外交、内政、司法、宗教、文化、スポーツ、その他、あらゆる方面にわたって、日本軍政の支配下にあり、その政策は、朝鮮の発展と日本利益の増進を目的として、徹底的に実施されてきた。この間、朝鮮の行政機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮の行政機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮の警察機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮の警察機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮の教育機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮の教育機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮の衛生機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮の衛生機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮の交通機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮の交通機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮の産業機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮の産業機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮の金融機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮の金融機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮の貿易機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮の貿易機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮の外交機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮の外交機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮の内政機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮の内政機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮の司法機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮の司法機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮の宗教機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮の宗教機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮の文化機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮の文化機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮のスポーツ機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮のスポーツ機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。この間、朝鮮のその他機構は、日本軍政の体制に適合するように、徹底的に改組され、その権限も、日本軍政の政策に適合するように、徹底的に改組された。この結果、朝鮮のその他機構は、日本軍政の体制に適合するものとなり、その権限も、日本軍政の政策に適合するものとなった。

せんとし、又重要施設には米軍憲兵を派遣して之が保護に任せしめたり
九月十二日ハッデ中將は阿部總督に対し監督個人の人格に對しては
従前より格別尊敬しあるも今因其の地位よりの解任及退官竝に連署政
務廳長の行政上の手続に教官を表し従前の地位に於て軍政を援助すべ
きことを要請するを以て總督は之を了承し中央政府に對し所要の手続
を爲すべき旨を回答すると共に朝鮮露面の具體的諸問題を率げ之が解
決善処方を要請し又朝鮮在留公私日本人の保護に付懇請せられたり、
阿部總督に代りて朝鮮總督の権限行使の機能を賦與せられたる軍政
長官アーノルド少將は直に九月十二日附凡ての行政職員に對し其の職
責を盡すべきこと竝に公約機關の記録等を保存すべき旨命令を發し
たり

京城府廳は九月十二日米軍キョフ少佐府尹に任せられてより事務
の接收開始を見たり、又當時従業員の退任手続の多寡を繰り紛争を生
じ居りたる京城電気会社は米軍政廳の管理下に移され益々従業員は従前

朝鮮の行政実施に關し總督府從來の機構を踏襲する意圖の下に朝鮮京城米國軍政廳本部の組織決定せらるゝ之に關聯して左の如き陳述の發表を見たり

一軍政廳なるものは朝鮮人の民主主義政府の確立迄過渡的に至十八度以南の朝鮮地域を統治、指導、支配する聯合國最高指揮官の下に米國軍に依り設立せられたる臨時政府なり、軍政廳は南部朝鮮に於ける唯一の政府にして道、府、郡を通じて既設の各機關を運営す、軍政廳唯一の任務は朝鮮の權利上憲法なる政府及律法なる經濟の基盤を確立するに在り、之が成否は只管朝鮮人が軍政廳の命令に順服協力するに懸れり、之に反すれば独立の日を懸延せしめ無期の原因を作るのみ従前の文官任用制度の根本的改草は考慮せずとも種族、民族又は政治的差別待遇に關する凡ゆる制度は之を撤廃す、從來の新任委任の別は爾今各要なを以て一括之を高等官として軍政長官

と發表せり

九月二十日附を以て朝鮮の行政實施に關し總督府從來の機構を踏襲する意圖の下に朝鮮京城米國軍政廳本部の組織決定せらるゝ之に關聯して左の如き陳述の發表を見たり

一軍政廳なるものは朝鮮人の民主主義政府の確立迄過渡的に至十八度以南の朝鮮地域を統治、指導、支配する聯合國最高指揮官の下に米國軍に依り設立せられたる臨時政府なり、軍政廳は南部朝鮮に於ける唯一の政府にして道、府、郡を通じて既設の各機關を運営す、軍政廳唯一の任務は朝鮮の權利上憲法なる政府及律法なる經濟の基盤を確立するに在り、之が成否は只管朝鮮人が軍政廳の命令に順服協力するに懸れり、之に反すれば独立の日を懸延せしめ無期の原因を作るのみ従前の文官任用制度の根本的改草は考慮せずとも種族、民族又は政治的差別待遇に關する凡ゆる制度は之を撤廃す、從來の新任委任の別は爾今各要なを以て一括之を高等官として軍政長官

朝鮮半島の金融、産業、経済に付ての米軍の施策は従前の總督府の方針に基いて進められず九月十六日迄駐軍は軍票を使用せず、従来の鮮銀券を通貨として公認使用するも五十圓以下の補助貨は日銀券の使用を許可する旨発表せられたり

米軍の鮮内公的企業機関に対する扱いは相繼いで行はれ九月十六日南朝鮮内の全放送施設、同十九日同盟通信、朝鮮青島印刷、住宅管理等を更に其の後食糧管理、重要物資官署、三陟砲台（石炭）、

斯る無秩序なる事態に対し米軍当局は当初は当然日本人の甘受すべき待遇なりと採り直接実行行動に出づる以外に取締の域外に置く方針なりしが繼て事態は放置状態し得ざるに至り漸く十月二十三日に至り警察当局指示を公表之等不法不義行為の取締、未然防止に付一般の注意を喚起せり、次で二十七日公安院に軍政を妨害する性質のピラ、ボスターの貼撒布は實質的布告違反として処断する旨発表せり

鮮内の金融、産業、経済に付ての米軍の施策は従前の總督府の方針に基いて進められず九月十六日迄駐軍は軍票を使用せず、従来の鮮銀券を通貨として公認使用するも五十圓以下の補助貨は日銀券の使用を許可する旨発表せられたり

米軍の鮮内公的企業機関に対する扱いは相繼いで行はれ九月十六日南朝鮮内の全放送施設、同十九日同盟通信、朝鮮青島印刷、住宅管理等を更に其の後食糧管理、重要物資官署、三陟砲台（石炭）、

[illegible]

鑛業振興、朝鮮石炭十月十七日頃より東洋拓殖、鮮銀、殖銀等を順次撥收し孰れも米軍將校の管理指導下に於の業務を監視することとなれり

八月十六日以降、朝鮮人の態度行動は従来朝鮮人の
命の危殆すら予測せらるるに至り遂に当初は飽く迄殘留を覚悟しあ
りたる者迄も實際問題として朝鮮滯留を断念するの己むなきに至り
たり、既に蘇軍の暴挙に関する情報も傳播し他方日常の生活費も主
要物資は終戦直前の物價の十倍乃至二十倍に暴騰せる結果收入の途
を全然失ひたる日本人には極めて深刻なるものとなり為に一般日本
人は皇軍駐屯中に内地引揚を希望焦燥し預金引出の為各種金融機關
に殺到すると共に家財道具の放賣を行ひ又諸種企業経営に於ても事
業財産の処分、解散、従業員に對する退職手当の支給等全く浮足立
ちたる措置に出づるに至りたり、慥かに下層無智なる朝鮮人間には
恰も日本人に對し迫害を加ふるを以て国士を氣取るが如き氣運蔓延
し又他方心ある親日分子も日本人は此の際速かに帰還するを得策と
すべしとの提議ありたる状況なり

八月十六日以降、朝鮮人の態度行動は従来朝鮮人の
命の危殆すら予測せらるるに至り遂に当初は飽く迄殘留を覚悟しあ
りたる者迄も實際問題として朝鮮滯留を断念するの己むなきに至り
たり、既に蘇軍の暴挙に関する情報も傳播し他方日常の生活費も主
要物資は終戦直前の物價の十倍乃至二十倍に暴騰せる結果收入の途
を全然失ひたる日本人には極めて深刻なるものとなり為に一般日本
人は皇軍駐屯中に内地引揚を希望焦燥し預金引出の為各種金融機關
に殺到すると共に家財道具の放賣を行ひ又諸種企業経営に於ても事
業財産の処分、解散、従業員に對する退職手当の支給等全く浮足立
ちたる措置に出づるに至りたり、慥かに下層無智なる朝鮮人間には
恰も日本人に對し迫害を加ふるを以て国士を氣取るが如き氣運蔓延
し又他方心ある親日分子も日本人は此の際速かに帰還するを得策と
すべしとの提議ありたる状況なり

[illegible][illegible]

皇民化を根基とし内鮮一親同仁の言の朝鮮統理に只管順應し來りたる日本人の神経を痛く刺戟し爲に通關斯る不安は凡て朝鮮總督府の無為弱体より實まれたるものとして當局幹部を非難する声起り甚しきは警察權並に司法權を挙げて朝鮮人に委譲せりとのデマ巷間に流布せられ斯る風評の一部は日本諸新聞紙上にも登載せられたる処をみか之らは孰れも模範なき想像にして寧ろ其の出処の多くが自己の職責を拋棄して日本引揚に狹奔せるもの乃至早々に引揚げたるものの無責任なる首動に在るを知るべき殆ど單なる憶測、誇張の域を出でざるものなること思ひ半ばに過ぐるものあり、總督、總監等主腦部は凡ゆる機会に官民各方面に對し自重冷靜職責の宗遂に努むべきを強固統制し多くの官吏亦動搖混亂せる環境下可及的自己の最善を期せるものなること勿論なり

日本人安定のためには各主要地に日本人世話会を設置し衣、食、住の確保、自衛、財産保全、就職斡施、日本帰還に対する便宜供與等

小規模の事業を遂行するに必要とする資金は、その事業の規模に比例して、大規模な事業に比べて、比較的少ないものである。しかし、小規模の事業でも、資金の調達には、大規模な事業と同様に、銀行や信託会社などの金融機関を利用する必要がある。また、小規模の事業でも、資金の調達には、個人間の貸付や、家族からの出資など、非金融的な方法を利用することも、重要な手段となる。

小規模の事業の資金調達には、大規模な事業と同様に、銀行や信託会社などの金融機関を利用する必要がある。また、小規模の事業でも、資金の調達には、個人間の貸付や、家族からの出資など、非金融的な方法を利用することも、重要な手段となる。

（イ）大邱世面会

収入（一）国庫補助一 五〇〇
 支出（一）十月五日現在一 四〇〇

（ロ）釜山世面会

収入 五〇〇
 支出（一）十月五日現在一 二五〇

（一）国庫補助一〇〇千円中五〇〇は釜山系内所収に於て経費す
 支出（一）十月五日現在一 二五〇
 国庫補助の概況は大体

| | | | |
|-----|--------|-------|-------|
| 京 城 | 五〇〇〇千円 | 麗 水 | 五〇〇千円 |
| 釜 山 | 一〇〇〇 | 木 浦 | 二〇〇 |
| 大 田 | 五〇〇 | 新 義 州 | 二〇〇 |
| 蔚 山 | 二〇〇 | | |
| 大 邱 | 五〇〇 | | |

により、小規模な地区分は支拂米所の陸米軍に引渡した。

朝鮮内所有の國有財産に付ては南北分断に依り必ずしも正確を
し難きも財産当局に於て調査整理あり
日本人の不動産其の他の財産処分及評價方法に關し十月三日に
日本人の財産は朝鮮人に譲渡せよ九月二十五日附を以てする財
産移轉に關する法令及之に關聯する銀行に對する通牒發表せられたり
即ち日本人の財産は朝鮮人に譲渡すべく其の價格は軍政廳に届出づ
るを要し一時便取引一若し六十日以内に軍政廳より何等の異議なく
該賣買は完全に成立し之が代價は朝鮮銀行の日本人對儲蓄部に拂込
むべしとあり
其の他日本人の財産処分に關する法令の適用に付ては最大限
手続的對等の發表を見たなり其の大要左の如きなるが之に關聯して
特に朝鮮人の無統制なる強奪行為を禁むるもの多きは注目すべき
とに屬す、即ち
「朝鮮人は日本人所有財産を合法的に購入するを得るも之には正

朝鮮内所有の國有財産に付ては南北分断に依り必ずしも正確を
し難きも財産当局に於て調査整理あり
日本人の不動産其の他の財産処分及評價方法に關し十月三日に
日本人の財産は朝鮮人に譲渡せよ九月二十五日附を以てする財
産移轉に關する法令及之に關聯する銀行に對する通牒發表せられたり
即ち日本人の財産は朝鮮人に譲渡すべく其の價格は軍政廳に届出づ
るを要し一時便取引一若し六十日以内に軍政廳より何等の異議なく
該賣買は完全に成立し之が代價は朝鮮銀行の日本人對儲蓄部に拂込
むべしとあり
其の他日本人の財産処分に關する法令の適用に付ては最大限
手続的對等の發表を見たなり其の大要左の如きなるが之に關聯して
特に朝鮮人の無統制なる強奪行為を禁むるもの多きは注目すべき
とに屬す、即ち
「朝鮮人は日本人所有財産を合法的に購入するを得るも之には正

1

大正十一年
 早稲作
 大正十二年
 大正十三年
 大正十四年
 大正十五年
 大正十六年
 大正十七年
 大正十八年
 大正十九年
 大正二十年
 大正二十一年
 大正二十二年
 大正二十三年
 大正二十四年
 大正二十五年
 大正二十六年
 大正二十七年
 大正二十八年
 大正二十九年
 大正三十年
 大正三十一年
 大正三十二年
 大正三十三年
 大正三十四年
 大正三十五年
 大正三十六年
 大正三十七年
 大正三十八年
 大正三十九年
 大正四十年
 大正四十一年
 大正四十二年
 大正四十三年
 大正四十四年
 大正四十五年
 大正四十六年
 大正四十七年
 大正四十八年
 大正四十九年
 大正五十年
 大正五十一年
 大正五十二年
 大正五十三年
 大正五十四年
 大正五十五年
 大正五十六年
 大正五十七年
 大正五十八年
 大正五十九年
 大正六十年
 大正六十一年
 大正六十二年
 大正六十三年
 大正六十四年
 大正六十五年
 大正六十六年
 大正六十七年
 大正六十八年
 大正六十九年
 大正七十年
 大正七十一年
 大正七十二年
 大正七十三年
 大正七十四年
 大正七十五年
 大正七十六年
 大正七十七年
 大正七十八年
 大正七十九年
 大正八十年
 大正八十一年
 大正八十二年
 大正八十三年
 大正八十四年
 大正八十五年
 大正八十六年
 大正八十七年
 大正八十八年
 大正八十九年
 大正九十年
 大正九十一年
 大正九十二年
 大正九十三年
 大正九十四年
 大正九十五年
 大正九十六年
 大正九十七年
 大正九十八年
 大正九十九年
 大正一百年

押留せらる

十一月十日 検査局遊局の上取調継続中

小林交通局長

九月十四日 離任、顧問となる

十月二十五日 交通局内日本人官吏の滞留旅費を日本に送金せらる

事業計に八月十五日以降の支出の膨大なること等に付取調の為押留せらる

十一月下旬 一應釈放せらる

塩田鉱工局長

九月十四日 離任、顧問となる

後、石炭金庫の融資問題に付屢々取調を受け又検査局に出頭を命ぜられたるも押留の難を免る

十一月三十日 賄賂の許可あり

十二月四日 出発

